

やはり俺の福引旅行は
まちがっている。

EPIPHANEIA

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私がpixivで連載投稿している俺ガイルSSです。

八幡がららぼーとで当てた福引で、小町と偶然出会っためぐり、留美の4人で北海道旅行に行く事になります。

八幡にとって癒し系のメンバーしかいない、最高の旅行になるはずでした。しかし

.....

目次

第1話	1
第2話	12
第3話	32
第4話	52
第5話	71
第6話	90
第7話	106
第8話	126
第9話	149
第10話	166
第11話	181
第12話	198

第13話	218
第14話	234
第15話	249
第16話	261
第17話	280
第18話	299
第19話	311
第20話	324
第21話	344
番外編『やはり俺の福引旅行はまちがっている。Prototype』	
第22話	386

特別編 やはり俺達の大晦日はまち

がっている。

407

第1話

♪プロローグ ♪

カラ〜ン！カラ〜ン！

「特賞！特賞が生まれました〜!!おめでどうございませす!!」

八幡「……………はっ?」

はじまりは、3月の春休み前のある休日の日だった。

何が起こったのか頭の中で理解出来ず、思わずそんな間抜けな声が出てしまった。

まさか小町に頼まれて一緒にららぽーとのペットショップに行つて、そこでもらったつた一回の福引きでそんな幸運な事が起こるなんて、想像すらしていなかった。

小町「う、嘘でしょ…………?おにいちゃん…………?」

一緒にいた小町ですら、今の状況が信じられず呆然としながら俺を見ている。

「特賞はなんと！4名様ご招待の3泊4日の春休み札幌・函館ツアー!!本当におめでどうございませす!!」

そんな呆然としている俺達に、福引係の人は声高々に祝福していた。

小町「すごい！すごいよ、おにいちちゃん!!小町、もうおにいちちゃんの事、ゴミいちやんなんて言えないくらい、ポイント爆上げだよ!!」

福引係の人から目録をもらって、ようやく特賞の旅行ツアーを当たったと実感した小町は、凄く興奮しながら喜んでる。

八幡「あつ、ああ……。サンキューな。」

一方の俺は、目録を持っていながらも未だに特賞が当たったと実感出来ず、思わず戸惑った返事をする。

小町「これは神様が小町の中学校卒業&4月から総武高校に入学するお祝いを、おにいちちゃんから貰いなさいって事なのかな?」

八幡「バカ言え。そんなわけあるか。」

小町は3月に中学校を卒業し、4月から総武高校に入学する。

つまり、俺の後輩になる事が決まっていた。(ついでにいえば、川崎の弟である大志の野郎もだが。)

小町「何言ってるの、おにいちちゃん。この時に使わなかったら、いつ使うの!?!今でしょ!」

八幡「お前、もう古いな。そのネタ。」

小町の何年か前によく使われていた流行語にツツコミをいれつつも、言葉を続ける。

八幡「……でも、そうだな。俺ももう少して春休みに入るし、せつかくだから親父とお袋にも話して、一緒に小町の卒業&合格祝いで家族旅行に行くとするか。」

小町「やったー！さすが、小町のおにいちゃん!!……あつ、でもお父さんとお母さん、今仕事忙しくて、なかなか時間がとれないって言ってた。」

八幡「えっ……? そうなのか……?」

親父とお袋「……俺には話さないのに、何で小町には話すんだ……?」

俺、泣きたくなつたぞ。

八幡「うーん……。じゃ、延期するか? 親父とお袋が時間とれないんじゃないかな……。」

小町「うん、そうだね……。」

小町は口では納得したものの、ガツカリした悲しそうな表情を浮かべる。

小町にこんな顔をさせて、俺は申し訳ない気持ちでいっばいになる。

八幡(何か、何かいい方法は無いのか?)

小町の為にどうすれば旅行に行けるのか、そう考えていた時だった。

留美「……あれ? 八幡?」

めぐり「あら? 比企谷君じゃない? 久しぶり〜。」

偶然なのか予定調和なのか。城廻先輩と留美と出会ったのだった。

くサイゼリヤの店内く

小町「はじめまして、比企谷小町と言います。兄がいつもお世話になってます。留美ちゃんも久しぶり！」

めぐり「私は城廻めぐりです。はじめまして、妹さん。留美ちゃん。こちらこそ宜しくお願いしますね。」

小町「小町と呼んでください。ねっ、留美ちゃん。」

留美「……うん。久しぶり、小町さん。はじめまして、めぐりさん。鶴見留美です。城廻先輩と留美と出会った俺と小町は、成り行きで一緒にサイゼリヤで昼食をとつていた。

一見全く接点の無い3人（特に城廻先輩と留美）が、まさか一緒に席でメシを食べるなど、想像すらしていなかった。

小町「それでめぐりさんと留美ちゃんは、どうしてららばーと来ていたんですか？」
めぐり「私はスーツを買いに来ていたんだよ。大学の入学式で着る為のね。」

留美「……私は参考書を買って来た。総武高校に入る為の。」

小町「えっ？留美ちゃん、この間小学校卒業したばかりなのに、もう進路決めてるの？」

留美「うん。だって八幡の通っている学校だから。」

めぐり「すごいね、留美ちゃん。私は留美ちゃんの頃にそんな事全く考えていなかったよ。留美ちゃんが私達の後輩になってくれたら嬉しいな。」

留美「……ありがとう、めぐりさん。私、頑張る。」

……

こんな感じで、意外と3人の会話は弾んでいた。

小町はともかく、まさか城廻先輩と留美がここまで会話するとは、俺は予想していなかった。

特に留美は、俺と同じぼっちである為、人見知りする傾向があると思っていた。

だけど、城廻先輩と小町の雰囲気がそうさせるのか、留美も城廻先輩や小町と普通に会話が出来ている。

3人が意気投合している間、俺は完全に蚊帳の外だった。

八幡「(……:そーいや、この3人の共通点といたら……)」

俺は3人が会話をしている間、3人の共通点をふと思いついて出していた。

この3人の共通点、それは3月に学校を卒業している事——

八幡「(全く接点無いのに、意外な共通点があるんだな。)」

そんな事をふと思いつかべていた時だった。

小町「あつ、そうだ！」パン

突然、小町が両手を叩きながら席を立ち上がる。

八幡「っ？どうしたんだ、小町？」

小町「おにいちゃん、どうせだったらこの4人で行かない？北海道旅行!!」

八幡「……………はい？」

めぐり・留美「えっ？」

突然の小町の提案に、俺は啞然とし、事情を知らない城廻先輩と留美が驚いた。

めぐり「ちよ、ちよつと待つて、小町ちゃん。私と留美ちゃん、何の話か全く分からないんだけど？」

留美「そ、そうだよ。小町さん、どうしてそんな話になるのか説明して。」

小町「あつ、そうだった。今日おにいちゃんが……………」

突然の提案に戸惑う城廻先輩と留美に、小町は先程俺が福引の特賞である北海道ツアーを当てた事、4名まで使えるので家族と行こうとしたら、親父とお袋が仕事で時間がとれない事を、2人に説明する。

留美「八幡、本当なの？」

八幡「あつ、ああ。これがそうなんだが。」

俺はそう言いながら、目録とその中身を2人に見せる。

めぐり「本当だろ!!比企谷君すごい!」

留美「……」

城廻先輩は凄く感心しながら、留美は何も言わなかったものの、それぞれ俺の見せた目録に目を輝かせていた。

小町「それでどうでしょう?3月に卒業して4月から新しい生活をスタートさせる小町達が出会ったのも何かの縁ですし、おにいちやんを含めた4人で行きませんか?」

八幡「おつ、おの小町。いくらなんでもそれは……」

小町が暴走しそうなのを制止しようとしたその時だった。

留美「私、行きたい。八幡と一緒になら。」

めぐり「わ、私も比企谷君と一緒にならいいかなって……」

八幡「……えっ……?」

城廻先輩と留美が顔を少し赤くしながら、小町の提案に対して答えていた。

八幡「ほ、本当にいいんですか?城廻先輩。留美も。」

めぐり「う、うん。比企谷君が駄目だって言うなら、しようがないけど……。もし誘ってくれたら嬉しいなって……」

留美「私も八幡ともっと親密になりたい。今回がそのいいチャンスだと思っている。」

八幡「うっ……」

2人の言葉を聞いて、俺の顔も少し赤くなる。

小町「(ははくん。これはもしかして……!!)」

その瞬間、小町が目を輝かせていたような気がする。しかし、間髪を入れずに小町が続ける。

小町「ねえ、おにいちちゃんいいでしょ？小町とめぐりさんと留美ちゃんの卒業をお祝いしてよ。」

小町が上目遣いでそうおねだりされた俺は

八幡「わつ、分かった。城廻先輩、留美、一緒に行きましょう。」

思わず戸惑いながらも、OKの返事を出した。

めぐり「本当!?!ありがとう〜！比企谷君〜!!」

留美「八幡、ありがとう。」

OKの返事を聞いた2人が、凄く嬉しそうな表情を浮かべながら、俺に感謝している。その表情を見た時、何故か俺も凄く嬉しい気持ちになった。

その後、俺達は旅行の日時を決めて、目録に記載されていた宿泊先のホテルの予約、チケットの予約等の旅行の打ち合わせをしていた。

その際、俺と小町は城廻先輩と留美の連絡先も交換したり、スマホで札幌と函館の名所などを検索しどういうルートを通るか、旅行当日の集合場所等を話しながら、時間を

潰していた。

八幡「それじゃ、城廻先輩、留美。また旅行当日で。留美はちゃんと親御さんの許可をとつてから、来るんだぞ。」

留美「大丈夫。八幡と一緒に言えば、お父さんとお母さんも安心する。」

小町「えっ!?!おにいちゃんって留美ちゃんのご両親から、そんなに信頼されてるの!?!」

留美「うん。八幡には感謝してらつて。八幡に会つてみたいとも言つてた。」

つーか、知らない間に俺はルミルミの両親から信頼されてるのか?なんか照れ臭いぞ。

めぐり「私も大丈夫だと思うよ。友達と旅行だつて言えば。」

八幡「ええ。城廻先輩なら大丈夫だと思いますが、一応ご両親の許可をとつてからお願ひしますね。」

めぐり「うん。分かったよ。それじゃね、比企谷君、小町ちゃん、留美ちゃん。」

留美「またね。八幡、小町さん、めぐりさん。」

そう言いながら、今回は解散した。

く帰り道く

小町「ふくんふんふん♪」

小町が上機嫌に鼻歌を歌いながら、スキップしている。

それほどまでに、今回の旅行が楽しみなのだろう。

今回旅行に行くメンバーは、城廻先輩、留美、小町、そして俺。

偶然とはいえ、まさかこのメンバーで行く事になるとは思わなかった。

でも、俺にとって心を穏やかにして旅行に行ける癒し系のメンバーではあると同時に思う。

留美も俺が「ルミルミ」など変な事を言わない限り毒は吐かない癒し系、城廻先輩も悪い言葉を言わない癒し系の人。

勿論、小町は俺にとっての癒しの天使。戸塚と双壁を成すくらいなの。

……よく考えたら、ある意味最高なんじゃねえか？そんなメンバーで旅行に行けるなんて。

仮の話だが、雪ノ下・由比ヶ浜・一色で行くよりも、遥かに良いかもしれないぞ……

？アイツらだと、罵倒されまくりで楽しい旅行になると思えないし。

小町「おにいちゃん、どうしたの？もう家着いたけど。」

八幡「えっ？あつ、悪い。」

そんな事をふと思いつかべているうちに、いつの間にか家に着いていた。

そして、自分の部屋に入ってベッドに大の字になりながら、ふと呟いた。

八幡「……旅行、楽しみだな………」

今回のメンバーで行く旅行。

来週の春休み初日から行く旅行に、俺も小町同様これまでにない楽しみを期待していた。

——しかし、その淡い期待は

いろは「お待ちしてましたよ、先輩♪」

結衣「ヒツキー、やつはろー！」

陽乃「ひやつはろー！駄目だよ、比企谷君。こんな楽しそうないイベントにお姉さんを

呼ばないなんて♪」

雪乃「おはよう。随分な重役出勤ね、遅刻谷君。」

沙希「……おはよ、比企谷。」

八幡「……なんでいるの？お前ら……」

5人の招かれざる客達によって、旅行初日の朝から儂くも崩れさろうとしていた。

第2話

↳ 福引の翌日・奉仕部部屋↳

雪乃「……」チラッ

結衣「……」チラッ

いろは「……」チラッ

雪ノ下雪乃・由比ヶ浜結衣・一色いろはの3人は、それぞれ読書をしたり紅茶を飲んだりスマホをいじりながらも、ある方向をチラ見している。

八幡「うーん……………」

そこには、スマホを見ながら唸り声をあげ悩んでいる表情の八幡の姿があった。

結衣「……ねえ、ヒツキー。」

その八幡の姿を見かねた結衣が八幡に呼び掛ける。

八幡「うん？ どうしたんだ、由比ヶ浜？」

結衣「さつきからスマホを見ながら何悩んでるの？ もし悩み事があるんだったら、相談してよ。」

八幡「いや、別に大した事無い悩みだ。心配させて悪い。ありがとな。」

結衣「そ、そう。」

いろは「私は興味ありますね。先輩の悩み。」

八幡の感謝の言葉に結衣が顔を赤くすると、間髪入れずにいろはが口を挟む。

八幡「あん？何言ってるんだよ？一色。」

いろは「なんかいつもの先輩とは違う悩み方をしてるって思ったんです。私の勘なんですけど、今回はどちらかといえばポジティブな悩み方をしてるなあつて。」

八幡「はあつ？なんでそんな事が分かるんだよ？お前、俺の事をいつでも見てるの？」
いろは「はっ!?それは俺だっていつでもお前の事を見てるけども言いたいんですか？その気持ちは嬉しくない事もないんですけど、もう少しその目の濁りをとってから出直してきてください。ごめんなさい。」

八幡「なんで勝手にフラれてるの？つーか、俺はお前に何回フラれたらいいんだよ。」
いろは「それはともかく、どんな事で悩んでいるのか教えてくださいよ。雪ノ下先輩だって興味津々ですから。」

雪乃「一色さん、貴女は何を勘違いしているのかしら？そんな死んだ魚の目をした男の悩みを、私が興味を持つなんてあり得ないわ。」

八幡「……何気なく、俺をデイスってんじやねえよ。雪ノ下。」

八幡がいろはと雪乃のやりとりに呆れつつも、言葉を続ける。

八幡「そんなに聞きたいなら教えてやるよ。今週末から、札幌と函館の3泊4日の旅行に行く事になってな。」

雪乃・結衣・いろは『……………えっ?』

3人にとって予想外の八幡の言葉に、3人は呆然となる。

八幡「何だよ?揃いも揃って、アホケ浜みたいな間抜け面して。」

雪乃「いい、いえ。まさかヒキコモリ君の口からそんな言葉が出るとは思わなかったから。」

いろは「そ、そうですね。正直予想外でした。まさか休日は家で引きこもるのに命をかけてる先輩が旅行に行くなんて。」

結衣「引きこもりのヒッキーが旅行に行くって事自体、信じられない……………ってゆーか、アホっていうなし! マヌケじゃないし!」

八幡「……………揃いも揃って俺を引きこもり扱いかよ。否定は出来ないけど、泣くぞ。」
3人からの罵倒の言葉に呆れつつ、八幡は言葉を続ける。

八幡「そういう訳だから、ぐるなびや他のいろんなグルメサイトを見て、札幌と函館のメシの美味しい店を探してただけだ。大した問題じゃないだろ?」

雪乃「そういう事ね。旅行谷君にしては、随分と殊勝な心掛けね。感心するわ。」

八幡「お前にしては、誉めてくれるのはありがたいけど、旅行谷君って何だよ。」

いろは「それで先輩、誰と行くんですか？北海道旅行。」

八幡「はっ？何でそんな事まで聞くの？」

結衣「いや、少し興味あるなあって。まさか一人旅なの？」

八幡「馬鹿いえ、そんな訳あるか。その……」

言葉を続けようとしたところで、八幡は瞬間的に思考する。

八幡「(小町ならまだしも、城廻先輩と留美の名前も出すのはマズイかもしれん。特に留美の名前を出したら、コイツらに何言われるか分からないな。)」

数秒間の思考の後、八幡は続ける。

八幡「こ、小町とかと行くに決まってるだろ。言わせんなよ、恥ずかしい。」

結衣「出た！シスコン発言！ヒツキー、キモい！」

雪乃「流石、シス谷君ね。」

いろは「年下好きは嬉しいですけど、シスコンはお断りです。ごめんなさい。」

八幡「……俺、そろそろ泣いてもいいかな？」

八幡「(やつぱり、コイツらじゃなくて、あのメンツで正解だったな、今回の旅行……。)」

キーンコーンカーンコーン

そんなやりとりをしているうちに、下校のチャイムがなった。

雪乃「それじゃ、今日の部活はここまでにしましよう。」

八幡「おう、それじゃ帰るぞ。旅行の準備とかあるからな。じゃあな。」

雪乃の部活終了の声と同時に、八幡は早々に部室を後にした。

いろは「あの、雪ノ下先輩、結衣先輩。この後時間大丈夫ですか？」

結衣「うん。あたしは大丈夫だけど、どうしたの？」

いろは「この後、ファミレスに行きたいんですけど。今の話で。」

雪乃「……一色さんも『気付いた』という事ね。」

いろは「勿論です。あんなあからさまな態度をとりましたからね。」

雪乃「分かったわ。そこで話しましょう。」

結衣「へっ？気付いた？何が？」

そして、雪乃・結衣・いろはの3人は、ファミレスへと向かった。

く某ファミレス店内く

某ファミレスの店内でドリンクバーを注文した3人。

結衣「ねえ、ゆきのん、いろはちゃん。さっきの『気付いた』って何？」

早速結衣が雪乃というはに尋ねる。

雪乃「由比ヶ浜さん。さっきの比企谷君の話で、1つ引つ掛かる事がなかったかしら？」

結衣「へっ？ヒツキーの話で？うーん……特にそういう事はなかったと思うんだけど……。」

いろは「では、結衣先輩。最後の話を覚えていますか？先輩が誰と行くかって。」

結衣「それは覚えてるよ。小町ちゃんと行くつて。それがどうしたの？」

いろは「あくまでも推測なんですけど、小町ちゃんだけじゃなくて、私達に隠してる気がするんです。先輩と一緒に旅行に行く人。」

結衣「えっ!?どういう事!?ヒツキーと小町ちゃんだったら、家族旅行なんかじゃないの!？」

雪乃「私もその可能性を考えたけれど、おそらくその可能性は無いわ。」

いろは「私も同じです。家族旅行の可能性は0に等しいと思います。」

結衣「家族旅行の可能性は無いって、どうして分かるの?」

雪乃「もし家族旅行だとしたら、あの時にご両親の名前も言ってるはずよ。でも、比企谷君は『ご両親の名前』も『家族旅行』とも言つてなかった。」

結衣「あっ！そういえば……!」

いろは「それに私と結衣先輩が聞いた時に、一瞬だけ口ごもっていたんです。他の人

の名前を出すのに躊躇したのかなって思ってた。」

結衣「ゆきのんもそう思ってるの?」

雪乃「私も一色さんの考えと同じね。比企谷君が私達に知られたくない人と旅行に行くから、小町さんの名前しか出せなかったと考えているわ。」

結衣「なるほどねー。でも、ヒツキーと小町ちゃんと一緒に旅行行く人って誰なんだろうね?」

いろは「うーん、流石にそこまでは私も分かりませんね……。」

雪乃「私もそこまではつかめないわね。誰なのかしら?小町さんも知り合いで、私達に知られたくない人物……。」

結衣「うーん……。」

3人が八幡が誰と一緒に旅行に行くのか、思案している時だった。

「……比企谷と小町が旅行?……。」

「……比企谷さん、お兄さんだけじゃなくて、めぐりさんって人と留美ちゃんって子も一緒だって言ってた……。」

「……はあ!?!……。」

3人の2つ隣の席から聞き捨てならない会話が聞こえてきた。

〈夜のファミレス〉(沙希side)

京華「さーちゃん、おいしいね！」

沙希「そーだね、けーちゃん。」

アタシは今日は珍しく外食に来ていた。両親は仕事でいないけど、家族水入らずで。

大志「……はあ……。」

川崎弟「どーしたの？ たーちゃん？」

しかし、大志が注文された料理をそんなに食べずため息をついていた。見かねたアタシは大志に声をかける。

沙希「どうしたんだい？ 大志。今日はアンタが主役なんだよ。なんでそんなに落ち込んでるの？」

今日は大志の卒業と総武高校入学のお祝いを兼ねて、外食に来ていた。大志もすごく楽しみにしていたはずなのに、何故か落ち込んでいたので、心配になる。

沙希「悩みがあるなら言ってみなよ。相談にのれるかどうかわからないけど。」

大志「う、うん……。比企谷さんの事なだけど……。」

沙希「比企谷……？ 比企谷さんって妹の小町の事？」

大志「うん……。比企谷さんと今度の週末遊びに行こうと思ってメールしたんだ……。俺達、4月から総武高校に入学するだろ？ それで一緒に祝おうと思ってき……。」

沙希「へえー。まさかアンタがアイツの妹をデートに誘うなんてね。それで断られ

たつて事？」

大志「そうなんだ。比企谷さん、今週末に北海道旅行に行くんだって。お兄さんと。」
沙希「えっ？比企谷と小町が旅行……？それも北海道……？」

比企谷が旅行に行くのと聞いて、一瞬キョトンとする。アイツがそういう事をするのが、少し意外だと思った。

大志「うん。家族旅行だと思つたら、比企谷さん、お兄さんだけじゃなくて、めぐりさんつて人と留美ちゃんつて子も一緒だつて言つてた。」

沙希「はあ!？」

その話を聞いて、思わず声を大きく驚いてしまった。めぐりつて人なら心辺りがある。確かこの間卒業したウチの学校の元生徒会長の城廻めぐり先輩……。あと、もう一人の留美つて子も聞き覚えがあるような……。

沙希「(アイツ……どれだけの女の子と仲良くなつてんの……!?)」

そんな事を思いながら、アイツにやきもきをしている時だった。

「その話、詳しく聞かせてもらえないかしら？」

沙希・大志『えっ?』

京華「んっ?」

川崎弟「?」

突然、席の横から聞き覚えのある声が聞こえて、アタシ達が振り向くと。

いろは「なかなか興味深いお話ですね。是非、私達も混ぜてもらえませんか？」

結衣「やつはろー！沙希！大志君！京華ちゃん！」

沙希「ア、アンタら。なんでここに……!!？」

そこには、いつのまにか雪ノ下、由比ヶ浜、一色の3人が立っていた。

（同時刻・某カフェ（陽乃side））

市内のとあるカフェで私はある人物とお茶をしていた。

めぐり「すいません。はるさん。わざわざご馳走してもらって。」

陽乃「いいのよ。私がめぐりをお茶に誘ったんだからさ。」

その人物とは、城廻めぐり。私の高校時代の後輩だ。

市内をふらついていたら、偶然面白い物中のめぐりと出会って、お茶に誘った。

陽乃「ところで、めぐり。何の面白い物をしていたの？見た感じ、旅行のグッズみたい

なものもあるけど。」

めぐりが買った物を見ると、旅行で使いそうな物がいろいろ見受けられる。何となく

そうかなと思ひ、めぐりに尋ねてみた。

めぐり「あつ、分かりました？実は今週末に北海道旅行に行くんですよ。」

陽乃「成程、そういう事ね。家族の人と行くの？」

めぐり「違いますよ。友達……と行くんです。」

友達といいかけたところで、めぐりの顔が少し赤くなる。それを見逃さなかった。

陽乃「へえ。友達、とね。一体誰なの？私が知っている人？」

めぐり「えつ、ええ。比企谷君と行くんです。」

陽乃「へつ？……比企谷……君……？」

その名前を聞いた時、一瞬呆然となる。まさか、めぐりと比企谷君が一緒に旅行に行くなど、想像もしていなかった。

陽乃「そ、そうなんだ。もしかして、比企谷君と2人きりで？」

めぐり「ち、違いますよ。他にも比企谷君の妹の小町ちゃんと比企谷君のお友達の留

美ちゃんって子も一緒です。」

陽乃「へえ。随分と変わったメンバーで行くんだね。留美ちゃんって子は知らないけど。なんでそのメンバーで行く事になったの？」

めぐり「あつ、それはですね……」

私はめぐりから、今回の旅行は比企谷君が福引の特賞を当てて、当初は比企谷君の家族で行こうと考えていたのだが、両親が仕事で行けないとして、どうしようか悩んで

いた時に、めぐりと留美ちゃんと偶然出会って、一緒に旅行に行く事になった経緯を知った。

表向きはめぐりと小町ちゃんと留美ちゃんの卒業&進学のお祝い旅行で、福引を当てた比企谷君も当然参加するという訳だ。

陽乃「あつ、めぐり。私、この後用事があるのを忘れてた。私から誘っておいてんだけど、そろそろ行かなくちゃ。」

めぐり「あつ、大丈夫ですよ。私、もう少しゆつくりお茶を飲んでますから。はるさんにもお土産買ってきますからね。」

陽乃「うん、ありがと。ごめんね、めぐり。またね。」

めぐり「はーい。はるさん。」

そうして、私はめぐりと別れて、店内を出た。

陽乃「さくてと。」

店内を出てしばらく歩いたら、スマホを取り出してある人に電話をする。

陽乃「ひゃつはろー！雪乃ちゃん！」

その人物とは私の妹である雪乃ちゃん。雪乃ちゃんは果たして、この事を知っているのかな？

く同時刻・ファミレスく

結衣「……つまり、大志君は小町ちゃんから城廻先輩と留美ちゃんも旅行に行くってメールで知っただけなんだね？」

大志「は、はい。なんでそのメンバーで行くのかは知らないツスけど……。」

いろは「まさか、そのメンバーだったなんて思いもしなかったですね……。道理で私達に知られたくないはずですよ。」

雪乃「そうね。城廻先輩はともかく、鶴見さんなんてこの間まで小学生だった子なのに。そんなに通報されたのかしら？あの男。」

沙希「鶴見？それって留美って子の事？」

結衣「そうだよ。京華ちゃんが出てたクリスマスイベントの劇で、主役をやってた子覚えてる？あの子が鶴見留美ちゃんだよ、沙希。」

雪乃・結衣・いろはの3人は、川崎家の席と同席にしてもらい、旅行の件で大志から事情を聞いていた。

川崎弟「おねーちゃんたち、こわい……」

京華「さーちゃん……」

話し合いに参加していない京華と弟は雪乃達を見て怯えている。

結衣「あつ、ごめんね。お姉ちゃん達、けーちゃんやさーちゃん達をいじめるつもりなんてないから、安心してね。」

そんな空気を察知して、結衣はすかさず京華達の頭を撫でながら、優しくフオローする。

京華「うん！ありがとー、ゆーちゃん。」

結衣「ゆーちゃんね。なんかいいかも。」

いろは「（私はいーちゃんって呼ばれるのかな。）」

雪乃「（私もゆきちゃんって呼ばれてほしいかも。）」

そんな時に雪乃の携帯の着信が入る。

雪乃「姉さん？ちよつと待ってて、みんな。」

陽乃からの着信に出る雪乃。

陽乃『ひやつはろー！雪乃ちゃん！』

雪乃「姉さん？こっちは今、大事な話をしている最中なの。下らない事だったら、電話を切るわよ。」

陽乃『あれあれ？そんな事言っているのかな？もしかして、比企谷君の北海道旅行の話？』

雪乃「えっ!?どうして姉さんが知っているの!？」

陽乃『やつぱりね。雪乃ちゃんも知っていたんだ。因みに、どうしてそういう風になったのかも、知っているんだけど。』

雪乃「……私は今、市内の〇〇〇〇にいるわ。」

陽乃『わかった、そこで話しようって事ね。結構近くにいますから、今から向かうね。』

雪乃「ええ。待っているわ。」

電話のやりとりの15分くらい後に、陽乃はやってきた。

陽乃「あれ、こんなにいたんだ。結構な人数でいるね。」

雪乃「待ってたわよ、姉さん。」

沙希「(雪ノ下のお姉さん!?!確かに見た事あるような気がするけど……)。」

大志「(マジツスか!?!こんな綺麗な人が雪ノ下先輩のお姉さんで、お兄さんや比企谷さんの知り合いなんツスか!?!)」

結衣「やつはろーです!陽乃さん!」

陽乃「ひやつはろー!ガハマちゃん!いろはちゃん!」

いろは「お久しぶりです。はるさん先輩。」

陽乃「それから、初めて話す子やはじめましての人もいますね。私は雪乃ちゃんの姉の

雪ノ下陽乃つて言います。宜しくね。」

沙希「は、はい。川崎沙希です。比企谷と由比ヶ浜のクラスメイトです。」

大志「か、川崎大志ツス。比企谷小町さんと一緒に4月から総武高校に入学します。」

雪乃「早速、本題に入らせてもらおうわ。姉さん、比企谷君達が旅行に行く事になった経緯を説明して。」

陽乃「うん。まず比企谷君が……。」

そうして陽乃はめぐりから聞いた話を雪乃達に説明する。

八幡がららぼーとの福引で旅行を当てた事。

家族で行こうとしたら、両親が仕事の為、行けない事。

どうしようか悩んでいた時に、ららぼーとでめぐりと留美と偶然出会った事。

小町、めぐり、留美が意気投合して、小町と一緒に卒業旅行として行こうと提案した事。

めぐりと留美がその提案に賛同して、一緒に旅行に行く事になった事。

それら全てを、めぐりから聞いた話として、雪乃達に話した。

いろは「成程……。めぐり先輩も留美ちゃんも小町ちゃんも確かに今月で卒業しましたね。その為の旅行だと。」

陽乃「おそらく、比企谷君はそういう風に考えていると思うよ。でも……。」

雪乃「でも?どうしたの?」

陽乃「比企谷君がそう思っているても、相手はどう思っているかなって。」

雪乃・結衣・いろは・沙希『えっ……?』

陽乃の言葉に雪乃達は呆然となる。

雪乃「それって、どういう意味かしら?姉さん」

陽乃「だったら、分かりやすく教えてあげる。少なくともめぐりは、今回の旅行をきっかけに狙っていくみたいだよ、比企谷君の事。」

いろは「まっ、待ってください!めぐり先輩が!」

陽乃「そうだよ。めぐりがこの話をした時、凄く恋する乙女の表情をしていたからね。

あと、会った事ないけど、留美ちゃんって子も怪しいな。」

結衣「る、留美ちゃんも!?まだ、この間まで小学生だった子ですよ!」

陽乃「そうなの?でも、留美ちゃんからしたら、愛さえあれば年の差なんて関係無いって思っているかも。どこかのバスケットコートみたいに『まったく、小学生は最高だぜ!』ってね。あつ、でも今度中学生になるから、『まったく、中学生は最高だぜ!』か。」

雪乃「そんな事言ってる場合じゃないわ、姉さん!」

陽乃「あと、小町ちゃん、もしかしたらブラコンじゃないかしら?比企谷君、重度のシスコンだって聞いた事あるから、千葉の兄妹エンドもあり得るかもよ。」

沙希「ひ、比企谷と小町が!？」

大志「じよ、冗談じゃないツス! そんな事、絶対に許さないツス!」

陽乃「……まあ、それはさておき、ここにいるみんなは今回の旅行の事をどう思っているのかな？」

いろは「正直、面白くないですね。なんかめぐり先輩と留美ちゃんと小町ちゃんに負けた気がして、悔しいです……。」

結衣「あたしも悔しいですよ! 明日、絶対に問い詰めてやるんだから!」

沙希「……アタシも悔しいかも……。」

雪乃「わ、私は別にどうとも……。」

陽乃「雪乃ちゃん、比企谷君のいない時くらい素直になりなよ。」

雪乃「……やつぱり、悔しいわね。明日必ず尋問してやるわ……!」

陽乃「……オツケー。みんなの悔しい気持ちも聞けたところで、比企谷君に『復讐』してやりましょうか。『私達のやり方』でね。だから、尋問とか問い詰めるのは無しね♪」

〈旅行1日目・成田空港〉(八幡side)

小町「もう、ゴミいちちゃん！なんで寝坊なんかして、めぐりさんと留美ちゃんを待たせてんのよ!？」

八幡「しょうがねえだろ、二度寝しちまったんだから。それに間に合ったからいいじゃねえか。」

留美「八幡が悪い。女の子を待たせるなんてサイテー。」

めぐり「まあまあ。小町ちゃんに留美ちゃんもいいじゃない。これから楽しい旅行なんだから、大目に見てあげようよ。」

飛行機で向かう為、俺達は成田空港にバスで到着した。

集合場所である千葉中央駅にギリギリで到着した為、城廻先輩と留美を大分待たせてしまった。

その件で小町と留美から散々言われて、城廻先輩が2人を宥めていたのだった。

俺達がバスから降りて、空港のターミナルに入ろうとした時、不意に5つの人影が俺達の前に現れる。

八幡「……はっ？」

めぐり「あれっ？」

留美「えっ……？」

小町「ええっ!？」

その5つの人影を見た時、俺達は信じられないと言った感じで唾然としていた。何故なら――

いろは「お待ちしてましたよ、先輩♪」

結衣「ヒツキー、やつはろー!」

陽乃「ひやつはろー! 駄目だよ、比企谷君。こんな楽しそうなイベントに、お姉さんを呼ばないなんて♪」

雪乃「おはよう。随分な重役出勤ね、遅刻谷君。」

沙希「……おはよ、比企谷。」

八幡「……なんでいるの? お前ら……。」

――雪ノ下雪乃・由比ヶ浜結衣・一色いろは・川崎沙希・そして、雪ノ下陽乃――

招かれざる客である5人の闖入者達が、俺達と同じように旅行の支度をして、俺達の前に現れたからであった。

第3話

「福引翌日・フアミレス」

いろは「『復讐』……ですか?」

結衣「それに『私達のやり方』って……?」

陽乃「『復讐』って言っても、別に危害を加えるとかの意味じゃないよ。言い換えれば、『サプライズ』——ドッキリを仕掛けてやろうって事。」

雪乃「ドッキリ……?って、姉さんまさか!」

陽乃「そのまさかよ。比企谷君達の旅行に参加しようって事。比企谷君達にはオフレコでね。」

いろは「ええっ!?!でも、今週末ですよ!?!そんな急に、チケットとか宿泊先とかとれるんですか!?!」

陽乃「何とかなるよ。ここに来るまでの間に少し調べただけど、その福引、私と雪乃ちゃんの父さんの会社が1枚噛んでるから。」

雪乃「父さんの会社?それで調べて分かったの?」

陽乃「勿論。どの飛行機に乗るか、どの宿泊先に泊まるか分かったし、比企谷君達と

同じ行動をとれるようにだつて出来るよ。但し……。」

沙希「ただし？」

陽乃「やつぱり急な話だから、今からだと人数が限られちゃう。おそらく最大で5人が限界かな。」

結衣「5人ですか？」

陽乃「そう。たまたま、比企谷君達の乗る飛行機の余り席も、泊まるホテルの空き部屋も丁度5人分しか無いから。」

雪乃・結衣・いろは・沙希『……………』

陽乃「さて、どうするの？強制じゃないから、参加か不参加かは、みんなに任せるけどね。」

陽乃の問い掛けに暫し沈黙する一同。しかし、その沈黙を破つたのは意外な人物だった。

大志「……………行ってきなよ、姉ちゃん。」

沙希「えっ!?!大志!?!」

大志「姉ちゃん、いつも俺達の為に頑張ってくれてるじゃん。たまには自分の為に頑張ってみなよ。姉ちゃんがない間は俺が京華達の面倒見るからさ。」

沙希「そ、そんな事言ってくれるのは嬉しいけど、なんでアタシが自分の為に頑張るつ

て……!?!」

大志「姉ちゃん、お兄さんの事が好きなんだろ？よく家でお兄さんの話する事、多いじゃん。」

雪乃・結衣・いろは『……………はっ?』

沙希「バ、バ、バ、馬鹿!!大志、アンタ、何て事を言っ……!?!」

京華「そーだよ!さーちゃん、けーちゃんとおなじで、はーちゃんのことだいすきなんだよ!」

沙希「け、けーちゃん!」

大志の爆弾発言に啞然とする雪乃達とそれに対して顔を真っ赤にして慌てる沙希、そして追い討ちをかける京華。

陽乃「沙希ちゃん。」

そんな中、1人冷静に状況を見ていた陽乃が沙希に声をかける。

沙希「は、はい!」

陽乃「こんな可愛い応援団がいてくれるなんて、随分心強いじゃない。」

沙希「え、ええ……。」

陽乃「今回はこの子達の好意に甘えてみたら?この子達の為にも、沙希ちゃん自身の為にも。」

沙希「……でも、旅行に行く余裕なんてアタシには……。」

陽乃「旅費の事？それなら心配しないで。今回、私の名前でもう予約したし、私が出すから。」

雪乃「えっ!?姉さん、もう予約したの!？」

陽乃「当たり前じゃない。こんな楽しそうなイベント、私が見逃すとも思ってるの？当然、私も参加するからね。」

沙希「で、でも悪いです!!初めて会って話したのに、そこまでしてもらうなんて……。」
陽乃「別に見返りなんて求めてないよ。私がやりたいって思っている事に、沙希ちゃんがいたら面白そうだって。」

沙希「……………」

陽乃「最終的には沙希ちゃんの意志に任せるよ。さっきも言った通り、強制じゃ無いからね。どうするの？」

沙希「……………」

陽乃の言葉に沙希は目を閉じながら思案する。そして――

沙希「……アタシ、行きます。行かせてください、北海道旅行に。」

陽乃に対して強い意志を宿した瞳を向けながら、沙希は旅行の参加を宣言した。

陽乃「オツケー、これで沙希ちゃんは参加、と。それで雪乃ちゃん達は？」

結衣「あたしも行きます！沙希に負けられないですもん！」

沙希「ゆ、由比ヶ浜……？負けられないって、何が……？」

いろは「私も行きます。川崎先輩っていう強力で新しいライバルまで参加するのに、私が参加しないなんて、あり得ませんから。」

沙希「う、ライバル!?アンタまで何言って……!?」

雪乃「姉さんにまた借りを作るのは癪だけど、私も参加するわ。川崎さん、私、凄く負けず嫌いな。だからそのつもりで。」

沙希「ゆ、雪ノ下!?そのつもりってどういう……!?」

雪乃達にライバル宣言をされて、顔を真っ赤にしながら戸惑う沙希。

そんな様子をドン引きして見ている大志と何が起こっているか分からない表情で見ている京華達。

そんなやり取りを見ながら、陽乃は心の中でほくそ笑む。

陽乃「(……)さて、役者も揃った事だし、覚悟しなさいよく比企谷君♪こんな面白いイベントに、私や雪乃ちゃん達を除け者にして、めぐり達と楽しもうとした罪は重いんだからね♪」

陽乃も雪乃達同様、内心悔しかった……のかもしいない。

（旅行1日目・成田空港）（八幡side）

八幡「……なんているの？お前ら……。」

目の前にいる5人を見た瞬間、俺の今回の旅行に対する淡い期待が、儚くも崩れ落ちる音が聴こえたような気がした。

俺をはじめ、城廻先輩も小町も留美も、開いた口が塞がらない。

陽乃「やったー！ドッキリ大成功!!!」

そんな俺達に対して、魔王ごと陽乃さんが、この中の最年長者であるにも関わらず、してやったりの表情ではしやぎながら喜んでいた。

めぐり「へっ？ド、ドッキリ？どういう事ですか？はるさん。」

陽乃「決まってるじゃない、めぐり。めぐりや比企谷君達の北海道旅行、私達も参加させてもらうからね。」

小町「ええええええっ?!雪乃さんや結衣さん達が!？」

留美「……八幡、どういう事？」

小町が凄く驚き、留美が睨み付けながら俺に問い詰めてくる。

八幡「い、いや！俺は知らんぞ、ルミルミ！俺が旅行に誘ったのは、お前と城廻先輩と小町だけだ！」

留美「ルミルミ言うな、キモい。あと、お前じゃない、留美。」

八幡「……ごめんなさい。」

小学校を卒業したばかりの留美に頭が上がらない俺。情けなさすぎて、涙が出そう。

いろは「むー。先輩、留美ちゃんと随分仲良さそうじゃないですかー？」

八幡「馬鹿言え。それより、なんでお前らまで俺達の旅行に参加するんだよ？」

雪乃「あら、それは勿論、城廻先輩と小町さんと鶴見さんの卒業と進学をお祝いする為よ。その為の旅行なのでしょう？」

八幡「へっ？城廻先輩と小町と留美の為？」

結衣「そうだよ、ヒツキー！あたし達だつて関わりがあるんだから、声掛けないなんて水臭いじゃん！」

八幡「いや、でもおかしいだろ！小町以外接点の無い、か、か、……川村？まで来て……！」

沙希「……川崎なんだけど。いい加減覚えないと、本気でぶん殴るよ？」

八幡「すいません。勘弁して下さい。」

いろは「とにかく、私達にもお祝いさせてくださいよ。せつかくの記念旅行なんですから、みんなでお祝いで楽しんでほしいと損じゃないですか。」

八幡「……そういうや、どうして城廻先輩と留美が一緒だつて知つたんだよ？俺は小町

と行くとしか話してねえじゃねえか。」

俺が雪ノ下達に疑問を投げ掛けると、意外な人から答えが返ってきた。めぐり「あつ、それ多分、私だと思う。私のはるさんに話しちやつた。」

八幡「……えっ?」

そう言いながら、舌を出して謝る仕草をする城廻先輩。

し、城廻先輩……!よりによつて、一番話してはいけない人に話しちやつたんですか……!?

八幡「い、いや、それでも川崎まで来る理由にはならないですよ。陽乃さんとも城廻先輩とも、直接的な接点が無いはずだから……。」

心の声を抑えつつ、城廻先輩に問い掛けると

小町「あつ、もしかして、沙希さんは大志君に聞いたのかも。この事、大志君にメールしちやつたし。」

八幡「……はあっ!?!」

今度は小町が「てへぺろ」と顔に出しながら、川崎の来た原因らしき事を話した。

あのクソ野郎……!ふざけた真似を……!

八幡「城廻先輩はともかく、大志の野郎、旅行から帰ってきたら……!」

沙希「帰ってきたら、何だつて?」ギロツ

八幡「ごめんなさい。何でも無いです。」

思わず大志への報復を口に出したら、すかさず川崎が睨み付けてきたので、速攻で謝罪する。

小町「でも、本当に嬉しいですよ！まさか、小町達の卒業記念旅行に雪乃さんや結衣さんやいろはさん、更には陽乃さんと沙希さんも来てくれるなんて！小町的にポイント高過ぎどころかカンスト寸前です！」

このメンツの中で、俺を除いたら全員とそれなりに親交のある小町が、凄く嬉々としている。

結衣「そう言ってくれると、あたし達も嬉しいよ。小町ちゃん。」

沙希「ありがとね、小町。」

いろは「小町ちゃん、本当に嬉しそうだね。参加して良かった。」

小町「そりやそうですよ！未来のお義姉ちゃん候補が全員集合なんですもん！」

めぐり「……………へっ？」

しかし、小町の次の言葉に、一部を除いた全員が石のように固まる。

雪乃「こ、小町さん。あ、貴女は何を勘違いしているのかしら？わ、私はその男が貴女や城廻先輩や鶴見さんにやってはいけない事をしないか、監視する目的もあつて……………」

留美「お義姉ちゃんって……。私、小町さんよりも年下なのに……。」

雪ノ下と留美は否定的な発言をするものの、小町の言葉に陽乃さんと小町以外の全員が顔を赤くしながら俯いている。

何これ……。？何で小町の戯言に顔を赤くしてるのですか、皆さん？

陽乃「まあ、そういう訳だからね。比企谷君。めぐりと小町ちゃんと留美ちゃんの一生の思い出になるような、楽しい旅行にしましょうよ。ついでに、私と比企谷君の一生の思い出もね♪」ギョツ

八幡「いいっ!?は、陽乃さん!？」

陽乃さんはそう言いながら、俺の腕に抱きついてくる。

雪 乃・ 結 衣・ いろ は・ 沙 希・ め ぐ り・ 小 町・ 留 美

『あ——————っ!』

その刹那、他のメンツが叫び声をあげて大騒ぎになった。

雪ノ下・由比ヶ浜・一色・留美が俺と陽乃さん（といっても、雪ノ下以外は俺のみ）を散々非難し、川崎もジト目で睨んできたり、城廻先輩も苦笑いをしたり、小町も何故かキラキラした目で俺達を見たり等、一悶着も二悶着もあつて、時間ギリギリに飛行機に乗った事となつてしまう始末だった。

そんなドタバタの中、俺達9人の北海道旅行がスタートしたのであった。

く新千歳空港く

八幡「ふわあ……よく寝たなあ……。」

飛行機から降り、北海道の地に足を着いた俺の第一声。そんな俺に対して小町が茶化すように言う。

小町「おにいちちゃん、スツゴク寝てたよね。二度寝しといて。」

留美「ホントだね、小町さん。せっかく、あの人達と席が離れて、八幡と話すチャンスだったのに……。」

めぐり「いいじゃない、留美ちゃん。比企谷君の寝顔、良かったでしょ？」

留美「……うん。いつもの八幡と違って、格好よかった。」

めぐり「やつぱり？私もそう思っていたんだ。見れて良かったね、留美ちゃん。」
あの、めぐりん先輩にルミルミさん。そんな事言われると、俺、もう人の前で居眠りなんて出来ないですよ？恥ずかし過ぎて、穴に入っちゃいますよ？

結衣「あつ、ヒッキー！」

陽乃「おーい！比企谷君ー！」

いろは「せんぱーい!!」

そんな事を考えている内に、席が離ればなれだった由比ヶ浜達が来て、俺達と合流する。

よく考えてみたら、女8人に男が俺1人つて、どんな罰ゲームだよ……？只でさえ、最初の予定だったら、女3人に俺1人でも気が引けるっていうのに……。こんな事だったら、俺が自腹切つてでも、戸塚を参加させれば良かった……。あと、お情けで材木座でも（奴は払つて貰うが）。

？「あの……比企谷様ご一行で宜しいでしょうか？」

そんな下らない事を考えながらターミナルを出ると、突然女の人の声が聴こえて、顔をあげてみる。

八幡「えっ……!？」

そこには、バスガイドの制服を着た黒いロングヘアの綺麗な美女が、にこやかな顔で立っていた。

八幡「あつ、は、はい。それでふけど。」

突然、こんな美女に声を掛けられてキョドってしまった、舌を噛みながら答えてしまった。

？「ようこそ、北海道へ。この度は、福引でのご当選、本当におめでとうございます。今回比企谷様達の旅行のガイドを担当させて頂く事になりました。宜しくお願い申し

上げます。」

八幡「いつ、いいえ。こちら宜しゅうお願いひます。」

また舌を噛んでしまう。恥ずかし過ぎて、泣きたい……………。

？「あれ…………？」

その時、俺達を見てガイドさんが、きよとんとした顔をする。

八幡「どうしたんですか？」

？「いえ。比企谷様は4名様とお伺いしていましたが、見たところ9名様いらつしやるみたいなのですけど…………？」

陽乃「あつ、私達の事ですか？比企谷君達と同じ日に5名で予約した雪ノ下です。」

？「あつ、雪ノ下様も一緒だったのですね。大変失礼致しました。雪ノ下様、この度は当観光会社をご利用頂きまして、誠にありがとうございます。」

陽乃「大丈夫ですよ。こちらこそ宜しく願ひします。」

笑顔で会釈をする陽乃さん。しかし、これまでにこやかな笑顔をしていたガイドさんの表情が曇る。

？「…………それで、皆様には1つお詫びしなければいけない事がございまして…………。」

雪乃「お詫びしなければいけない事？何ですか？」

？「ええ、実は…………。」

ガイドさんが何かを言いかけた時だった。

??「——えくくくん!!ごめんなさくくい!!遅くなりましたくく

!!」

突然、大声で泣き謝りながら、俺達の方にダツシユで向かってくる女の人の姿が見える。よく見ると、ガイドさんと同じ制服を着ていた。

その女の人は亜麻色のショートカットの女の人で、ガイドさんと違って、綺麗と言うよりも可愛らしい感じだった。

その女の人を見た瞬間、ガイドさんの表情が一変する。

?「璃夢!あれほど遅刻は厳禁だって、いつも言ってるでしょう!」

璃夢「あくくくん!!ごめんなさい、姉様く!!目覚ましもちゃんとかけてたのにく!!」

?「こら!仕事では『姉様』じゃなくて『先輩』って呼ぶようにって言ってるじゃない!それに、寝坊での遅刻は通算何十回目だと思ってるの!」

ガイドさんが先程のにこやかな顔とは対照的に、怒った表情で璃夢さんと呼んだバスガイドさんを叱っている。その光景を見て、俺達全員が啞然としていた。

八幡「あ、あのー……もういいんじゃないですか?」

見かねた俺(というより、うちの女性陣全員に無理やり後押しされて)が、ガイドさん達に声をかける。

？「あつ……も、申し訳ございません！お客様の前で、ついお見苦しいところを見せてしまつて……！」

璃夢「ご、ごめんなさい！私が遅刻してきたばっかりに……！」

八幡「いえ、良いんですよ。俺達、気にしませんから。」

2人に深々と頭を下げられて、なんか逆にこつちが（というより俺自身が）恐縮した気持ちになつてしまう。こんな綺麗な美女達が、俺の事を丁重に扱ってくれるなんて……。うちの女性陣もこの2人に見習つてほしいものだ……。態度といい、綺麗さ……。雪乃・結衣・いろは・留美・陽乃・小町『比企谷君？（ヒツキー？）（先輩？）（八幡？）（ゴミいちゃん？）』

何で一致団結して、俺の頭の中を読んでくるんだよ、お前ら？

城廻先輩も苦笑いしてるし、川崎も睨みつけてるし。

八幡「と、ところで、貴女はいつたい……？」

璃夢「あつ、自己紹介が遅れました。私は雪ノ下様のバスガイド担当をさせて頂きます、能登谷 璃夢（ののや りむ）です！今回がバスガイドデビューになります！皆さん、宜しく願いますねー！」

……うん。明らかに新人さんですね。さっきのガイドさんの挨拶に比べたら……。あれ、そう言えば……？

八幡「あの……さつき『姉様』って言われてましたけど、もしかしてガイドさんと璃夢さんって……?」

俺が尋ねると、ガイドさんが困った顔をしながら答える。

奈呼「そうです。私達、姉妹なんです。自己紹介が遅れましたが、私は能登谷 奈呼（のとや なこ）と申します。今回は璃夢の教育も兼ねて、雪ノ下様の旅行にも同行させて頂きます。改めて、宜しくお願い申し上げます。」

成程な。要するにガイドさん改め奈呼さんは、新人教育ついでに、俺達の旅行の案内をするというわけだ。

璃夢「あれ?もしかして、ね……先輩の担当の比企谷様も一緒になんですか?」

奈呼「そうよ。昨日のミーティングで聞いてなかったの?しかも、比企谷様のご一行と雪ノ下様のご一行はお知り合いみたいだから、一緒に来られたのよ。」

璃夢「そうなんですか!?そう言えば、偶然同じ千葉県から来るから、珍しいなと思ってたんです。」

璃夢さんとやら、知らない人にとつちや確かに偶然かもしれないが、陽乃さん達のグループは、俺達の旅行を知って参加した仕組まれたグループだぞ。

璃夢「よーし!では早速私達の旅行会社のバスで、札幌までお連れ致しますよー!皆さーん!ごちらでーす!」

奈呼「皆様、どうぞこちらへ」

そうして、俺達は奈呼さんと璃夢さんに案内されて、新千歳空港から札幌へと向かうバスに乗り込んだ。小さいマイクロバスだったが、俺達だけに乗せるのには充分すぎるくらい広いスペースがあった。

そうして、俺達は最初の目的地、今日と明日に宿泊するホテルへと向かうのであった。

おまけ・第1話

く旅行1日目の夜・総武高校く

静「ふう……」

平塚静は、残された仕事を大方片付けて、一服していた。

春休み初日にもかかわらず学校にいたのは、4月からの新年度開始と新生受け入れの準備の為の仕事をしていたからであった。

静「この分だと、明日と明後日は連休だから問題ないな。よし、久しぶりに陽乃辺りを誘って、飲みに行くか。」

残された仕事の内容を見て、明日と明後日の休みと陽乃と飲みに行く事を決めて、陽

乃に連絡をした。

トウルル ガチャ

陽乃『ひやつはろー！静ちゃん、久しぶりだね！どうしたの？』

静「久しぶりだな、陽乃。たまには、お前を飲みにも誘おうと思っただが、どうだ？」

陽乃『あつ、ごめん。誘ってくれたのは嬉しいんだけど、今、旅行中なんだ。』

静「旅行……？珍しいな、お前が旅行だなんて。まさか、一人旅か？」

陽乃『違うよー。比企谷君と北海道に行ってるんだよ。婚前旅行でね♪』ドンガラ

ガツシャーン！！

静「……………はっ？」

陽乃の発言の瞬間、静は頭が真っ白になり、電話の向こう側から、騒がしい物音が聴こえてきた。

静「ひ、ひ、ひ、ひ、ひ、比企谷と、こ、こ、こ、婚前旅行だど!？」

陽乃『そーだよー。私、比企谷君と結婚を前提にしたお付き合いを……』

雪乃『何、馬鹿な事を言ってるの!?姉さん!!』

結衣『そうですよ!!これは小町ちゃんと留美ちゃんと城廻先輩の卒業記念旅行じゃないですか!』

いろは『大体、何で先輩とはるさん先輩が、結婚を前提にしたお付き合いをしている

んですか!？」

沙希『比企谷、どういう事!？』

留美『八幡、ちゃんと説明してほしいんだけど……。』

八幡『い、いや、落ち着け、お前ら。どう考えても、陽乃さんの戯言じゃないか。』

めぐり『そ、そうだよ、みんな。比企谷君、私は信じてるからね。ちゃんと説明してくれたら。』

八幡『そ、それって、説明しない限りは信用しないって事ですか!？』

小町『うーん。流石、陽乃さんですね。小町的にポイント高い♪』

電話の向こうでは、陽乃や八幡達が大騒ぎをしている様子が聴こえてくる。電話の向こうの声で、静は誰がいるのか瞬時に理解出来た。

静「……………陽乃、電話を切るぞ。邪魔して悪かったな……………」

陽乃『あつ、わかったよー。お土産買ってくるから、期待して待っててねー!』

ピッ

静「……………ふ……………ふふふふ……………はははは……………!」

電話を切った刹那、静の中の『何か』が壊れて、乾いた笑いが出てくる。

静「同級生なら未だしも……………まさか、教え子達にまで先を超されてしまうとはな

……………!」ポロポロ

笑いながらも、静の両目から涙が零れ落ちる。そして

静「——うあああああああああああ——！！！！」

叫び声をあげながら高校を出て、夜の千葉の繁華街へと走り出した。

飲み屋で自棄酒をした果てに酒乱になり、その店にいた何組かの不幸なカップルの男に問答無用で襲い掛かり、店を追い出されると、今度は道行く何組かの不幸なカップルの男相手に大暴れをして、最終的には警察のお世話になったという。

なお、警察のお世話になつてゐる間に八幡達が帰つてきて、八幡や陽乃達からお土産を貰えなかつたのは、全くの余談である。

第4話

「札幌・某ホテル」

陽乃「へえー、なかなかいい感じじゃない。」

雪乃「そうね。流石、4つ星ホテルと言ったところかしら。」

新千歳空港からバスに乗って1時間、俺達とはあるホテルに到着し、バスから降りてホテルを見た（社長令嬢であり県議会議員の娘達である）雪ノ下姉妹の感想は、平然としたものだった。

八幡・結衣・いろは・小町・めぐり・沙希・留美『……………』

しかし、しがたない庶民の俺達は、ホテルを見て茫然としていた。マジでこんな所に俺達が宿泊するのかと思うくらい。

八幡「あ、あのー……。奈呼さん。」

奈呼「いかなさいましたか？比企谷様。」

八幡「道、間違えてないですよ？俺達が本当にここに宿泊するんですか？」

奈呼「ええ。間違いないありません。こちらのホテルが比企谷様と雪ノ下様達が宿泊されるホテルです。」

小町「本当ですか!?!すごい!!こんな凄いホテルに小町達が泊まるなんて、夢にも思わなかったですよ!」

璃夢「喜んでくれて何よりです。他の皆様も気に入って頂きました?」

留美「う、うん。嬉しい事は嬉しいけど……。」

めぐり「逆に信じられないって気持ちの方が強いですよ。本当に私達がここに泊まるって思うと。」

結衣「まさか、こんな大きいホテルにあたし達が泊まるなんて……。」

沙希「そうだね。後にも先にも、今回だけでもね。」

いろは「なんか、一生分の運を使い果たしちゃった感じですね。ここまで来ると……。」

俺達が今回の旅行で宿泊するホテル、その大きさに雪ノ下姉妹を除いた俺達は圧倒されるか信じられないと言った気持ちでいっぱいだった。

札幌の市内から車で約30分ぐらいの郊外にある海が近いホテルで、何とプールや温泉、エステやフィットネスなど、とにかく庶民には贅沢過ぎる位の施設が揃っていた。

結婚式の会場でも当然使われており、二次会で使われるような和洋中の高級レストランやスカイラウンジバー等もあり、一介の学生の身分では、とても敷居の高すぎるホテルだったのだ。

璃夢「ではでは、フロント迄ご案内致しますねー!」

璃夢さんと奈呼さんの案内のもと、俺達は受付をする為にホテルのフロントへと向かった。

「ホテル・フロント」

八幡「うわっ……。マジかよ……。」

ホテルに入ってその光景を見た第一声が、それだった。

フロントの広さも当然の事ながら、隣には大きなプールまで見える。しかも、3月の肌寒い時期にも関わらず、そこで海パンやら水着やらに着替えて遊んでいる人達の姿も見える。

陽乃「おそらく、この時期だと温水プールね。ここって、確か一年中プールの営業やっているから。」

そういう事か。陽乃さんの言う通り、それでもなければ寒中水泳なんてやるバカなんていないだろう。

そんなプールを見ながら、俺達はフロントの受付へとたどり着く。

「いらっしやいませ。当ホテルへようこそ。」

受付の女性が落ち着いた微笑みで、俺達に應對する。

八幡「4名で予約した比企谷です。」

陽乃「雪ノ下です。5名で予約しました。」

「比企谷様と雪ノ下様ですね。お待ちしておりました。お手数ですが、こちらにご記入の程、お願い致します。」

そうして、俺のグループと陽乃さんのグループは、それぞれ名前を記入して、受付に渡した。

「はい。お受け賜りました。では、雪ノ下様からお部屋の鍵をお渡し致します。」

陽乃さん達のグループの部屋数は、501〜503の3部屋。501に川崎（シングルの部屋らしい）、502には雪ノ下と陽乃さん、503に由比ヶ浜と一色という組み合わせだった。

「続きまして、比企谷様のお部屋の鍵をお渡し致します。504に城廻様と比企谷小町様、505に比企谷八幡様と鶴見様で、宜しいでしょうか？」

雪乃・結衣・いろは・沙希・陽乃『……………えっ?』

八幡「あつ、はい。そうです。」

受付の女性の確認に答えて、俺達が鍵を受け取ろうとした瞬間

結衣・いろは・沙希『ちよつと待った—————!!』

いきなり、由比ヶ浜・一色・川崎の3人が大声で叫び、俺達の動きを止めた。

八幡「な、何だよ、お前ら?! いきなり大声で叫びやがって。ビックリしたじゃねえか。他の人達も見てるんだから、やめろよ。」

振り向くと、大声で叫んだ由比ヶ浜達が、顔を真っ赤にさせながら口をパクパクさせて、俺と留美を睨みつけていた。

結衣「ビ、ビックリしたのはこっちだよ! 何で、ヒツキーと留美ちゃんが一緒の部屋になるんだし!」

八幡「別にいいじゃねえか、ホテルの部屋くらい。ってゆーか、雪ノ下はなんで携帯取り出してんだよ?」

雪乃「あら、目の前に今日犯罪者になる男がいるのに、それを見逃す訳にはいかないでしょう。善良な一市民として。」

陽乃「そうだね。流石にこれは、いかななものかなあ。」

雪ノ下姉妹は笑顔ではあるものの、由比ヶ浜達同様、完全にお怒りモードと化している。

めぐり「はるさん、違うですよ。相部屋をジャンケンで決めた結果なんです。」

いろは「じゃ、ジャンケンの結果なんですか!」

沙希「本当なの? 小町。」

小町「そうなんですよ。小町もめぐりさんもおにいちちゃんと相部屋を狙ってたんですけど、留美ちゃんとジャンケンして負けちゃったんです。」

留美「めぐりさんと小町さんの言う通り、公正なジャンケンの結果、私が勝ったの。だから、悪く思わないでね、飛び入り参加のお姉さん達。」ドヤア

結衣「な、何で留美ちゃん、そんなどや顔してるんだし!!ヒツキー、キモい!超キモい!!」

八幡「何で俺がデイスられなくちゃいけないんだよ?だからいいじゃねえか。二元々、別のグループなんだし。」

いろは「と、とにかくダメです!!留美ちゃん、それなら私が部屋を変わってあげるから!!」

沙希「一色?どきどきに紛れて、アンタは何ほざいてるんだい?」

陽乃「留美ちゃん、もっと自分を大切にしなさい。なんなら、お姉さんが部屋を変わっても……。」

雪乃「姉さんもどきどきに紛れて、何ふざけた事を言ってるのよ!!」

あの、周りの視線が物凄く痛いので、そろそろ騒ぐのはやめて頂けませんかね?お嬢様方。受付の人も凄い苦笑いして、ドン引きしてるし。

璃夢「皆様、それならこれで決めるのはどうでしょう!?!」

その時、璃夢さんがある小さなものを手にしながら、騒いでいる俺達に声をかける。

八幡「サ、サイコロ？」

奈呼「ええ。これで皆様の部屋を決めるんです。別に予約をされた方々ですけど、大丈夫ですよね？」

「は、はい。見たところ、皆様お知り合いみたいですから、こちらは一向に構いませんが……。」

奈呼さんが受付の人に確認をとって、受付の人がそれを了承する。おそらく、受付の人も早く決めてほしいと思っっているのだろう。

八幡「ちなみに、どうやって決めるんですか？」

璃夢「簡単です。皆様このサイコロを1回ずつ振って、1〜5が出たら、その下1桁の部屋で決定。6が出たらもう1回っていう感じで、いかがでしょうか？」

奈呼「補足しますと、1回目で1が1人、2〜5が2人以下でしたら、その部屋で決定になります。それ以上になった場合は、2回目の出目が多い人がその部屋、出目の少ない人は埋まっていない部屋で決定になります。それで異存はないでしょうか？」

成程な。公正さを出す為にも、全員が1回ずつ振るといふ訳だ。しかし、他のメンツが了承するかどうか……。

留美「……別に構わないよ。」

意外な事に、一番反対すると思っていた留美が賛同してきた。これには、陽乃さんですら驚いている。

八幡「えっ？留美、いいのか？」

留美「うん。どうせ多数決でそうなるのが見えてるし。それだったら、最初から賛成した方が良いと思ったから。」

陽乃「……流石、最年少で参加しているだけの事はあるね。昔の雪乃ちゃんみたい。」
陽乃さんが留美の事を関心を持ったみたいだ。「昔の雪乃」と言っているように、確かに留美の数年後には雪ノ下に負けなくらいの美少女に成長している可能性は高い。それにしても、魔王に目をつけられるなんて、ルミルミも大変な目に遭うぞ……。

留美「お姉さん達はどうなの？」

陽乃「勿論、私も賛成だよ。改めて自己紹介するけど、雪乃ちゃんのお姉ちゃんの雪ノ下陽乃よ。宜しくね、留美ちゃん。」

留美「……鶴見留美。宜しく、陽乃さん。」

雪乃「……鶴見さんが賛成するなら、私達も賛同するしかないでしょう。」

沙希「……そうだね。恨みつこ無しで出来るなら、それで構わないよ。」

結衣「まさか、留美ちゃんがそんな事を言うとは、思わなかったけどね。」

いろは「でも、良いじゃないですか。それで行きましようよ。受付の人も奈呼さんも

璃夢さんも、構わないって言ってるんですから。」

留美「めぐりさんと小町さんも参加するんでしょ？」

小町「えっ!?! 良いの、留美ちゃん!?!」

めぐり「私達、ジャンケンで負けちゃったのに……?」

留美「うん。全員でやらなくちゃ公平じゃないから。勿論、八幡もね。」

八幡「お、おう。分かった。」

そうして、俺達はサイコロを振って、宿泊する部屋を決めたのであった。

そして、意外な事に、俺達の部屋は一発で決まったのであった。

く部屋決めの結果く

501

八幡「……まさか、俺以外誰も1が出ないとは思わなかったな。」

八幡がトップバッターでサイコロを振り、その結果は1だった。

八幡以外のメンバーが、全員1以外を出してしまった為、必然的に八幡が501の部屋に決定したのだった。

八幡「まあいいか。1人部屋のほうが何かと落ち着くしな。」

八幡はベッドに寝転がりながら、思わず呟く。

八幡「それにしても、偶然とはいえ、よく他の部屋のメンツも上手く振り分けられたよな……。ある意味、今回のメンツじゃベストなんじゃないかって思うくらい……。」

502

沙希「……まさか、アンタと一緒にになるとは思わなかったよ、由比ヶ浜。」

結衣「えっ、あたしと一緒にじゃ嫌なの、沙希!？」

502の部屋は、結衣と沙希のクラスメイトペアになった。沙希の言葉に、結衣は不安げな表情になる。

沙希「違うよ。むしろ、その逆。由比ヶ浜で良かったって意味。」

結衣「へっ?良かった?」

沙希「そうだよ。アタシが今回のメンツで気軽に話せそうなの、アンタか比企谷か小町ぐらいだからね。他のメンツだったら、少し気不味い雰囲気になってたかもね。」

結衣「……」

沙希「ん?どうしたの?」

結衣「……学校では無口な沙希が、こんなに喋ってくれてるなんて思わなかった。それに、沙希があたしの事をそんな風に思ってくれるなんて……。」

沙希「ゆ、由比ヶ浜……?」

結衣「嬉しいよー！沙希ー!!」ギュツ

沙希「ちよっ！いきなり抱きつくな！」

結衣「これからルームメイト同士、宜しくね！あつ、でもヒツキーの事は話は別だからね。負けないよ、沙希!!」

沙希「あつ、ああ……。お手柔らかに頼むよ……。アタシも負けるつもりはないけどね……。」

503

留美「……八幡、一番最初なのに、1人だけ1を出すなんてあり得ない。どんだけ、ぼっちになるのが好きなの？」

小町「まあまあ、留美ちゃん。それが、ゴミいちゃんクオリティでしょ。」

503の部屋になったのは、小町と留美の最年少ペア。

八幡が1人部屋を引いて、ぷくーと頬を膨らましながら不満を愚痴る留美を、小町が宥めていた。

小町「でも、小町は留美ちゃんとペアになれて、良かったよ。留美ちゃんにおにいちやん以外の人達と仲良くしてもらいたいって、小町思ってたから。」

留美「えっ？そうなの？」

小町「そうだよ。余計なおせっかいかもしれないけど、小町は留美ちゃんにも今回の

旅行を楽しんでほしいって思ってるよ。その為にはめぐりさんだけじゃなくて、雪乃さんや結衣さん達とも仲良くなつてほしいなって。」

留美「……………」

小町「勿論、留美ちゃんが『みんなと楽しみたい』って思わなくちゃ意味ないからね。無理やり楽しませようとしても逆効果なのは、おにいちゃん見て分かっているから。」

留美「……八幡もこの旅行、楽しみたいのかな?」

小町「ありや。ここでおにいちゃんの名前が出ちやうの。でも、おにいちゃんも楽しみたいって言つてた気がするよ。」

留美「……それだったら、私も仲良く出来るように頑張る。八幡や小町さん、他のみんなと楽しみたいから。」

小町「うん、分かったよ。小町もサポートするからね。(まだ、おにいちゃんに依存してる)ところはあるけど、良い傾向かな?」

留美「うん。宜しくね、小町さん。」ニコツ

小町「(か、可愛い~~~~!!)」ズキューン

留美「でも、みんなと仲良くなる事と八幡の事は話は別。ついでに八幡の事も小町さんにサポートしてもらおうかな。」ニヤリ

小町「(でも、その直後に黒い笑みだよ! さつきの可愛い笑みが台無しだよ! 留美

ちやくん!!」

504

めぐり「嬉しいですよ。はるさんと一緒の部屋になれるなんて。」

陽乃「私も嬉しいよ、めぐり。」

504の部屋には、陽乃とめぐりの最年長ペアになった。

元生徒会の先輩と後輩の関係であるこの2人、陽乃はめぐりに一目置いてある事もあり、結構可愛がっていた。

陽乃「ねえ、めぐり。」

めぐり「はい? どうしました?」

陽乃「比企谷君の事、狙ってるんでしょ? 今回の旅行をきつかけにして。」

めぐり「えっ……!? は、はるさん……!!」

陽乃の問いかけに対して、瞬き間に顔を真っ赤にするめぐり。

陽乃「やっぱりそうなんだ。だったら、私達恋敵になるね。」

めぐり「えっ!? は、はるさんもまさか……!?」

陽乃「そうだよ。私も比企谷君の事、好きなんだ。本当の初恋って言っても良いぐらいね。」

めぐり「えええ!!」

陽乃の初恋発言に、めぐりは驚きを隠せなかった。

陽乃「最初は雪乃ちゃんとかくっ付けようって思ってたんだけど、比企谷君と話したり交流していくうちに、それがだんだん無くなってきちゃってね。あんな魅力的な人、他にいないんじゃないかな。」

めぐり「……………」

陽乃「だから今回の旅行の話聞いて決めたんだ。比企谷君の恋人になるって。だから、めぐり達の旅行に飛び入り参加したんだよ。」

めぐり「そ、そうだったんですか……………」

陽乃「それに、めぐりも含めて今回の参加した女の子全員、比企谷君の事が好きみたいね。」

めぐり「ええええ!?!全員って……………留美ちゃんや小町ちゃんも!?!」

陽乃「おそらくね。私らしくも無いけど、全員集めて勝負したくなっちゃったんだ。だから、雪乃ちゃんとガハマちゃん、いろはちゃんと沙希ちゃんも誘ったのよ。」

めぐり「……………」

陽乃「私、負けないからね。めぐり。必ず比企谷君の恋人になってみせるから。」
めぐり「わ……………私だって、負けません!」

陽乃の宣言に、めぐりもまた、決意表明をしたかのように陽乃に宣言する。

めぐり「……はるさんの事は尊敬しています。でも、比企谷君の事を譲るつもりはありません！私が比企谷君の恋人になってみせます！」

陽乃「……オツケー。流石、私が一目置いている城廻めぐりね。言っておくけど、負けても恨みつこ無しだからね。」

めぐり「はい。はるさんが相手なら。」

陽乃「あつ、でも相手は私だけじゃ無いからね。雪乃ちゃん達もいるから。」

めぐり「うつ、そうでした……。」

505

いろは「うー……先輩のバカ。何でよりによつて、1人部屋になっちゃうんですか。せつかく、先輩と一緒にの部屋になるチャンスだったのに……。」

雪乃「いつまでも愚痴るのはやめなさい、一色さん。恨みつこ無しの約束でしょう。」
必然的に505の部屋になったのは、雪乃といろはの先輩後輩ペアだった。

八幡への不満を愚痴るいろはを、雪乃が諫めている。

いろは「でも、雪ノ下先輩で良かったですよ。部屋のペアになったの。」

雪乃「あら、それは意外ね。私、一色さんにライバル視されると思ってるんだけど？」

いろは「確かに先輩の事では、結衣先輩も含めて最大のライバルだと思っています。」

でも、それと同時に雪ノ下先輩と結衣先輩の事、尊敬していますから。」

雪乃「そ、そう。」

いろはの言葉に、雪乃は思わず顔を赤くしながら背ける。

いろは「それにしても、雪ノ下先輩とはるさん先輩、こんな凄いホテルに来て平然としていましたよね。私なんて、驚くしか出来なかつたのに。」

雪乃「別に慣れてるつもりはないわ。ただ、幼い頃から家族旅行か何かで、こういうホテルに宿泊する機会があつただけだから。」

いろは「……それが慣れてるって言うんですよー。私なんて、雪ノ下先輩やはるさん先輩と違つて、庶民なんですから、こういうホテルに泊まる機会なんて無いですもん。」

雪乃の言葉に、ぷくーと頬を膨らますいろは。

雪乃「(あら、可愛い。由比ヶ浜さんとはまた違つたベクトルの可愛さね。比企谷君だつたら、『あざとい』って言いそうだけど。)」

いろは「……雪ノ下先輩、何か失礼な事、考えてませんでした?」

雪乃をジト目で見るいろは。

雪乃「そ、そんな事無いわよ。一色さんも比企谷君に毒されて、そんな目をしちやいけないわ。」

いろは「だ、誰が先輩に毒されてるんですか!? あんな死んだ魚の目と一緒にされるな

んて心外です！雪ノ下先輩こそ先輩に毒されて、私に考えを読まれないでくださいよ！」

雪乃「だ、誰が毒されてるですつて!? あんな男と一緒にされるなんて、侮辱以外の何物でも無いわ！ 訴訟も辞さないわよ！」

いろは「……………」

雪乃「……………」

一触即発の状態で睨みあう2人。しかし

雪乃「……フフフ。」

いろは「……アハハ。」

暫くしたら、2人で笑いあう。

いろは「……………」でも、そんな人を好きになっちゃったんですよね、私達。」

雪乃「……そうね。しかも私達だけじゃなくて、比企谷君を除いた今回の旅行の参加者全員つていう事になるけどね。」

いろは「そうですね。でも、覚悟してくださいよ、雪ノ下先輩。最後に勝つのは、私ですから！」

雪乃「あら、私が負けず嫌いなもの知つての宣言? いいわよ。私だつてそのつもりで来ているから。」

八幡「……なんか、隣の部屋から雪ノ下達の部屋まで、攻撃的な気配がするんだけど……。気のせいだよな……。」

—— おまけ 第2話 ——

（同時刻・新千歳空港（折本かおり side））

かおり「いやー、来ちゃったね。北海道。」

私は家族と一緒に北海道に旅行に来た。まさか、こんな年になって、家族旅行なんてウケるんだけど。

折本母「そうね。どういう予定か覚えているの？ かおり。」

かおり「当たり前じゃん。今日と明日の昼までは札幌、明日の昼から明後日は函館でしょ？ 父さん。」

折本父「そうだ。3連休で駆け足になるけどな。悪いな、かおり。」

かおり「別にいいよ。たまには私も家族サービスしてあげないとね、母さん。」

折本母「何言ってるの、かおりったら。家族サービスするのはお父さんでしょ。」

かおり「そう言えば、そうだった。ウケるw」

折本父「まあ、なんだ。今からレンタカー借りてくるから、母さんと待つてなさい、か

おり。」

かおり「分かったよ、父さん。」

なんだかんだ言っても、父さんと母さんと北海道に来る事を、私は楽しみにしていた。これから先、どんな楽しみがあるんだろう。

まさか、ここで知り合いとかに会うなんて無いよね？

もし会ったら、マジウケるんだけどwwww

第5話

（ホテル・フロント）

八幡「遅いですね。アイツら。呼びに行つたら、全員『先行つて』とか言うし……。』
奈呼「八幡様以外、皆様女の子ですからね。きつと、おしやれに気を使つているんですよ。」

八幡「そうですね。アイツらが俺相手におしやれしても意味無いと思うんですけど。むしろ、何人かは奈呼さんと璃夢さんの爪の垢を煎じて飲めつて言いたいですよ。」
璃夢「ハハハ……。八幡君も手厳しいですね……。」

俺は札幌市街を観光する為に、ホテルのフロントで奈呼さんと璃夢さんと一緒に、他のメンツを待つていた。

もう出発時間を5分くらい過ぎているのに、俺以外のメンツは未だに姿を見せていないので、思わず奈呼さんと璃夢さんに愚痴つていた。

待つてる間に俺は、奈呼さんと璃夢さんといろんな話をしていた。（きつかけは奈呼さんと璃夢さんから話しかけてきた事もあるが。）

その中で璃夢さんが、『比企谷様』ではなく『八幡君』と呼んでも良いですか？ 『比

企谷様』つてお2人いますから。」と言ってきたので、俺はそれを了承した。（ついでに小町の事を『小町ちゃん』つて呼ぶ事も。）

奈呼さんは、お客様に失礼だと璃夢さんに怒ったが、『比企谷』という性のお客様がお2人いる以上、どちらを呼ぶか分からない時がある。」という璃夢さんの主張にも一理あると思ひ、奈呼さんにもそう呼んでほしいと俺は頼んだ。（ただ、『雪ノ下』も2人いる為、そちらは本人達の了解をとつてからは付け加えた。）

奈呼さんは渋々承諾したが、抵抗があるのか、俺の事を『八幡様』と呼んでいる。

というより、俺のほうが年下なんだから、年上の人に『八幡様』と呼ばれるのは、正直抵抗がある。しかし、奈呼さんの真面目な勤務姿勢と性格が、非常に好感を持ったので、それは妥協しようと思った。

少し話してみてわかった事は、奈呼さんと璃夢さんは俺にとつて、戸塚や小町、城廻先輩とはまた違うベクトルの癒し系の間人だと感じた。

奈呼さんは、雪ノ下や留美（容姿もあの2人が大人になったような感じでもある）みたいな真面目さがベースではあるものの、あの2人とは違うところは、それを感じさせない城廻先輩のような柔らかい姿勢（言い換えれば、頑固で毒をはく性格ではない）と川崎の気取らないお姉さん属性を持っている。結論を言えば、雪ノ下+留美+城廻先輩+川崎の長所を併せ持ち、短所をなくしたような人なのだ（因みに年齢は24歳）。

それに対し璃夢さんは、簡単に言えば、

「あざとさのない一色や小町」、「キモいと言わない由比ヶ浜」、そして「仮面の無い陽乃さん」。

それらを併せ持った感じだ。

明るくて天真爛漫でドジっ子な人ではあるが、それが演技ではなく、計算や打算で動く人ではないと感じた（因みに年齢は21歳、なんと陽乃さんよりも年上だったのだ）。そして、2人に共通していえる事は、『客である俺達の事を心からもてなしたい』ところだ。

作業的に仕事をこなすのではなく、俺達に楽しい旅行を過ごしてもらいたいという姿勢が、短時間で話してみただけでも凄く伝わる。

無論、現時点では奈呼さんの方が、非常に優秀なガイドさんなのは、言うまでもない。しかし、璃夢さんは未熟なところが多いけれど、それがなくなればいずれは姉を越えるガイドさんになるのではないかと思う。

話が長くなってしまったが、これだけは言える。

『もし、この2人から告白されたら、俺は迷う事無くOKを出す』と。

璃夢「あれ？八幡君の飲んでいるその飲み物、なんですか？」

奈呼「何か変わった感じのコーヒーですね。黄色い缶で。」

そんな事を考えているうちに、奈呼さんと璃夢さんは、俺の手に持っているマツカンに興味を示し、尋ねてきた。

八幡「あつ、これですか？これはマツクスコーヒーと言って、千葉県のソウルドリンクです。一応、全国的に発売されてるんですけど、見た事無いですか？」

璃夢「いいえ。見た事無いですよ。先輩は？」

奈呼「私も見た事無いですね。」

俺は2人にマツカンについての簡単な説明をすると、2人はマツカンに興味津々になる。

璃夢「少し興味あるかも。飲んでみても良いですか？」

奈呼「こ、こら！璃夢!!貴女はまたお客様に対して!!」

八幡「別に良いですよ。俺の飲みかけで良ければ。奈呼さんも飲んでみますか？」

奈呼「い、いえ、八幡様に対して申し訳ないですよ。そんな事。」

八幡「俺は良いんですよ。まだホテルの部屋に持ち込みあるし、帰ってからでも飲めるから。少しでも、多くの人にこのコーヒーの良さを知ってもらいたいから、奈呼さんにも是非飲んでもらいたいです。」

奈呼「わ、わかりました。それでは失礼します。」

そうして、俺は飲みかけのマツカンを奈呼さんに渡し、奈呼さんが一口飲んでみた。

奈呼「えっ?このコーヒー、私の好みかも……。」

………マジで!?俺の知り合いほぼ全員に、散々否定されてきたマツカンが受け入れられただど!?

璃夢「先輩、本当!?私も飲みますよ、八幡君!」

八幡「え、ええ。どうぞ。」

続いて璃夢さんがマツカンを一口飲んでみる。

璃夢「あつ!美味しい!私もこれ好きになりそう!」

マジかよ……!まさか、遠い北の地でマツカンを好きになってくれる人が2人もいるなんて……!

璃夢「あれ!?どうしたんですか!?八幡君!」

奈呼「い、いかなさいました!」

八幡「……いや、嬉しくてつい目から汗が出ちやっただです。地元で散々否定されてきたから……!」

奈呼「そ、そうなんですか?」

璃夢「と、とりあえずお返ししますから、飲んで落ち着いてくださいよ。」

八幡「あつ、はい。すいません……。」グベツ

璃夢さんからマツカンを返されて、俺がそれを飲んだ瞬間

雪乃・結衣・いろは・陽乃・めぐり・沙希・小町・留美
 『あー！！！！』

突然、俺達の数メートル離れた場所から、悲鳴に近い叫び声が聞こえてきた。

八幡・奈呼・璃夢『えっ……？』

突然の叫び声に、俺達はその方向を振り向くと

雪乃・結衣・いろは・陽乃・めぐり・沙希・小町・留美『……………』

そこには、叫び声の主達である、俺達の待ち人達が叫び声をあげたであろう体制のまま、口を大きく開けながら固まっていた。

八幡「ど、どうしたんだよ？揃いも揃ってアホ面しながら叫び声なんてあげて。他の人の迷惑になるから大声出して騒ぐのはやめろって言っただろ。」

俺はこれ以上騒ぎになるのを防ぐ為、彼女達に注意をする。

結衣「……か、間接……キス……。」

八幡「えっ？」

結衣「……ヒッキーと璃夢さんが……間接……キス……。」

八幡「間接……？あっ……／／／」

由比ヶ浜の指摘に、俺の頬の温度が物凄い速さで上昇していくのを感じる。

奈呼・璃夢『あつ……』メソラシ

そして、奈呼さんと璃夢さんもまた、由比ヶ浜の指摘に目をそらした。

小町「ちよ、ちよつと待って！奈呼さんもどうして目をそらしたんですか!？」

留美「まさか、あのコーヒー……奈呼さんも飲んだの？」

うおおおおおおい!!!ラブリーエンジェルマイシスターにルミルミ!!思い出させるんじやねえええええ!!!恥ずかしくて、顔が真っ赤になっちゃうだろうがああああ
ああああ!!!

八幡「い、いや!!違うんだ!!これは……そう!宣伝だ、宣伝!!ごく一部にしか受け入れられないマックスコーヒーの美味しさを、奈呼さんと璃夢さんにも知ってもらおうと思つて……!!信じてくれ、それだけは!!」

結果は何となく分かつていた。しかし、せめて少しでも罪を軽くしてもらおうと、瞬間的に思い付いた弁明を必死に彼女達に伝える。

雪乃「宣伝谷君♪」

結衣「ヒッキー♪」

いろは「先輩♪」

陽乃「比企谷く〜ん♪」

川崎「比企谷♪」

小町「ゴミいちゃん♪」

めぐり「比企谷君♪」

留美「八幡♪」

それに対して、彼女達は実に綺麗な笑顔で、俺を呼ぶ。

八幡「Yes! You, re majesty!」

俺は某アニメの最敬礼にあたる言葉を告げ、直立不動の姿勢になる。そして——
雪乃・結衣・いろは・陽乃・川崎・小町・留美『——言い訳の続きは、バスの中で聞きましょうか（聞こうか）?』

めぐり「あつ、奈呼さんと璃夢さん。遅れてきて大変申し訳ないんですけど、もう少しだけ待って頂けませんか? 運転手さんにも席外してもらいますので。終わりましたら呼びますから。」

——そう言った時の彼女達の目に、光は無かった。

奈呼・璃夢『か、かしこまりました。お待ちしております。』ガクブル

そうして、俺はドナドナの子牛のようにマイクロバスに連れてかれて、散々な目に遭いましたとき。尋問? 魔女裁判? そんな生ぬるいレベルじゃ無かったですよ。

そんな騒動がありながらも、俺達を乗せたマイクロバスは、札幌市街の観光スポットへと向かうのであった。

おまけ 第3話

旅行1日目の夜・千葉市街（戸塚 side）

材木座「戸塚氏、恩にきる。我の買物に付き合ってもらつて。」

戸塚「大丈夫だよ、材木座君。僕も暇だったし、たまには、こういうのも良いと思つたから。」

僕は、材木座君の付き添いで、秋葉原に買物に行つていた帰りで、千葉市街に材木座君と共にいた。

材木座「それにしても、八幡の奴……。我に黙つて北海道旅行だど!? 何故、戸塚氏に言つて、我には言つてくれぬのだ!？」

戸塚「アハハ……。今日、ずっとそればかり言つてるね……。」

材木座君は、八幡が北海道に旅行に行った事を知らされてなかつたらしく、ずっと愚痴を言つていた。

僕は、八幡が福引で旅行を当てた事、小町ちゃん達と一緒に行く事を、福引の翌日に聞いていた。

八幡は、『本当は戸塚も連れていきたかつた』つて悔しそうに言いながらも、『絶対、北

海道士産買ってくるからな！期待して待つてろよ！」とも言っていたので、『うん、待つてよ！』と喜んだ。

八幡が僕の事をそれだけ気にかけてくれるのは、素直に嬉しい。それを材木座君にも、少し分けてあげてもいいんじゃないかなって思うくらい。材木座君も僕と同じぐらい、八幡の事を友達だと思っているんだから。

戸塚「あれ……？」

材木座「ん？どうしたのだ？戸塚氏。」

カラ○ケ館の近くに来た時に、見覚えのある人達が店の前に立っていたのが見える。

戸塚「あのグループ、葉山君達じゃない？」

材木座「ダニイ!？」

そこには、僕達のクラスメイトである葉山君をはじめとした葉山グループの面々がいた。三浦さん、海老名さん、戸部君、大和君、大岡君、そして葉山君。『ある1人』を聞いて、カラ○ケ館の店の前にいた。カラオケを終えた直後なのかな？

戸部「あれ？もしかして、戸塚君達じゃね？あの2人。」

僕達が気付いた直後くらいに、戸部君もまた、僕達の事に気付く。

三浦「あつ、本当だ。戸塚と中二だし。」

海老名「……はっ!?2人きりって、もしかして……!?まさかの『ざい×とつ』!?キー

マーシーターワー……!!」ブハッ

三浦「姫菜、擬態しろし。」

大和「それな。」

大岡「ホントそれ。」

な、なんか、僕達を見て、海老名さんが鼻血を出したんだけど……。それより、『ざい
×とつ』って何……？

葉山「やあ、戸塚君。こんな所で奇遇だね。」

戸塚「うん。今晚は、葉山君。カラオケの帰り？」

葉山「ああ。」

材木座「おい、後ろの眼鏡の女子が、『今度は『はや×とつ』!?愚腐腐腐……』とか
言っておるのだが……。」

なんか材木座君が不穏な事を言っているの、申し訳ないけどスルーして、葉山君に
尋ねてみる。

戸塚「今日は、由比ヶ浜さんがいないみたいだけど、どうしたの？」

材木座「戸塚氏、まさかの無視!？」

葉山「ああ、結衣は旅行に行くって言ってたから今日はいないんだ。戸塚君達も比企
谷と遊びに行ってたのかい？」

戸塚「八幡？八幡は今日はいないよ。北海道旅行に行くって言ってたから。」

葉山・三浦・海老名・戸部・大和・大岡『えっ……？』

葉山君の質問に答えると、葉山君達はきよとんとした顔になる。

三浦「ちよつ、ちよつと待つし！ヒキオがそんな事言つてたの!？」

戸塚「うん。確かにそう言つてたよ。どうしたの、三浦さん？」

三浦「あーしも結衣の旅行先が北海道だつて聞いたから……。雪ノ下さん達と一緒に。」

戸塚・材木座『へっ……？』

三浦さんの言葉に、今度は僕と材木座君がきよとんとなる。

戸塚「そ、それ本当なの!？葉山君。」

葉山「ああ。俺も結衣から聞いている。他には雪ノ下さんのお姉さんと川崎さん、あと生徒会長のいろはも一緒だつて言つてた。もしかして、比企谷も一緒じゃないのか?？」

材木座「いや。我が戸塚氏から聞いた話とは全然違うぞ。」

葉山「全然違う?君達は、比企谷から結衣達と行くとは聞いていないのか?」

戸塚「違うよ。僕達は、八幡の妹の小町ちゃん、元生徒会長の城廻先輩、あと僕達や葉山君達が千葉村で出会つた小学生の留美ちゃんだつて聞いたよ。」

三浦・海老名・戸部・大和・大岡『……………はあっ!?!』
葉山「……………それ、本当かい?」

戸塚「本当だよ。八幡が僕にそう言つてたから。」

海老名「それじゃ、どういう旅行かつて言うのも聞いているの?」

材木座「無論だ。3泊4日の札幌・函館旅行だと言つておつた。」

三浦「はあっ?中二には聞いてないし。アンタも戸塚から聞いたんだろ?」

材木座「ヒイツ!す、すんまそん!」

戸部「でも、結衣も同じ事言つてたんじゃね?」

海老名「私もサキサキから同じ事聞いたよ。この間、北海道の旅行ガイド読んでたから。」

大和「つていうより、それが全部本当の話だったら、ヒキタ二君、凄すぎじゃね?」

大岡「ヤベーな、ヒキタ二君。羨ましすぎでしょ。女の子8人と一緒に旅行だなんて。」

戸部「ヒキタ二君パネエわー。ぼっちどころか超リア充つしよ。下は小学生から上は大学生までなんて。」

三浦「ヒキオの野郎……………!帰つてきたら、絶対に問い詰めてやるし!もし、結衣を泣かせたら……………!!」

葉山「……………。(比企谷、どういふつもりだ……………?)」

海老名「(はっ!隼人君がヒキタニ君の事を考えてる!?)」

材木座「…………と、戸塚氏。思ったよりも、複雑な事態になつておるでござるな…………。」

戸塚「う、うん。そうだね…………。」

僕と材木座君しか知らなかつた八幡の話、葉山君達しか知らなかつた由比ヶ浜さんの話が複雑に絡み合つて、正直頭の中が混乱している。それを整理しようとした時だつた。

相模「あれ?葉山君達に戸塚君?」

偶然なのだろうか、僕達のクラスメイトである相模さんもこの場所に通りがかつたのだ。

戸塚「あつ、相模さん…………。どうしてここに?」

相模「さつきまで、ゆっこや遙達と遊んで、その帰り。つてゆーか、珍しいじゃない?葉山君達と戸塚君が一緒にいるなんて?どんな集まり?」

材木座「あの一応、我も…………。」

葉山「戸塚君。相模さんにもこの事を話しても、大丈夫かい?」

戸塚「あつ、うん…………。」

材木座「また無視!?!」

相模「……この事？」

そうして、葉山君は僕達の一連の話しをまとめて、相模さんに話した。

相模「……要するに、女誑しのヒキタニが、結衣達8人の女の子を侍らかして、北海道に旅行に行つたつて事？」

戸塚「なつ……！相模さん、そんな言い方……！」

相模「だって、事実じゃない。その話が全部本当だつたらだけど。つていうか、あのスケコマシ何様なの？ハーレム王にでもなつたつもり？」

戸塚「相模さん……！」

材木座「お主！これ以上、八幡を愚弄すると……！」

葉山「相模さん、いくらなんでもそれは……！」

僕と材木座君が、相模さんの言葉に食いかかり、葉山君が相模さんを諫めようとした時だった。

「衝撃のおおおお!!!ファーストブリットおおおおおお!!!」

「ぎゃあああああああああああ!!!」

戸塚・材木座・葉山・三浦・海老名・相模・戸部・大和・大岡『っ!?』

突然、僕達の遠くない場所から、聴いた事あるような叫び声、そして男の悲鳴が聞こえて、僕達はそつちの方に振り向いた。

女「や……やめなさいよ！コイツが何をしたって言うのよ!?」

男「つていうか、あんた誰だよ!?俺、あんたみたいなオバサン、知り合い……!!」

静「黙れええええええええええええええええええええええええ!!撃滅のおおお!セカンドブリットお
おおおおおお!!」ドゴオツ!!

男「があああああああああああああああああ!!」

静「……五月蠅い五月蠅い五月蠅い……!貴様等のような小僧や小娘がいちゃつく様
を見せつけられるのは、私にとってこの上ない耐え難い屈辱なのだ……!!」

女「な、何言ってるのよ!オバサン!!私達は遠出で遊びに来ただけなのに……!!」

男「……やめろ……御○……!」

女「……アンタ…………!」

静「ほう、あれを喰らってもまだ立ち上がるか……!!」

男「………へっ、コイツの目の前でみつともない姿を見せる訳にはいかないんでな
………!!」

静「………ふむ、貴様はこれまでのカップルの男と違い、根性のある奴のようだな
………だが!!」

男「ふざけんじゃねえ!!その幻——」

静「これで終わりだ!!抹殺のおおおおおおおおお!!!ラストブリットおおおお

おおおおおおお!!!!
「!!!」

ドカアツ!!!!

男「だーーーーー!!不幸ーーーーーだーーーーー!!!」ヒュ
ウーーーーー キラン☆

女「と……………当〇ーーーーー!!!」タツタツタ……………

静「フン……………。なかなか骨のある奴だったな……………。次のカップル狩りに行くか……………」コツコツコツ……………

戸塚・材木座・葉山・三浦・海老名・相模・戸部・大和・大岡『……………』ヒュ
ウウウウウウ……………

目の前で起こった出来事の一部始終を見ていた僕達は、暫く茫然自失になって立ち尽くすしか出来なかった。

自分達の高校の教師である平塚先生が、僕達の目の前で暴行事件を起こしていた。おそらく、僕も材木座君も葉山君達も、目が点になっているに違いない。さっきの相模さんとの間に起こりそうだったいざごぎも、正直吹き飛んでしまった。

三浦「……………はっ!隼人!みんな!!」

そんな中、一番早く復活した三浦さんが、僕達に呼びかける。

葉山「……………!優美子!!」

三浦「早くあのアラサー教師、止めるし！最悪、警察呼んでも……！」

戸塚「そ、そうだよ！早く平塚先生、止めないと！このままじゃ、他の人達にも……！！」

材木座「……いや、戸塚氏。我等にあの修羅が止められると思うか……？」

戸部「ざいもくざき君の言う通りっしょ……。俺、まだ死にたくねえもん……。」

大和「……それな。」

大岡「……ホントそれ。」

相模「……いや、どう考えても無理でしょ。ウチらじゃ……。」

海老名「やっぱり警察呼ぶ……？」

三浦「隼人、どうするし!？」

葉山「……残念だけど、今の平塚先生を止めるのは、俺達では危険だ。警察を呼ぼう……。」

戸塚「う、うん……。それしか無いよね……。」

そうして、僕達は警察に連絡して、平塚先生の暴走を止める事にした。

余談として、僕達が目撃した事件や他の事件が翌日の朝刊の三面記事に出て、平塚先生が新聞の顔に出ていた。

戸塚「……ねえ、材木座君。」

材木座「……何だ？戸塚氏よ。」

戸塚「平塚先生が襲ったカッパルの人達、どこかで見た事ある気がするんだけど……。」

材木座「……奇遇だな。我もそう思っていた。」

あのカッパルの2人（黒髪のツンツン頭の男の子と短い茶髪の女の子）には、平塚先生が迷惑をかけて本当に申し訳ないと思う。（男の子は入院したと記事に載っていた。）もし、入院先が分かったら、訪問して平塚先生の代わりに謝りたいと、心から思った。

第6話

〽札幌市街・札幌駅付近〽

八幡「ゼエ……ゼエ……ちよつ、ちよつと待つてくれ……。」

雪乃「あら。ギブアツプかしら？荷物持ち谷君。」

いろは「そーですよ、先輩。いつもの生徒会で重い荷物を平気で持つてくれる先輩は、何処に行っちゃったんですかー？」

八幡「いや……それは学校の中だけの話だろうが……。流石に8人分の買い物物の荷物を持つて街の中を歩くなんて、したことねえぞ……。」

結衣「でも、バスに着くまでの我慢だからね、ヒツキー。」

沙希「まあ、頑張りなよ。それでさっきの件は水に流すつて約束だからね。」

めぐり「そうだよ、比企谷君。もう少しの辛抱だからね。」

……そういう訳で、俺は女性陣全員の買い物物の荷物持ちをしていた。

さっきのマツカン間接キス事件の罰として、札幌駅と繋がっているショッピングモールで全員の買い物物を持ってもらうという事で、俺の処分を決めたらしい。

まあ、それまで散々な目に遭ったのは、言うまでもない。

つていうか、たかが間接キスだけじゃねえか……。それなのに、どうしてこうなるんだよ……。

陽乃「あれ？この後の商店街や市場でも、荷物持ちをやりたいたいのかな？比企谷君。」

八幡「い、いいえ。謹んでお断り申し上げます。」

あの、俺つてそんなに考えが読まれやすいですかね？ふと思っただけで、こういう風に言われちゃうし。

小町「まったく……これだから、ゴミいちゃんは……。」

留美「……バツカみたい……。」

小町も呆れた表情で、留美も頬をぷくーと膨らませながら、俺を見ている。だから、何でルミルミも俺の心の中が読めるんだよ？小町はなんとなく分かるけど。

奈呼「あの、本当に申し訳ございません。八幡様。」

璃夢「大丈夫ですか？八幡君。本当にごめんなさい。」

そんな時、奈呼さんが璃夢さんが、申し訳なさそうに俺に謝ってくる。自分達のせいでもあると思っっているのだろう。

八幡「いえ、大丈夫ですよ。一色も言っただけで、部活や生徒会で重い物を持つのは慣れてるんで。それに悪いのは勧めた俺で、奈呼さんと璃夢さんのせいじゃないですから。」

そんな戸塚に負けず劣らずの天使の2人に対して、俺はそう彼女達に言った。しかし、その次の瞬間

八幡「……ん？ヒッ！」

雪乃・結衣・いろは・陽乃・沙希・留美『……………』

城廻先輩と小町を除いた他のメンツが、俺に対してゴミを見るような視線（陽乃さんは冷たい笑顔）で見えていた。

めぐり・小町『ハハハ……』

城廻先輩と小町はと言うと、ただ苦笑いしているだけだったが。

八幡「な、何だよ？」

陽乃「比企谷君。いつの間に、奈呼さんと璃夢さんから名前で呼ばれるようになったのかな？お姉さん、スツゴク知りたいんだけど。」

八幡「……はい？」

雪乃「そうね。私達が準備している間、お2人と楽しそうにお話しをしていたみたいですよのね。私も凄く気になるわ。」

八幡「あのな、これは……。」

璃夢「あく。ごめんさい。それは私がお願いしたんですよ。」

俺が反論しようとした時、璃夢さんが雪ノ下と陽乃さんに対して、俺の代わりに答え

ていた。

結衣「えっ？ 璃夢さんがですか？」

璃夢「そうなんです。同じ『比企谷』の姓の方が、お2人いらつしやいますから、仮にお名前をお呼びする場合、混乱しちゃうかなって思つて。一応、『八幡』と『小町』でいいつて、八幡君からのご了解は頂いてます。」

いろは「そうだったんですね。それならそうと、先輩も早く言つてくれればいいのに。」

いや、俺、言おうとしてたからね。いろはす。

でも、璃夢さんのお陰で、アイツらの視線が普通に戻つたし、陽乃さんの冷たい笑顔もなくなつた。城廻先輩も小町も感心していたし。

俺が言つと、こうはいかないんだろな……。少し泣きたくなつたぞ。

璃夢「あ、あと雪ノ下様にも同じ事をお願いしようと思つていたんです。雪ノ下様も私達や八幡君達と同じように姉妹じゃないですか。八幡君に聞いたたら、雪ノ下様のご了解を得てからにしてくださいって言われましたので。」

陽乃「なるほど、そういう事ですね。雪乃ちゃんはどうなの？」

雪乃「私？ 別に構わないけれど。」

陽乃「でしたら、私達も名前で呼んでいいですよ。『陽乃』と『雪乃』で。」

璃夢「ありがとうございます。でしたら……陽乃ちゃんと雪乃ちゃん？」

八幡「ブフツツ!!」

璃夢さんの呼び方に思わず吹き出してしまふ。『雪乃ちゃん』は陽乃さんからよく聞くからいいけど、『陽乃ちゃん』だぜ？確かに璃夢さんの方が年上だけど、まさか魔王がそんな風に呼ばれるなんて思わないじゃないか。

奈呼「り、璃夢！いくら何でも、それはお客様に対して失礼でしょ!! 『八幡君』はま
だいいとしても!!」

璃夢「でも、八幡君の妹は『小町ちゃん』でいいって言ってたじゃないですか。大丈夫ですよ、小町ちゃん？」

小町「はい！小町も璃夢さんの意見に賛成しますよ！」

奈呼「で、でも、流石にそれは馴れ馴れし過ぎると思うのですが……。小町様にも悪
いですし……。」

小町「あつ、奈呼さん。その『小町様』というのは、小町的にポイント低いですよ。」
奈呼「ポ、ポイントですか？」

小町「そうです。確かに小町達はお客様かもしれないけど、この旅行ですつと奈呼さんと璃夢さんは同行してくれるわけじゃないですか。小町達が楽しい旅行を過ごす為には、奈呼さんと璃夢さんと親しくなる事が重要だと思っんです。」

奈呼「……………」

小町「だから、『様』というのはちよつとどうかなって。奈呼さんにも『ちゃん』、せめて『さん』付けで呼んでくれた方が、小町的には嬉しいし、ポイント高いです。」

陽乃「私も小町ちゃんや璃夢さんの意見に賛成ですね。奈呼さんは仕事の出来るガイドさんなんですから、もう少し璃夢さんみたいに砕けてもいいと思いますよ。それに、『陽乃ちゃん』なんて呼ばれるのもそんなに無いですから、面白いなって思ってます。」

流石、魔王……。あまり関わっていけないのに、奈呼さんが仕事の出来る人だって事を見抜きやがった。この人、絶対父親の会社継いで、社長になるだろ……。

奈呼「……分かりました。それでは『陽乃さん』と『雪乃さん』と呼ばせて頂きます。あと、『八幡さん』と『小町さん』とも。」

璃夢「でしたら、私は『陽乃ちゃん』と『雪乃ちゃん』って呼ばせて頂きますね♪」
一応、これで呼び方に関しては、解決したかのように思われた。

陽乃「……それはそうと、さつき『陽乃ちゃん』って璃夢さんが呼んだ時に、どうして吹き出したのかな、比企谷君？」ゴゴゴ

……やっぱりスルーしてくれないんですね、分かります。

その件で俺が魔王に問い詰められている間、由比ヶ浜や一色も「あたし達の事も名前前で呼んでください！」と奈呼さんと璃夢さんをお願いしていて、結局、奈呼さんと璃夢

さんは全員を名前呼びにする（奈呼さんは『さん』、璃夢さんは『ちゃん』（俺のみ『君』）事になった。

由比ヶ浜や一色に理由を聞いたら、『なんかヒツキーやゆきのん達だけ不公平だと思うしー。』とか訳の分からない事を宣っていた。

そのついでに、由比ヶ浜と小町が奈呼さんと璃夢さんに『やつはろー』（更には陽乃さんも『ひやつはろー』）を教えていたのは、全くの余談である。

わざわざ旅行で知り合った人達に、しょうもないバカな挨拶、教えんなよ……。

く 札幌市街・商店街く

奈呼「皆様、こちらが札幌の有名な商店街、○小路商店街です。」

璃夢「こちらの商店街は、140年以上もの歴史を持つ北海道で最古の商店街の一つです。また、その規模も最大級で約200軒もの店舗があります。8月に行われるお祭りをはじめ、イベントなども色々と行われているんですよ。」

奈呼さんと璃夢さんが、次のスポットである商店街の説明をしている。

この商店街も結構大きなアーケード商店街で、雨や雪の日でも安心して買い物が出る商店街である。

その説明をしている最中に、俺の中で事件が起こる。（因みにさっきの買い物はバスの中に置いてきた。）

八幡「（……あれ……う？）」

あんまり言いたくは無いのだが、『急にお腹が痛くて、お手洗いに行きたくなつた』のだ。こればかりは、急にくるときはくるからな。

八幡「（……これ、ヤバイんじゃないか……!?）」

このままでとマズイ事態になる。仕方なく、俺は奈呼さんに声をかける。

八幡「あの、奈呼さん。すいません。」

奈呼「はい、いかがなさいました？」

八幡「ちよつとあそこのド○キで、お手洗に行きたいんですけど、いいですかね……？」

奈呼「あつ、はい。大丈夫ですよ。」

八幡「……すんません。すぐ戻りますから。」

そうして、俺はお手洗いを借りる為に、ダッシュでド○キに向かった。

沙希「……あの——」

くド○キ店内く

八幡「……はあ……危なかった……。」

お手洗いで用を足した俺は、安堵の溜息をついていた。

八幡「……とにかく済ませたし、すぐ戻らねえとな。」

そうして手を洗い、お手洗いを出たところに

八幡「……あれ？」

沙希「……あつ……。」

俺と同じようなタイミングで、女子の方から出た川崎と鉢合わせした。

八幡「あれ、お前もだったのか？か……か……川谷？」

ゴチン!!

八幡「痛つてえく……！何すんだよ!？」

何故か問答無用でげんこつを喰らってしまった。真面目に痛い。

沙希「デリカシーの欠片もないアンタに、問答なんているのかい？名前も覚えられない

んだつたら、もう一発行くけど？」

八幡「すいませんでした。やめてください、川崎さん。」

沙希「……まあ、アタシもアンタが行く直前ぐらいに、『きちやった』からね……。」

八幡「そつか。まあ、しょうがねえよな。」

沙希「と、とにかく、急ぐよ。みんな、先に商店街に行ってるから。」

八幡「あつ、ああ。そうだな。」

そうして、俺と川崎は店内を出ようとした時だった。

「ヒック……………グスツ……………」

八幡「……………ん？」

俺達の目の前に、小さな女の子が泣いている姿があつた。

出ようとしたけど、何故か気になって、俺は立ち止まってしまう。

沙希「……………？どうしたの、比企谷？」

八幡「川崎、あそこで小さな女の子が泣いているのが分かるか？」

沙希「うん。それがどうかしたの？」

八幡「ちよつと気になってな。話聞いてくるから、悪いけど川崎は戻っててくれ。」

沙希「あつ、比企谷！」

そうして、俺はその女の子の所に向かい、女の子に声をかけてみる。

八幡「どうしたんだ？」

？「……………グスツ……………えつ……………？」

八幡「どうして泣いているんだ？良かったら、俺に話してくれないか？」

? 「……あのね、私、お兄ちゃん達とはぐれちゃったの……。お兄ちゃん達と旅行に
来ていて……。」

なるほど、この子も俺達と同じように観光客というわけか。

そして、ここら付近で兄貴達とはぐれてしまい、迷子になってしまったって事だな。

八幡「そうか。だったら、俺と一緒に探そうか? そのお兄ちゃん達を。」

? 「えっ……? いいの……? 」

八幡「大丈夫だ。俺も観光客なんだけど、小さい子どもが困っているのに、放っておくわけないだろう? 」

? 「……うん、ありがとう。えっと……。」

八幡「八幡だ。俺の事は『八幡』って呼んでくれ。もしくは、『はーちゃん』でもいいぞ。」

イ○ヤ「ありがとう、ハチマン。私、イ○ヤって言うの。」

イ○ヤ……? ? ? なんか、どっかで聞いた名前だな……? ? ?

よく見てみると、容姿も何かで見た覚えがある感じだ。銀と白の中間のようなロングヘアーに、紫色のコートと帽子を被っている小さな女の子だ。しかも外国人の。

あれ、やっぱりこの子、どっかで見た事あるような……? ? ?

沙希「待ちなよ、比企谷。」

そんな事を考えている時に、川崎も俺に声をかけてきて、思考を中断させる。

八幡「あれ？戻ってなかったのか？川崎。」

沙希「『戻ってなかったのか』じゃないよ。アンタ、どうしようとするつもりなんだい？言っておくけど、アタシもここで全部聞いてたからね。」

マジかよ……？だったら、隠してもしょうがねえか。

八幡「俺はとりあえず、この子の兄貴達を探してくる。アイツらにもそう伝えてくれないか？」

沙希「……だったら、アタシもついていくよ。なんかこの子、けーちゃんみたいで放っておけないからさ。」

八幡「えっ？いいのか？」

沙希「この子も観光客なんだろう？せっかくの旅行なのに、迷子になって楽しめなかったら、可哀想じゃない。」

八幡「……悪いな。ありがとう、川崎。」

沙希「べ、別にお礼はいいよ。アタシがやりたくてやってるだけなんだから……。」

俺がお礼を言うと、川崎は頬を赤くしながら、顔を背ける。

イ○ヤ「あの、ハチマン？このお姉ちゃんは……？」

八幡「あつ、ああ、このお姉ちゃんは川越……。」

ゴチインツ!!

沙希「イ○ヤって言ったっけ? アタシの事は『沙希』って呼んでよ。アタシもコイツと一緒にイ○ヤのお兄ちゃん達、探してあげるからね。」

八幡「~~~~~!!」

イ○ヤ「う、うん。ありがとう、サキ。」

痛つてえ~~~~!!よりによって、さつき殴つたところと同じ場所をピンポイントで殴つてきますかね!?川崎さん!マジで涙出てきましたよ!!

八幡「つてえ……。とりあえず店を出て、アイツらにも言つてこようぜ。」

暫く痛みで悶えているのち、俺と川崎、そしてイ○ヤという女の子の3人でド○キを出た。

しかし、俺と川崎は『ある事』を失念していた。

そのせいで、アイツらに言えないまま迷子探しをしてしまう羽目になるとは、この時の俺には知るよしもなかった。

おまけ・第4話

同時刻・札幌市街・商店街付近

かおり「父さん、これから何処に向かうの？」

折本父「やはり、サツ○ロビール博物館だな。私にとっては、今回のメインイベントみたいなものだからな。」

かおり「何それ、ウケるwでも、父さんが飲んじやったらどうするの？」

折本母「大丈夫よ、かおり。お母さんが運転するから。でも、ほどほどにしてくださいね、お父さん。」

私は車の中で、家族団欒の会話をしていた。

母さんは忠告していたけど、きつと父さん飲み過ぎて帰りの車の中で寝ちゃうんだろ
うなく。楽しみなのは分かるけど。

そんな会話をしながら、スマホを取り出して、札幌市街の中で信号待ちをしている時
だった。

かおり「あれ……？」

車窓の外の街の景色を見ようと横を振り向いた時、私にとって信じられないものを見
た。

かおり「(あの女の子達……って、えっ!?)」

それは、以前の合同クリスマスイベントで見た事ある女の子達が、札幌の街を歩いて
いた光景だった。他にも何人か見た事無い女の子達が一緒にいたから、幻かと思つて目

をこらして見ても、確かに彼女達がいたのだ。

かおり「嘘でしょ!? マジで!」

折本父「な、なんだ!」ビクッ

折本母「どうしたの、かおり!」

かおり「あつ、ごめん、父さん、母さん。千佳からウケるメールがきてて。ハハハハ……。」

私は思わず大声をあげてしまい、ビククリした両親に笑いながら謝る。ちようどスマホを持ってた事だし。

信号が変わり車が走り出して、彼女達の姿が遠ざかる。

でも、間違いない。同性の私から見ても見惚れちゃいそうなレベルの彼女達の姿を、見間違うなんてあり得るはずもない。

——雪ノ下さん、由比ヶ浜さん、一色ちゃん、あと演劇の主演をやっていた子、確か留美ちゃんだったかな。

私がクリスマスイベントの時に出会った彼女達を、まさか地元ではない旅行先で見ると、夢にも思わなかった。

空港で『知り合いに会おうなんて無い』って思っていた私に対して、こう言いたい。

『それ、フラグだからね。超ウケるwwww』

……もしかして、『アイツ』もいるのかな……？

彼女達と繋がりのある『アイツ』の姿は何故か見えなかったけど、もし彼女達と一緒に
だつたら、『超ウケるWWW』を通り越したレベルなんですけど。

かおり「……ヤツバ。超楽しみなんですけど……。ウケる……。」

私はこの家族旅行が予想外の展開になって、今の私の正直な気持ちを思わず（父さん
や母さんに聞こえないように）小さく呟いていた。

——そして、私と彼女達、そして『アイツ』と再び出会うのは、そう遠い未来で
は無かった。

第7話

〔商店街の入口付近（沙希 side）〕

八幡「なあ、川崎……。」

沙希「……何、比企谷？」

八幡「お前、携帯をホテルに忘れてきたって、どういう事だよ!? そのせいで、アイツらに人探しするって言えねえじゃねえか！」

沙希「はあっ!? 自分の事を棚にあげて、そんな事言ってるの!? アンタと違って、アタシは『ついうっかり』なんだよ! アンタは『確信犯で置いてきた』んだろ!」

八幡「お、俺はエリートぼっちだからいいんだよ! 家族との連絡は小町がやってくれりし、俺が誰かと連絡する必要なんて無いんだからな！」

沙希「威張って言う事か! このシスコン！」

八幡「うるせえ! このブラコン&シスコン！」

本当に呆れた……。自分に対してもコイツに対しても……。

アタシ達が失念していた事、それは2人とも携帯を持つていなかった事だった。アタシは本当に『ついうっかり』忘れてしまい、比企谷は『誰かと連絡取る必要がない』と

いうことで置いてきてしまったのだ。

イ○ヤ「あの……ハチマン、サキ……。」

しかし、アタシ達の間で不安そうな顔をしておろおろしているイ○ヤを見て、アタシ達はすぐに口喧嘩をやめる。

八幡「あつ……！わ、悪い、イ○ヤ……。」

沙希「ごめんね、イ○ヤ。みつともないところ、見せちゃつて……。」

イ○ヤ「ううん、大丈夫。それより、お兄ちゃん達が何処に行くかって思い出したの。」
八幡「本当か!?何処に行くって言つてた!?!」

イ○ヤ「確か、公園に行くって言つてた気がするよ。ちよつと名前までは思い出せないんだけど……。」

沙希「公園……?」

イ○ヤが話してくれた手掛かりの言葉に、アタシはこの近辺の公園が何処なのかを思い出していた。

沙希「ねえ、比企谷。」

比企谷「あん?どうした?川崎。」

沙希「ここら辺の公園って——」

アタシが比企谷にここら辺の公園の事を話そうとした時だった。

璃夢「あー!! いたいたー!! どうされたんですかー!!」

沙希「あつ、璃夢さん……。」

アタシ達がいっまでも合流しないので、迎えに来てたのだろうか、璃夢さんがアタシ達の所まで駆け付けてきた。

璃夢「ハア……ハア……。心配しましたよー。少し離れただけなのに、もしかしたら八幡君と沙希ちゃん、何か事件か事故に巻き込まれたのかと思って……。」

八幡「す、すみません。」

沙希「……すみません。」

アタシ達の事を心から心配してくれてるのが、その言葉と泣きそうになるくらいの顔で、充分伝わってくる。だからこそ、息を切らすくらい走って、アタシ達の事を探していただろうなと思う。

璃夢「あれ? その子は……?」

そう思っている時に、璃夢さんがイ〇ヤを見て、アタシ達に尋ねてくる。

沙希「あつ、この子観光客なんですけど、こちらで家族の人達とはぐれて迷子になっちゃったみたいなんです。アタシと比企谷がそれを聞いて、この子の家族を探そうとしてるんですけど……。」

璃夢「えっ!? そうなんですか!? それなら、どうして連絡を……?」

八幡「俺達、たまたま携帯を持ってなかったんです。その時、この子が家族が公園に向かうって言ってたのを思い出して……。あつ、璃夢さん、携帯持っていますか？」

璃夢「ええ、勿論です。私の携帯で連絡をするんですか？」

八幡「そうです。まず、奈呼さん経由で、アイツらに俺と川崎が人探しするから少し離れる事を伝えてほしいんです。ついでに、この子の写真を撮って、メールに添付してもらいたい。」

璃夢「はっ、はい。でも、何故この子の写真まで……？」

八幡「もしかしたら、この子の家族も商店街付近にいて、奈呼さんやアイツらに尋ねてくる可能性もあるからです。迷子になった場所で探しているのは、迷子探しのセオリーですから。」

璃夢「そういう事ですね、分かりました。でしたら、写真撮っていい？お嬢ちゃん。」

イ〇ヤ「うん、いいよ。」

成程……。比企谷の言う通り、確かに家族の人達もこちら辺にいる可能性は高い。だからこそ、イ〇ヤの写真を奈呼さんのメールで送って、迷子で尋ねてきた人にそのメールを見せるわけだ。

そして、その比企谷の読みは、結果的に言えば『ある意味正解』ではあったのだ。しかし……。

〈同時刻・商店街中心部〉

結衣「遅いね、ヒツキーと沙希。2人とも電話にも出ないし……。」

いろは「本当ですね。少しお手洗い行っただけなのに、なんで私達と合流出来ないんですかね？」

奈呼「すみません、皆様。今、璃夢がお迎えに行つてますから。」

小町「奈呼さん達のせいじゃないですよ。悪いのは、ウチのゴミいちゃんですから。」
雪乃「そうね。遅くなる連絡もしてこないなんて、言語道断ね。そんなに私達からいろいろ言われたのかしら？あのマゾ谷君は。」

陽乃「案外、抜け駆けして2人きりでデートしてるのかもね。沙希ちゃんが誘つて。」
めぐり「えっ!?!川崎さんがですか!?!」

留美「そんな事するような人には見えないのに……。もしそうだったら、ちよつと許せないかも……。」

商店街の中心部で八幡と沙希を待っている他のメンツが、それぞれ八幡と沙希が何をしているかと話しながら、待ちぼうけしていた。

結衣「あれ……?」

すると、結衣が数メートル先にいる人物達に注目する。

いろは「どうしました？結衣先輩。」

結衣「いや、あの人達、なんか凄い焦っているみたいだから、どうしたのかなって……。」

小町「えっ？あの人達……って、あれ……？」

結衣や小町達が注目したその先には、4人組の男女が焦燥しきった表情で話しあっている。彼等の会話も注目した結衣達の耳に入ってきた。

？「ハア……ハア……。アイツ、見つかったか？」

??「駄目ね……。何処に行ったのよ……。あの白い小悪魔は……。」

???「この商店街辺りではぐれてしまったから、この近くにいるとは思ってたんですけど……。」

????「申し訳ありません……。私が目を離さなければ……。」

？「いや、それは俺の責任だ。あんまり、自分を責めるんじゃない。」

??「とんだ旅行になっちゃったわね。アンタが、来月から私達全員で倫敦に住むから、思い出作りで行こうって言うから……。」

???「姉さん、あまり先輩を責めないでください。先輩ですよ。私達全員の責任みたいなものですから。」

???? 「兎に角、搜索を続けましょう。銀色の髪で紫のコートと帽子を身に付けた外国人の女の子なんて、そうそういませんから。」

? 「そうだな。もしかしたら、アイツに公園に行くって言ったから、そっちに行つてるかもしれない。急ぐぞ。」

金色の髪の少女と亜麻色の髪の少年の言葉に、彼等は結衣達の近くを離れる。

陽乃「迷子探してもしてるのかな?あの子達。」

めぐり「そうみたいです。見た感じ、私達と同一年ぐらいみたいですけど、あの子達も観光客なのですかね?」

雪乃「話を聞く限り、そんな感じだと思います。しかも、女の子達全員、とても綺麗な子達でしたね。城廻先輩。」

結衣「そうだよね、ゆきのん!みんな、スツゴく可愛かった!!それに、あの男の子も何気に格好良かったよね。強いて言えば、沙希の弟の大志君っぽいけど、アタシ達の周りにいないタイプかも。」

いろは「あれ?結衣先輩、浮気ですか?でしたら、先輩の事は諦めるって事で♪」

結衣「だ、誰が諦めるんだし!?!あたしはヒツキー一筋なんだから、浮気なんてあり得ないし!!……………って、あつ……………!!」

結衣の言葉に、結衣自身が顔を真っ赤になったり、他のメンツは呆れたり、ジト目で

結衣を見たり、苦笑いしたり、ニヤニヤしたりなど、様々な反応を示していた。

小町「う〜ん……………」

そんな中、1人小町がさつきの4人組を見てから、ずっと顎に手をあてて唸っていた。留美「どうしたの、小町さん？あの人達を見てから、ずっと難しい顔をして、唸っているみたいだけど……………」

小町「あつ、ごめんね、留美ちゃん。さつきの人達、小町どつかで見た事あるような気がするなつて思つて……………」

留美「えっ？そうなの？」

小町はさつきの4人組を見た刹那、何か引つ掛かるものを感じていた。

小町「おにいちゃんや小町の親戚や知りあいつて訳でもないけど、なんでだろう？おにいちゃんを通じて、確かに見た覚えが……………」

無論、小町の親戚や知りあいという訳ではないが、明確に思い出せていないものの、八幡経由で確かに『見た』気がするのだ。

ピリリリ……………」

小町がそう考えている時、奈呼の携帯の着信音が鳴り響く。

奈呼「つ！璃夢!?!皆様、お2人をお迎えに行った璃夢からです！」

雪乃・結衣・いろは・陽乃・めぐり・小町・留美『えっ!?!』

奈呼が彼女達に、八幡と沙希を迎えに行つた璃夢からの着信だと伝え、彼女達は奈呼の方に注目する。

奈呼「あつ、璃夢？八幡さんと沙希さんは……。えっ!？」

小町「ど、どうしたんですか!？奈呼さん!」

奈呼「ええ……。ええ……。分かつたわ。一応、そうお伝えするから……。」ピツ

璃夢からの電話を切り、心底申し訳なさそうな表情で彼女達に電話の内容を報告する。

奈呼「あの……。皆様には大変申しにくい事なのですが……。」

結衣「ヒツキーと沙希に何かあつたんですか!？」

奈呼「ええ……。お2人が迷子の子供を保護されたみたいで、今からその子の家族を探しに行かれると伝えてほしいと……。お2人とも現在携帯を持っていなくて、連絡出来なかつたとの事です。」

雪乃「えっ!？迷子の子供ですか!？」

奈呼「はい。因みに、今から璃夢が私達にも心当たりがあるかどうかという事で、メールでその子の写真を送ってくれます。」ピロリロリン♪

奈呼が説明すると同時に、メールの着信音が入る。

奈呼「あつ、来たみたいですね……。えっ!？」

メールを見た奈呼が、驚いた表情を見せる。

めぐり「どうしたんですか？」

奈呼「……皆様、この子が迷子の子供です。」

奈呼が彼女達に自分のメールに添付されたイ〇ヤの写真を見せる。

めぐり「えっ!?!この子って……!?!」

いろは「もしかして、さっきの人達が話してた子じゃないんですか!?!」

結衣「そ、そうだよね!?!金髪の子が話してた特徴と、一致してるし!」

雪乃「銀色の髪に紫のコートと帽子を身に付けた外国人の女の子……。成程、確かに

そうそういないわね。」

陽乃「そうだね。ましてや、こんな可愛い子が目立たないなんて、あり得ないと思う

よ。見つけられない方がおかしいぐらいじゃない?」

留美「うん、凄く可愛い……。八幡達、この子と一緒にいるの?奈呼さん。」

奈呼「そうです。あの方々、確か公園に行くって仰ってましたよね?」

雪乃「ええ。私達もそう聞きました。」

いろは「この付近の公園って、何処なんですか?」

奈呼「少し離れた場所に、大〇公園という観光スポットがあります。さっぽろ雪まつ

りも開催される有名な所ですから、おそらくそこになるかと……。」

結衣「それだったら、ヒツキーと沙希に教えてあげましょうよ！あの男の子や女の子達も向かってるかもって！」

奈呼「分かりました。璃夢に連絡します。」

プルルル……

奈呼「璃夢？私達の方で、その子の家族らしき人達を見てるの。その人達は……えっ!?」

璃夢と電話で会話している奈呼が、再び驚きをみせる。

奈呼「……そう、分かったわ。その人達、おそらく大〇公園に行かれた可能性が高いと思うの。皆様にもお伝えするから、少し待っててね。」

奈呼が気まずそうな表情で受話器から耳を離し、彼女達に報告する。

奈呼「……皆様、お2人はもう璃夢の所にいないとの事です。その写真の子も。」

雪乃・結衣・いろは・陽乃・めぐり・留美『えっ!?!』

奈呼の報告に、彼女達は驚きを隠せない。

めぐり「ど、どうしてですか!?!」

奈呼「……璃夢が電話している間、沙希さんとその子が何かを話していたら、その子が、走って何処かに行ってしまい、八幡さんと沙希さんも、その子を追ってしまっただけです……。」

いろは「えっ!? それじゃ、先輩達は……!?」

奈呼「はい。残念ですが、何処に向かわれたのか、手掛かりがない状態です……。」

結衣「そ、そんな。せつかく、教えられそうだったのに……。」

奈呼「……本当に申し訳ございません。私達が至らないばかりに、皆様の旅行が……。」

陽乃「謝らないでください、奈呼さん。奈呼さんと璃夢さんが悪い訳じゃないのは、分かっていますから。」

雪乃「まずは璃夢さんと合流して、私達も大〇公園に向かいましょう。もしかしたら、比企谷君達もいるかもしれませんから。」

陽乃「そうだね。仮に比企谷君達がいなくても、あの子達に伝えるべきだと思う。勿論、その逆のパターンもあるかもしれないけどね。」

こうして、彼女達は大〇公園に向かう為に、まずは璃夢がいる商店街の入口付近へと向かうのであった。

小町「この子も何かで見たような……? なんてだろうか? あの人達もこの子も、小町、確かに見た覚えが……。うーん……。」

留美「こ、小町さん……。独り言が増えるよ……。」

ただ一人、小町はイ〇ヤの写真を見て、ますます独り言を言いながら思い悩んでいた。

く大○公園近く(沙希side)く

沙希「ハア……ハア……!まさか、こんな事になるなんて……!」

迂闊だった……。まさか、イ○ヤがこんな突発的な行動をするなんて……!

璃夢さんが電話をしている間に、アタシがイ○ヤに話してしまったのが発端だった。

沙希『ねえ、イ○ヤ。』

イ○ヤ『何?サキ。』

沙希『イ○ヤのお兄ちゃん達、もしかしたら大○公園っていう所にいるかもしれないって思ったんだけど……。』

イ○ヤ『大○公園?何処なの!?!そこ!』

沙希『こちら辺の近くにある観光スポットだよ。あそこの交差点を——』

イ○ヤに大○公園の場所を案内した刹那、そこに向かって走り出してしまったのだ。

アタシは慌てて追いかけて、比企谷も少し遅れて追いかけてきている。

璃夢さんが、『ちよつ、ちよつと待って〜!!八幡君〜!!沙希ちや〜くん!!』つて泣

きそうな声で叫んでいたが、今はイ○ヤの方を優先するべきだと思った。あの人には、

また後で比企谷と一緒に謝らないとね……。

八幡「ハア……ハア……！おい、川崎！」

後ろを走っている比企谷が、アタシに叫ぶように呼びかける。

沙希「何!?!比企谷!!」

八幡「ハア……ハア……！悪い……！アイツ、意外と足が早いから……！ゼエ……

ゼエ……俺、お前らについてけそうに無い……」。ガクツ

沙希「えっ!?!」

比企谷はそう言うと同時に、走るのをやめて両手をついて膝から座り込んでしまう。

沙希「ひ、比企谷!?!」

アタシが止まってしまった比企谷が心配になり、比企谷の所に向かおうとする。しか

し、

八幡「お前はイ○ヤを追いかけろ、川崎！」

沙希「えっ!?!」

比企谷は、アタシにイ○ヤを追いかけるように言う。

八幡「心配すんなよ……。久しぶりに全力疾走しただけだから……。ハア……ハア

……少しだけ休んだら、すぐ追いかけるから……」。

沙希「……分かった。待ってるからね、比企谷。」

アタシは比企谷にそう言うと、イ○ヤを再び追いかけた。

暫く走って、アタシは大○公園に着いた。

沙希「何処にいるの……？あの子……。」

周囲を見回して、イ○ヤの姿を探してみる。

沙希「っ……！！いた……！！」

噴水の向こう側で、アタシと同じように周囲を見回しながら、自分の家族を探しているイ○ヤの姿があった。

—— おまけ・第5話（璃夢 side） ——

璃夢「ちよつ、ちよつと待って……！！八幡君……！！沙希ちゃん……！！」

予想外の事態になってしまった。

私先輩—— 姉様からの電話を一旦切って、メールであの子の写真を送っている時に、迷子の子が突然何処かへ走り出してしまい、それを沙希ちゃんと八幡君が追いかけてしまったのだ。

私はなんとか引き留めようとしたのだが、後の祭りだった。

璃夢「ああ……どうしよう……。八幡君達をお迎えに来たのに、どうしてこんな事に……。」

『八幡君達をお迎えに行く』という、自分の本来の仕事もやり遂げる事も出来ずに、こんな事態になってしまつて、私は頭を抱えてしまう。

ピリリリ……

そうこう悩んでいるうちに、姉様からの着信が入る。

璃夢「あつ、もしもし。……えつ、そうなんですか!?あの、実は——」

私は姉様に、八幡君達が私の所から離れてしまつた事、何処に向かつてたのか分からない事を報告し、姉様からその家族の人達が、大〇公園に向かつているかもしれない事、私と合流する為に姉様達が今から私の所に向かう事を聞き、姉様達を待つ事にした。

璃夢「————分かりました、先輩。ここで待つてます。………ハア………。」

ピッ

私は姉様との通話を終えると同時に、深い溜息をつく。

璃夢「………本当に申し訳ないな。私が担当する初めてのお客様なのに……。」

私の初めてのお客様である、陽乃ちゃん御一行と八幡君御一行に、心底申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

朝から寝坊はするわ、八幡君には荷物持ちをやらせる事になるわ、お迎えに行つたのに見失つてしまうわ、本当に迷惑ばかりかけてしまつている。

幸い、八幡君も女の子達もみんな、良い人達みたいだから救われている。だからこそ、

楽しい旅行を過ごしてもらいたいと思ひ、私が頑張らなくちやいけないのに……。

璃夢「……なんで私って姉様と違つて、こんなにダメなんだろう……。」

そんな自己嫌悪に陥り、凄く落ち込んでいる時だった。

？「あの、すいません！」

璃夢「……えっ!？」

突然、後ろから男の人の声を掛けられて、ビックリしながら振り向いてみる。

？「ハア……ハア……。」

そこには、八幡君と同じ年くらいの亜麻色の髪の子が、息をきらせながら深刻そうな顔で、立っていた。その後ろには、男の子と一緒にいると思われる同年代の3人の女の子達の姿もあった。

璃夢「あ、あの、どうされたんですか？そんなに息をきらせて。」

？「ここら辺の公園で大○公園って所があるって聞いたんですけど、何処なのか分からなくて……。」

璃夢「大○公園ですか？それでしたら、その角を……。」

私は彼等に、大○公園の道を説明する。

？「そうですか。大体分かりました。ありがとうございます。」

璃夢「あの、つかぬことをお伺いするんですけど、何かあったのですか？見た感じ、観

光で来られたみたいですけど……。」

「……ええ。実は、俺達の連れがこちら辺ではぐれて迷子になっちゃったんです。もしかしたら、ソイツに公園に行くって言ったから、そっちに向かったのかと……。」

璃夢「迷子……? あっ……!」

男の子の話を聞いて、私はもしかしたらと思ひ、携帯を取り出す。

璃夢「もしかして、この子の事ですか? その迷子って。」

そして、携帯で撮った女の子の写真を、彼等に見せる。

「えっ、イ〇ヤちゃんじゃないですか!?! この子!」

「何ですって!?! アイツ、こちら辺にいたの!?!」

「教えてください!?! 何故、貴女が彼女の写真を持っているのですか!?!」

? 「何処でコイツと出会ったんですか!?! コイツ、今いないみたいですけど、何処に

るんですか!?!」

写真を見せた瞬間、彼等は驚くと同時に私に必死な顔で尋ねてくる。

間違いない。この人達が姉様の言っていた、あの子の家族の人達なのだろう。

璃夢「あ、あの……これはですね……。」

そうして、私はあの子の写真を撮った経緯、私がバスガイドとして担当しているお客様と一緒にいた事、そして、突然あの子が何処かへ走り出してしまい、お客様も追いか

けていった事を説明した。

「?????」「そうですか……。それでは、何処に向かったのかは、貴女も知らないのですね?」

璃夢「ええ……。……。あれっ?」

??「どうしたんですか?」

璃夢「そう言えば、この子達の走っていた方向って、確か、大○公園があったような……。」

???「えっ!?本当ですか!」

璃夢「はい。そこ以外だと少し離れています、札幌駅やその近くぐらいしか考えられません。」

?「分かりました!貴重な情報を頂いて、ありがとうございます!行くぞ!!」タツタツタツ……

璃夢「あっ……。!」

そして、彼等は私の所から離れ、八幡君達が向かっていった方向へと走り去ってしまつた。

璃夢「……。……」

彼等が走り去つてしまう姿を見届けて、暫くしてから呟く。

璃夢「……。私、少しは役に立てたのかな?会えるといいな、八幡君達とあの人達……。」

そんな風に思えて、少し嬉しくなる。そうして、暫くしてから、
奈呼「璃夢ー!!」

璃夢「あつ、ねえ……じゃなかった、先輩！」

姉様達がやって来て、私と合流し、私達は大○公園へと向かうのであった。

第8話

く大○公園く

沙希「イ○ヤ!!」

アタシは公園の噴水の近くで、家族を探してキヨロキヨロとしているイ○ヤに、叫ぶように声をかける。

イ○ヤ「あつ、サキ……………」

沙希『あつ、サキ』じゃないよ!アタシ達も一緒に探すって言ってるのに、どうして1人で突つ走つていつちやつたの!？」

イ○ヤ「ごめんなさい…………」。でも、私、早くお兄ちゃん達に会いたいから、我慢出来なくなつちやつて…………」。

沙希「…………まつ、その気持ちは分からなくもないけどね。でも、少しはアタシや比企谷の事を頼つてよ。」

イ○ヤ「うん。でも、ヒキガヤつて誰?」

沙希「……………は、八幡の事だよ。」

成り行きとはいえ、アイツの名前を声に出してしまい、私の頬が紅くなるのを感じる。

イ○ヤ「……ふくん。サキはハチマンの事、ヒキガヤって呼ぶのね。」

沙希「そ、そうだよ。『八幡』って呼び方より、そっちの方が慣れてるから……。」

イ○ヤ「へえ、そっか♪」

顔を赤くしているアタシに、何故か小悪魔的な笑みを浮かべるイ○ヤ。何？ちよつと怖いんだけど……。

八幡「ハア………ハア………。待たせたな………。」

そんなやりとりをしているうちに、少し遅れて比企谷が到着した。かなりキツそうな感じだけど。

沙希「比企谷、アンタ大丈夫？」

八幡「ああ………なんとかな……。それより、イ○ヤ。どうしたんだよ？突然、走り出して……。」

イ○ヤ「……ごめんね、ハチマン。どうしてもお兄ちゃん達に早く会いたくて……。」

八幡「そういう事かよ……。とりあえず、ここの公園で少し休まないか？流石に、ちよつとしんどいから……。」

沙希「そうだね。闇雲に廻っても疲れるだけだし。イ○ヤはどうなの？」

イ○ヤ「私もいいよ。ハチマンが体力回復するまでだったら。」

こうして、アタシ達3人は大○公園で、比企谷が体力回復するまでの間、休む事になっ

た。

暫くして、少し体力が回復した比企谷が、コンビニかどつかのお店で飲み物を買ってくると言い出し、比企谷を休ませる為にアタシが代わりに行くと言ったのだが、女の子の方が話しやすいという事で、比企谷が飲み物を買に行く事になり、イ○ヤと2人きりになるのであった。

八幡「それじゃ、行つてくるからな。大人しく待つてるんだぞ、イ○ヤ。」

イ○ヤ「うん。なるべく早く帰ってきてね。早くお兄ちゃん達を探したいから。」

八幡「おう。川崎もイ○ヤから目を離すんじやねえぞ。」

沙希「分かつてゐる。早く買つてきなよ。」

そうして、比企谷が飲み物を買うに行き、アタシとイ○ヤは2人きりになった。

イ○ヤ「ねえ、サキ。聞きたい事があるんだけど、いい?」

比企谷の姿が見えなくなった直後、イ○ヤがアタシに尋ねてくる。

沙希「何?」

イ○ヤ「サキってハチマンの事、好きなの?」

沙希「なっ……!!」

イ○ヤはいきなり爆弾を投げつけてきた。それを言われた瞬間、アタシの頬が熱くなる。

沙希「な、な、な、な、何で、アタシが比企谷の事を……!？」

イ○ヤ「あれ？違うの？なんか、サキがハチマンを見る目がそんな感じかなって思っただけど。」

まさか、初めて出会った子に、こんな事を言われるとは思わなかった……。そんなに、アタシって分かりやすいのかな？

イ○ヤ「それに、ハチマンって私のお兄ちゃんになんとなく似ている気がするの。」

沙希「似ている？どういう事？」

イ○ヤ「簡単に言えば、ハーレム王みたい。いろんな女の子にモテている感じがするの。」

……この子、実はアタシや比企谷の事を知っているんじゃないの？そう思いたくなるくらい、イ○ヤはアタシだけじゃなくて、比企谷の事も正確に把握していた。

沙希「へ、へえー。そうなんだ。イ○ヤのお兄ちゃんも結構モテるんだね。もしかして、イ○ヤもお兄ちゃんの事、大好きなんじゃないの？」

アタシと比企谷の事をはぐらかすように、イ○ヤに他愛ない質問を試みる。

イ○ヤ「うん、そうよ。愛してるって断言してもいいわ。」

沙希「……………へっ？」

しかし、イ○ヤから返ってきた答えは、予想の斜め上をいく答えだった。

沙希「あ、あ、あ、愛してる!?!おかしいでしょ、その答え!!だって兄妹なんでしょ!?!家族愛とかじゃないの!?!」

イ○ヤ「ううん。家族愛じゃないわ。異性としてお兄ちゃんの事を愛してるの。他にも私と同じくらいお兄ちゃんの事を愛してるライバルが3人いるけど、負けるつもりないもん。」

沙希「……………」

ぐうの音も出ないとはこの事を言うのだろうか。自分のもとより、おそらく留美より年下の女の子が、こんなにはつきりと自分の好意を言われるとは思わなかった。イ○ヤの言葉に、アタシは何も言えなかつた時だった。

イ○ヤ「だから、サキも自分の好意をはつきり伝えなくちゃダメだよ。余計なお節介かもしれないけど。」

沙希「えっ…………?!?!」

気が付くと、これまでの幼い無邪気な笑顔とは一変した、真剣な表情をしたイ○ヤが、アタシにアドバイスしてきた。

イ○ヤ「ハチマンの事が好きなんでしょ?もう分かっているんだから。」

沙希「……………そうだね。アタシは……………アイツの事、好きだよ……………」

イ○ヤ「私、応援するよ。サキもハチマンも凄く優しい人達だから。」

沙希「……………ありがとね。イ○ヤ。」

今日初めて出会ったこんな小さな子に小さな勇気を貰うなんて、夢にも思わなかった。なんか知らないけど、アタシの心が凄く暖かい気持ちに包まれている。

この子にそんな勇気や暖かい気持ちをくれたお礼を言った直後だった。

？「あつー!!いたー!!見つけたぞー!!」

沙希「えっ?」

少し離れた場所から、知らない男と女の子達がアタシ達の方を指差して、走り向かってくる姿が見えた。

イ○ヤ「あつー!お兄ちゃん!!みんな!!」

彼等の姿が見えた瞬間、イ○ヤがこれまでにない満面の笑顔で、彼等の所に走っていき、アタシはその様子を見ていた。

？「イ○ヤ、何処に行つてたんだよ!?!本当に心配したんだからな!!」

イ○ヤ「……………ごめんね。シ○ウ。」

シ○ウ「言っておくけど、謝るのは俺じゃない。俺と一緒にイ○ヤを探してたみんなだ。」

イ○ヤ「……………ごめんなさい。セ○バー、○ン、サ○ラ。」

セ○バー「イ○ヤスフ○ール!!貴女は何を考えているのですか!?!せっかくの旅行を、

台無しにするつもりなのですか!？」

○ン「セ○バーの言う通りね。こんなんじや、嫌な思い出作りにしかならないわよ。」
サ○ラ「ま、まあまあ。セ○バーさんも姉さんもその辺にしましょうよ。イ○ヤちゃんだって、反省しているみたいですから。」

シ○ウ「そ、そうだぞ。イ○ヤも迷子になりたくてなつたわけじゃないんだろ?」

イ○ヤ「うん。本当にゴメンね、みんな……。」

沙希「……………」

イ○ヤと家族の人達(見た感じ、アタシと年代ぐらい)が再会出来た様子を見て、自然と笑顔がこぼれる。何はともあれ、イ○ヤが家族の人達と出会えて良かった。アタシももし、京華が迷子になってしまったら、絶対にあの人達と同じ事をすると思うから。

シ○ウ「ところで、あの女の子は?もしかして、イ○ヤが迷子になったのを、助けてくれたのか?」

イ○ヤ「そうよ。サキって言うんだけど、凄く優しい人だよ。」

イ○ヤがそう言うのと、彼等がアタシのもとに近づいてきて、アタシに頭を下げる。

シ○ウ「本当にすいません。イ○ヤや俺達の為に、ご迷惑をおかけして。」

沙希「あつ、いえ、いいですよ。アタシ、イ○ヤみたいな幼い妹がいますから、何か放っておけなくて。むしろ、アタシの方が余計な事を言っちゃったせいで、この公園

に来る事になったんですから。」

セ〇バー「いえ、貴女には本当に感謝します。見ず知らずのイ〇ヤス〇イールを保護したと、お伺いしましたから。」

沙希「えっ? どうしてそれを……?」

〇ン「貴女の旅行を担当しているバスガイドさんからです。貴女ともう一人の人がイ〇ヤを追い掛けて、ここに行つたつて聞きましたから。」

沙希「バスガイド? もしかして、茶色のショートカットの?」

サ〇ラ「そうです。その人にこの公園の場所を教えて貰つて、私達もここに来たんです。」

沙希「そうですか……。そうだと分かつたら、イ〇ヤに言わなきゃ良かったかな……。」

シ〇ウ「いえ、それでも本当に助かりましたよ。ありがとうございます。ほら、イ〇ヤも。」

イ〇ヤ「うん。ありがとね、サキ。お陰でサキの貴重な話も聞けたし。」

沙希「なつ……。!!そ、それと今は関係ないでしょ!」

イ〇ヤの小悪魔的な笑顔で言われた言葉に、アタシは顔を赤くしながら、反論する。

セ〇バー「そういえば、さつき〇ンが言っていたもう一人つて、何処にいるのですか

?その者にも、お礼を言いたいのですが……。」

沙希「ああ、ソイツでしたら、今……。」

アタシが彼等に、比企谷が飲み物を買に行っていると言おうとした時、

八幡「あつー……」

沙希「えっ!?!」

シ〇ウ・イ〇ヤ・セ〇バー・オン・サ〇ラ『えっ?』

ようやく、買い物から帰ってきた比企谷が、アタシとイ〇ヤ達を見て、普段の比企谷では考えられない叫び声を出した体勢で、唾然としながら固まっていた。

沙希「ど、どうしたの!?!」

イ〇ヤ「ハ、ハチマン?」

突然の叫び声をあげた比企谷に、アタシとイ〇ヤがビツクリしながらも訊ねる。

八幡「……」

一方の比企谷は、唾然としながら固まっている。しかし、暫くして

八幡「……」

何か意を決した表情で、大志に少し似ている亜麻色の髪の子——シ〇ウに近づいてくる。

シ〇ウ「な、何だよ!?!」

シ○ウは比企谷を警戒しながら、近づいてくる比企谷に対して問い掛ける。しかし、八幡「……………う、嘘だろ？まさか、こんなところで出逢えるなんて…………。」

シ○ウ「…………へっ？」

八幡「超感激ツス!!まさか、あなた達と出逢えるなんて!!俺、本当に嬉しいですよ!!」
セ○バー・○ン・サ○ラ『えっ…………?』

イ○ヤ「ハ、ハチマン…………?」

沙希「…………はい？」

比企谷はシ○ウ達を見て、まるで無邪気な子供のようにはしゃいでいた。アタシとイ○ヤ達は、その様子を見て唾然とする。

八幡「そうか。イ○ヤってどっかで聞いた名前だっと思ったけど…………そういう事だったんだ!!」

イ○ヤ「えっ？私達の事、知っているの？ハチマン。」

八幡「当然だろ!!俺はイ○ヤ、いや、イ○ヤス○イル・フ○ン・ア○ンツベ○ン達の大ファンだから!それに、そちらの皆さんは、衛○士○さんにセ○バーさん、遠○凜さんに間○桜さんですよね!!」

シ○ウ「そっ、そうだけど…………君は一体…………?」

八幡「言ったじゃないツスカ、皆さんの大ファンだって!!やっべー、パネエわー!夢

じゃ無いんだよな!? そうだよな、川崎!

沙希「ひ、比企谷……。」

何か口調が戸部っぽくなってるし……。ここまではしゃぐ比企谷を見たのは初めてだった。どういう事……。? イ〇ヤとこの人達って、アタシが知らないだけで、実は結構有名なの?

八幡「あつ、そうだ!! 俺、コンビニでカメラ買ってきますよ! あなた達と写真撮りたから! いいツスよね!」

シ〇ウ「あつ、ああ……。俺達は構わないけど……。」

写真を撮りたいが為に、コンビニに行こうとする比企谷。

沙希「(あれ? そういえば……。)」

さつき、ホテルに忘れた携帯を探してた時に、アタシは『ある物』を携帯と勘違いして取り出した事を思い出す。

沙希「あの、比企谷。」

八幡「あん? どうした、川崎?」

沙希「アタシ、カメラ持つてるんだけど……。」

そう言つて、アタシは『ある物』——カメラをバッグから取り出して、比企谷に見せる。

八幡「えっ!?マジで!」

沙希「うん。アタシのカメラで良かったら、写真撮ってあげるよ。」

八幡「いいのか!?サンキュー!愛してるぜ、か……いや、沙希!!」

沙希「なっ……!!」

い、いきなり、何言い出すの!?コイツは!!しかも、文化祭でのあの言葉を今度は名前
で呼ぶなんて……!!

アタシは比企谷から言われた言葉に、顔が真っ赤になるくらいの恥ずかしさを感じ
た。

イ○ヤ「あーっ!サキ、顔が真っ赤になってる!」

シ○ウ「こら!イ○ヤ!知り合いになっただけの人になつたばかりの人に失礼だろ!」

サ○ラ「でも、いいですね。初々しいカップルで。」

セ○バー「そうですね。まるで、少し前の私とシ○ウを見ているようです。」

○ン「フフ、何か新鮮な気持ちになるわね。この2人を見てると。……つて、どさく
さ紛れて、何ほざいてんのよ!?セ○バー!!」

サ○ラ「そうですね!それを言うなら、私と先輩ですよ!決して、セ○バーさんや姉さ
んやイ○ヤちゃんじゃ無いですからね!!」

○ン「そんな訳ないじゃない!!私と士○以外あり得ないわよ!」

シ〇ウ「お、おい！落ち着け！お前ら!!」

あ、あの……アタシと比企谷、まだ恋人にすらなっていないんですけど……。というより、貴女達がイ〇ヤの言っていたライバル達なんですか……。？そして、イ〇ヤを含めた皆さん全員がシ〇ウを愛していると……。

イ〇ヤの『比企谷がシ〇ウに似ている』って言葉が、この光景を見て、何となく理解出来た。この光景、まるで空港やホテルで大騒ぎしていたアタシ達みたいじゃない……。

八幡「うんうん。やっぱり、土〇さんパネエツスわー。流石、ハーレム王ツスね。」

そして、大志と戸部の口調がごつちや混ぜになつて比企谷が、嬉々としてこの光景を見ている。……そのハーレム王って言葉、アンタにのしつけて返してやりたいよ。

沙希「……比企谷、写真撮るの？撮らないの？」

八幡「あつ、そうだ！皆さん、俺と一緒に撮ってくださいよ！一生の宝物、いや、むしろ家宝にしますから!!」

シ〇ウ「い、いや、そんな大袈裟な……。」

イ〇ヤ「うん、いいよ。でも条件が一つだけあるわ。」

八幡「うん？何だ、イ〇ヤ？」

イ〇ヤ「ハチマンとサキは私達と別れた後、手を繋いで帰る事。それが条件よ。」

沙希「えっ……!!」

八幡「おう、分かった。それでいいなら、お安い御用だ。」

沙希「なっ……!!」

アタシは写真を撮る条件を出したイ○ヤを見ると、アタシにウィンクをしてきた。『サキの恋のキューピッドになってあげる♪』と言わんばかりに。

沙希「(……………ありがと、イ○ヤ。)」

アタシは顔を赤くしながらも、比企谷との距離を縮めてくれるきっかけを与えてくれたイ○ヤに、心の中で感謝していた。

それからアタシと比企谷は、暫くの間、イ○ヤ達との写真撮影会をやっていた。比企谷とシ○ウの2ショット、比企谷がイ○ヤ達女の子4人に囲まれての写真、時折カメラマンをしていたアタシも、比企谷との2ショットやイ○ヤ達との女の子5人での写真、イ○ヤと比企谷との3ショット等々、いろんな写真を撮った。最後には、近くにいた人に頼んで、全員での記念撮影も撮ったりしていた。

写真を撮った時の比企谷は、いつもの比企谷らしくない満面の笑顔を浮かべていた。凄く生き生きしていたし、知っている人にとっては、『こんなの比企谷じゃない』と言いたくなるくらい。

そして、撮影会が終わり、イ○ヤ達とのお別れの時がやってきた。

八幡「本当にありがとうございます！今日皆さんと撮った写真、大切にしますから！！最後に握手してくださいよ！！」

シ○ウ「ああ。こっちこそ、ありがとな。イ○ヤを助けてくれて。」

比企谷がシ○ウ達と握手をしていた。最初は比企谷のハイテンションに引き気味だった彼等も、慣れてきたのか普通に対応していた。

イ○ヤ「頑張つてね、サキ。応援してるから。私を助けてくれて、ありがとね。」

沙希「う、うん。アタシこそ、本当にありがと、イリヤ。」

イ○ヤ「それじゃハチマン、手を出して。」

八幡「えっ？」

アタシとイ○ヤが握手していた時に、イ○ヤが比企谷に手を出すように促す。

イ○ヤ「はい。これが写真を撮った条件ね。」ギョツ

沙希「あっ……！！」

イ○ヤがそう言いながら、アタシと比企谷の手を繋がせる。更にイ○ヤは言葉を続けた。

イ○ヤ「言っておくけど、ホテルに戻るまでその手を離しちやダメだからね。私と約束してくれる？ハチマン。」

八幡「おう、勿論だ。一緒に写真を撮ってくれた以上、約束は破らねえよ。」

顔が少し赤いものの、比企谷はイ○ヤと交わした約束を守ると宣言していた。

沙希「あ、あの、比企谷？本当にいいの？」

八幡「大丈夫だろ。これぐらい、俺達じゃ普通じゃねえか。」

沙希「なっ……！お、俺達じゃ普通って……!!」

本当にコイツとイ○ヤは、さつきから何、アタシが恥ずかしくなるような事ばかり、言ってるの!? さつきから、ずっと顔が赤くなつたまんなんだけど……!

イ○ヤ「うんうん。何かいいわね、ハチマンとサキの雰囲気。それじゃ、私達もう行くからね。」

八幡「ああ。縁があつたら、またどっかで会おうぜ。土○さん達ですよ。」

沙希「じゃ、じゃあね、イ○ヤ。皆さんもありがとうございました。」

シ○ウ「ああ、お別れは言わないさ。またな、八幡、沙希。」

サ○ラ「また何処かでお会い出来るといいですね。」

○ン「あなた達には本当にお世話になつたわ、主にイ○ヤがね。」

セ○バー「あなた方のご好意、心から感謝します。」

イ○ヤ「バイバイ!! またねー!! ハチマン! サキ!」

そうして、アタシと比企谷は大きく手を振っていたイ○ヤ達と別れて、さつきいた商店街に戻る事にした。

それにしても、イ〇ヤもそうだけど、他の人達も不思議な人達だったような気がする。見た目はアタシ達と同じぐらいの年齢なのに、何となくいろんな経験をしてきたって感じがした人達だった。

比企谷もよく知っている人達みたいだし、あの人達は本当に何者だったんだろう……？

〔札幌市街〕

イ〇ヤ達と別れてから、暫くの間会話もせずに、手を繋ぎながら札幌の街を歩いていった。

それもそのはず、比企谷が繋いでいない方の手で、アタシのカメラを持って、さっきイ〇ヤ達と撮った写真をホクホク顔で見っていたからだ。

こんなニコニコしている比企谷、初めて見た……。アタシ、実は貴重な瞬間を見てるんじゃないのかな？いつも、どっちかって言えばブスツとした顔位しか見てないから。

八幡「なあ、川崎。」

そう思っていた時に、比企谷は突然、アタシに尋ねてくる。

沙希「な、何？」

八幡「お前、このカメラで撮った写真、絶対現像して俺にくれよ！絶対だからな！マジで一生の宝物にするから！」

沙希「あ、ああ。分かつてるよ。アタシもそのつもりだから……。」「
な、何だ……。写真の事か……。」

少し残念な気持ちになりながらも、アタシは比企谷の要望に応える。言われなくても、そのつもりだったんだけど……。」

八幡「本当か!?サンキュー！愛してるぜ、沙希!!」

沙希「なっ……。!ア、アンタ、また……。!!」

本当にコイツは……。!また、アタシの事、名前で呼んで……。!」

でも、不思議と嫌な気分にならなかつた。比企谷との距離が、今回の事をきっかけに縮められたような気がして、むしろ幸せな気持ちに包まれていた。それと同時に、そのきっかけを作ってくれたイ○ヤにも心から感謝していた。しかし――

陽乃「――へえー……。やっぱり抜け駆けしていたんだね、沙希ちゃん……。?」

八幡・沙希『……。えっ?』ビクッ

その幸せな気分も一瞬の内に終わりを迎えたのだった。背後から突然聴こえてきた底冷えする声に、アタシと比企谷が恐る恐る後ろを振り向くと

結衣「ズルいなあ……沙希。抜け駆けなんて、本当にズルいなあ……。許せないなあ……。」

いろは「何が迷子の家族を探すですか……。そんな事言つて、本当は先輩とデートしてたんじゃないですか……。川崎先輩？」

留美「本当に迷子の家族を探していたの？何かそんな手を繋いでいるところを見せつけられると、信用出来ないんだけど……。」

雪乃「そうね。しかも、今の『愛してるぜ、沙希』という言葉、それも含めて、私達に納得の出来る説明が欲しいわね。手繋ぎ谷君に川崎さん。」

そこにはいつの間にか、アタシ達に冷たい視線を向けた、雪ノ下・由比ヶ浜・一色・留美・陽乃さんがいた。

めぐり「は、はわわわわ……。比企谷君と川崎さん、いつの間にそんな手を繋ぐような仲に……!!」

小町「うーん……。これは、小町的にポイント爆上げなんですけど……。この状況じゃ笑えないかも……。」

奈呼・璃夢『ハ、ハハハ……。』

その後ろには、うろたえている城廻先輩、複雑な表情をしている小町、苦笑いをしている奈呼さんと璃夢さんもいた。

その後、アタシと比企谷は釈明をしたが、奈呼さんと璃夢さん以外のメンツに一向に信じてもらえず、最終的にはカメラで撮ったイ○ヤ達との写真+璃夢さんの証言で、ようやく信じてもらえたのだった。

イ○ヤ達と一緒に撮った写真を見せた時に、比企谷が小町に彼女達の事を話したら、小町が『あああああ!!思い出したー!ー!ー!!何で小町達が行くまで引き留めてくれなかったの、ゴミいちゃん!!小町もこの人達と一緒に写真撮りたかったー!!』とか『アー○ヤーやラ○サーやア○シンやギ○様はいなかったの!?!』とか、小町も比企谷同様、彼女達の事を知っていたらしく、物凄く興奮していたのであった。(因みに、他のメンツは知らなかったみたいで、興奮している比企谷と小町にドン引きしていた。)

最後に、この旅行の後日談として、アタシのカメラに収めてあるアタシと比企谷とイ○ヤ達の写真を見せたところ、大志と戸塚、材木座と海老名辺りが、比企谷や小町と同じぐらいの反応を見せていた。

大志は『マジかよ!?!姉ちゃんとお兄さん、良いなー!俺もこの人達と会いたかったー!!』と羨ましがっていたり、戸塚は『八幡と川崎さん、凄ーい!!本当にこの人達が来たの!?!』と驚いていたり、材木座は『おのれ、八幡……!!何故、セ○バー嬢や遠○姉妹やイ○ヤ嬢達と……!!』と血の涙を流すぐらい悔しがっていたり、海老名は『もしかして、『しろ×はち』!?禁断のコラボの『しろ×はち』なの!?キーマシーターワ……』

!!!!!!
 『とか、訳の分からない事を言って鼻血を出していた。もしかして、あの子達、一部の人達にはかなりの有名人だったのかな……?』

—— おまけ・第6話 ——

○ン「ねえ、イ○ヤ。1つ聞いていい?」

八幡と沙希と別れた後、ホテルに戻ってる時に○ンがイ○ヤに尋ねていた。

イ○ヤ「何?」

○ン「どうして、あの八幡ってヤツ、私達の事を知っていたのかしら?まさか、私達の秘密を話した訳じゃないわよね?」

イ○ヤ「話すわけじゃないじゃない。でも、本当に何でだろうね?」

セ○バー「あのハチマンという男、魔術師だったという可能性は?」

イ○ヤ「それはないわよ、セ○バー。だって、ハチマンもサキも手に触れた時、魔力を全然感じなかったもの。」

サ○ラ「うーん……:……でしたら、どうして私達の事を知っていたんでしょうね?セ○バーさん以外の私達の名前まで、フルネームで答えてましたからね。」

イ○ヤ「そういえば、そうね。私の本名も『イ○ヤス○イル・フ○ン・ア○ンツベ

○ン』って言ってたぐらいだし。」

シ○ウ「まあ、いいじゃないか。アイツ、悪い奴じや無さそうだったしな。俺達の大ファンだって事で。でも、俺達、そんなに有名人じゃないはずなんだけどな。」

イ○ヤ「まったく、シ○ウは相変わらずお人好しね。そんなところが、シ○ウらしいけどね。」

5人は、八幡の事を話題にしながら、ほのぼのとした平和な会話をしていた。

シ○ウ「あつ、そういえばあのもう一人の女の子、沙希って子なんだけど……。」

イ○ヤ「えっ？サキがどうかしたの？」

シ○ウ「あの子、結構良かったよな。俺達の周りにはいなそうな同年代の綺麗でクルな美人なのに、俺の勘だけど家庭的な優しい感じがするんだ。何となく、ああいう子と結婚したいなって思つて。」

しかし、シ○ウのこの（本人的には）悪気の無い言葉で、ほのぼのとした平和が終わりを告げる。

○ン「ふん……私達を目の前にしてそんな事言うなんて、いい度胸してるわね、衛○君？」ゴゴゴ

シ○ウ「あつ……！」ビクッ

シ○ウが気が付いた時には、後の祭りだった。4人の目の前でこんな事を話してし

まったら、只では済まないという事を、彼は失念していたのだ。

セ○バー「…………シ○ウ、貴方という人は…………。」ゴゴゴ

サ○ラ「…………先輩、私達というものがありながら、その発言はなんなんですかねえ…………？」ゴゴゴ

イ○ヤ「…………お兄ちゃん、いくらサキが私を助けてくれたって言っても、今の発言は許せないよ…………？」ゴゴゴ

シ○ウ「い、いや、ご、誤解だ！悪気は無いんだ！ただ、そう思っただけで…………!!」

○ン「問答無用よ！徹底的にお仕置きするわよ!!」

イ○ヤ・セ○バー・サ○ラ『了解（よ）（です）!!』

シ○ウ「ぎゃー—————!!なんでき—————!!」

こうして、シ○ウは自分の失言によって、哀れにもお仕置きを受けるのであった。そして、そんな光景の目撃者がいた。

かおり「何、あの人達？超修羅場ってるんですけど、ウケる!」

サツポ○ビル博物館から家族と一緒に帰ってきた折本かおりが、偶然彼等と宿泊したホテルが一緒だった為、ホテルの近くで起きていた修羅場を見て、ウケていたのであつた。

第9話

「ホテル・501の部屋」

八幡「つ、疲れた……。」バタン

いろいろあった1日めの札幌市街観光を終えて、ようやくホテルの部屋に戻ってきた途端、俺は大の字になってベッドに倒れこんだ。

『もう疲れたよ、パトラッシュ……。』——今の気分を例えると、本当にこんな感じである。衛○士○さんやイ○ヤ達に会えたという嬉しい奇跡があったものの、全体的には荷物持ちばかりやらされて、疲労感が半端ない。

川崎と手を繋いでいる所を他のメンツに見られ、あれから俺と川崎は、必死に釈明をしていた。

奈呼さんと璃夢さんはすぐ信じてくれたが、その2人以外には一向に信じてもらえず、最終的には川崎のカメラで撮影した写真+璃夢さんの証言で、ようやく信じてもらったのだ。(イ○ヤ達ヒロイン4人娘と一緒に写った写真や彼女達との2ショット写真、川崎との2ショット写真の事では、いろいろ言われたが。)

しかし、信じてもらえる事は出来たものの、納得させる事はまた別の話で、俺はまた

もやアイツらが商店街で買った荷物を持たされる羽目になった。

その件に関しては、川崎も『アタシにも責任があるから』と言つて引き受けようとしていたが、俺はそれを断つた。だって、女の子に優しい正義の味方の士〇さんにあつた直後で、そんな事をやらせてしまつたら、士〇さんやイ〇ヤ達に申し訳が立たないじゃないか。(それで、何故かまた、川崎が顔を赤くしていたり、雪ノ下姉妹・由比ヶ浜・一色・留美辺りが頬を膨らませていたが。)

そして、マイクロバスでホテルに戻り、アイツらの買った荷物を部屋まで運び終えた俺は、自分の部屋のベッドに倒れこんだという訳だ。

八幡「やつべ……………すげえ眠くなつてきた……………」
倒れこんだ直後、もの凄い睡魔が襲い掛かつてくる。やつぱり、相当疲れたんだろうな……………」

八幡「まあ、いいか……………。今日は、もう何処かに行くなんてないだろうから……………」
俺は、その睡魔に身を任せて、深い眠りに入り今日の疲れを癒やそうとした。しかし、

プルルルルルルルル!!!

八幡「……………あん?」

突然、ホテルの部屋に置いてある電話の着信音が鳴り響き、眠気が少し吹き飛んでし

まう。

八幡「何だよ、まったく……。」ガチャ

気だるいものの、俺はその電話に出る事にする。

八幡「はい。」

結衣『あつ、ヒッキー!?今からみんなで……』ガチャン

……では、寝るとするか……。

プルルルルルルル!プルルルルルルルルル!!ガチャ!

八幡「何だよ!」

結衣『それはこっちのセリフだし!!何で電話切っちゃうの!』

八幡「悪いけど、ホテルの中で遊ぶならパスだ。お前らだけで楽しんでこい。」

結衣『違うよ!ビュツフエだよ!今からみんなで、晩御飯食べようって事!!』

八幡「はあつ?そっちかよ?それだったら、悪いけどお前らだけで先に行ってくれ。

俺は後でぼっち飯を堪能するから。」

結衣『何で旅行に来てまでぼっち飯だし!?もういいよ!そんな事言うんだったら、

こっちにも考えがあるんだから!』

八幡「あん?何だよ、考えって?」

俺の質問に電話の向こうの由比ヶ浜は答えなかった。代わり、別の人物が電話に出

る。

小町『……おにいちゃん。』

八幡「へっ？小町……？」

小町『……おにいちゃんが一緒にいかないんだったら、小町も晩御飯食べない。結衣さんや他のみんなは勿論だけど、おにいちゃんと一緒に楽しくご飯食べたいから……。』

八幡「い、いや、ちよつと待て！別に俺と一緒にいかないからって、小町が食べない理由には……。」

留美『……私も八幡が行かないんだったら、行かない。八幡と一緒に美味しいご飯食べたい……。』

八幡「る、留美!?!お前もかよ!?!」

留美『……でも、食べたかったな……。北海道の海や山の幸のビュッフェ……。ウウ……。グス……。』

小町『……そんなビュッフェ、この先食べられるかどうか分からないのに……。ヒツグ……。エツグ……。』

八幡「だーっ!!分かった、分かった!!俺も一緒に晩御飯行くから!だから、泣かないでくれよ!!晩御飯食べないなんて、悲しい事言わないでくれ!!」

そういう事かよ……！確かに小町と留美の最年少コンビにそんな事言われ泣かれてしまつては、俺に断る事なんて出来ない。というより、俺以外の奴がこの2人を泣かせたと聞いたら、ソイツは間違いなく万死に値する。

八幡「やつてくれたな、由比ヶ浜め……！アホの子の癖に……!!」

結衣『誰がアホの子だし!?』

あつ、ヤベエ。思わず心の声を口に出してたか。つていうか、いつの間に由比ヶ浜と代わつてたんだよ。

結衣『とにかく、ヒツキーも早く来てよ！みんな準備して、あたしと沙希の部屋にいるから!』

八幡「……分かったよ、少し準備してから行くから、待ってる。」ガチャン

こうして、俺は眠気覚まし代わりと疲れをとるためのシャワーを浴びて、着替えてから隣の502の部屋で他のメンツと合流して、全員でビュツフェのやっている会場に向かったのだつた。

せっかく、寝ようとしてたのに……。ホテルの時ぐらい好きにさせてくれよ………。最も、今の電話で眠気なんてなくなつちまつたけどな……。

くホテル・ビュツフエ会場く

めぐり「うわあ〜！凄いな〜！まるで、結婚式の会場みたい！」

陽乃「めぐり、『みたい』じゃなくて、むしろそうだから。この会場、結婚式でも結構使われているみたいよ。」

沙希「へえ、そうなんです。大志やけーちゃん達も連れていきたいな……。」

小町「大丈夫ですよ、沙希さん。おにいちゃんとここで結婚式をあげればいいじゃないですか♪」

留美「ちよつと待つて、小町さん。何で八幡と沙希さんの結婚式なの？私と八幡の結婚式でしょ？」

いろは「そ、それも違いますよ、留美ちゃん！むしろ、私と先輩の結婚式でみんなを招待しますから!!」

結衣「いろはちゃん？どさくさに紛れて、何言ってるのかな？あ、あたしとヒツキーのけ、結婚式に……」モジモジ

雪乃「由比ヶ浜さんも一色さんも川崎さんも鶴見さんもやめておきなさい。比企谷君とここで結婚式をあげたら、破産しかねないわよ。そ、それなら、私が……」ゴニョゴニョ

ビュツフエの会場に来た俺以外のメンツは、その会場の凄さに感嘆している。確か

に、内装も広く隅々まで綺麗で、ここで結婚式をあげたいと思えるのも、納得出来るくらいのお会場だ。

しかし、『女3人寄ればかましい』って言うけど、本当にコイツらの為にあるような言葉だよな。8人いるから、それも倍以上になつてゐるが。あと、何人からかは俺が勘違いしそうな事を言つてゐるが、敢えて聞かなかつた事にする。

そうして、係の人に席に案内されて、俺達は並んでゐる料理を見て、またもや感嘆と
する。

海の幸では、ウニやイクラ、蟹や鮭を使った料理といった定番のものはじめ、いろんな魚介類の料理が豪華に並んでゐる。

山の幸でも、ふきやたけのこの煮物、舞茸やタラの芽の天ぷら等、北海道ならではの山の幸の料理が美味しそうに並んでゐた。

その他にも、じゃがいも料理やジンギスカン等、北海道の定番料理がいろいろと取り揃えており、まさに北海道料理の展覧会かと言わんばかりの品揃えであつた。

めぐり「うわあ。こういう料理見ると、改めて北海道に来たんだって感じがするね。」

留美「本当に美味しそう……。全部食べちゃいたいぐらい……。」

小町「る、留美ちゃん。それは流石に無理だと思うよ。確かに小町も同じ気持ちだけ

ど……。」

沙希「大志やけーちゃん達に食べさせてあげたいな……。」

結衣「さ、沙希……。大志君やけーちゃんばかりになってるよ……。」

雪乃「でも、鶴見さん達の気持ちも分からなくはないわね。確かに美味しそうですもの。帰ったら、作ってみたいぐらいだわ。」

いろは「あー！いいですね、それ！雪ノ下先輩の料理って美味しいって聞きますから、是非作ってみてくださいよ！私も作ってみようかな♪」

陽乃「いいね♪帰ったら、奉仕部主催でみんなで作ってみたら？北海道料理コンテスト。勿論、私も行くからね♪」

おい……。美味しそうなのは分かるし、事実美味しいとは思うけれど、それで奉仕部主催で北海道料理コンテストやるっていうのは、マジで勘弁してくれ。

雪ノ下や川崎辺りならまだしも、由比ヶ浜のも食べるなんて、罰ゲーム以外の何物でもないじゃないか。ましてや、魚介類の生物なんて使った日には、俺、マジで食中毒で入院する自信まであるぞ。

そして魔王、アンタもちやつかり参加しようとしてんじやない。

八幡「まつ、まあ、見るだけっていうのもなんだし、とにかく食べようぜ。」

俺がそう言うと、全員がそれぞれ料理や飲み物を適当に取り出して、テーブルに運ぶ。

そして、全員が席についた時に陽乃さんに促され、俺が『いただきます』と言おうとした時だった。

ピリリリリ……

陽乃「あれ？静ちゃんだ？みんな、ちよつとゴメンね。」

陽乃さんの携帯に、平塚先生からの着信があった。俺達に謝りつつ、陽乃さんは電話に出る。

陽乃「ひやつはろー！静ちゃん、久しぶりだね！どうしたの？」

静『久しぶりだな、陽乃。たまには、お前を飲み誘おうと思っただが、どうだ？』
陽乃「あつ、ごめーん。誘ってくれたのは嬉しいんだけど、今、旅行中なんだ。」

どうやら、平塚先生は陽乃さんを飲み誘おうとしていたらしい。それは何の問題も無いはずだった。しかし、その刹那、陽乃さんは俺の方を見てほくそ笑みながら――

静『旅行……？珍しいな、お前が旅行だなんて。まさか、一人旅か？』

陽乃「違うよー。比企谷君と北海道に行ってるんだよ。婚前旅行でね♪」ドンガラ
ガツシャーン!!

静『……………はっ？』

――まさに、核爆発級の爆弾を、この場にいる全員に投げつけてきたのだ。陽乃

さんの言葉に、俺達全員が盛大にコケてしまう、料理の皿をひっくり返す等のギャグ漫画やコントのような反応をしてしまう。

静『ひ、ひ、ひ、ひ、比企谷と、こ、こ、こ、婚前旅行だ?!』

陽乃「そーだよー。私、比企谷君と結婚を前提にしたお付き合いを……」

て、て、て、て、て、て、て、て、て、て、て、て、この魔王様は!?

思わずニセ福岡弁を心の声で叫んでしまいそうな位の言葉を、陽乃さんは平塚先生に話していた。

おい、マジでやめてください、魔王様! そんな事言ったら、今度平塚先生に遭った時に、『ここで会ったが百年目だな!!』とか言つて、殺されちゃいます!!

雪乃「何、馬鹿な事を言ってるの!?! 姉さん!!」

結衣「そうですよ!! これは小町ちゃんと留美ちゃんと城廻先輩の卒業記念旅行じゃないですか!」

いろは「大体、何で先輩とはるさん先輩が、結婚を前提にしたお付き合いをしているんですか!?!」

そんな時、雪ノ下・由比ヶ浜・一色の3人が、陽乃さんに対して声を大きくして抗議をしていた。周りのお客さんやホテルの従業員達から、『また、アイツらか……。』と言いたげな呆れた視線を感じるんだが……。

沙希「比企谷、どういう事!？」

留美「八幡、ちゃんと説明してほしいんだけど……。」

つて、サキサキにルミルミ、お前らもか!?!なんで、そんなに睨み付けながら怒ってるんだよ!?!

八幡「い、いや、落ち着け、お前ら。どう考えても、陽乃さんの戯言じゃないか。」
めぐり「そ、そうだよ、みんな。比企谷君、私は信じてるからね。ちゃんと説明してくれたら。」

八幡「そ、それって、説明しない限りは信用しないって事ですか!?!」

大天使・メグリエル先輩、貴女もですか!?!ある意味、1番シヨックですよ!?!貴女が1番信じてくれそうなのに!!

小町「うーん。流石、陽乃さんですね。小町のポイント高い♪」

いやいやいや!八幡的には、全然ポイント高くないからね、マイシスター! 静『……………陽乃、電話を切るぞ。邪魔して悪かったな……………。』

陽乃「あつ、わかったよー。お土産買ってくるから、期待して待っててねー!」ピッ
雪乃「ちよつと、姉さん!どういいうつもりなの!?!」

陽乃「いやー、お昼は沙希ちゃんにしてやられちゃったからねー。ここら辺で、少し挽回しとかないと思ってね。」

沙希「し、してやられた!? な、何を言って……!?」

陽乃「決まってるじゃない。迷子探しを兼ねた2人きりのデートよ。」

八幡「デ、デート!? 違いますよ! あれは本当に迷子探しで、あの子やその家族の人達もいたし、俺と川崎がデートなんて……!」

沙希「……………」

あの……川崎さん、川崎さんの為に弁護してるのに、なんでそんなに睨み付けてるんですか? それに、由比ヶ浜や一色や留美も頬を膨らまして怒ってるし、雪ノ下と陽乃さんも何時にも増した冷たい視線だし、小町と城廻先輩にも苦笑いだし……。

「ママー。あのおにーちゃんとおねーちゃん達、またケンカしてるよー。」

「しっ! 見てはいけません!」

……近くで晩御飯食べてるお母さんにお嬢ちゃん。そんなママアレのテンプレのよ
うなやり取りしないでください。マジで泣きそうなんです。それに、『また』って事は、
昼間のフロントの騒ぎも見ていたんですか?

そんな騒ぎの後、俺達は晩飯を食べたのであった。確かに、美味しかった事は美味し
かったのだが、あんな騒ぎを起こした後じゃ、その美味しさも堪能出来ないうすよ、マ
ジで。そんな中でも、俺以外のメンツは、俺より食べていたけどな。コイツらの神経、図
太いにも程があるだろ……………。

くホテル・廊下

八幡「はあ……やつと、静かに過ごせるな……。」

俺は、ため息をつきながら一人ホテルの廊下を歩いていた。

食事が終わってから、女性陣は全員でプールと温泉に遊びにいった。

俺は即座に、「もう、荷物持ちで疲れてるし、眠いから寝る」と言つて、断ったけどな。

八幡「流石に、今日はもう何も起こらねえだろ……。マジで寝よう……。」

俺が自分の部屋の前に立ち、まさに部屋のカードキーで開けようとしたその時だった。

？「うおおおいいいいいい!!ちよつと待つてくれー……!!」

八幡「えっ!?!」ビクッ

突然、スーツ姿の男が俺に向かって猛ダツシユしてきたのだ。

八幡「ど、どうしたんだよ?アンタ、いきなり……?」

?「ハア……ハア……!お、お前を男と見込んで、頼みたい事がある……!」

八幡「な、何だよ!?!」

? 「一生のお願いだ……俺をお前の部屋に匿ってくれ!!」

八幡「……はあ!？」

突然現れた謎の男の出会い、それが俺にとつての『いろんな意味で最悪な夜』の始まりになる事を、この時の俺は知るよしもなかった。

—— おまけ・第7話 ——

夜・すすきの周辺

璃夢「うくん、やっと今日1日が終わったね、姉様。」

奈呼「お疲れ様、璃夢。初現場としては、凄く頑張っていたと思うわ。」

璃夢「え。そんな事無いよ。八幡君達をホテルに送った後、事務所に帰って、反省会とかやったじゃない。」

奈呼「お客様が迷子の家族を探しに行かれるという事自体、イレギュラーどころか私の経験上、前代未聞の事例だから仕方ないわ。私と璃夢にも至らない所があったのも事実だけどね。私もまだまだ未熟だっと思って知らされたわ。」

璃夢「そうなの? でも、姉様が未熟だったら、私なんてそんなレベルじゃないよ。姉

様はうちの人気No. 1ガイドどころか北海道人気No. 1ガイドなのに。」

奈呼「やめて、璃夢。私、そんな風に全然思っていないから。」

八幡達のガイドをしていた奈呼と璃夢が、仕事を終えてすすきのに来ていた。

八幡達をホテルに送っていった後事務所に戻り、日報を書いたり反省会をしたり等の事務仕事をした後、晩御飯を食べる為にすずにの足を運んでいた。

璃夢「それにしても、八幡君達って凄く良い人達だよ。私のバスガイドデビューが八幡君達で良かった。」

奈呼「そうね。璃夢は恵まれているわよ。私が今までガイドしてきたお客様の中でも、本当に良いお客様だと思う。」

璃夢「へえー、姉様がそう言うんだから、きつとそうなんだろうね。だったら、八幡君達に『楽しい旅行だった』って思えるような旅行にしくちやいけないね。」

奈呼「その為には、八幡さん達にそう思っ頂けるように、私達が努力しなくちやいけないわよ。分かっているわね、璃夢？」

璃夢「勿論だよ、姉様！まず、明日は寝坊して遅刻しないようにするから！」

奈呼「……貴女はまず、そこから直しなさい。璃夢。」

奈呼と璃夢の八幡達の印象は、非常に好意的なものだった。彼女達は、八幡達に『楽しい旅行』を過ごして貰いたいと思ひ、明日からの仕事に臨もうとしていた。寝坊の事

で、奈呼が呆れていた事もあったが。

璃夢「ところで姉様、八幡君って誰の事が好きなんだろうね？」

奈呼「えっ？何言ってるの？璃夢？」

璃夢「だって、気にならない？8人の可愛い美少女達の中に男の子1人で来ているんだよ？小町ちゃんも妹みたいだけどね。あの中に、恋人か好きな人がいるんじゃないかなって思ってる。」

奈呼「それは分からないわよ。あくまで八幡さんのプライベートな問題だから。私から見たら、女の子達全員が、八幡さんの事を好きなのかなとは思ってあげようね。」

璃夢「あつ！やつぱり!?姉様もそう思っていたんだ！みんな、八幡君の事大好きみたいだよね〜！陽乃ちゃんと雪乃ちゃん、それに結衣ちゃんというはちゃんと沙希ちゃんって、八幡君の事追い掛けて来たのかなって思っているもん。めぐりちゃんと留美ちゃんも凄く惚れてるっぽいし。あと、小町ちゃんもブラコンで、『お兄ちゃんだけ可愛さえあれば関係ない』とか。」

奈呼「コラ、璃夢。私達の間だけで話すのはいいけど、その事を八幡さん達の前では、言ったらダメよ。」

璃夢「分かっていますって。仮にもお客様だからね。」

彼女達は、八幡達の関係についていろいろと推測していた、その時だった。

「おい、コラ！テメエ、何なんだよ!?その子の彼氏か!」

「……そ、そうだよ!コイツは俺の彼女だよ!!何か文句あんのか!」

奈呼・璃夢『えっ……?』

彼女達とそう遠くない距離から、男達が言い争いをしている声が聴こえてくる。しかも、後から聴こえてきた声は、聞き覚えのある声だった。その声が聴こえた方を彼女達
が振り向いてみると

奈呼「えっ……八幡さん!」

璃夢「あれ!?ホントだ!って言うより、八幡君の隣にいる男の人と女の子……!」

そこにいたのは、数人の男達に囲まれている八幡の姿、そして、八幡の隣にいるのは、一緒に旅行に来た8人ではない、『知らない男』、そして、『知らない女の子』がいたのであつた。

第10話

「ホテル・501の部屋」

「ハア……ハア……。た、助かった……。ありがとな、坊主……。」

八幡「あつ、ああ……。ところで、何かやらかしたのか、アンタ？ 言っておくけど、命を狙われているとかだったら、マジで勘弁してくれよ。」

必死の形相で匿ってほしいと頼まれ、俺はその男を部屋に入れる事にした。（見た感じ、年齢は平塚先生と同じぐらいか少し年上のようなようであった。）

その男から礼を言われて、俺は何があつたのか尋ねてみる。

「いや、命を狙われているとかじゃないんだ。ただ、『ある場所』に行きたいんだが、それが連れにバレちゃつてな。今、ソイツらを撒いたところなんだ。」

八幡「そ、そうか。で、その『ある場所』って何処なんだ？」

「決まつてるだろ!! 男の夢が詰まっている札幌の理想郷（アヴァロン）、『すすきの』だ!!」

八幡「……はい？」

突然、何言つてんだよ。コイツは……。すすきのつて言うのと、俺も調べたからある程

度なら分かっている。そこに行きたいって言う事は……。

八幡「まあ、その何だ。アンタがすすきのに行きたいというのは、分かったよ。で、アンタが揉めた連れというのは、女なのか？」

？「へえー、お前なかなか鋭いな。むしろ、その内の一人は俺の嫁さんだけど？」

八幡「はあ!!」

マジかよ、コイツ……!?嫁さんだけじゃなくて、女何人か連れて来ているのに、すすきのに行きたいだと……!?

八幡「ア、アンタ、正気かよ!?嫁さんや他の女連れて来ているのに、何考えてんだよ!?!」

？「いや、嫁さんもソイツらも仕事仲間なんだ。彼女らと東京から出張みたいな感じに来ていてな。仕事が今日で終わりで明日帰るから、どうしても行きたいんだ!何だかんだ、アイツらに監視されて行けなかったし!」

八幡「そうか……。それならバレないように何とかしなくちゃいけないよな……。?」「そうだな……。ん……。?待てよ……。?そうだ、お前だ!!」

その時、男は俺を見て、何か名案が閃いたような顔をする。

八幡「えっ!?!俺がどうしたんだよ!?!」

？「何、難しい事じゃない。『お前の姿を借りたい』ってだけだ。」

八幡「はい……!?!」

マジでコイツ何なんだよ! 『俺の姿を借りた!』 って……!!

八幡「と、どういう意味だよ!?! それ! アンタ、俺に何かしようってのか!?!」

? 「別にお前に危害を加えようって事じゃない。ちよつと、『これ』を使つてな。」

男はそう言いながら、スーツの胸ポケットから2個のビー玉らしきものを取り出す。

八幡「ビー玉? そんなもんで何をしようって……!?!」

? 「しっ! 少し黙つて見てろつて!」

そう言うと、男はビー玉に『念』らしきものを送るように、力を込めている。

キイイイイン!!

八幡「なっ………!!」

すると、次の瞬間、2つのビー玉が光り輝き出したのだ。

そして、そのビー玉から文字が浮かび出して、男は『ある人物』の姿に変わったのであった。

八幡「な、何だよ、これ………!?!」

男が姿を変えた『ある人物』、それは………

くホテル・フロントく

「ねえ、何、あの人達？」 ヒソヒソ

「双子なのかな？まるで、ザ・た○ちみたい。」 ヒソヒソ

「ホントだね。太らせたら、そのまんまじゃない？」 ヒソヒソ

数分後、俺と『その男』は、ホテルのフロントを堂々と歩いていった。但し、その男は『ある人物』の姿になりながら。

俺達が歩いている時に、周りの人達からいろいろとヒソヒソ話が聴こえてくる。言っておきますけど、俺達、双子でもザ・た○ちでもありませんからね。

？（八幡の姿）「いやー。お前には、本当に感謝するわー。姿を借りたどころか、わざわざすすきのに付き合ってもらえるなんてな。」 ヒソヒソ

八幡「何言ってるんだよ。どうしてもお礼をしたいうて言うからだろ。だから、アンタが付いてこいって言ったから来たんじゃないか。」 ヒソヒソ

男が姿を変えた『ある人物』、それは『俺自身』だった。

つていうか、どういうマジックかトリックだよ!? 突然、ビー玉が光りだしたその次には、俺の姿に変身したんだぜ!? 平然を装っているけど、心の中ではかなりテンパってますよ!

？（八幡の姿）「……………ん？ マズイ!!」

八幡「あっ?どうしたんだよ?」

? (八幡の姿)「おい、坊主。決してあっちを振り向くなよ……。」「ヒソヒソ

八幡「えっ?それって……。」「ヒソヒソ

男が僅かに指差した方向をチラッと見てみる。すると、

「おかしいでござる……。先生の匂いがさつきから感じられないでござるよ……。」

「本当ね……。私でも嗅ぎ付けられないなんて……。パツタリと消えてしまったわ

……。

??「アンタ達、何やってんのよ!?あのヤドロクを草の根分けても探さないよ!!」

???「そうは言っても……。ここまで見つからないなんて、おかしいですね……。」

そこには、4人組の美女達が揉めている姿があった。もしかして、あの人達……。コイツが言っていた、嫁さんと仕事仲間なのか!?

? (八幡の姿)「おい!そんなに注目するな!バレたらお前まで巻き添えになるぞ!!」

ヒソヒソ

八幡「あ、ああ。悪い。分かった。」ヒソヒソ

男に促されホテルを無事に出た俺達は、止まっていたタクシーをに乗る事になった。

? (八幡の姿)「よし。ここまでくれば大丈夫だろ。」キイキイイイン

男は俺の姿から元の姿に戻る。マジでコイツ何者だよ……?」

横○「おつ、そう言えば、自己紹介してなかったな。俺は横○忠夫って言うんだ。それでお前は？」

八幡「……比企谷八幡だ。」

横○「そうか。宜しく頼むぜ、兄弟！」

八幡「……誰が兄弟だよ……。」

こうして俺は、謎の男改め横○とタクシーに乗り、すすきのに行く事になったのであった。

すすきの

横○「いやー！やって来たぜ!!すすきのよ、私は帰ってきたー!!」

ニツカウイスキーの絵やいろんなビール会社の看板をはじめ、きらびやかな街の灯りが彩られている街、すすきの

そこに到着した途端、横○はこのハイテンションである。

アンタ、初めて来たんだろ？何で某ガン○ムの名台詞を使って、そんなデタラメ言ってるんだよ？

八幡「なあ、横○さん。」

横○「うん？どうした？」

八幡「アンタ、お礼がしたいって言ってたけど、まさか……。」

横○「おう、そのまさかだ。お前に風俗を奢るよ。」

八幡「……………へっ!？」

や、や、や、やっぱりか……!!ま、ま、ま、まさか、本当にそうだったとは……!!

八幡「い、いや、でも悪いだろ!たがが、ここに行くのを協力しただけで……!!お金だつて、そんな余裕あんのかよ!？」

横○「いや、お前がいなかったら、俺はここに来れなかったかもしれないだろ?本当にお前には感謝してるんだ。お金の事なら、心配するな。」

八幡「えっ!?マジかよ……!？」

横○はそう言いながら、スーツの胸裏のポケットから1万円の札束をこっそり見せつける。アンタ、マジに何者だよ……?如何わしい仕事してんじやねえだろうな……?

横○「まあ、そういう訳だからさ。お前に借りを返す意味でも、風俗を奢らせてくれよ。大人としてさ。」

……………以前、『ある人』が俺を『ある言葉』で評した事がある。その人に対して、こう言いたい。

『俺は理性の化け物をやめるぞー!ー!ー!ー!!雪ノ下陽乃ー!ー!ー!ー!!』

……………はい。DIO様ですね、わかります。

しかし、今の俺の心境は、それぐらい興奮していた。だって、考えてみる？ 見ず知らずの男をすすきのに行くのを助けて、お礼が風俗奢るだけ？

普通に考えて、こんな大チャンス、滅多にないじゃないか!!

横○「ん？ どうした？ お前、風俗行くの嫌なのか？」

心の中で興奮していて返答していなかった俺に、横○が尋ねてきた。その問いに対して、すかさず俺は答える。

八幡「とんでもない!! 付いていきますぜ、兄弟!!」

横○「おっ！ お前もノツて来たじゃないか!! では、共に行こうぜ、兄弟!!」

八幡「おおーっ!!」

親父、お袋、小町、戸塚、どうやら俺は、魔法使いにも天使にも妖精にもなれないようだ。今日で汚れた体になってしまふ、俺を許してくれ。

八幡「それで横○さん、もう行く店は決まってるだろうな？」

横○「ああ、勿論だ！ 少し先に、俺の行きたい店があるからな。付いてこれるか？」

八幡「付いてこれるかじゃねえ！ アンタの方が付いてきやがれ！」

横○「良いね〜！ 最高だね〜！ 兄弟!!」

最早、自分でも信じられないくらいの高テンションで有頂天になっている。横○もそんなハイテンションに便乗して、有頂天になっている。さっきの眠気なんて、あつと

いう間に無くなったぐらいだ。

しかし、運命の女神がそんな俺に天罰を降す事になるとは、この時の俺は知るよしもなかった。

くすすきの・ラーメン横丁付近く

「ちよつ、ちよつとやめてよ！それ、ないんですけど！マジウケないんだけど！」

「なあ、そんなに嫌がる事ねえじゃん。少し遊びに行こうって言うてるだけだろ？」

「そうだけ。せつかくの可愛い顔が台無しだぜ？そんなに怒っちゃ。」

「いいじゃねえか。俺達と一緒に遊んだら、楽しいぜ？」

八幡「あん……？何だ？」

俺と横○が目的の風俗店の付近にやって来ると、何人かの男が一人の女を強引にナンパしている光景が見えた。

女の方の声は、どっかで聴いた事があるような声だ。口調も何となく、聴いた事があるような……。

横○「ほうほう、強引なナンパか。これは、少し頂けないな。」

横○がナンパの光景を見て、顔を少し歪ませる。まあ、確かに見てて気分の良いものではないからな。

「いい加減にしなよ！私、アンタ達のようなゲスなヤツら、興味なんて全く無いんだから

！舐めんじやないわよ！

八幡「……………あれ？」

やっぱり、何処かで聴いた事あるよな？この声……。そう思い、女の方をよく見てみると……………。

八幡「……………はあつ!?う、嘘だろ!?何で……………!？」

横○「へっ?どうしたんだ？」

その女は、『俺のよく知っている女』だったのだ。『その女』は、ナンパしている3人組の男達に対して、啖呵を切っていた。

「……………えっ!？」

八幡「あつ……………!!」

俺が思わず大声で驚いた事で、『その女』も俺がいる気が付いてしまう。それまでの怒りの表情が、見るからに希望に満ちた表情になっていく。そして、『その女』は俺に向かつて、こう叫んだ。

「ダー……り……り……ん!!」

八幡「……………はいっ!？」

『その女』——『折本かおり』はそう言いながら、こつちに向かつて走っていく。

俺にとっての『いろんな意味で最悪な夜』の1つ、それは、折本かおりとの旅行先で

のまさかの再会だった。

—— おまけ・第8話 ——

「すすきの（折本かおり side）」
かおり「へえー、なかなか悪くないかもね。」

私はサツポロビール博物館から帰ってきた後、しばらくホテルで過ごしていた。しかし、あまりにも退屈過ぎたので、母さんに『コンビニ行ってくる』と言って、すすきのの街を散策していた。（因みに父さんは、飲み過ぎて酔いつぶれていた。）

いろいろな看板が綺麗に彩られているし、流石は日本3大歓楽街と言われるくらいの街だなあと、素直に感じた。

かおり「さて、何処のコンビニ行こうかな？ 定番のローソンやセブンもあるけど、やっぱり北海道と言ったら、セイコーマートかな。」

そんな感じでブラブラしていたら、私にとって最悪な瞬間がやって来た。

「よう、その可愛い姉ちゃん。」

かおり「えっ？」

私の目の前に突然、私に声をかける3人組のガタイの良い男達が現れた。突然の事で、私は思わず後ずさりしてしまふ。

「めっちゃ可愛いじゃねえか。この後、暇だったら、俺達と少し遊ばねえか？」

「何、心配する事はねえよ。姉ちゃんの悪いようにはしねえからよ。」

かおり「はあっ!？」

突然現れた上に、このナンパ行為……マジでないんだけど!

かおり「悪いけど、他当たってくれる?私、アンタ達に構うほど暇じゃないから。」

私は、胸の中に秘めた怒りを抑えつつ、出来るだけ丁重に断ろうと思った。しかし、怒りを隠しきれないのか、少し口調を厳しくしながら断ってしまったのだ。

「へえ、俺達を目の前にして、なかなか度胸のある女だぜ。」

「こんなに厳しく断られたのは、『アイツら』以来だなあ。ますます、一緒に遊んで欲しくなっちゃった。」

『『アイツら』に負けないくらいに可愛い子ちゃんだし、可愛がつてやろうぜ。ホラ、来いよー!』

かおり「いや!ちよっ、ちよっ!!」

私は逃げ出そうとしたが、その寸前に男達の1人に腕をつかまれ、逃げ出すのを失敗してしまい、別の所に連れてかれた。

くすすきの・ラーメン横丁付近く

かおり「ちよつ、ちよつとやめてよ！それ、ないんですけど！マジウケないんだけど！」

逃げられない事は分かっているけど、私はせめてものの抵抗で、男達を精一杯睨みながら、怒りの言葉を吐いていた。こんなヤツらと遊びに行くなんて、私のプライドが許さない。許す筈がない。

「なあ、そんなに嫌がる事ねえじゃん。少し遊びに行こうって言うてるだけだろ？」
「そうだけ。せつかくの可愛い顔が台無しだけ？そんなに怒っちゃ。」

「いいじゃねえか。俺達と一緒に遊んだら、楽しいぜ？」

しかし、男達はそんな私を厭らしい目付きで嘲笑っている。そんな男達の態度に、私は完全にブチギレた。

かおり「いい加減にしなよ！私、アンタ達のようなゲスなヤツら、興味なんて全く無いんだから！舐めんじやないわよ！」

この後、どうなるのか分からない。しかし、コイツらの女を舐め腐った態度が、どうしても許せなかった。だから、言わずにはいられなかった。

それと同時に、何故かは知らないけど、『アイツ』の姿が脳裏に浮かぶ。ナンパしてき

たのが、こんなヤツらより『アイツ』だったら……と何故か思ってしまった。（『アイツ』は絶対、ナンパなんてしないだろうけど。）

そんな事を思っていた時、私にとつての『奇跡』が起きた。

「……はあっ!?う、嘘だろ!?何で……!?」

突然、聞き覚えのある大きな声が、私の耳に入ってきた。

かおり「（えっ……今の声……!?）」

まさかと思い、私は声のした方を振り向くと

かおり「……………えっ!?」

八幡「あっ……………!!」

こんな『奇跡』つてあるんだろうか。そこには、知らない男と一緒にいる『アイツ』――

――『比企谷八幡』の姿があったのだ。

比企谷の姿を見た瞬間、これまでの怒りの感情と違い、心の中に暖かいものを感じて、私の表情が柔らかくなっていくのを感じる。

そして、男達が比企谷達の方を振り向いた一瞬の隙を突いて、男達から脱出した私は、

かおり「ダー……ダー……!!」

八幡「……………はいっ!?」

この場を凌ぐ為に、比企谷と『偽の恋人』を演じる為に、比企谷のもとに一目散に駆

けて
いった。

第11話

「同時刻・ホテル・フロント」

結衣「最高だったね！プールと温泉!!」

沙希「そうだね、由比ヶ浜。アタシも今日歩き回った疲れが取れたし。」

小町「小町も初めてですよ！こんなに気持ちいい温泉とプールに入ったの！留美ちゃんも楽しかったでしょ？」

留美「うん。楽しかった。八幡も来れば良かったのに……。」

めぐり「比企谷君は、何だかんだで疲れてると思うよ。だから、ゆっくり休ませてあげようよ。」

いろは「めぐり先輩？そう言つて、先輩へのポイントを稼ぐ作戦ですか？」

雪乃「やめなさい、一色さん。城廻先輩がそんな打算で言うはずないでしょう？」

陽乃「そうだよ、いろはちゃん。めぐりは天然だから、本心で言つてる筈だよ。」

めぐり「そ、そんなつもりないよ。いろはちゃん。それに、褒められてるのか、馬鹿にされてるのか分からないですよ。雪ノ下さんもはるさんもいろはちゃんも酷い。」

八幡がかおりと再会していた頃、女性陣がプールと温泉を終えて、談笑しながら部屋へと戻ろうとしていた。

雪ノ下姉妹というはに弄られてめぐりが困惑しているのを、他のメンツが笑っていたりと、和気あいあいな雰囲気だった。もし、八幡絡みの事がなければ、彼女達は仲良しグループになれるかもしれないと思うくらい。

？「ちよつと、いいかしら？」

雪乃・結衣・いろは・陽乃・めぐり・沙希・小町・留美『えっ？』

そんな彼女達に対して、突然謎の美女4人組が現れ、彼女達に声をかける。

？「突然で悪いんだけど、この男を見かけなかった？」

美女達のリーダー格らしき、茶色の髪のが『ある男』の写真を見せつけて、彼女達に尋ねていた。

結衣「えっ？あたしは見かけてませんけど……。みんなは？」

めぐり「私も見かけてませんね。」

留美「私も見かけてないよ。」

沙希「右に同じく。」

いろは「以下同文ですね。」

小町「小町も見かけてないですね。」

ているような気がするのよ。貴女達本人じゃなくても、例えば『貴女達の関係者』とか。雪乃・結衣・いろは・陽乃・めぐり・沙希・小町・留美『えっ……?!』

茶色の髪の女の言葉に、彼女達は哑然となる。『彼女達の関係者』、このホテルの中で、該当するのは1人しかない為だ。

？「貴女達は8人で旅行に來たの？それとも、他に誰か一緒に來ているの？」

小町「は、はい。おにいちゃんが一緒です。おにいちゃんは『もう寝る』とか言つて、部屋にいるはずですけど……。因みに、おにいちゃんは別の部屋です。」

？「おにいちゃんね……。一応、貴女達の部屋を調べてから、そのおにいちゃんの部屋も最後に調べたいんだけど、宜しいかしら？『この男』に関する手掛りがあるかもしれないから。」

小町「は、はい。分かりました。ところで貴女達は一体……?」

美○「自己紹介が遅れたわね。私は美○令子。美○探偵事務所の所長よ。」

おき○「私は氷室キ○と言います。美○さんの助手です。」

シ○「拙者は犬塚シ○と申す。同じく美○殿の助手で、写真に写っている横○先生の弟子でござる。」

タ○モ「私はタ○モ。同じく美○さんの助手よ。」

小町「た、探偵さんなんですか？なんか変わった名前ですね……。」

こうして彼女達は、4人の美女達——美○達と共に自分達の部屋へと戻る事になる。

それが後に、八幡と『写真の男』——横○にとつての、更なる悲劇（喜劇？）を生む事になるのであった。

くすすきの・ラーメン横丁付近

かおり「ゴメンね、ダーリン！待ったー!?」ギョツ

八幡「お、折本!?!お前……!」

俺を見つけたと思つた刹那、折本は俺が勘違いしてしまうかもしれない言葉を言いながら、俺に抱きついてくる。しかし、次には

かおり「……比企谷、ゴメン。アイツらを何とかしたいから、その間だけ、私の恋人を演じて欲しいの。お願い……!」ヒソヒソ

八幡「あつ……!」

折本は俺と隣にいる横○だけにしか聞こえないような話し声で、俺にお願いをしてくる。

成程、つまり『ニセコイ』を演じろつて事か……！確かにあんなヤツらと遊ぶ折本なんて、見たくないしな……！

八幡「分かった……。アンタも良いな、横○さん？」ヒソヒソ

横○「お、おう。任せとけ。」ヒソヒソ

その数秒間のやり取りで、俺達の『ニセコイ』が始まる。

八幡「やあ、ハニー。俺を待たせるなんて、随分罪深い事をしてくれるじゃないか。」

かおり「ブツ!!」

俺の臭すぎる台詞に、折本が吹き出す。

おい、笑うなよ、折本。お前の為にやってんじゃねえか。

かおり「ゴ、ゴメンね。ダーリン。ククク……。お、お兄さんもお久しぶりですな

……。フフフ……。」

横○「おう！久しぶりだな、折ちゃん！いつもコイツが折ちゃんの話ばっかしてくるから、こっちまで嫉妬しちまうぜ！」

八幡「あ、兄貴。それは言わねえ約束だろ！それに『折ちゃん』じゃなくて、『かおり』って呼んでくれて、いつも言ってるじゃねえか！」

横○「あー！そう言えば、そうだった!!悪いな、『かおりん』！」

かおり「か、『かおりん』って……。それに『折ちゃん』って……。マジウケるんです

けど……!ククク……!」

駄目だ、コイツ……。笑いの沸点が低すぎる……。

つて言うか横○さん、アンタもコイツを笑わせようとしてるんじゃない。

もう、アイツらにバレちまったんじゃないやねえか……。そんな不安を抱いていた。

「何だ!?!お前ら!?!」

「突然、でしゃばってくんじゃねえよ!」

「おい、コラー!テメエ、何なんだよ!?!その子の彼氏か!?!」

良かった。コイツら馬鹿で……。

まだ騙せていたのを確信した俺は、ヤツらに啖呵を切る。

八幡「……そ、そうだよ!コイツは俺の彼女だよ!!何か文句あんのか!?!」

「生意気な野郎だなあ!そんな腐った魚の目をしやがって!!」

「お前みてえな目付きの悪いのヤツが、何でこんな可愛い子の彼氏なんだよ!?!」

「テメエもその目みたいに死んだ魚のようにしてやろうか!?!」

おい、テメエら……。俺の目の事ばかり言うなよ。マジで泣くぞ。

横○「まあまあまあ、皆さん!ここは1つ、穏便に行きましょうよ!ね?痛い目遭いたくないでしょ!?!ね?かおりん?」

そんな俺とヤツらの口論中、横○が仲裁に入る。まあ確かに、穏便に済ませられたら、

俺としても助かるのだが……。

「ああ!? うるせえよ! すつこんでろ、オッサン!」バキッ!!

八幡・かおり『あっ!』

しかし、その仲裁も空しく、横○は男の1人に殴られてしまう。

このままじゃマズイ……!! 俺が本気で危機を感じた時だった。

横○「……あくあ。これで正当防衛成立だな。」

八幡「えっ!」ビクッ

殴られた横○から、ただならぬ気配を感じる。まるで、雪ノ下姉妹や川崎辺りが真面目に怒った時、いや、それ以上の気配だった。

「何言ってるんだよ!? そんなに痛い目に遭いてえのか!」

そう言いながら、別の男が横○に襲いかかる。しかし、

バキィッ!!

横○「……そう言えば、1つ言い忘れてたわ。」

「がっ……! あっ……!」ドサッ

横○「痛い目に遭うのは……お前らのほうだつてな!」

横○はそう言いながら、襲いかかってきた男を一撃で殴り倒していた。

八幡「へっ……!」

あまりの突然の出来事に呆然とする。自分はおろか、横〇よりもガタイのいい男が、横〇の一撃で倒されるなんて、我が目を疑ってしまっていた。

「な、何だ、この野郎!!」

「テメエ、調子こいてんじゃねえぞ、コラア!!」

残りの2人が一斉に横〇に襲いかかる。しかし、

ドゴオツ!! ドガアツ!!

横〇「……あと、もう一つ言い忘れてた。」

「テ……テメエ……」 ドサツ

「ち……畜生……」 ドサツ

横〇「俺は女には優しいんだが……男と悪いヤツには容赦しない主義なんだよ……

!」

その2人もまた、横〇の一撃で倒される事となった。

八幡「……………」

かおり「えー! 何、何!? 凄いいんだけど! 超ウケる!!」

横〇の強さに唖然となる俺、そして、折本ははしゃいでいる。

横〇……アンタこんなに強いのに、アンタが逃げ出す『あの人達』って、一体何者な

んだよ……?」

「ふ、ふざけんじゃねえぞ……！テメエ……！」

その時、最初に倒された男が再び立ち上がり、横〇と対峙する。

横〇「おいおい、まだやるつてののか？止めといた方がいいぞ。」

「うるせえ!!テメエみてえなオッサンに負けてたまつかよ!!」

男が啖呵を切りながら、横〇に襲いかかろうとした、その刹那

「そこまでだよ!!」

俺の聞き覚えのある声が、男を制止させたのだった。

八幡「あつ……！」

俺がその声に反応して振り向くと、そこにはやはり、『俺の知っている人達』がいた。

「ゲッ！ア、アンタらは……！」

「なっ……!?!」

「ケゲッ!!」

それに対し、ガタイのいい男3人組は、『その人達』を見て怯えた表情を見せる。

かおり「あつ……!?!あの人達……！」

横〇「ん？誰だ？」

そして、折本は『その人達』の事が心辺りあるような表情、横〇は見たことないと言った顔をする。

璃夢「もう！貴方達、また女の子が嫌がるような事をしているの！？そんなに私達にお仕置きされたいのね！！」

奈呼「予め言っておきますけど、嘘ついても無駄ですからね。私達、一部始終を見ていましたから。それに私達の知っている方もいらつしやいますから、その方々を傷付ける事は許しませんよ。」

八幡「奈呼さん、璃夢さん……！」

『その人達』——奈呼さんと璃夢さんが、この現場に介入してきたのだ。しかも、この3人組と何故か知りあいのようなようであった。

「い、いやーすまねえ！まさか、アンタ達の知りあいだとは知らなくて……！」

奈呼「言い訳は結構です。」

「ひっ！ど、どうかお許しを!!」

璃夢「今なら、特別に許してあげるよ。さっさとお家に帰りなさい！」

「ひいひいひい!!す、すいませんでした~~~~!!」タッタッタッタ………

奈呼さんと璃夢さんに詰問されて、涙目になりながら逃げていった3人組。

えっ、どういう事……!?!あんなガタイのいい連中が、あんなに涙目になるくらい怯えるなんて、奈呼さんと璃夢さんって、実は結構凄い人達なのかよ……!?!

奈呼「大丈夫ですか？八幡さん。お怪我とか御座いませんか？」

璃夢「アイツらに殴られたりとかしませんでした!? もし、されていたら、遠慮なく言うてくださいいね!」

八幡「い、いえ、お陰様で何も無いですよ。こちらこそ、助けてくれてありがとうございます。ございます。」

しかし、あの男達を追い返した次には、俺の体の心配をしてくれた。嗚呼、やっぱりこの人達は、癒しの女神様達だ。

横○「へえー、お前、随分モテるんだな、兄弟。こんな綺麗な年上の美女達にも愛されるなんて。」

八幡「はあ!? な、何言ってるんだよ、アンタ!」

かおり「……………」

八幡「ん? どうしたんだよ? 折本?」

かおり「別に!!」プイツ

奈呼「そう言えば貴女も大丈夫ですか?」

かおり「あつ、はい。比企谷が助けてくれたから。」

璃夢「もしかして、八幡君の彼女さんなんですか? 八幡君もそう言ってたし。」

八幡「ブツ!!」

ちよつ、ちよつ、ちよつ、ちよつと待つてくれ! 璃夢さん! もしかして、アイツらに

横○「これでみんな美味しく物でも食べてこいよ！それじゃなー!!」タツタツタツタ……

横○は足早に立ち去っていった。まるで、閉店間際のタイムセールに行く主婦のよう

に。

八幡「あつ、おい！行っちゃまった……！」

かおり「ねえ、比企谷。あの人、アンタのお兄さん？」

八幡「ち、違う！ちよつとした偶然で知り合った男で……！」

奈呼「あの、八幡さん……。」

八幡「うん？どうしたんですか？奈呼さん。」

璃夢「私達もそろそろ行きますね。元々、晩御飯食べに来ただけですから。彼女さんとのデート、楽しんできてくださいよ。」

そう言つて、奈呼さんと璃夢さんも立ち去ろうとする。

八幡「ま、待ってください！」

奈呼・璃夢『えっ？』

八幡「奈呼さんと璃夢さんに、お願いがあります。」

しかし、俺は2人に引き留めて、『あるお願い』をしたのであった。その『お願い』と

は――

おまけ・第9話

折本母「……遅いわね、かおり。『コンビニ行ってくるだけ』って言ってたのに……。かおりの母親は、コンビニに行ったかおりの帰りが遅い事を心配していた。

折本母「探しに行きたいのだけれど……。旅行先で地理も疎いし、お父さんもこんな状態だし……。」

折本父「Zzzzzzzzz……。」

探しに行こうとも考えているが、勝手が違う土地である旅行先の札幌、そして、かおりの父親も酔って寝ている為に、躊躇していたのだ。

折本母「あつ……。！そうよ、電話すれば良いじゃない！」

かおりの母親は、電話で連絡する事を思いつき、携帯を取り出してかおりに連絡しようとする。その刹那だった。

ピッ ガチャ

かおり「たっだいまー!!」

かおりがニコニコしながら、ホテルの部屋に戻ってきた。その様子を見て、かおりの母親は安心したと同時に、かおりに問い詰める。

折本母「かおり、どうしたの!?随分遅いから、心配したのよ!」

かおり「ああ、ゴメンね、母さん。コンビニ行ったら、偶然知り合いと会っちゃって。」
折本母「知り合い?旅行に来ているのに、知り合いなんて……。」

かおり「いやー、それがいたんだよ。同中の同級生が、偶然旅行に来ててね。私もビツクリしたんだけど。」

折本母「えっ!?そうなの!」

かおり「そうなんだ。それで、久しぶりに会ったから、少しソイツと遊んできちゃって、ね……。」

そう言いながら、かおりは顔を少し赤くしながら、自分の唇を意味ありげに指でなぞっていた。

折本母「そうだったのね。それならそうと、携帯で連絡してくればいいのに。」

かおり「あつ、そうだったね。ゴメンね、母さん。」

折本母「別にいいわよ。ちゃんと帰ってきたんだから。」

かおり「っ……!そうだ!母さんに1つ『お願い』があるんだ!」

かおりが何かを思い出したかのように、母親に『お願い』をする。

折本母「『お願い』？」

かおり「そう。明日、父さんにも私から言うから。」

折本母「何なの？その『お願い』って？」

かおり「へへ。それはね——」

かおりは、自分の『お願い』を母親、翌日には父親に告げて、両親からその『お願い』を了承してもらえた。

かおりの『お願い』——それは旅行の後半の舞台、函館で八幡達に大きな嵐を巻き起こす事になるのである。

第12話

〈ホテル内〉

沙希「借りてきたよ、スペアキー。」

沙希は501の部屋のスペアキーをフロントから借りてきた。八幡が宿泊しているのだが、それはサイコロによる部屋決めをしたもので、本来は沙希が宿泊するはずだった。チェックインの時に書いた登録がそのままだった為、沙希が借りてくる事が出来たのだ。

お〇又「本当にすみません。お手数をおかけして。」

小町「いいんですよ。むしろ、おにいちちゃんも全く反応ないから、本当にいるのかなって思ってますから。」

いろは「本当ですよ。携帯がなっているのに出ないし、部屋の電話にも出ないし。ここまでしつこく電話したら、流星に出るはずなんですけどね。居留守使っているとかじゃなければ。」

タ〇モ「もうこの部屋以外考えられないのよね……。貴女達の部屋を探させてもらっても、手掛りが何一つなかったし。」

シ〇「そうでござるな……。ここらで先生の手掛りがあるはずでござる。」
 美〇「本当に貴女達の機転には助かったわ。下手したら、強硬的な手段を使うつもりだったから。」

陽乃「いやいや、たまたま思い出しただけですよ。私達、部屋をシャツフルしただけで、書いた時の登録はそのままだったなーって。」

結衣「(強硬的な手段って……。何をするつもりだったんだろう……。?)」ガクブル

美〇の言葉に震える結衣。それとは対称的に陽乃は平然と対応していた。

沙希「それじゃ、開けるよ。」ピツ ガチャ

そして、沙希がスペアキーで501の部屋を開けて、一同は一斉に部屋の中へ入った。

雪乃・結衣・いろは・陽乃・めぐり・沙希・小町・留美『えっ!?!』

しかし、彼女達がそこに寝ていると思っていた八幡の姿が、何処にもなかった。

いろは「ど、どういう事ですか!?!どうして、先輩の姿が何処にも……。!?!」

お〇又「あつ!これ見てください!」

彼女達が八幡の姿を探している時、〇又が床に落ちていたものを発見する。

めぐり「ビー玉……。?」

留美「何これ？八幡、こんなもの持っていたの？小町さん。」

小町「う、ううん。おにいちやんがこんなもの持っていたの、見た事ないよ。」

美〇「……いいえ、これはウチのヤドロクの持ち物よ。」ゴゴゴ……

雪乃・結衣・いろは・陽乃・めぐり・沙希・小町・留美『えっ……!?!』ビクッ

そのビー玉らしき物を見つけた時、美〇からただならぬ気配を感じ、彼女達全員（雪ノ下姉妹や沙希ですら）が恐怖で震える。

美〇「……ねえ、貴女のおにいちやんって、結構目付きが悪いかしら？」

小町「えっ、ええ。そうですね。その目が特徴みたいなものですから……。」

タ〇モ「なにか分かったの、美〇さん？」

美〇「……さつき、フロントで私達の事をチラツと見ていた目付きの悪い双子らしき2人組を、微かに見かけたのよ……。」

シ〇「えっ!?!そのどちらかが先生なのでござるか!?!」

美〇「……おそらくね。ここにいたこの子のおにいちやんに変し……ううん、変装して彼を巻き込んで、すすきのに行ったに違いないわ……。」

陽乃「えっ!?!すすきの……!?!」

お〇又「そ、それじゃ、横〇さんは……!?!」

美〇「こうしちやいられないわ！行くわよ!!」

小町「あつ、ちよつ、ちよつと!!」

美〇「ご協力感謝するわ!後日、貴女達にお礼をするから!!」タツタツタツ……

お〇又「あ、ありがとうございました!!」タツタツタツ……

雪乃・結衣・いろは・めぐり・沙希・小町・留美『……………」

そうして、美〇達は彼女達から離れて去っていった。その姿を、1人を除いた彼女達は呆然と見送る。

陽乃「……………」

その除いた1人である陽乃は、険しい表情で何かを考えていた。

めぐり「ど、どうしたんですか?はるさん。そんな顔して……………」

陽乃「ねえ、みんなに聞きたい事があるんだけど。」

雪乃「えっ?何よ?姉さん?」

いつもとは違う表情を見せる姉に、内心戸惑いながら、雪乃は問いかける。

陽乃「すすきのつて、どういう所かって知ってる?」

陽乃は彼女達に問い掛け、すすきのに関する話を語りはじめたのであった……………。

くすすきの・ラーメン屋（八幡side）

俺は晩御飯を食べに来たという奈呼さんと璃夢さんのいきつけのラーメン屋にいた。ついでに『もう1人』も。

八幡「本当にありがとうございます。俺のお願いを聞いてくれて。」

奈呼「ええ、勿論ですよ。誰にも言いませんから。」

璃夢「だから、大丈夫ですよ。ラーメン奢ってくれなくても、言うつもりはないのに。」
八幡「いいえ。それでもしなきや、俺の気が済まないんです。だから、ここは奢らせてください。」

俺が奈呼さんと璃夢さんに『お願い』した事、それは

かおり「ねえ、比企谷。私も来ちゃったんだけど、いいの?」

八幡「ああ。さっきので分かっただろ?女の子が夜1人でこんな所出歩くなつて。俺がホテルまで送つてやるから。」

俺の隣にいる『もう1人』——折本と出会った事をアイツらに口外しない事だった。

幸い、奈呼さんも璃夢さんも快く応じてくれたが、それでは俺の気が収まらないので、横〇から貰ったお金でラーメンを奢る事にしたのだ。横〇も『これで美味しいものでも食べたい』って言つてたしな。

そして、折本も1人にさせるには危険なので、一緒にラーメン屋に来たという訳だ。

かおり「ところで、比企谷。この人達ってガイドさんなの？」

八幡「はっ？どうしてお前が知ってるんだよ？」

かおり「だって、昼間に見たもん。雪ノ下さんや由比ヶ浜さん達と一緒に歩いてたの。」

八幡「……へっ!!？」

マジかよ……!!?コイツ、雪ノ下や由比ヶ浜が来てる事まで、知ってたのか!?

かおり「他には一色ちゃん、それと留美ちゃんだっけ？あの子達も見たよ。他にも何人かいたけどね。もしかして、比企谷もあの子達と一緒に来たのかなって思ってたんだけど。」

いろはすとルミルミも見てるのかよ……。だったら、隠しても無駄か……。

八幡「……まあ、お前の言う通りだ。それで、この人達は俺達の案内をしてくれているバスガイドの奈呼さんと璃夢さんだ。」

かおり「へえ。そう言えば、自己紹介してなかったね。私、折本かおりです。比企谷と同中なんですよ。」

奈呼「そうなんです。私は能登谷奈呼と言います。八幡さん達のバスガイドを担当させて頂いてます。」

璃夢「同じく八幡君のバスガイドを担当している能登谷璃夢です！宜しくお願いしま

すね、折本様。」

かおり「『かおり』でいいですよ。何か比企谷の事も『八幡』って呼んでるみたいだし。そう言えば、どうして比企谷達も北海道に来てるの？私みたいに家族旅行だったら、雪ノ下さん達も来てるはず無いし。」

八幡「……分かったよ。隠しても無駄だろうから、話すよ。」

そうして、俺は折本に今回の旅行の経緯を話した。俺が福引で4名様ご招待の3泊4日の北海道旅行ツアーを当てた事、その旅行に留美と小町達の卒業記念旅行として来た事、その旅行に雪ノ下達も付いてきた事、それらを全て、折本に説明した。（但し、折本が知っているメンツ以外の名前は伏せたが。）

かおり「何それ!?留美ちゃんや妹さん達の卒業記念旅行に、雪ノ下さん達も付いてきたって事!?超ウケる!」

八幡「いや、ウケねーよ。むしろ、アイツらが騒ぎすぎて、俺が参っちまうよ。」

かおり「でも、それアリかも。なんか楽しそうだし。あつ、奈呼さんと璃夢さんに聞きたい事があるんですけど、いいですか?」

奈呼「は、はい。何ですか、かおりさん?」

かおり「私をナンパしてきた連中がいたじゃないですか。アイツらが言っていた『ナンパを断った女達』って、奈呼さんと璃夢さんの事ですか?」

八幡「へっ……?」

突然、何言ってるんだよ……?と思いつつ、奈呼さんと璃夢さんを見ると、奈呼さんは気まずそうな顔、璃夢さんは怒った顔をしていた。

奈呼「えっ、ええ……。そうなんです。あの人達、地元でも有名な女癖の悪い人達です……。」

璃夢「でも、本当に女の子の敵ですよ、アイツら!!女の子を舐めているとしか思えないですもん!だから以前、私と姉様で懲らしめてやっただんです!」

かおり「えー!そうなんです!アイツらが奈呼さんと璃夢さんにやられるなんて、マジウケるんですけど!」

マジかよ……。!あんなガタイのいい連中とケンカして勝ったのかよ、この人達……。!人は見かけによらないって聞くけど、奈呼さんと璃夢さんがそんな風に見えねえんだけど……。

仮の話だけど、川崎や雪ノ下姉妹とケンカしても勝てるんじゃないやねえのか?2人とも、あの3人と比べて小柄なのに……。(因みに川崎は空手、雪ノ下姉妹は合気道をやってると聞いた事がある。)

璃夢「でも、まだナンパしてたなんて思ってたですよ!私達に『もうしません!』って言ってたのに!」

かおり「おそらく、私が地元の人間じゃないからだったと思いますよ。地元の女の子達にも警戒されているんですよ？」

奈呼「ええ。本当に申し訳ありません。せつかくの北海道旅行なのに、不快な思いをさせてしまって……。」

かおり「謝る必要ないですよ。むしろ、奈呼さんと璃夢さんには助けてもらいましたから、感謝しています。それに比企谷もね。」

八幡「へっ、俺？」

かおり「だつて、そうじゃん。比企谷とあの横〇つて人がいなかったら、今頃どうなつてたか分からないもん。ありがとね、比企谷。」

八幡「おつ、おう……。」

笑顔で感謝の言葉を言う折本に、俺は顔を頬を赤くしながら背ける。気を取り直して、水を飲んでいいる時だった。

璃夢「そう言えば、さつき答えてくれませんでしたけど、八幡君とかおりちゃんつて恋人同士なんですか？」

八幡「ブフツッ！ゲホツッ！ゲホツッ!!」

しかし、璃夢さんの発言に、俺は飲んでいた水を吐き出したり、気管に詰まらせてしまう。水飲んでいいる時にそんな事言わないでくださいよ、マジで！むせるに決まってる

じやないツスカ!!

かおり「何むせてんの、比企谷!ウケる!」

八幡「いや、ウケねーから!璃夢さん、違いますよ!アイツらを何とかする為に、偽物の恋人を演じていただけですから!」

璃夢「あつ、そうだったんですね。」

かおり「でも、あの時の比企谷だったら、恋人になってもそれあるかなって思ったよ!まるで王子様みたいだったし!」

八幡「いや、それは言い過ぎだろ!」

そんな事アイツらに聞かれたら、雪ノ下や由比ヶ浜や一色辺りに何言われるかわかんねえぞ……。『王子谷君』だの『キモイ』だの『無理です、ごめんなさい』だの言われるのがオチだろ……。

あと、折本。今の発言、中学の時みたいにマジで勘違いするからやめろ。

そんな話をしていると、注文されたラーメンが出来たので、俺達は食べる事にした。さつきまで喋っていたのが、嘘みたいに一言も喋らないで食べていた。折本ですら、何も喋らないで食べていたぐらいだ。

本当に美味かった。そりやそうだ。地元の人である奈呼さんと璃夢さんが常連になつているぐらいだからな。食べ終わってから、店主の親父さんとも話していたが、凄

い気前のいい親父さんで、折本も『おじさん、超面白いんだけど！マジウケる！』とか言つてたぐらいいだからな。

く数十分後く

八幡「ご馳走さまでした。また機会があつたら来ますよ。」

親父「うむ！また来るのだぞ！特にその娘な！」

かおり「うん！おじさん、ありがとー！マジウケるし！」

奈呼「いつもご馳走さまです。」

璃夢「また来るね、おじさん！」

親父「お前らはこんな所に来る暇あつたら、早く男の1人でも見つけろ！仕事やこゝ通いばつかだと、嫁の貰い手がなくなつてしまふぞ！」

璃夢「もう！余計なお世話だよ、おじさん！」

奈呼「ハハハ……。相変わらず、私達には手厳しいですね……。」

親父の言葉に奈呼さんは苦笑いし、璃夢さんは頬をぷくーとさせて怒っている。

大丈夫です、親父さん。万が一の時には、俺がその貰い手になりますから。むしろ、その台詞は千葉のアラサー独神に言つてやつてください。

そうして、俺達はラーメン屋を離れて、折本が宿泊しているホテルまで足を運んだ。

く折本家が宿泊しているホテルの正門前く

八幡「それじゃ、ここでもいいな？」

かおり「うん。ありがとね、比企谷。奈呼さんと璃夢さんもありがとうございます。」

璃夢「どういたしまして。またお会いできるといいですね、かおりちゃん。」

奈呼「礼には及びませんよ。こちらこそ、かおりさんにご迷惑おかけして……。」

かおり「大丈夫ですよ。ところで、比企谷達つて3泊4日つて言つてたよね？」

八幡「ああ。それがどうかしたのか？」

かおり「ううん、何でも……。ねえ、比企谷、最後にお礼がしたいんだけど。」

八幡「あん？お礼？何のだよ？」

かおり「いろいろだよ。私を助けてくれたり、偽の恋人を演じてくれたり、ラーメン奢ってくれたり、ホテルまで送ってくれたりの。」

そう言いながら、俺に近づいてくる折本。そして——

……チユツ

八幡「……………っ？」

奈呼・璃夢『……………へっ？』

——何が起こったか、真面目に分からなく、頭の中が真っ白になってしまふ。しかし、確かな事實は1つ。

——俺の唇と折本の唇が重なりあっていたのだ——

かおり「エヘへ……比企谷にあげちゃった、私のファーストキス♪それありかな♪」
顔を赤くしながらも、凄く嬉しそうな表情をする折本。

かおり「それじゃーね、比企谷！今日は本当にありがとうー！」
「タッタッタッタ……」
お礼を言いつつ、折本はホテルの中へと入っていった。

八幡・奈呼・璃夢『……………』

俺は勿論、奈呼さんと璃夢さんも、暫く茫然自失となっていた。

八幡「……………っ！あつ……………あああつ……………！！」

ようやく復活した俺は、状況を理解したと同時に、情けない声を出しながら、顔がみるみると真っ赤になっていくような感覚に陥る。

だって考えてみるよ。いくら過去にフラれたとはいえ、初恋の相手とキスだけ!?しかも俺も相手も初めてのキスだぜ!?テンパるなっていう方が無理だろ!!

奈呼「あ、あわわわわ……………！！」

璃夢「キ、キス……………！！八幡君とかおりちゃん……………！！」

そして、俺同様に復活した奈呼さんと璃夢さんもまた、口を両手で覆っていたり両手

を頬に当てながら、顔を真っ赤にしていた。

その後、俺は奈呼さんと璃夢さんに『一生のお願いです！今夜のアイツの事は、マジで誰にもオフレコでお願いします!!』と土下座してお願いしていたのであった。

奈呼さんは『えっ、ええ。かおりさんの事は私達の胸の中に留めておきます。約束しますよ。』、璃夢さんは『も、勿論ですよ。他の人には内緒にしておきます。だから、土下座しないでくださいよ。』と約束してくれたのであった。

やっぱり、今夜は『いろんな意味で最悪な夜』だった——しかし、それはまだ終わりを告げていなかった。

くホテル内く

璃夢「それじゃ、八幡君。また明日！」

奈呼「おやすみなさい、八幡さん。」

八幡「ええ、おやすみなさい。こちらこそ、送ってくれてありがとうございます。」
あれから、奈呼さんの車で泊まつてるホテルまで送ってもらった。本当にあの人達には、感謝してもしきれないぐらいだよ……。仕事終わったのに、こんなに良くしても

雪乃「あら？そんな事を貴方が言える立場？夜遊び谷君。それに、最後の口調は私の真似かしら？全然笑えないのだけれど。」

留美「そうだよ、八幡。私達には『もう寝る』とか言っておいて、どこに行つてたの？」

八幡「いつ、いや、それは……。」

結衣「先に言っておくけど、全部白状するまで今夜は寝れないと思つていた方がいいよ、ヒツキー。」

小町「結衣さんの言う通りだよ、ゴミいちゃん。小町達に嘘ついてまで、夜遊びに行つた罪は重いんだからね。」

八幡「コ、コンビニ行つてたんだよ!!こつから歩いて10分ぐらいの所にあつて……!!」

めぐり「へえ、コンビニで3時間も入り浸つてたんだ。………やつぱり君は不真面目で最低だね。」

沙希「アタシ達、そこも行つたんだよ。もしかしたらアンタがいないかと思つてね。」

八幡「………えっ？マジで？」

いろは「もー、先輩つたら、なんで正直に言つてくれないんですかー？（おい、そんなデマほざいて風俗に行くとはいいい度胸だな、コラ。）」

陽乃「そんな嘘ついてまで、風俗店の多いすすきのに行った経緯や感想、全部吐いてもらうまで寝かさないからね？」

八幡「なっ!? 何で知っているんですか!? すすきのに行ったって!」

雪乃・結衣・いろは・陽乃・めぐり・沙希・小町・留美『覚悟しなさいよ（してよね）（してくださいね）（しなよ）、比企谷君（ヒツキー）（先輩）（比企谷）（ゴミイちゃん）（八幡）?』

こうして、俺はようやく訪れようとした休息の時が一転、最後の最後で地獄に叩き落とされるのであった。

俺は正座をしながら、横〇とすすきのに行った経緯、そこで奈呼さんと璃夢さんと偶然出会って、ラーメンを食べに行つたという事を、アイツらに白状したのであった。（折本との事に関しては、一切喋らなかつたが。）

奈呼さんと璃夢さんにも話を聞く為、八幡裁判は最終的な判決を降されなままお開きとなったのだが、どうやらまた罰を受ける事が決定しているとの事だった。

そして、俺にとつての『いろんな意味で最悪な夜』、いろんな騒動や事件が起こり過ぎた旅行1日目は、ようやく終わりを迎えたのであった。

もし、この旅行の今までの成り行きを知っている人（もしくは神様）がいるとしたら、俺はこう問い掛けたい。

『……俺、何か悪い事でもしましたか……？（泣）』と。

—— おまけ・第10話 ——

～同時刻・すすきの～

さて、ここからは『お約束』の時間となる。

「また来てねー!!お兄さん!!」

横○「おう!おねーさん、またなー!!」

八幡達と別れた横○は、目的のお店に無事入店し、『自分の最大の目的』を果たした。

横○「いやー、あのおねーさん、最高だったなー。美○さんやお○又ちゃん達より綺麗だし、本番や前座も上手かったし……。」

目的を果たした横○は、まるで天国に登ったような気分であった。その前には、文字通り『天国』を体験したのであったが。

横○「よーし!この調子で次にいってみよーかー!!」

そして、この有頂天の気分のまま、次の店に行こうとした。しかし

「——アンタに、次があると思ってるのかしら？」

横○「……………えっ？」

後ろから突然、聞き覚えのある声が聴こえたので、おそろおそろ後ろを振り向く。

横○「ゲツ!!」

シ○「先生……見下げ果てたでござるよ……!拙者達というものがあいながら、他の女子と情事など……!」

タ○モ「ホンツトサイテーね……。人間の男でも、アンタは悪くないかなって思ってたのに……。」

お○又「横○さん……不潔ですわ……。見損ないました……。」

横○「あつ……あつあつあつ……!」

まるで、中の人と同じ某サ○ヤ人の如く、言葉を失う横○。そして、美○が告げる。

美○「さて、横○クン。何か遺言はあるかしら?お義父様やお義母様をはじめ、これまで関わってきた人達に対して。」

横○「カ、カンニンや……。これは男の本能なんや……。」

美○「うんうん、遺言はそれで良いって事ね?」

横○「い、いやー!ー!!赦してくださいさー!ーい!!!美○さー!ーん!!!」

美○「……………赦すわけないでしょうがー!ー!!!このクソ亭主!ー!ー!!!」

横○「ぎやあああああああああ………!!!」

こうして、八幡が悲劇（喜劇？）的な目に遭っている同じ時、横○もまた、八幡より更なる悲劇（喜劇？）的な目に遭っていた。

最後に、横○の後日談。

↳翌日・札幌市内の病院↳

シ○ウ「アンタ……何が遭ったんだ？そんな全身包帯だらけのミイラみたいになって……。」

横○「そ………そういう兄ちゃんこそ………身体中包帯だらけやないか………。俺よりは軽
いみたいやけど……。」

横○は隣のベッドにいた八幡と同年代の少年と、仲良く入院していたのであった。

第13話

「旅行2日目の朝・ホテル」

ピピピピピピピピピピ……

八幡「ん……ん……ん……」

ホテルのアラームが鳴り響き、朝を迎えた事を告げている。

昨日の疲れがとれていないのか、足がパンパンな感じがした。

八幡「しょうがねえ……。起きるか……。ん？」

プニ

体を起こしたら、右側に何かの違和感を感じた。

俺の寝ていた右側に『何か』がいるのだ。

八幡「な、何だ!?!」ガバツ

何があるのかと思ひ、かけている布団を剥ぎ取ってみる。すると、

留美「すーすー……」

八幡「どわああああああああ!!」ドタアン!!

……朝一からどんなドツキリですか？これ。

そこには、留美が可愛らしい寝息をたてながら寝ていたのであった。マジでビックリしてしまい、思わずベッドから転がり落ちてしまいました。

留美「んー……。あつ、八幡……。おはよ……。」

八幡「な、な、な、な、な、な、な……。何やってんだよ!? お前!!」

留美「うーん……。お前じゃない……。留美……。」

八幡「ルミルミ、それ答えになってねえから! 何で、俺の部屋の俺のベッドの中で寝てんだよ!」

留美「ふわああああ……。ルミルミ言うな……。キモい……。」

八幡「いや、寝ぼけてんのか!? それも答えになってないからな!!」

留美「うーん……。昨日、帰る前にこの部屋のトイレ借りたでしょ? そしたら、八幡がもう寝てたから、いいかなって……。私も凄く眠くなっちゃって……。」

八幡「良くねえよ! 自分の部屋近いんだから、そこで寝ればいいじゃねえか! それなのに、何で……!」

留美「だって、もともと私と八幡、同じ部屋だったんだよ。部屋決めのシャツフルを許したんだから、これぐらいはいいでしょ? それに、同じ部屋の小町さんには了承を得てるから。ここの電話で。」

そ、そういう事か……。道理で真つ先に賛成したわけだ……。それに小町も共犯かよ

……。

八幡「ま、まあ、その、何だ。とりあえず、留美は部屋に戻って着替えてこいよ。今日も全員で観光に行くんだから。」

留美「うん、分かった。八幡も遅れないでね。」

そうして、留美は自分の部屋に戻る為に、俺の部屋のドアを開けた。しかし、その瞬間

ガチャ

留美「あつ」

雪乃・結衣・いろは・陽乃・めぐり・沙希『……………えっ?』

小町「……………あつ。」

運命というのは、こうも残酷なものなのだろうか。朝風呂に入ってきた感じの俺と留美以外のメンツと留美が鉢合せしてしまったのであった。

八幡・雪乃・結衣・いろは・陽乃・めぐり・沙希・小町・留美『……………』
俺を含めたその場にいる全員が、まるで時が止まったかのように、石のように固まってしまふ。しかし、暫くの時が流れて、動き出す者がいた。

八幡「……………つ！ま、待て！雪ノ下!!とりあえず、その手に持った携帯をしまえ!!」

雪乃「問答無用よ。もはや、言い訳や釈明が出来るなんて思わない事ね。ロリ谷君？」

八幡「ち、違う!! 誤解だ!! お前らが思っている事は何一つ……!」

留美「そうだよ。私が勝手に八幡と添い寝しただけ。当然の権利でしょ? お姉さん達。」

八幡「……………へっ?」

しかし、意外な事に留美が俺の弁護をしてくれたのだ。何、この子? 今日には天使モードなの……? いや、でもこれ、弁護どころか、むしろ、ますます窮地に陥りそうなんだが……。

結衣「と、当然の権利!? 何言ってるの、留美ちゃん!!」

留美「だって、そうでしょ? 元々、私と八幡は同じ部屋だったんだよ。部屋決めのシャツフルを最初に許したんだから、これぐらいはね。沙希さんだって、昨日抜け駆けして八幡とデートしてるじゃない。」

沙希「い、いや、だからはあれは、抜け駆けとかデートじゃなくて……………!」

いろは「だ、だからっておかしいですよ!? 先輩と一緒に添い寝なんて羨ま……………けしからんですよ!!」

留美「別にいいでしょ。やましい事は何もしてないんだから。それに陽乃さんにも、夜のビュツフェの時にしてやられちゃったから。」

陽乃「ふくん。なかなかやってくれるね、留美ちゃん。やつぱり、面白い子だよ、君は。」

結衣「と、とにかくダメ！ヒッキーもヒッキーだよ！！何で今まで気付かなかったんだし！！」

八幡「えっ？何？爆睡してて気付かなかった俺も同罪なの？アホケ浜さん。」

結衣「アホって言うなし！！」

めぐり「ふええええ……！まさか、留美ちゃんまで、そんな大胆な事を……！！」

小町「うーん……留美ちゃんの作戦大成功なだけ……。最後の最後でみんなにバレてしまったのは、詰めが甘かったかな……。」

めぐりん先輩、そんな顔を真つ赤にしてテンパらないでください。それに小町、これはお前も共犯だからな。

「あー！また、あのおにーちゃんとおねーちゃんたち、さわいでるよー！ママー！」
「コラー！見ちゃいけません！」

そこのお嬢様にお母様、昨日のビュツフェと同じようなママアレのテンプレをしないでください。本気で泣きますよ。っていうか、同じ階に泊まってたんですか？

朝からそんなドタバタがあった後、俺達は朝食のビュツフェを食べて、2日目の札幌観光の準備をして、フロントへと向かうのであった。なお、朝食のビュツフェの時は何

事もなく平穩に食べていたのだが、ホテルの従業員や他のお客さんから警戒や好奇の目で見られていたのは、全くの余談である。

確かに、このホテルに来てから、何回も大騒ぎしたのは認めるよ。だけど、昨日の夜あんなに大騒ぎしたのは、同じ事繰り返す訳ないだろ……。

くホテル・フロントく

奈呼「あつ、おはようございます。皆様。」

璃夢「おはようございます！皆様、今日も宜しくお願ひしますねー！」

全員揃ってからフロントに行くと、既に奈呼さんと璃夢さんが俺達の事を待っていていた。昨日、俺のせいで夜遅くなってしまったのに、璃夢さんも今日は寝坊しなかった。この2人、やっぱり、新しい癒しの女神様だ……。朝一の元気な笑顔で癒されるぜ……。

八幡「おはようございます。奈呼さん、璃夢さん。今日も宜しくお願ひします。」

俺も普通に笑顔で挨拶をする。しかし

雪乃・結衣・いろは・陽乃・めぐり・沙希・小町・留美『……………』
俺以外のメンツは、奈呼さんと璃夢さんを見た途端、不審な顔になりながら、2人を見ていた。

奈呼「ど、どうされたんですか？皆様。」

璃夢「ど、どうして、私達を見て、そんな顔を…………？」

小町「…………奈呼さん、璃夢さん、昨日の夜、おにいちやんとすすきので会ったって本当ですか？」

奈呼・璃夢『……………えっ？』

小町に尋ねられた2人は驚きながら、俺のほうを見る。

八幡「すいません。バレました…………。」

俺は右手で謝るしぐさをしながら、2人に謝罪する。それと同時に、2人がどう答えるのか凄く不安を感じた。もし、おどおどしながら答えたら、怪しまれるのではないかとか。

奈呼「本当の話です、皆様。」

璃夢「ええ。嘘じゃありませんよ」

八幡「えっ!？」

しかし、俺の不安に反して、2人は堂々と答えていた。

どういふつもりだよ……？折本の事は話さないって言つてたのに、まさか……！

奈呼「1つお聞きしたいのですが、皆様は、その件について、八幡さんからどういふ風にお伺いしていますか？」

奈呼さんは俺以外のメンツに対して、逆ににこやかな顔で質問をしてくる。

あれ……？何だ、この展開？ボロクソ言われるのを覚悟していたのに……。

いろは「えっ？それは、3人でラーメンを食べに行つたつて聞きましたけど……。」

奈呼「その通りです。私と璃夢が常連で通つているラーメン屋さんに、八幡さんと3人で行きました。それ以外の事は、何かお伺いしていますか？」

結衣「い、いいえ。特別、何も……。」

陽乃「あつ、そういえば、比企谷君と一緒に男の人がいたつて聞いてるんですけど、その人とはお会いしたんですか？」

奈呼さんの答えと問い掛けに困惑しているメンツがいる中、陽乃さんが奈呼さんに問い掛ける。

奈呼「ええ、お会いしています。ですが、八幡さんと私達が偶然お会いした時に、どちらかに行かれました。」

雪乃「本当なんですネ？璃夢さん。」

璃夢「ええ。ねえ……じゃなかつた、先輩の言う通りです。私達は八幡君とすすきの

で偶然お会いして、私達の行き着けのラーメン屋さんに一緒に行つただけです。後は、特になかったですよ。あの男の人もそこで別れちゃいましたから、何処に行かれたか分かりませんよ。」

陽乃「ふーん……。どうやら、比企谷君の言つてた事、嘘じゃなかつたみたいだね。」
陽乃さんが言いながら、俺をジト目で見ている。

八幡「だ、だから言つたじゃないですか。あの横〇つて奴に連れていかれたけど、奈呼さんと璃夢さんと偶然会つて、ラーメンを食べに行つただけだって。」

結衣「そつか、奈呼さんと璃夢さんが言うなら信じますよーごめんなさい、奈呼さん、璃夢さん。変に疑つちやつて。」

八幡「あの、俺への謝罪は……。？」

結衣「それはヒツキーが疑われるような事をするから、悪いんじゃない！」

いろは「そうです！先輩がいけないんですよ！」

雪乃「もし、お2人と出会わなければ、あわよくば行こうとしてたんじやないのかしら？」

八幡（ギクツ）そ、そんな訳ないだろうが！陽乃さんにも理性の化け物つて言われているんだし！」

陽乃「それだったら、その言葉、撤回させてもらおうかな？ケダモノ谷君？」

八幡「な、何で陽乃さんも、雪ノ下みたいな呼び方をしてるんですか!？」

めぐり「まあまあ、はるさんもみんなも素直に謝りましょうよ。ゴメンね、比企谷君。」

沙希「……悪かったね、比企谷。よく考えてみりや、アンタそんな奴じゃないしね……。」

八幡「お、おう。当たり前だろ、川崎。城廻先輩も分かってもらえれば良いですよ。」

小町「ごめんさい、おにいちゃん。おにいちゃんにそんな度胸あるわけないもんね。」

留美「ごめんね、八幡。八幡だつて分かつてるもんね。そんな事したら、私達に何されるか。」

八幡「あの……小町ちゃんに留美ちゃん? 謝つてくれるのはいいけど、それと同時に俺をけなしたり脅したりの言葉が聞こえるんだけど……。」

俺のツツコミに回りから笑いが起こる。良かった。どうやら、折本の事を話さずに済みそうだ。バレてしまつたら、何言われるか分からないし、最悪、殺されるかもしれないしな。何となく……。

結衣「では、改めまして……せーの!」

結衣・陽乃・小町『やつはろー(ひやつはろー)!! 奈呼さん! 璃夢さん!』

八幡「ゲッ!」

そんな時、由比ヶ浜と陽乃さんと小町の3人が、2人に対してあのしようもない挨拶をしていた。昨日練習したのかと思うくらい、息ピッタリすぎる。

おい！そんな馬鹿な挨拶、ここでやるなよ！奈呼さんと璃夢さんも困って……。

璃夢「やつはろーです！皆様！」

奈呼「や、やつはろーです……／／／」

あ、貴女達まで何やつてるんですか……。奈呼さんは、凄く顔を赤くしながら恥ずかしそうにやつてるし……。

「ママー。あのおもしろいおにーちゃんとおねーちゃんたち、へんなあいさつしてるよー。やつはろー！」

「コラー！真似しちゃいけませんー！」

……何で俺達が騒いでいる時に、いつもいるんですか？面白って、俺達、お笑い芸人じゃないからね、お嬢ちゃん……。それに、その変な挨拶、教育にも良くありませんよ、お母さん。

璃夢「それでは、皆様！早速、出発致しますよ！どうぞ、こちらへ！」

そうして、璃夢さん主導で俺達はマイクロバスへと向かう。俺と奈呼さんがたまたま列の一番後ろにいた時だった。

璃夢「……」パチッ

奈呼「……」パチッ

八幡「(えっ?)」ドキッ

2人が俺に微笑みながらウインクしてきた。おそらく、『昨日のかわりさんとの事は、絶対に話しませんから。』という意味でだろう。他のメンツに、それはバレなかつたみたいだった。

八幡「(……本当にありがとうございませす。)」

俺は再び謝るしぐさを見せながら、2人に感謝した。本当に奈呼さんも璃夢さんも、凄く優しく良い人達だ。俺に対して、凄く良くしてくれるし、こんな人達と出会えた事が奇跡のようだ。

俺、本当にこの2人に惚れちゃうかもしれない……………。

そんな淡い心を抱きつつ、旅行の2日目が始まったのであった。

—— おまけ・第11話 ——

旅行2日目の昼・千葉市内の某公園(川崎大志side)

川崎弟「までー！けーちゃん！」タツタツタツ……

京華「こつちだよー！」タツタツタツ……

大志「おーい！2人ともあんまり遠くにいくんじゃないぞー!!」

こんには、川崎大志ツス。この春中学を卒業して、4月から比企谷さんと一緒に（ここ大事ツスよ！）総武高校に入学します。

今日は弟や妹達と共に、とある公園に遊びに来ていました。沙希姉ちゃんが、比企谷さんやお兄さん達と一緒に旅行に行っている間は、俺が弟や妹の面倒をみます。

大志「……それにしても、姉ちゃん大丈夫かな？まさか、お兄さんの事が好きな人達があんなにもいたなんて……。」

俺の自慢の姉ちゃん、川崎沙希は、今旅行に行っています。しかし、姉ちゃん達と一緒に行く人達は、どうやらみんなお兄さんの事が好きだと聞いて、凄く不安を感じています。

も、勿論、比企谷さんは別ツスよ！千葉の兄妹エンドなんて、絶対にダメツスから！そんな事したら、いくらお兄さんでも許さないツスよ！

大志「……はあくあ。今更ながら、凄く不安だよ。もし、姉ちゃんがお兄さんにフラれたらつて思うと……。」

そんな溜息をつきながら、弟と妹を見守っている時でした。

? 「こんにちは。」

大志 「えっ? ……っ!」

突然、俺の目の前に凄く綺麗なお姉さんが立っていて、俺に挨拶してきました。

大志 「あつ、は、はい! こんにちはッス!」

その綺麗な思わずビックリしてしまいました、俺も挨拶をします。少しキョドつちやつたッスけど。

? 「隣に座つてもいいかしら?」

大志 「い、いいッスよ! どうぞ!」

その綺麗なお姉さんは、俺の隣に座りました。暫くの間は、その人との会話はありませんでした。

川崎弟 「へへーん! ここまでおいでー!」

京華 「むー! までー!」

大志 「2人ともケンカにならないようになー!!」

京華達が鬼ごっこをしていて2人に注意していた時、そのお姉さんが俺に声をかけてきたッス。

? 「あの子達のお兄さんなの?」

大志 「えっ? はい、そうッス。」

? 「そっか。随分可愛らしい弟さんと妹さんね。娘の幼い頃を思い出すわ。」

大志 「娘? お姉さん、娘さんがいるんですか?」

由比ヶ浜母 「そうよ。結衣って言う娘がいるの。君より少し歳上ぐらいかな?」

大志 「えっ……ええええええええ!!」

マ、マジツスカ……!!? 凄く若く見えるのに、俺より歳上の娘さんがいるなんて……。

つて、あれ? 俺より歳上で、名前が結衣? 何処かで聞いたような……?

由比ヶ浜母 「偉いね、弟さんと妹さんの面倒をちゃんと見てるなんて。3人兄妹のお兄ちゃんなんでしょ?」

大志 「いや、もう1人姉ちゃんの4人姉弟なんですよ。いつもは姉ちゃんが面倒見てるんですけど、旅行に行っちゃって、代わりに面倒を見てるんです。」

由比ヶ浜母 「あら、そうなの? 私も娘が旅行に行ってるのよ。昨日から春休みに入ってるね。」

大志 「へー、そうなんですな。」

そんな感じで、俺とお姉さんが世間話に花を咲かせていました。そして、それと同時に

ドン

?? 「あっ……!」

京華「きやつ！」

川崎弟「あつ、けーちゃん！だいじょうぶ!?」

京華「うん！だいじょうぶ！ごめんなさい、おねーさん！」

川崎弟「ごめんなさい！」

雪ノ下母「いいえ、こちらこそごめんなさい。大丈夫ですか？」

京華達が、着物姿の素敵なお姉さんとぶつかって、謝っていたのでした。

第14話

北海道大学（八幡 side）

奈呼「皆様。こちらがかの有名なウイリアム・スミス・クラーク博士の胸像になります。」

璃夢「北海道の開拓の父と言われてますクラーク博士は、今の北海道大学に当たります札幌農学校の初代教頭でした。この後向かいますさつぼろ羊ヶ丘展望台には、皆様もご存知、クラーク博士の全体像があるんですよ。」

八幡「へえ……。テレビとかで見た事ありますよね、これ。」

陽乃「テレビで見るとかよりも違うよね、こうやって実物を見ると。」

めぐり「そうですね。胸像だけでもなんか凄いですもんね。」

いろは「そうなるよ、この後の全体像も凄く楽しみです。」

結衣「へー、この人って、そんなに有名なんだー。あたし、知らないけど。」

沙希「えっ……。？ 由比ヶ浜、クラーク博士の事知らないの？」

小町「へっ？ 小町も知らないですよ？ 沙希さん。」

留美「……結衣さん、小町さん。それはギャグで言ってるの？ 私でも知ってるのに」

……。

八幡「川崎、留美……察してやれ。コイツらが総武高校に合格した事自体、奇跡なんだから。」

結衣「なっ……!!バカにすんなし!!ヒツキー、キモイ!」

小町「そ、そうだよ!バカっていう方がバカなんだよ!バカ、ボケナス、八幡!!」

俺達は2日目の最初の観光地、北海道大学に来ていた。北海道開拓の父とも呼ばれるクラーク博士の胸像を見て感嘆とする中、由比ヶ浜と小町は、クラーク博士の事を知らず、他のメンツから引かれていた。

知らないなんてどんだけアホなんだよ、由比ヶ浜、小町……。最年少の留美ですら知ってるんだぞ……。

あとお前ら、それだけでキモイとか言ったり、俺の名前を悪口と同列にするんじゃない。泣くからな。

いろは「でしたら、結衣先輩、小町ちゃん。この人が遺した有名な言葉って知ってます?」

結衣「えっ?う、うーん……。」

小町「な、何でしたっけ……?」

めぐり「えええええ!!本当に知らないの!?!由比ヶ浜さん、小町ちゃん!」

結衣・小町『は、はい……。』

陽乃「それじゃ、ガハマちゃん和小町ちゃんに宿題ね。羊ヶ丘展望台までに、クラーク博士の言葉を思い出す事。出来なかつたら、今日は比企谷君に近づくのはダメね♪」

結衣「そ、そんなあ〜!! ゆきのくん!!」

小町「助けてください〜!! 雪乃さ〜ん!!」

他のメンツに弄られて、由比ヶ浜と小町は泣きそうな表情で雪ノ下に助けを求める。なんか、ドラ○もんと○太のやり取りを見てるみたいだぞ、お前ら。さしずめ、ゆきえもんとゆい太、もしくはこま太じゃねえか。

結衣「……って、あれ? ゆきのんは?」

その時由比ヶ浜は、俺達が気付かなかつた事に気付く。

小町「あれ? そう言えば、確かに雪乃さんいませんね?」

璃夢「あつ、雪乃ちゃんでしたら、御手洗いに行かれましたよ。私にこちらのカバンを『汚したくないから預かってください』って言って。」

八幡・陽乃『……………えっ?』

璃夢さんからの話を聞いて、俺と陽乃さんがひきつった表情になる。

八幡「ほ、本当ですか!? 璃夢さん!」

璃夢「え、ええ。私が『お待ちしますか?』って聞いたたら、『すぐに済みますから。』

先に行つて大丈夫です。』つて言つてましたから。」

陽乃「ええ!? それ、マズイですよ! 璃夢さん!」

いろは「ど、どうしたんですか!?! はるさん先輩、先輩も……。」

沙希「マズイつて何が……?」

陽乃「……………雪乃ちゃん、極度の方向音痴なのよ。」

いろは・めぐり・沙希・小町・留美・奈呼・璃夢『えつ……………!?!』

陽乃さんの言葉に唖然となる他のメンツ。

結衣「えつ、どうしたの?」

八幡「……………由比ヶ浜、この北海道大学つて、日本一広い大学なんだ……。」

結衣「……………えつ?」

由比ヶ浜は、唖然となった理由を理解していなかった。しかし、俺の言葉でそれを理解し、顔を青くする。

璃夢「……………マ、マズイですよ! この北海道大学つて、観光客の方が道に迷う事が多いんですよ!!」

結衣「ほ、本当ですか!?! だったら、本当にヤバいですよ!! ゆきのん、絶対に迷子になっちゃいますよ!」

驚きの理由、それはこの北海道大学という所は、日本一広い大学で、日本の国土の約

570分の1を占めている場所なのだ。冬の雪の降り積もる時期だと、ガチで遭難しかねないくらいの場合と言われているくらいである。

奈呼「……本当に申し訳ございません。私と璃夢が迂闊でした。雪乃さんがそうだと知ってたら、絶対に1人にさせないのに……。」

璃夢「ご、ごめんなさ〜い。また、私やっちゃった……。」

小町「ど、どうするの？ おにいちやん!! あつ、そうだ! 小町、雪乃さんに電話してみますよ! それで、そこに待っててもらえれば!!」

めぐり「そ、そうだね。雪ノ下さんも携帯持つてるはずだから。」

俺達が慌てているなか、小町が機転を効かして雪ノ下に電話をする。それで、何とかなるはずだった。

ピリリリリ……………

八幡・結衣・いろは・陽乃・めぐり・沙希・小町・留美・奈呼・璃夢「……………えっ?」

しかし、俺達の予想に反して、璃夢さんが預かっている雪ノ下のバッグの中から、携帯の着信音が聞こえてきた。それを聞いて、俺達は血の気を引いてしまう。

留美「も、もしかして、雪乃さん……。」

沙希「……マジで迷子になったんじゃないの……?」

そう、私はみんなとはぐれてしまったのだ。ましてや、場所も場所で、日本一広い大
学と言われている北海道大学。はぐれたり迷子になってしまふ条件がこれでもかとい
うくらい多い、私を含めた方向音痴の人間にとつて最悪な場所だった。

雪乃「どうしよう……？ 財布以外、璃夢さんが預かったバッグの中だし……。」オロオ
ロ

しかも、私は財布以外を全てバッグに入れてしまい、そのバッグを璃夢さんに預けて
しまつていた。つまり、はぐれてしまつた時の対策の手段が、全くなかつた。

雪乃「こんな事になるんだつたら、みんなに待つてもらつた方が良かったわ……。
かえつて、迷惑をかけてしまつたじゃない……。とりあえず、あそこのベンチに座つて
落ち着かないと……。」オロオロ

私は、不安を少しでも落ち着かせる為、ベンチに座る事にした。そうでもしなかつた
ら、本当に不安で気持ちが悪く押し潰されそうになるから。

雪乃「……本当に悪い事してしまつたわね……。みんなには……。」「ウルウル
私は今更ながら、自分の選択に後悔していた。結果的に、みんなに迷惑と心配をかけ
てしまつたから。」

雪乃「早くみんなを見つけないと……。でも、どうすれば……。」「ジワツ
早くみんなと合流しなくてはいけないという焦りと、どうすればいいかわからないと

いう不安が入り交じり、思わずうつむきながら目頭が熱くなってしまった時の事だった。

？「あ、あの……。すいません……。」

雪乃「えっ……？」

聴いたことのない女の人の声が聞こえて、私は急いで目をぬぐいながら、顔をあげてみる。

??「どうかしたんですか？ 凄く悲しそうな顔をしてましたから、気になって……。」

そこには、私と同年代ぐらいの2人組の男女が、私に声を掛けてきたのだ。

雪乃「い、いいえ……。別に……。」

??「もしかして、誰かお探しとか？ もし良かったら、俺達お手伝いしますけど……。」

私が何とか誤魔化そうとしたが、男の人が助けの手を差しのべてくれようとする。黒い髪の男の人で、何処と無く葉山君に似ているような気がした。

雪乃「い、いいえ……。そんな悪いです。ところで、あなた達は……？」

？「ご、ごめんさい。実は私達も、春休みになったからこちらに遊びに来たんですよ……。」

私の問い掛けに対して、女の人がおどおどしながら答えている。黒い髪のロングヘアの人で、その人を見た瞬間、何故かは分からないけど、『私と由比ヶ浜さん、そして

比企谷君に似ている』と感じた。

雪乃「遊びに?どちらからですか?」

??「北海道の〇幌町って所からです。札幌からバスで3時間ちよつとぐらいなんですけど、この子が札幌にデートで行ってみたいって言って、朝早起きしてそれで……。俺達、この春から高校3年生になるから、その記念で来たんですよ。」

雪乃「この春からですか?でしたら、私と同学年ですね。」

?「えっ?そうなんですか?凄く綺麗で大人びてるから、私達より歳上かなって思いました。」

女の人が私の事を褒めながら驚いている。同い年の人に歳上に見られたのは微妙だけど、悪気はないと思うから良しとしよう。

雪乃「ところで、あなた達の名前は……?」

風〇「ああ、すみません。自己紹介が遅れました。俺は風〇翔太って言います。」

〇子「わ、私は黒沼〇子といいます。」

雪乃「風〇君と黒沼さんですね。私は雪ノ下雪乃と言います。」

〇子「ゆ、雪ノ下雪乃さんって言うんですか?」

雪乃「……?どうかしましたか?黒沼さん。」

〇子「い、いえ、凄く素敵な名前だなって思っ……。」

風〇「もしかして、北海道生まれですか？名前もそんな感じですよ。」

雪乃「いいえ。千葉から観光で来ました。それで、姉さんや友達とかと一緒に来たんですが……。」

こうして、私は同い年のカップル——風〇君と黒沼さんという人達と不思議な出会いをはたしたのであった。

その2人の出会いが、私と『彼』——比企谷君との関係に変化をもたらす事を、今の私は知るよしもなかった……。

く数十分後、大学・構内く（八幡side）

八幡「ハア……！ハア……！何で昨日に続いて、今日も朝からは走り回らなくちゃいけないんだよ……!!」

俺達は、雪ノ下を各自で探す事にした。

この日本一広い大学と言われている北海道大学、集団で固まって探しているのは時間が掛かるといふ事で、それぞれ各自で探す事にしたのだ。（但し、小町は奈呼さん、留美は璃夢さんとペアにした。一応年少組なので、万が一の保険として。）

八幡「畜生……！本当に何処に行ったんだよ……雪ノ下……！！」

イライラしながらも、俺は北海道大学の構内を走り回る。もう、かれこれ数十分ぐらい走り回っただろうか。

「……………俺、会ってみたいな、その人に。凄く興味あるよ。」

「……………私も会ってみたいかも……。何となく、その人と通じるものを感じる……。そんな時、俺はベンチシートに座っている3人組のリア充っぽい男女の声を耳にする。

八幡「まあ、ここは通り過ぎるのが1番だな……。」

そんな事を思いながら、ソイツらの事をよく見ないで、その場を通り過ぎようとした時だった。

「……………雪乃ちゃんは……………好きなの？」

八幡「えっ!？」

その中の1人の女の声から、聞き覚えのある名前が聴こえ、俺はソイツらの方へと振り返る。

雪乃「……………そうね。好き……………いいえ、愛してるわ…………。」

八幡「……………へっ?」

そこには、俺達の探し人——雪ノ下雪乃が2人組の男女と共にいて、意味ありげ

な言葉を口にしていたのであった……………。

—— おまけ・第12話 ——

→ 2日目の昼・千葉市内の公園→ (川崎大志 side)

大志「あつ……………！何やってんだよ!!」

俺がベンチの隣に座っている綺麗なお姉さんと話している最中、京華達が着物姿のお姉さんとぶつかっているのを見て、俺はベンチを離れて、京華達の所に走っていきました。

大志「コラ！気をつけろって言っただろ！」

川崎弟「あつ、たーちゃん。ごめんなさい！」

京華「ごめんなさい、たーちゃん！」

大志「全く……………。本当にすみません。ウチの弟と妹が…………。」

雪ノ下母「いいえ、謝るのは私ですよ。私が不注意でしたから。本当にごめんなさい。」

大志「(ドキッ) い、いいえ。そんな事ないツスよ。」

そ、そんなに見つめないでください！お姉さん！心の中で心臓バクバクツスよ！

由比ヶ浜母「あの、大丈夫ですか？」

そんなテンパっている時に、俺の隣に座っていた綺麗なお姉さんが、着物姿のお姉さんに声を掛けました。

雪ノ下母「ええ、大丈夫です。私よりもこの子達の事を心配してあげてください。この子達のお母様なのでしょう？」

由比ヶ浜母「あつ、違うんですよ。私、たまたま通りがけで来ただけで、この子達とは何の関係も無いんです。」

雪ノ下母「あら、そうなのですか？お若くて美しい方ですから、てつきり弟さんと一緒に来たのかと……。」

由比ヶ浜母「そんな事ないですよ。こう見えて、高校生の娘がいますから。」

雪ノ下母「それは奇遇ですね。私も下の娘が高校生なんですよ。上の娘は大学生ですけどね。」

由比ヶ浜「へー、それは意外ですね。私よりも若くてお美しかったって思ってた。」

えっ……？この着物のお姉さんも、俺より歳上の娘さんがいるんスか!?!しかも2人い

て、姉が大学生で妹が高校生ツスカ!?

……つて、あれ?この話も、何処かで聞いた事があるような……?

雪ノ下母「せっかく、お会いしたのも何かの縁ですから、何処かでお茶でもいかがですか?あなた方と少しお話してみたいと思ひまして。」

大志「……………えっ?」

由比ヶ浜母「あつ、いいですね!私もそう思っていたところなんですよ。」

大志「……………はい?」

マ、マ、マ、マ、マジツスカ……!?こんな若くて素敵なママさん達とお茶に行くなんて、俺、罰当りもいいところじゃないツスカ!?

由比ヶ浜母「ねえ、君達はどうするの?」

大志「えっ!?あ、あの、俺、いや、僕達は…………。」

雪ノ下母「勿論、御馳走しますよ。ケーキとかいかがですか?」

京華「ケーキ!?けーちゃん、いきたーい!!」

川崎弟「ぼくもー!!」

大志「コ、コラ!お前ら!!」

雪ノ下母「大丈夫ですよ。貴方も良かったら、是非来てください。」

由比ヶ浜母「そうそう。私も君達と少しお喋りしてみたいのよ。」

大志「わ、わかりました……。宜しくお願いします……。」

こうして、俺達川崎家3兄妹は、名前も知らない素敵なママさん達と、喫茶店に行く事になりました。

比企谷さん、お兄さん、勘違いしないでほしいツス！これは、決して浮気じゃないツスから！俺は比企谷さん一筋ツスからね！！

第15話

〔北海道大学・構内〕(雪乃 side)

風○「……少し離れたら、一緒に来た人達とはぐれてしまったって訳ですね。」

雪乃「……ええ。恥ずかしい話ですけど……。」

○子「そ、そんな事ないですよ。むしろ、話してくれて嬉しかったです。」

風○「そうですね。俺達に相談してくれて、ありがとうございます。」

私はみんなとはぐれてしまった事を、黒沼さんと風○君に相談していた。そうしたら、2人とも親身になって、相談にのってくれた。

少し話ただけなのだが、この2人は凄く優しい人達なのだろうと感じた。

風○君に関しては、第一印象が『葉山君に似ている』と感じたのだが、その言葉を撤回したいと思う。似た者同士だと思っていた彼と葉山君の優しさは、『何か』が違う。

そして、黒沼さんは、私と比企谷君みたいに、孤独に過ごしていた事が多かったのではないだろうかと推測する。妙におどおどした性格や何処と無く暗い雰囲気、その理由。しかし、それと同時に周りの空気を読んで行動するような性格も見受けられる。そ

れが、由比ヶ浜さんに似ているとも感じた理由だ。

雪乃「……ところで、1つお願いがあるのですが……。」

○子「えっ？何ですか？」

雪乃「敬語ではなくて、常語で話しませんか？私達、同じ年齢ですから。」

○子・風○『えっ？』

私の言葉に一瞬きよとした顔になる2人。

風○「……そうだよ。俺達、同級生だし。」

○子「うん。私もいいよ。せっかく出会ったのも、何かの縁だから。」

雪乃「……ありがとう。黒沼さん、風○君。」

次に、2人は笑顔で快く了承してくれた。私もそれに笑顔で応じる。

○子「……あの、私もお願いがあるんだけど。」

雪乃「何かしら？黒沼さん。」

○子『雪乃ちゃん』って呼んでいい？凄く素敵な名前でもいいなと思ったから。」

雪乃「ええ、いいわよ。素敵な名前って言ってくれて、ありがとう。」

○子「う、ううん。どういたしまして……。宜しくね、雪乃ちゃん。」

黒沼さんのお願いに、私も快く応じる。お礼を言うと、黒沼さんが照れながらそれに
応えてくれた。

なんか一瞬、黒沼さんが2頭身になったような気がしたけど、気のせいかしら？見た瞬間、非常にほっこりしたのだけれど……。

○子「そ、そう言えば、雪乃ちゃんと一緒に来た人達って、どんな人達なの？」

風○「あつ、そうだね。お姉さんや友達と来たって聞いたけど、一緒に探すにあたって、どんな人達か知りたいから。」

雪乃「……ええ、分かったわ。」

私は2人に、一緒に来たみんなの事を話した。由比ヶ浜さんや一色さんや姉さん達の事を。

風○「へー、なんか凄いね。雪ノ下さんのお姉さんの大学生から小学校を卒業した子まで、いろんな年齢の人達で来てるんだ。」

○子「うん、同じ高校の人達と来てるのかなって思ってたから、ビックリした。その人達とどんな繋がりなの？」

雪乃「一言で言えば、部活で関わった人達ね。奉仕部って言う部活なんだけど。」

○子「奉仕部？初めて聞いた部活だね。どんな部活なの？」

雪乃「簡単に説明すると、悩みを持つ相談者の依頼を手助けする部活ね。因みに、私はその部長を務めているわ。」

風○「そうなんだ。ボランティア部みたいなもの？」

雪乃「似ているけど、少し違うわ。……ところで、私からも黒沼さんと風○君に聞きたい事があるのだけれど。」

○子「えっ？ 私達に聞きたい事？」

雪乃「失礼な質問になるけど、2人は恋人同士なのかしら？」

○子・風○『……！！』

私が質問した途端、2人の顔が真っ赤になっていく。

雪乃「あら、ごめんなさい。もしかして、聞いてはいけない質問だったの？」

○子「ううん、そんな事無いよ！ そう思ってくれるなんて、凄く嬉しいよね、風○君！
！／／／」

風○「そ、そうだな、黒沼。付き合つて1年もたつてないけど、雪ノ下さんもそんな風に見えたんだ……／／／」

雪乃「それはそうでしょう。わざわざ、バスで3時間ぐらいかけて札幌に来たぐらいですもの。まだまだ初々しい感じがして、良いカップルだなんて思ったから。」

○子「あ、ありがとう。私達、去年の夏ぐらいから恋人同士になったの。本当は1年の時から、ずっと好きだったんだけど……。／／／」

風○「俺も入学した時から、ずっと好きだったんだ。いろいろすれ違いが多かったけど、今こうやって付き合えて、凄く幸せだなんて思えるよ……。／／／」

○子「風○君！私も同じだよ！私も風○君と付き合えて、凄く幸せになれた気がするもん！／＼／＼」

こうやって話を聞いてみても、凄く微笑ましく感じる。

この2人は、『思わず私が次に口にした言葉』を手に入れたのかもしれないと思うぐらい。

雪乃「……『彼』のいう『本物』なのかもしれないわね、この2人は……。」

○子・風○『えっ？』

私が思わず口走ってしまった時、2人が私の声に反応する。

風○「雪ノ下さん、『本物』って何の事？それに、今『彼』って……。」

雪乃「あっ……／＼／＼」

○子「えっ？もしかして、雪乃ちゃんにも好きな人が……？」

何て迂闊な事を口走ってしまったのだろう。2人に尋ねられた私は、顔を赤くしてしまいながら、反論する。

雪乃「いい、いいえ。違うわ、黒沼さん、風○君。あ、あなた達は何を勘違いしているのかしら。わ、私があんな男の事を好きだなんてあるはずないじゃない。あ、あの死んだ魚の目の男が、私を好きだと言うのなら、やぶさかではないのだけれど。そんな事言うなら、名誉毀損で訴訟も辞さないけど、よろしいかしら？」

○子「ひっ！ご、ごめんなさい！まさか、それだけで訴えられるなんて！」

風○「ご、ごめん！雪ノ下さん！もしかして、失礼な事聞いちゃった!？」

雪乃「あつ、ご、ごめんなさい……／＼／＼」

私は、先程の反論と違い、縮こまりながら2人に謝罪する。穴があつたら入りたい気分だった。きつと、私の顔も真っ赤になっているに違いない。

暫くの間、私達3人は気まずい雰囲気のまま、沈黙していた。しかし

雪乃「……黒沼さんと風○君に、もう1つお願いがあるのだけれど……。」

○子・風○「……えっ?」

雪乃「もし、良かったら聞いてくれないかしら?私が出会った『ある男』……『彼』の話を。」

私の心が平常じゃなかったかもしれない。こんな事、私らしくもないと思った。しかし、この2人にどうしても聞いて欲しかったのだ。

『彼』——比企谷君の話を。

○子・風○「……」

雪乃「……『彼』と出会ってからの今までの話は、以上よ。」

私は2人に比企谷君と出会ってから今までの話を全て話した。

比企谷君が奉仕部に入部した時の事、由比ヶ浜さんのクツキーの話、川崎さんの話、林間学校、文化祭、修学旅行、生徒会選挙、クリスマスイベント等……。

話していた時、黒沼さんと風○君はずっと黙って聞いていた。比企谷君の事を、どう捉えたのかはわからない。話終えて暫くしてから、2人が口を開く。

○子「……私、その人の事、凄い人だなって思ったよ。雪乃ちゃん。」

風○「俺も同じ意見だよ。その人の事、尊敬するよ。同じ年なのに。」

雪乃「えっ？」

2人が次に口にしたのは、比企谷君を褒めた言葉だった。

○子「その人、他の人達の為に悪者になったんじゃないのかな。凄く優しい人なんだなって思うよ。その人の味方になってあげたいなって思ったもん。」

風○「俺も同じ高校だったら、黒沼と同じようにその人の味方になりたいな。その人、もつと報われるべきだよ。みんなの為に頑張っている人なんだなって感じたから。」

雪乃「……………」

2人の発言を聞いて、私は沈黙してしまふ。まさか、2人が彼のやり方を肯定する人達だとは思わなかった。あくまでも、当事者ではない第3者からの意見だろうが、それでも私は驚きのあまり、押し黙ってしまふ。

そうか……。考え方によつては、そう捉える人もいるんだ……。

今さらながら、かつて、私は彼のやり方を否定した事を後悔してしまふ。確かに、私や由比ヶ浜さんが何もしなかつた事、比企谷君に解決を任せてしまつた事があつたのも事実なのだから……。

そして、彼が心の奥底から言つてくれた『あの言葉』——『『本物』がほしい』

その言葉を聞いて、私は——

風○「俺、会つてみたいな、その人に。凄く興味あるよ。」

○子「私も会つてみたいかも……。何となく、その人と通じるものを感じる……。」

雪乃「えっ……?」

私がそんな事を考えていると、2人が意外な言葉を口にする。比企谷君に興味を持つ人達が、会つてみたいという人達がいるとは、予想外だつた。

○子「……雪乃ちゃんはその人の事が好きなの?」

私が呆然としてゐるうちに、黒沼さんが私に問い掛ける。

ここまで話しておいて否定するとしたら、もはや只の欺瞞になつてしまふ。だから、

私は

雪乃「……そうね。好きなのかも……。いいえ、愛してるわ。」

『あの言葉』を聞いてから、自分の中で確信になった、『秘めてゐる想い』——それ

をはつきりと口にした。

○子「……やっぱり、そうなんだね。私、応援するよ。雪乃ちゃんの事。」

風○「俺も雪ノ下さんの事、応援するよ。雪ノ下さん見てると、昔の黒沼を見てるみたいだから。その人と恋人になれたらいいね。」

○子「か、風○君！雪乃ちゃんに失礼だよ！私、こんなに可愛くないよ！」

雪乃「いいえ。そんな事無いわよ、黒沼さん。ありがとう、風○君も。」

私の事を応援すると言った2人に、心からの笑顔で感謝する。しかし

八幡「——ゆ、雪ノ下……!?!」

雪乃「えっ……!?!」

○子・風○『えっ?』

聞いた事がある声が聴こえて、私達はその方へ振り向くと

八幡「お前……今、『愛してる』って……!?!」

そこには、私達が話題にしていた、私の想い人——比企谷八幡が驚愕の表情で私達を見ていたのであった。

おまけ・第13話

く千葉市内・某カフェ

川崎弟「ケーキおいしいね、けーちゃん！」

京華「うん！ありがとー！おねーさん！」

雪ノ下母「ふふふ、どういたしまして。喜んでくれて良かったです。」

どうも、川崎大志です。

俺達3兄妹は、あれから凄く綺麗で素敵なママさん2人と一緒に、とあるカフェに来ていました。京華達がケーキを美味しそうに食べているのを見て、着物姿の綺麗なママさんが喜んでいます。

由比ヶ浜母「本当にすみません。私までご馳走になつて。私でしたら、自分で出していたのに。」

大志「本当に申し訳ないツス……。」

雪ノ下母「いいのですよ。言つたではありませんか。何かの縁だつて。」

着物姿のママさんにご馳走してもらつて、俺ももう1人のママさんも、恐縮しています。

大志「ところで、お姉さん達にお聞きしたい事があるんですけど、いいツスカ？」

ご馳走してもらつたカフェオレを一口飲んでから、俺は2人にどうしても尋ねたい事

があつたので、聞きました。

由比ヶ浜母「まあ、お姉さんだなんて♪君、なかなかお上手ね。」

雪ノ下母「フフ、ありがとうございます。それで何でしょうか?」

大志「高校生の娘さんがいらつしやるつて聞いたんですけど、もしかして総武高校ですか?俺、じゃなかった、僕も4月から総武高校に入学するんですけど。」

さつきの2人の話から、何か引つ掛かる物を感じた俺は、ひよつとしたらと思い、勇気を出して尋ねてみました。

由比ヶ浜母「そうだよ。私の娘、総武高校に通っているよ。君、娘の後輩になるんだ。」

雪ノ下母「あら、そうなのですね。私の下の子も通っていますよ。上の子も卒業生ですけどね。」

由比ヶ浜母「へえ、それは奇遇ですね。まさか、娘同士が同じ高校だったなんて。」

雪ノ下母「そうですね。しかも、貴方も4月から入学するのでしょうか?何かの縁だと思いましたが、意外な所で縁がありましたね。」

大志「そ、そうツスね。しかも、僕の姉も通っているんですよ。姉は今度、3年生になるんですけど。」

由比ヶ浜母「あら、そうなの?私の娘も今度3年生になるのよ。」

雪ノ下母「それも奇遇ですね。私の下の子も、今度3年生ですよ。」

あれれ……? やつぱり、そうツスよね……? この2人、ひよっとしたらひよっとして、ですよね……?

大志「あの……もう一つお伺いしたい事があるんですけど……。お姉さん達、もしかして——」

俺がある程度の確信を得て、2人に尋ねようとした、その時でした。

? 「何か美味しそうな匂いのするお店なんだよ! と○まのお見舞いに行く前に、ここで休んだ方が良いかも!」

?? 「そーだね! せっかく遠出してきたんだから、あの人とお姉様に会いに行く前に休みたいと、ミ○カはミ○カは賛同してみたり! ついでに、あの人のお見舞いの品も買った方が良いかもって、ミ○カはミ○カは提案してみる!」

??? 「……ったく、うるせエンだよ。少しは静かにしろ。クソガキ共。」

雪ノ下母・由比ヶ浜母『んっ?』

京華・川崎弟『ふえ?』

大志「へっ?」

これまで落ち着いた感じだったカフェに、どこかで見たことあるような謎のお兄さんと美少女達が入店してきて、余りにも目立つ風貌だったのか、俺達は勿論、他のお客さんや店員の人も、その人達に注目していたのでした。

第16話

（北海道大学・構内）（雪乃 side）

八幡「雪ノ下、お前……!!」

雪乃「ひ、比企谷君……!!」

彼が今の話を聞いていたと知った瞬間、私の頭の中が真っ白になる。よりによって、比企谷君に今の話を聞かれているとは思わなかった。

雪乃「あっ……ああ……!!」

私はどうしていいか分からなくなって、混乱してしまう。どう上手く言い繕うか分からない。どう反論しようかも分からない。

そんな私がつてしまった行動は——

雪乃「っ……!!」タツタツタツ……

八幡「あっ！おい、雪ノ下!!」

○子「ゆ、雪乃ちゃん!」

風○「えっ!?雪ノ下さん!」

——この場から、逃げ出してしまう事だった。何故、逃げ出したのかも分からない。

逃げ出して、彼が私の言葉を聞いていた事実が変わるはずもない。しかし、今の私の選
択肢は、それしかなかった。

北海道大学・イチヨウ並木付近

雪乃「ハア……！ハア……！つ……！ここは……!?」

一心不乱に走っていた私は、気が付くとイチヨウの木々が多く並んでいる所まで、
走っていた。秋の紅葉の時期だったら、きっと色鮮やかなイチヨウの葉が、彩られてい
そうな所だ。

雪乃「ハア……ハア……。私とした事が……持久力もないのに、どうして……？ハア
……ハア……。」

そんなに遠くの距離を走った訳でも無いかもしれない。しかし、持久力の無い私に
とって、最早フルマラソンを走ったぐらい、息があがる距離だと感じた。

八幡「……ハア……ハア……！どうしてって言うのは、俺の台詞だぞ……雪ノ下……
！」

雪乃「えっ……!?」

声が聴こえて振り返ると、そこには比企谷君が肩で息をしながら、私を見ていた。

八幡「お前、どういうつもりだよ……!? お前が迷子になって心配して探してるんだぞ……! 由比ヶ浜も一色も陽乃さんも、みんなで……!」

雪乃「……………」

比企谷君をはじめ、みんなに心配をかけて申し訳ない気持ちでいっぱいになった私は、比企谷君の言葉に何も言えない。

八幡「ようやく見つけたと思ったら、突然逃げ出して……! お前、いったい……!」

雪乃「……比企谷君。」

八幡「っ……………! 雪ノ下……………!」

その時の私は、どんな顔をしていたのか分からない。しかし、私が比企谷君の名前を呼びながら彼の顔を見た時、彼は厳しい表情から驚きの表情へと変わっていた。

雪乃「……私……その……………」

心の中に秘めている想いが昂ってくる。『愛してる』という言葉が聞かれてしまった以上、この想いを彼に伝えたい、彼の言う『本物』になりたいという気持ちが、いつもの素直になれない私を上回っていた。

そして、意を決して、この想いを伝えようとした時だった。

八幡「ま、待て! ストップだ、雪ノ下!!」

雪乃「えっ……？」

八幡「……まあ、その、何だ。お前の言おうとしている事は分かっている。」

雪乃「ひ、比企谷君……。」

八幡「……お前の言いたい事って、つまりさっきの『愛してる』って言葉の事なんだろう？つまり、あれだ。その……。」

まさか、彼がそんな事に機敏に反応するなんて思わなかった。彼がそんな事を言ってくれるなんて……。私の心が、暖かい気持ちで満たされていく。

そして、その暖かい気持ちの中、彼の次に出た言葉は——

八幡「……そんなに、ウチのカマクラや猫の事が好きなのか……？通りすがりの人に言うぐらいまで……。」

雪乃「………はい？」

——私の心の暖かい気持ちを一瞬で冷まさしてくれる、しかし、ある意味彼らしい答えだった。

雪乃「………。」

八幡「まあ、確かにお前が猫好きなのは、重々承知してるけどな……。それを通りすがりの人に『愛してる』まで言うのは、流星にどうかと思うんだが……。」

雪乃「………。」ワナワナ

私の心が、先程の暖かい気持ちから一変、『違う意味での』暖かい気持ちに変わつていく。

ドゴツ!!

八幡「グハツ!?!」

次の瞬間には、彼の胸をおもいつきり殴つていた。

八幡「痛つてえ……! な、何すんだよ、雪ノ下!?!」

雪乃「うるさいわよ。殴られた胸に手を当てて聞いてみなさい。バカ、ボケナス、八幡。」

八幡「はあつ!?! 何だよ、それ!?! 何で、俺の名前を悪口と同列に並べるの!?! 泣くぞ、おい!!」

雪乃「聴こえなかった、朴念仁谷君? うるさいから黙りなさい。それとも、またいろいろ言われたいのかしら?」

八幡「ぐっ……。」

……なんか、彼の顔を見たりや言葉を聞いただけで、いつもの私に戻つてしまう。何だかんだで、それが凄く心地良く感じる。

雪乃「……でも、ありがとう。『私を助けて』くれて……。」

私が彼に言った言葉——『いつか私を助けてね。』

こんな形とはいえ、それを実践してくれた彼に、私は小さな眩きで感謝を告げていた。八幡「あん？何か言ったか？雪ノ下。」

雪乃「つ……！な、何にも言っていないわよ……。」

彼に聞かれて、私が顔を背けながら否定した時だった。

○子「雪乃ちゃ〜ん!!」

風○「雪ノ下さん!!」

彼に少し遅れて、黒沼さんと風○君の2人が、私に追い付いてきた。

雪乃「あつ、黒沼さん、風○君。ごめんなさい……。」

○子「どうしたの？突然走り出して。この人と何か関係があるの？」

風○「もしかして、この人が雪ノ下さんの言つてた人じゃ……。」

八幡「はっ？雪ノ下の言つてた人？お前、この2人に何言つたんだよ？」

雪乃「い、いいえ。違うわよ。こんな死んだ魚の目をした男が、私の話していた人？

馬鹿も休み休み言いなさい、風○君。黒沼さんもよ。こんな鈍感男が、私を関係あるですって？そんなおとぎ話を聞かせると、告訴も辞さないわよ。」

○子「ひっ！ご、ごめんなさい！雪乃ちゃん！お、お願いだから、そんな事で告訴しないで！」

風○「な、何かごめん……。雪ノ下さん。そこの君も……。」

八幡「……ああ、いつもの事だから。それに雪ノ下、何気に俺の事をディスプレイしてんじやねえよ。」

そんな会話の後、比企谷君が小町さんに連絡して、他のみんなに私を見つけた事と、もうすぐ次の場所に移動する為、私達の乗ってきたバスが置いてある場所に集合する事を連絡して、私達もその集合場所に向かう事になった。

く北海道大学・入口付近く

八幡「……なんか悪いな。黒沼さんに風〇さんつつたっけ？アンタ達まで付き添う事なかったのに。」

風〇「ううん、大丈夫だよ、比企谷君。俺達ももうすぐ別の場所に行こうと思っただところだから。」

〇子「それに、雪乃ちゃんや比企谷君とこうやって出会えた事も、何かの縁だと思っもん。せつかくだから、もう少しだけでも仲良くなれたらなって。」

雪乃「ええ。本当にありがとう。黒沼さん、風〇君。私もあなた達と出会えて良かったわ。」

集會場所に向かうまでの間、私達4人はいろんな話をしてきた。比企谷君と2人がお互いに自己紹介をしたり、私と2人が出逢つた経緯や、私と一緒に来ているみんなを探索うとしていた事を、2人は比企谷君に話して、比企谷君とも打ち解けていた。

八幡「あつ、由比ヶ浜や小町達だ。おーい！」

もうすぐ、バスのある集會場所に着きそうになる時、由比ヶ浜さんや小町さん達の姿が見えて、比企谷君が彼女達に声をかける。

小町「あつ、おにいちゃん!!……………つて、あれ?」

結衣「あつ、ヒツキー、ゆきのん!……………つて、えつ!」

私達の姿を確認した由比ヶ浜さんと小町さんは、何故かキョトンとした顔になる。

いろは「えつ!?!あの2人……………!?!」

めぐり「ふえつ?あの人達、まさか……………?」

由比ヶ浜さんと小町さんだけでなく、他のみんなもまた、私達4人を見て呆然とした顔になる。

雪乃「ん? みんなどうしたのかしら?まるで、信じられないものを見たような顔をしているのだけれど……………?」

八幡「さあ……………?とにかく、合流しようぜ。アンタ達はどうするんだ?」

○子「う、うん。せつかくだから、ご挨拶だけでも。行くでしよ、風○君。」

風○「あつ、ああ。そうだな、黒沼。」

会話が聴こえるくらいの距離になり、2人がそんな会話をした瞬間だった。

結衣・いろは・陽乃・めぐり・沙希・小町・留美
『あつ……………!!!』

突然、由比ヶ浜さん達が、大きな驚きの声とともに、信じられないといった表情で、私達を見ていた。

雪乃「えっ!？」

○子「な、何、何!?どうしたの!？」

風○「えっ?比企谷君、どうしたの?あの子達?」

八幡「い、いや!?俺が知るわけないだろ!」

由比ヶ浜さん達、どうして驚いているのかしら……?黒沼さんが驚きのあまり、デフォルメな姿になったのだけだ……。

そんな事を考えている時、由比ヶ浜さん達が私達の目の前に来て、目を輝かせながら結衣「嘘……!?!?○子ちゃんと風○君だよね!?そーだよね!？」

○子・風○『えっ?』

八幡「はっ……?」

雪乃「えっ……?」

——黒沼さんと風○君を見て、子供のように無邪気にはしゃいでいた。

何で……? どうして、由比ヶ浜さんが2人の事を知ってるの……?

小町「凄いい、すごーい!! まさか、○子ちゃんと風○君に出会えるなんて!! おにいちゃん」と雪乃さん、お手柄ですよ!!」

風○「えっ……? ど、どうして俺達の事を……?」

結衣「あたし、○子ちゃんや風○君の大ファンなんだよ! ○子ちゃんは恋する女の子の憧れみたいなものだもん!!」

○子「わ、私達の大ファン……? 憧れ……?」

小町「そーですよ! 小町も漫画や映画やアニメ見ましたもん! 凄く、○子ちゃんに共感出来る事、多いですよ!」

陽乃「へー、実際会ってみると、○子ちゃん、凄く可愛いんだね。」

留美「本当だね。しかも、風○君も一緒にいるなんて思わなかったから、凄く嬉しい。風○君、格好いいし。」

めぐり「あわ、あわわわわ……! まさか、旅行でこんな有名な人会えなんて……!」

沙希「城廻先輩、テンパリ過ぎです。まあ、気持ちは分からなくもないですけどね。ア

タシも出会えて嬉しいし。」

いろは「でも、先輩と雪ノ下先輩、本当に凄いですよ。私も○子ちゃんと風○君の事、応援してますから。私も先輩とこの2人のようになれたら……。」

何で、姉さん達もこの2人の事、知ってるの……？あと一色さん、今の発言、聞き捨てならないわよ。

奈呼「皆様、お待たせしました。準備のほうが……つて、あれ？その方々……!？」

璃夢「あーっ!!もしかして、○子ちゃんと風○君じゃないですか!?何で、札幌に遊びに来てるんですかー!？」

少し遅れて、バスの準備をしていたと思われる奈呼さんと璃夢さんが現れて、2人もまた黒沼さんと風○君の事を見て、とても驚いていた。

どういふ事なの……？私と比企谷君が知らないだけで、この2人、実は凄い有名人なのかしら……？

○子「な、な、な、何で!?どうして、雪乃ちゃんと比企谷君の友達が、私と風○君の事を知ってるの!？」

雪乃「いい、いえ、私も何が何だか分からないのだけれど……。」

八幡「お、俺も知らんぞ。アンタ達、実は有名人じゃないのか？」

風○「いい、いや、そんなはずないと思うんだけど……。」

小町「何言ってるんですか！主に女の子達の間じゃ、超有名なですよ!!おにいちゃん、昨日の○郎君やイ○ヤちゃん達の事は、帳消しにするからね!あつ、今のは小町的にポイント超高い!!」

結衣「そうだ!せっかくだから、みんな写真撮ろうよ!○子ちゃんと風○君に出会った記念で!!○子ちゃんと風○君は、どうかな!」

風○「う、うん。俺は構わないけど……。黒沼は?」

○子「じゃ、写真!?!ま、まさか、心霊現象とかで撮るとかじゃないよね!」

雪乃「大丈夫よ、黒沼さん。由比ヶ浜さん達が、そんなつもりで撮る事なんて無いわよ。心霊現象だったら、その目の腐ったゾンビが担ってくれるし。」

八幡「……おい、何でそこで俺を心霊現象やゾンビ扱いするんだよ?泣いてもいいよな……。」

そんなやり取りの後、私達は『キミ○ドカップルと出会った記念』(由比ヶ浜さん命名)として、黒沼さんと風○君と一緒に写真撮影をした。私と黒沼さんの2ショット写真や比企谷君と風○君の2ショット写真、他のみんなと黒沼さんの2ショット写真や女の子達全員での写真撮影、最後には、主にカメラマンを担当していた奈呼さんと璃夢さんも交えての、全員での記念撮影も行った。

小町「本当にありがとうございます!友達に自慢出来ますよ!」

結衣「機会があつたら、千葉にも遊びに来てよ！あたし達が案内するから!!」

風○「うん。もし、何かの形で行く事になったら、お願いしようかな。ねえ、黒沼。」

○子「そ、そうだね。みんないい人達みたいだから、友達になりたいかも……。」

写真撮影も終わり、2人とお別れの時が来る。北海道での思い出になりそうな不思議な出会いだった。少し名残惜しさを感じる私がいる。

○子「あつ、そうだ。雪乃ちゃんと少しだけ2人きりで話してもいい？」

雪乃「えっ……？」

風○「うん。比企谷君達は？」

八幡「お、おう。別に構わねえけど。」

そうして、私と黒沼さんは少し離れた場所で、2人きりになる。話したい事って何かしら……？

○子「あ、あの……雪乃ちゃん、自分の気持ちに正直になって。私、雪乃ちゃんに後悔してほしくないから……。」

雪乃「えっ!?ど、どういう事……?」

○子「私、分かるよ。比企谷君の事でしょ？雪乃ちゃんの言つてた人つて。」

雪乃「っ……………」

○子「余計なお節介かもしれないけど……………雪乃ちゃんの事、凄く応援したいの。雪乃ちゃんの恋が実つてほしいって思つてる。何かすれ違ひが多かつた、前の私と風○君を見ているみたいだから。」

雪乃「……………」

○子「だから、雪乃ちゃんも、自分の恋心に正直になつてほしいなつて思つてるよ。自分の心に嘘をつかないでほしいって……………」

雪乃「……………ありがとう。黒沼さん。」

○子「えっ……………」

雪乃「……………貴女の言う通りね。確かに、私は正直に向き合つてなかつた。自分の心に嘘をついていたかもしれないわ。私が一番嫌いなのに、嘘や欺瞞なんて……………」

○子「雪乃ちゃん……………」

雪乃「……………貴女に勇気を貰つて、決めたわ。私、向き合つてみる、比企谷君と。この旅行中に、必ず伝えるわ。私の正直な恋心を。約束するわ。」

○子「……………うん、分かつた。頑張つてね。本当に応援してるから！」

雪乃「ええ、本当にありがとう。黒沼さん。」

所へと戻った。

そうして、私は黒沼さんと握手を交わす。握手を交わした後、私達はみんなのいる場

結衣「あつ、ゆきのんと○子ちゃん！どうしたの、話つて？」

雪乃「……いいえ、ただ黒沼さんに感謝を伝えただけよ。そうよね、黒沼さん？」

○子「あ、うん。私も雪乃ちゃんにお世話になったから。」

いろは「……本当ですか？何か怪しいですねー。」

八幡「まあ、いいじゃねえか。それより、もう行く時間だぞ。」

小町「あつ、本当だ！○子ちゃんと風○君とここでお別れするなんて、小町はとても

悲しいです。」

風○「ハハハ……。でも、本当にどこかでまた出会えたら、いいですね。」

留美「うん。いつか千葉に遊びにくればいい。そうしたら、また出会えるから。」

陽乃「そーだよ。今度は、友達も連れてくればいいじゃない。」

○子「えっ!?!と、友達と!?!あ○ねちゃんやち○ちゃん、来てくれるかな、風○君!?!」

風○「い、いや、それはアイツらに聞いてみないと……。」

沙希「まあ、落ち着きなよ。千葉に遊びに来るなんて、決まったわけじゃないから。めぐり」でも、本当に来たら、私達に会いに来てよ。全員で歓迎するからね。」
風〇「分かりました。その時は、是非宜しくお願いします。それじゃ、この辺で。雪ノ下さん、比企谷君。」

八幡「ああ、また会おうぜ。」

雪乃「ええ、またどこかでね。黒沼さん、風〇君。」

〇子「うん、またね。雪乃ちゃん。」

そして、私達は黒沼さんと風〇君と別れ、次の場所へと移動することになった。

あの2人には、本当に幸せになつてもらいたい。そして、私もあの2人のように比企谷君と……………。

因みにこの話の後日談として、私達があの2人と撮影した写真が私達の関係者の間で、非常に話題になった。

中でも三浦さん、材なんちやら君、海老名さんの反応が凄かったと、由比ヶ浜さんと比企谷君から聞いた。

三浦さんは『ハアッ!?』なんで、結衣やヒキオ達がこの2人と一緒に写真撮ってるんだし!?』と驚いてたり、材なんちやら君は『おのれ、リア充の代表どもめ!!爆発しろーろーろー!!』と泣いていたり、海老名さんは『かぜ×はち!!』また禁断のコー

ボの『かぜ×はち』なの!?! 愚腐腐腐腐腐……!!』と鼻血を出して気絶したという話だった。

黒沼さんと風○君——この話が、私の『今後』を変えるあの2人との出会いのエピソードだった………。

——おまけ・第14話——

く北海道大学付近く

雪乃や八幡達と別れた直後、○子と風○は、北海道大学の付近を散歩デートしていた。

○子「ねえ、風○君。聞きたい事があるんだけど……。」

○子が風○に尋ねようとする。

風○「もしかして、雪ノ下さんと比企谷君の事?」

○子「えっ!?! どうして分かったの!?!」

風○「そりゃ、分かるさ。雪ノ下さんが比企谷君を見た時の反応を見たら。雪ノ下さんの言ってた人って比企谷君の事だろ?」

○子「そ、そうだよ。だから、雪乃ちゃんに言ったの。自分の気持ちに素直になっ

て。」

風○「……そうだな。あの2人、付き合う前の俺と黒沼みたいに、すれ違いばかりみたいだし。」

○子「そ、そんな事まで分かるの？」

風○「雪ノ下さんの話聞いて、何となくそう思ったんだ。黒沼もでしょ？」

○子「うん。でも、比企谷君、凄い激戦区だよな。多分、雪乃ちゃん以外の女の子達も……。風○君に負けないぐらいモテるよね。」

風○「いや、比企谷君の方が全然モテるだろ。あの小学生みたいな子や女子大生みたいな人まで、比企谷君の事好きみたいだから。そもそも、俺モテないだろ。」

○子「そ、そんな事ないよ！風○君が私にとって1番モテる人だから！」

風○「お、おう。ありがと……。雪ノ下さん、なんとか比企谷君と恋人になってほしいね……。」

○子「うん。頑張ってるね、雪乃ちゃん……。」

2人は、雪乃の事を応援しつつ、この後の札幌デートを満喫していた。

最後に、この2人もまた、八幡や雪乃達と一緒に撮影した写真を見せたところ、2人の通っている学校でも物凄い反響だったらしい。

ある友人達は、『何、この子達! く〇みと同レベルかそれ以上なんだけど!!』とか『マジヤバツ!! 何で、〇子と風〇、こんなレベル高い子達と写真撮ってんの!』と驚いてたり、

また、ある友人は『……みんな、可愛いな。タイプなのとそうじゃないのもいるけど。』と冷静な分析をしたり、

また、ある友人は、『この子達、すげえー! 貞子ちゃんと風〇、紹介してよ!』とか言つて彼女に怒られたり、

また、ある友人(?)は、『へえー、なかなか可愛いじゃない。風〇がこの子達に浮気されないようにね。』と忠告されたり、

そして、ある教師は『おい、翔太に黒沼!! このバスガイドさん達、紹介しやがれ!!』と言つて、風〇や友人達からゴミを見るような目で見られていたという。

この教師、千葉のとある教師と出会ったら、結構いいコンビになれるかもしれない。

第17話

「すすきの・ラーメン横丁」（八幡 side）

北海道大学を離れた頃に、ちようどランチの時間帯になった。その時に、俺を除いた全員が『すすきのに行きたい』と言い出して、俺達はすすきののラーメン横丁に来ていた。

奈呼「あの……皆様？」

めぐり「はい、何ですか？奈呼さん。」

璃夢「何で、ここに来たんですか？確かに札幌でラーメンを食べたいというのも分かりますが、女性の方がお食事されるなら、もっとふさわしい場所を知ってますけど……。」

いろは「それは、昨日の夜の事と関係あるからですよ。ねえー、せんぱーい？」

八幡「あつ？どういう事だよ？確かに昨日の夜、すすきのに来たけど。」

小町「フフン。では、ここで昨日の八幡裁判の罰ゲーム、発表でくす!!」

八幡「はっ?!?何でだよ!?奈呼さんと璃夢さんとラーメン食べに行っただけだって言っ
たじゃねえか!!」

留美「でも、私達の判決は有罪だよ、八幡。結果的には、私達の誘いを断って、奈呼さんと璃夢さんと夜遊びに行っただけだから。と言っても、罰ゲームの内容、知らないんだけど。」

奈呼「えっ!?!」

璃夢「ちよつ、ちよつと待つててください!私達、本当に八幡君と偶然出会っただけですよ!?!」

八幡「それに、お昼にここに来たのどう関係あるんだよ!?!」

沙希「だから、小町が言ったじゃない。ここで罰ゲーム執行だつて。」

結衣「つべこべ言わないで諦めてよ、ヒツキー。それで、昨日の夜の事は帳消しにするから。あつ、奈呼さんと璃夢さんは、勿論罰ゲームはしなくて大丈夫ですよ。」

八幡「……はあ、しようがねえな……。で、その罰ゲームって何だよ?」

雪乃「姉さんから発表するわ。よく聴きなさい。」

陽乃「それじゃ、発表ね。比企谷君の罰ゲームは……:『昨日、3人で食べに行っただけ』、私達全員にラーメンを奢る』に決定です!!」

八幡「ハアツ!?!」

奈呼・璃夢『ええっ!?!』

陽乃さんから発表された罰ゲームに、罰を受ける俺は勿論、奈呼さんと璃夢さんも驚

く。

八幡「な、なんでさ!？」

あつ、思わず○郎さんの真似しちやった。

いろは「私達も本場の札幌ラーメンを堪能するしたいんですよ。せつかく行くんだから、美味しいところで食べたいじゃないですかー。」

雪乃「昨日、貴方も美味しいって言ってたわよね? 貴方だけそんな思いをするのは、不公平ではないのかしら? ラーメン谷君。」

沙希「雪ノ下の言う通りだね。みんな旅行を楽しむには、みんなでいい思いを共有しないとイケないと思うよ。」

陽乃「私達が美味しいラーメンを食べて、比企谷君はその支払いで昨日の夜の事を帳消しにする。ある意味、win-winだから問題ないじゃない。」

結衣「それに、そのお店って、奈呼さんと璃夢さんが、常連で通っているお店なんですよ? ヒツキー、昨日話してたじゃん。」

小町「それだったら、安心して小町達も行けますよ。それにラーメン大好きなおにいちちゃんのお墨付きだったら、間違いないですね!」

めぐり「因みに、今朝、留美ちゃんがいなかった朝のお風呂の時に、みんな話合っ
て決めたんだよ。留美ちゃんもそれでいいでしょ?」

留美「うん、問題ない。八幡、ごちそうさま。」

八幡「……分かったよ。」

こうして、俺達は昨日の夜に来たラーメン屋に向かう事になった。

その途中で、折本がこの付近のホテルに泊まっている為、鉢合せしないか危惧していたが、それは杞憂に終わったので、少しホッとした。

奈呼「あつ、皆様。こちらが私達の通っているお店です。」

八幡「ああ、この看板と玄関、見覚えがありますね。」

そして、俺達は昨日のお店の前に到着した。

『札幌ラーメン 函勇』

少し変わった名前だが、味は確かな店。それに店主だと思われる親父も気前は良いが、結構奈呼さんと璃夢さんに毒を吐いてたなと思いつく。

八幡「昨日の今日で来ることになるとは思わなかったけどな。まあ、大丈夫だろう。」

そんな事を思いつつ、店内に入る。しかし、『大丈夫だろう』という考えが甘いと、その後思い知らされる事になるとは、その時の俺、そして奈呼さんと璃夢さんは知るよしもなかった。

ラーメン屋店内へ

親父「おう、らっしやい!……って、またお前らか!!」

璃夢「もう!またって何よ!!」

奈呼「こんにちは。いつもお世話になってます。」

親父「こんなとこに来る暇があつたら、男の1人でも見つけろって、いつもいつも言うてるだろうが!本当に嫁の貰い手いなくなつちまうぞ、お前ら!」

璃夢「何言つてんの!!相変わらず口の減らないおじさんだね!!私はともかく、姉様まで馬鹿にしないでよ!!それしか、ボキヤブラリー無いの!?!」

結衣「あ、あの、奈呼さん……。」

奈呼「ああ、気にしないでください、皆様。この2人、いつもの事ですから。」

雪乃・結衣・いろは・陽乃・めぐり・沙希・小町・留美『えっ……?』

店に入るなり開口一番、親父さんは奈呼さんと璃夢さんに暴言を吐いて、それに対し璃夢さんが反論する。このやりとりは、昨日折本と4人で来た時も、やりあっていた。昨日見た時は、俺もコイツら同様ドン引きしていたが、少し慣れたのか、冷静になつて見ている事が出来た。

親父「むっ……?そこにいるのは、昨日の小僧ではないか?」

八幡「あつ、どうも……。昨日はごちそうさまでした。」

その時、親父さんは俺の顔を見て、俺がいる事に気付く。

でも、この親父さん、誰かに似ているんだよな……。確か、ス〇ロボ辺りで見た事があるような気がするんだが……。

親父「フン、まあいい。食べに来たんだろ、早く席に座れ。お前らの知りあいらしいし、サービスしてやるから。」

奈呼「ありがとうございます、おじ様。」

璃夢「むー、最初から喧嘩売らないで、そんな風にすれば良いじゃん。」

そうして、俺達は席に座りラーメンを注文する。因みに、席はこんな感じだった。

テーブル1：陽乃さん、城廻先輩、小町、留美

テーブル2：雪ノ下、一色、由比ヶ浜、川崎

テーブル3：俺、奈呼さん、璃夢さん

……うん、4名席のテーブルだから仕方ないけど、奈呼さんと璃夢さんがいなかったら、俺ボツチでしたね。でも、良かった。昨夜同様、癒しの女神様達を対面に、ラーメンを食べられるなんて……。それだったら、全額支払いの罰ゲームなんて……。

陽乃「比企谷君ー？お姉さんが比企谷君の隣に行こうかー？何か、奈呼さんと璃夢さんにデレデレしてるみたいだから。」ゴゴゴゴゴゴ……

小町「むむむ！これは、ひよつとしてまさかの伏兵登場ですかね!？」

……何で俺の癒しの空間をぶち壊そうとしてるんですかね、魔王様……。しかも、背中合わせの俺の表情まで何で分かるんですか、貴女は……。それに、ゴゴゴゴ……。つてジョジョのような擬音が聴こえるんですけど……。

あと小町、なんでそんなに目をキラキラと輝かせているんだよ？

留美「何言ってるの、陽乃さん。それだったら、私が八幡の隣に行くから。」

結衣「ダ、ダメだよ、留美ちゃん!!留美ちゃんは今朝、抜け駆けしたんだから!」

雪乃「由比ヶ浜さんの言う通りよ、鶴見さん。姉さんも。貴女達が犠牲にならない為に、私が行くわ。」

いろは「雪ノ下先輩もダメです!それでしたら、私が先輩の隣に行きますから!!」

そんな事を陽乃さんが言ったら、また雪ノ下、由比ヶ浜、一色、留美辺りがギャーギャー騒ぎはじめた。

沙希「ちよつとやめなよ、アンタら!」

めぐり「ま、周りの人達も見てますよ!はるさん、みんなく!」

少女A「ねえ、あのお姉さん達、何を揉めてるのかな?」

少年A「何か物凄い修羅場って奴を見てるのか?俺達。」

マスコット?「ウムム、これぞハーレムという奴であるか!羨ましいのであーる!!」

少女B「私の勘だと間違いなくそうだね!お姉さん達、あのお兄さんの事が好きみた

いだよ！」

少年B「ラーメン屋で、ハーレムを目にするなんて……ありえない。」

川崎と城廻先輩の仲裁も空しく、近くの席にいた中学生らしき4人組＋ぬいぐるみみたいな赤い奴1匹の団体客から、ヒソヒソ話が耳に入る。

おい、You Oubeの毎週土曜夜7時で見たことあるようなその中学生みたいな奴ら、何でお前らも北海道にいるんだよ……。しかも、そのぬいぐるみみたいな赤い奴、実在していたのかよ……。しかも普通に喋ってポップコーン食ってるし……。

親父「ほらっ！出来たぞ、お前ら！これでも食って少しは静かにしろ!!」

そんな時、親父さんが作ったラーメンを持ってきて、俺達に静かにするように注意する。

奈呼「あつ、ごめんなさい。おじ様。」

八幡「すみません。お騒がせして。」

親父「……ところで、昨日一緒に来ていた娘はどうしたのだ？見たところいなみたのだが……。」

八幡・奈呼・璃夢『えっ……!?』ギクツ

そして、親父さんは昨日俺達と一緒に来ていた折本がない事に気付き、俺達に問い掛けた。まさか、その事で問い掛けられるとは思わなかったので、俺達は動揺する。

璃夢「あー！あの子、私達の会社の新人さんなんだ！昨日は歓迎会的な意味でここに連れてきて……。今日は別の仕事でいないんだけど。」

親父「むっ、そうか。昨日の感じだと小僧と仲が良さそうな感じがしたのだが……。」
璃夢「あの子、八幡君の事気に入っちゃったみたいなの。八幡君と仲良くしたいからおじさんにそんな風に見えちゃったんじゃないか……。」

親父「成程、そういうことか。小僧、中々のスケコマシというか女誑しだな。」ニヤリ
八幡「ハ、ハハハ……。」

親父「まあよい。これ以上追求するのはどうかと思うし、早く食べろよ。冷めたりのびたら、美味しくないからな。」

あ、危ねえじゃねえか……。この親父。危うく、折本の事がバレそうになった……。璃夢さん、咄嗟の機転の効いた返答、マジでありがとうございます。

陽乃「——比企谷君？」

八幡「ひや、ひやい!!」ビクッ

そんな事を思っていると、陽乃さんが普段の陽気な声とは程遠いドス黒い声で俺の名前を呼んでいたの、裏声でカミカミになった返事をしながら振り替える。すると、

八幡「ゲツ……。!!」ブルッ

奈呼・璃夢『えっ……。!!』ビクッ

雪乃・結衣・いろは・陽乃・めぐり・沙希・小町・留美『……………』ジトー

あ、あのー、皆さん……。なして、そんなハイライトの消えたヤンデレっぽい目で俺達を見てるんでせうか……。？ほら、早くラーメン食べないと、冷めちゃうしのびちゃつて、美味しくなくなりますよ。親父もそう言ってるし。

親父「ほーう、どうやらその娘達もお前にご執心という訳だな、小僧。羨ましいなー、モテモテで。」ニヤニヤ

うるせえぞ、親父!! そんなニヤニヤしてんじやねえ! 元はと言えば、アンタが余計な事を言ったせいじゃねえか! あと、そんな事言ったら、勘違いしちゃうからやめろ!!

しかも、そのニヤケ顔で思い出したぞ! アンタの顔、第2次と第3次のスパ○ボ乙に出た『アイツ』にそっくりじゃねえか!! ラーメン屋の名前も何となく似てるし!

陽乃「今の話、ラーメンを食べた後に詳しく聞きたいんだけど? 奈呼さんと璃夢さんもですよ?」

八幡・奈呼・璃夢『は、はい……。』

その後俺達は、ラーメンを食べた後に魔王を筆頭に散々問い詰められたが、璃夢さんが言っていた『バス会社の新人さん』という事で何とか誤魔化せたお陰で、折本の事は何とかバレずに済んだ。

なお、アリーナ席でそれを観戦していた中坊軍団は、ぬいぐるみみたいな赤い奴が、

『あの男、○ンみたいな奴であるな！前にあ○いとみ○みのダブルブッキングデートした時みたいである！』と口走ったお陰で、向こうも女の子2人と男で修羅場を展開していて、眼鏡をかけた男が『ありえない……。』と呆れていたのは、全くの余談である。うん、何となくだけど、お前らとモン○トで勝負してみたかったよ……。言っておくけど、俺のメンバーは、アー○ー、ダルタ○ヤン、アグナ○ートX、カブ○エルでな。そんな事を考えているうちに、俺達は次の観光スポットへと向かう為にラーメン屋を出るのであった。

その時に親父が、『今度も違う女を連れてくるんじゃないぞ、女誑しの小僧！ハハハハ!!』と言われたので、苦笑いを浮かべていた。(因みに、その時も8人全員に睨まれました。)

なお、さつぼろ羊ヶ丘展望台に向かう前に、さつきの話の罰として、とあるカフェにて俺が全額食後のコーヒーを御馳走する事になったのも、追記しておく。

それを含めて、俺はスパ○ボZシリーズに出ていた『アイツ』に似ている親父に対して心の中でこう叫んだ。

——『アンタは人間のクズだな!』——と。

くさつぽろ羊ヶ丘展望台・クラーク博士像前く

奈呼「はい、皆様。こちらがさつぽろ羊ヶ丘展望台のメインスポット、かの有名なクラーク博士の全体像になります。」

璃夢「ウイリアム・スミス・クラーク博士には、後世に遺した有名な言葉がございますが、もう皆様ご存じですよね？」

陽乃「だつてさ。答えてもらおうかな？ガハマちゃん、小町ちゃん。」

さつぽろ羊ヶ丘展望台に着いた俺達は、奈呼さん達の案内のもと、クラーク博士の全体像の前に来ていた。

さつぽろの北海道大学の時に、由比ヶ浜と小町がクラーク博士の名言を陽乃さんに宿題として与えられていて、それをここで答える事になっていたが、さて、答えられるのだろうか……？

結衣「勿論ですよ！答えは『Boys, be ambitious』、『少年よ、大志を抱け』です！」

小町「この言葉は、正確には『Boys, be ambitious like this old man』。クラーク博士が『この老人〓私のようにあなた達若い人も野心的であれ』と北海道大学の前身である、札幌農学校の1期生の生徒達との別れの時

に、送った言葉だという説があります。」

……うん、明らかにユキペディアさんに教えてもらったな、お前ら。クラーク博士を知らなかったお前らが、こんな裏話的な一説まで答えられるわけないだろ。

陽乃「へえー、なかなかいい答えじゃない。雪乃ちゃんにでも教えてもらったの？」

結衣・小町『うつ……。』

陽乃「まあいいか。別に教えてもらうのがダメって言ってなかったもんね。」

めぐり「そうですね。むしろ、いい勉強になりましたよ。」

留美「結衣さん、小町さん、もし良かったら、私が勉強教えてあげるよ？」ドヤア

小町「ひ、酷い！留美ちゃん！」

結衣「そ、そうだよ！何でそんなドヤ顔してるし!？」

留美の言葉に、顔を真っ赤にしながら反論する由比ヶ浜と小町を見て、みんなで笑っていた時だった。

?「——まつ、待ってよ！みんなのところへ戻ろうよ！」

??「知るか知るか!!悪いのはアイツらだー!泣いて謝るまで許してやるもんかー

!!」

留美「ん……?えっ……!？」

八幡「……あん?どうした、留美?」

留美「……………」

俺達の近くに來た2人の女の子達——そのうちの1人を見て、留美は驚きを隠せない顔をしていた。

——おまけ・第15話——

札幌市内・某ホテル（折本かおりside）

折本父「うう……………まだ酒が残ってる……………」

折本母「お父さん、だから飲み過ぎだつて言ったのに……………今日も私が運転しますから、隣で寝てくださいね。」

折本父「うう……………すまん、母さん……………」

旅行2日目のお昼前、私達折本一家は、チェックアウト寸前までホテルに滞在していた。理由はこの会話の通り、二日酔いの父さんがギリギリまで寝ていたからだ。

かおり「まあ、無理しないでよ、父さん。それより、私の『お願い』、聞いてくれてあ

りがとね。母さんも。」

折本父「ああ、いいぞ。しかし、大丈夫なのか？」

折本母「そうよ。『向こう』も快く応じてくれたけど……。」

かおり「あー、その辺なら心配しないで。ちゃんと確認とっているから……。ちよつと飲み物買ってくるね。」

そんな会話をして、私は自販機で飲み物を買いに行った。

かおり「ん……あれ？」

自販機で飲み物を買って戻ろうとした時、向こうからきた人達に目が入る。

○ン「全く……昨日はやり過ぎよ。アンタ達。」

セ○バー「何を言うのですか!? 一番危害を加えてたのは貴女でしょう、○ン！」

サ○ラ「ま、まあまあ、姉さんもセ○バーさんも抑えてください。私も含めてみんなでやり過ぎちゃいましたから。」

イ○ヤ「そうね。早くシ○ウを迎えに行かなくちゃ。今日帰らなくちゃいけないし。」

あの子達……確か昨日、このホテルの前で修羅場つてた子達じゃない。あの子達、このホテルに泊まってたんだ。なんかウケるw

イ○ヤ「うん……? あっ……!!」

そんな事を考えていると、銀色の髪の小さい女の子が、私を見て近づいてきた。その

子に続いて、他の子達も私に近づいてくる。

えっ?! なになに?! しかも、小さい女の子はなんか怖い顔をしてるし?! そうして、彼女達は私の目の前にやって来た。

かおり「えつと……何かな……?」

イ○ヤ「貴女……ハチマンとどういう関係なの?」

かおり「……はい? ハチマンって、比企谷の事?」

イ○ヤ「そうよ。昨日の夜、ハチマンとキスしていたでしょう? ホテルの中から見ていたんだから。」

えつ、どういう事?! この子達、比企谷の知り合い?! しかも、昨日のキスも見られてたの!?

かおり「……私、比企谷と同中なんだけど?」

イ○ヤ「オナチュー? 何それ?」

かおり「あつ、分からなかった? 同じ中学校の同級生って事。アイツと私が。」

イ○ヤ「……そう、そういう事ね。それだけの関係でキスをするの?」

なんか喧嘩腰だなあ、この子……。思わず、私はこう言い返してやった。

かおり「それだけの関係じゃないよ。私、アイツに告白された事あるんだから。」

イ○ヤ・セ○バー・○ン・サ○ラ『えつ?!』

私の発言に、驚きを隠せない彼女達。でも、嘘は言っていないからね。私が振っちゃったとはいえ、事実だし。

○ン「成程ね……。どうやら、あの沙希って子に強力なライバルが出てきたって事かしら?」

サ○ラ「そうですね……。しかも、告白されたって大きなアドバンテージですよ……。」

セ○バー「あのハチマンという男、サキというものがありながら、何という……。まるでシ○ウみたいではありませんか。」

イ○ヤ「……貴女、名前は?」

かおり「私?私がかおりっていうんだ。それで貴女は?」

イ○ヤ「私はイ○ヤって言うの。カオリ、サキは貴女に負けないんだからね。」

かおり「へえー、面白い事言ってくれるじゃない、イ○ヤちゃん。貴女達は、そのサキって子の事を応援してるの?」

イ○ヤ「そうよ。私達はサキの事を応援しているわ。」

そんな会話を彼女達としていると、

折本母「かおりー。どうしたのー?」

遅くなって心配したのか、母さんが私を迎えに来た。

かおり「あつ、ゴメン。私、そろそろ行かなくちゃいけないから。でも、比企谷は私
が戴くからね。そのサキつて子だけじゃなくて、他にもライバルが何人もいるけどね。」
イ〇ヤ「ふーん……。貴女もせいぜい頑張つてね、カオリ。悪い人じゃなさそうだ
し。」

かおり「ありがと、イ〇ヤちゃん。じゃあね。」

そうして、私は彼女達と離れ、両親と合流する。

折本母「どうしたの、かおり？あの女の子達と話してみたんだけど……。」

かおり「ああ、別に悪い事じゃないよ。ちよつと、あの子達との共通の知り合いの話
をしてたんだ。」

そして、私達家族はホテルを離れ、車で函館へと向かう事になった。

くお昼頃・札幌市街く

かおり「(あー、いたいた。何かオドオドしてキョドつてるし、比企谷。マジウケる
w)」

車に乗つてすぐに車の外の景色を見ると、比企谷達の姿が見えた。

かおり「(本当にみんなで旅行に来てたんだね、ウケるw)」

比企谷の他にも、雪ノ下さんや由比ヶ浜さん、一色ちゃんに留美ちゃん、それに昨日
出会った奈呼さんと璃夢さんがバスガイドの制服を着て案内をしていた。

かおり「(よく見てみると、見た事ある子もいるね。比企谷の妹さんの……確か小町ちゃんだったかな？それに、あの青い髪のポニーテールの子もクリスマスやバレンタインのイベントで見た事があるような……。2人のお姉さんみたいな人達も、凄く可愛いし。)」

あのお姉さん達かポニーテールの子の誰かが、サキって子なのかな？小町ちゃんとはともかく、全員が比企谷を狙っているとしたら、いずれも強敵ばかりのライバル達だなと感じた。

かおり「まあいいか。『こつち』はみんなに譲ってあげるよ。でも、『向こう』では私のターンになるからね。覚悟してよね、比企谷♪)」

私達家族がこれから向かう場所、函館——そこで両親に『お願い』して仕掛けようとする『サプライズ』を思い浮かべて、私は物凄くワクワクしていたのであった。

第18話

く2日目の昼・さつぽろ羊ヶ丘展望台く(留美side)

? 「——まつ、待ってよ〜! みんなのところへ戻ろうよ〜!」

?? 「知るか知るかー!! 悪いのはアイツらだー! 泣いて謝るまで許してやるもんかー!!」

留美 「ん……えっ……!?!」

クラーク博士像で観光していた私達の近くで騒いでいる女の子2人組——そのうちの1人を見て、私は驚きを隠せなかった。

留美 「(あの子……まさか……!?!)」

あの子の事は忘れるはずもない。小さい頃から友達の小なかつた私にとって、あの子は——

八幡 「……おい、留美!」

留美 「……あつ、八幡。」

八幡 「どうしたんだよ? 俺が呼んでるのにポーっとして。」

八幡の呼びかけにも気付かなかつたぐらい、私はあの子達を見入っていた。

八幡「もしかして、あの子達の事か？留美、あの子達を見たらなんか驚いていたみたいだから。」

流石に八幡も気付いたみたいだ。私は八幡に尋ねてみる。

留美「八幡……ちよつと、あの子達の所に行つてきてもいい？八幡も一緒に来てほしいんだけど。」

八幡「あつ？ああ。別にいいぜ。」

そうして、私は八幡と一緒にあの子達の所に行つてみた。

？「ふあうう……。どうしよ……。す〇るさん達とはぐれちゃつて、私達2人きりになつちやたし……。」

??「ふーんだ!!あたしからアイツらの所に戻る気なんて、これっぽっちもないからなー!!」

留美「……あの」

??「んー？何だー？」

私が声を掛けると、もう1人の子は不審げに私と八幡を見て、逆に尋ねられる。

八幡「いや、この子がお前達に何か話があるみたいなんだ。俺はその付き添いだ。」

??「へっ？あたし達に？」

留美「ううん。正確に言えば、この子に話があるの——湊〇花に。」

私は赤みのかかったピンク色の髪のおっとりしている『あの子』——湊○花の名前を口に出す。

○花「ふえ?ど、どうして、私の名前を!？」

留美「覚えてる?私、留美。幼稚園の時、近所だった鶴見留美だよ。」

○花「ふええええ!?!も、もしかして、留美ちゃん!？」

留美「うん。久しぶりだね、○花。その口調も相変わらずみたいだし。」

○花「ふあううう……。な、なんか恥ずかしいよお……。私の口調も覚えられてるなんて……。」

本当に相変わらずだなあ、この口調。

そんな事を懐かしみながら、私は昔の幼馴染である湊○花と、北海道でまさかの再会をはたしたのであった。

??「へっ?なにになに?もっ○んの知り合い?」

八幡「成程な。留美の幼馴染か、この子。」

私と○花が話していると、八幡と○花の連れの茶色の髪の子が私達に話しかける。

留美「うん。この子は湊○花。引越して離ればなれになっちゃったけど、幼稚園の

時、近所に住んでた幼馴染なの。」

○花「は、初めまして。湊○花と申します。よろしくお願ひします。」

八幡「そうか。俺は比企谷八幡っていうんだ。宜しくな、○花。」

……八幡が○花に対して優しそうな笑みを浮かべてるんだけど……。なんかムカムカする。

??「コラー！あたしを無視するなー!!」

○花「あつ、ごめん。○帆。」

○帆「全く、あたしをハブにするなよー。あつ、あたしは三沢○帆っていうんだー。まほ○ほって呼んでもいいぞー。宜しくなー、『ルミミミ』に『ハチ公』。」

留美・八幡『………はっ?』

な………何なの、この子?自己紹介したと思つたら、いきなり……

八幡「………も、もしかして、『ハチ公』って俺の事か………?」

○帆「そーだぞー。八幡っていうんだろ?『ハツチ』っていうのも考えたんだけど、『ハツチ』は既にいるしカブつちやうからなー。どーだー?良いネーミングだろー?」ドヤア

八幡「へっ、へー………!」イラッ

あ、ヤバイ……。八幡、ちよつと怒ってる。

留美「は、八幡！ダメだよ！怒っっちゃ！」

○花「す、すみません、比企谷さん！○帆、初対面の相手でもニツクネームをつけちゃうから……！○帆！す○るさんやあ○いさんみたいに優しい人ばかりじゃないんだから！」

八幡「し、心配するな、留美……それに○花……。この俺が、こんな子ども相手に怒るわけないだろ……。」ピクツピクツ

○帆「何だよー。せつかく、ハチ公とルミミミに良いニツクネームつけてあげたのにー。」プクー

っていうか、その『ルミミミ』って私の事……？八幡の『ルミルミ』と同じぐらい、ネーミングセンス無いんだけど……。『ハチ公』は思わず笑いそうになっちゃったから、まだしも……。

小町「おにいちちゃん！留美ちゃん！どうしたのー!？」

八幡が○帆という子に対してかなりイラついていたら、小町さんをはじめとする他の旅行メンバーが、私達のところに駆け付けてきてくれた。

結衣「どーしたの、ヒツキー!?留美ちゃんも。」

留美「あ、ゴメンね、結衣さん。私の幼馴染がいたから、ちよつと挨拶して……。」

小町「留美ちゃんの幼馴染？この子達が？」

留美「ううん、この子だけ。○花って言うの。一緒にいる子は、○花の友達。」

○花「あつ、初めまして。湊○花と言います。」

○帆「あたしはもっ○んの友達の三沢○帆って言うんだ。通称まほ○ほ。宜しくな。」

めぐり「へー、留美ちゃんの幼馴染なんだ。もしかして、留美ちゃんみたいに小学校を卒業したばかりなの？」

○花「は、はい。私達、慧○学園の初等部だったんですけど、今月卒業して、来月なら中等部に進学する事になってます。」

沙希「け、慧○学園!？」

いろは「な、何か聞いた事あるような……?」

雪乃「確か、千葉県でも有数の名門校だったはずよ、一色さん、川崎さん。最もそこは初等部から高等部までエスカレーター式の学園だって聞いた事があるのだけけど。」

陽乃「へー、それじゃ、○花ちゃん達も千葉から来たんだね。私達、留美ちゃんを除いて、みんな千葉の総武高校っていう高校の関係者なんだよ。」

○帆「総武高校? 知ってる、もっ○ん?」

○花「あつ、私、聞いた事あるよ。確か、慧○学園高等部と同レベルの進学校だって。」
小町「そういうえば、小町達の自己紹介してなかったよね? みんなで○花ちゃんとまほ

○ほに自己紹介するね。そこにいるおにいちゃんの妹の比企谷小町。4月から、おにいちゃん達と同じ総武高校に入学するんだ。」

雪乃「雪ノ下雪乃。その目の腐った男の部活の部長よ。」

結衣「あたしは由比ヶ浜結衣。ヒッキーやゆきのんと同じ部活なんだよ。」

いろは「総武高校生徒会長の一色いろはです。宜しくね。」

陽乃「雪乃ちゃんのお姉ちゃんの雪ノ下陽乃。総武高校のOGで大学生やってます。」

めぐり「私は城廻めぐりです。元生徒会長で、今度大学生になるんだ。」

沙希「アタシは川崎沙希。比企谷の兄貴の方と由比ヶ浜のクラスメイトだよ。」

奈呼「私は能登谷奈呼と申します。高校の関係者では無いのですが、ここにいる皆様のバスガイドを担当しています。」

璃夢「同じく、八幡君や留美ちゃん達のバスガイドを担当している能登谷璃夢だよ。奈呼姉様とは姉妹なんだ。○花ちゃん、○帆ちゃん、宜しくね。」

○花「は、はい。こちらこそ不束者ですが、宜しくお願ひします。」

留美「○花……お見合いじゃないんだから……。」

○花「ふあ、ふあうう……。」

私達と合流した小町さん達が○花と○帆に自己紹介をして、○花が照れながら挨拶を

しているのを私がツツコミをいれると、みんなから笑いが起こる。そんな中、

○帆「……うん、決めた！」

騒がしそうな感じがする○帆が、みんなの自己紹介を聞いて、少しの間目を瞑りながら黙っていると、目を見開いたと同時にそう叫ぶ。そして、

○帆「それじゃ、『まっち』、『ゆきゆき』、『はまたん』、『ほへと』、『はるる』、『めぐつち』、『さきつぺ』、『なつこる』、『りむりん』で決定だなー！うんうん、我ながらナイスネーミングだろー？やはりあたしのネーミングセンスはまちがっていない！」ドヤア
雪乃・結衣・いろは・陽乃・めぐり・沙希・小町・奈呼・璃夢『……………』
はいつ？』

私（『ルミミミ』）や八幡（『ハチ公』）と同じように、一緒に旅行に来ている小町さん達だけでなく、バスガイドの奈呼さんと璃夢さんにまで、壊滅的なネーミングセンスのニツクネームを付けて、満面のドヤ顔をしていたのであった。

……何か、○帆の最後の言葉、凄くメタい感じがするんだけど……気のせいかな？

く2日目の昼・千葉市内・某カフェ

こんにちは、川崎大志ツス。俺は今、非常に信じられない光景を見えています。

？「うーん？どれにするのかな？ アクセ○○ータ。ラス○○オー○○。」

アクセ○○ータ「知らねエよ。とつと注文を決めやがれ、クソガキ共。」

ラス○○オー○○「ミ○カはもう決まったよ！イン○○ツ○○スももう決まっているんですよ？つて、ミ○カはミ○カはボタンに手を伸ばしてみろ！」

イン○○ツ○○ス「あああ！待つんだよ！どれもこれも私の胃に満たされたいと言いたげな魅力に溢れてるんだよ……！」

な、何と……俺達が座っている席の隣席に、(一部の人達の間では)有名人である『あの人達』が座っていたツス……！

でも、不思議ツス……。何故、『あの人達』——特に『銀髪シスター』の人と言ったら、あの『ツンツン頭の人』と一緒にいるというイメージが強いのに、今日はどうしてその人が一緒では無いのでしょうか……？

ピンポン

仲町千佳「お、お待たせしました。ご注文はお決まりでしょうか？」

そんな事を考えているうちに、『茶髪のぺったん娘に似ているロリッ子』が呼び出しボ

タンを押して、バイトのお姉さん呼びました。

あのお姉さん、心なしか『白い髪のお兄さん』に緊張しているっぽいツスけど、大丈夫ツスカ……？

イン〇ツ〇ス「私は、ここに載ってるデザートを一品ずつなんだよ！季節限定も含めて全部！」

千佳「ぜ、全部ですか!？」

イン〇ツ〇ス「そうなんだよ！何か問題あるかな!？」

千佳「い、いえ、大丈夫です。今入力しますので、少々お待ちください。」

お姉さんは忙しそうに、ハンドオーダーを入力しています。流石にデザート全部頼む人なんていないはずですから、テンパってるみたいツスね……。

千佳「お、お待たせしました。他にご注文はございますか?」

ラス〇オー〇ー「ミ〇カはホットミルクと苺のショートケーキ、つてミ〇カはミ〇カは堂々と注文してみたり！」

千佳「ホットミルクと苺のショートケーキですね……?あ、あの……そちらのお客様は……?」

アクセ〇〇ータ「……アイスコーヒー。」ボソツ

千佳「えっ?あ、あの……。」

アクセ○○ータ「アイスコーヒーつってんだらうが。聞こえねエのかア？」ギロツ
千佳「ヒツ!!も、申し訳ございません!!すぐにお持ちいたしまゝす!!」タツタツタツ

……

注文を聞き終えたお姉さんは、逃げるようにその席を離れていったツス。お姉さん、お勤めご苦労様です……。

由比ヶ浜母「へー、あのシスターっぽい女の子、この店のデザート全部食べるつもりなんだねー。あんな小さい子に出来るのかなー?」

大志「ど、どうでしょうね……?」

俺には分かりませんが、(多分)由比ヶ浜先輩のお母さん。あのシスターがこの店のデザート全部を、いとも容易く食べてしまう光景が、はつきり目に浮かんでくるツス。

雪ノ下母「……何か興味ありますね。あの子達。」

大志・由比ヶ浜母『……えっ?』

へっ……?(おそろく)雪ノ下先輩とお姉さん先輩のお母さん、あの人達に興味を持つたんツスカ……?しかもその顔、以前ファミレスで会った時に見せた、お姉さん先輩の何か企んでいるような顔にそっくりツスよ……?やっぱり親子なんスね……。

アクセ○○ータ「……おい、何ジロジロ見てんだよ?ガキ共。」

大志「えっ……!?って、あっ……!!」

京華「じー」

川崎弟「じー」

ラス〇オー〇ー「んー？どうしたのかなー？つて、ミ〇カはミ〇カは、ミ〇カより幼い子達に尋ねてみる。」

イン〇ツ〇ス「な、何かな……？私を調べても何も出てこないかも！」

気がつくとき京華達が、あの人達、というよりシスターさんのところに近づいて、胸を注目していました。

大志「こ、こら!!お前達!!」

俺が京華達に注意しようとしていた時でした。

？『——ニヤー』

京華・川崎弟『あーっ♪』

明らかにその場にいる誰もいない『何か』の鳴き声が聴こえ、その声を聞いた京華達が、目を輝かせたのです。

……つていうか、店内でこれつて、マズイ展開じゃないツスカ……？

第19話

く2日目の昼・さっぽろ羊ヶ丘展望台く（留美side）

八幡「ブツ……クツクツクツ……!!」

○花「ふええええ!?ま、○帆!!」

○帆が命名した皆のニツクネームを聞いた途端、八幡は腹を抱えて笑いだし、○花が○帆を諷めようとする。そして……

結衣・めぐり・小町・奈呼・璃夢『……………』（。○。；）ポカーン

雪乃・いろは・沙希『……………』（#。∩。）ピクツピクツ

陽乃「……………」（#・3・）ジトー

あつ、やつぱり。

結衣さん、めぐりさん、小町さん、そして奈呼さんと璃夢さんは、開いた口が塞がらないといった感じで、呆然としていた。

雪乃さん、いろはさん、沙希さんに関しては、明らかに○帆に対してイラついているといった感じで、額に血管を浮かびそうに口元をピクピクさせながら、物凄くひきつった顔をしている。

留美「……っ！な、何言ってるの、○花……！バツカみたい……！」／／／

○花「あつ！その口癖も懐かしい！よく言ってたよね！」

留美「くくくくく!!」／／／

もしかして、さっきの口調にツツコんだ仕返し……？私の口癖を聞いた○花は、懐かしみながら笑っていた。その反応に対して、私は顔が真っ赤になってしまふ。

留美「と、ところで、どうして北海道にいるの？私達みたいに旅行か何か？」

私は○花に、何故北海道にいるのかを尋ねる。引越しかしていなければ、彼女も千葉に住んでいるはず……。それなのに、どうして……。

○花「私や○帆も、友達と一緒に北海道旅行に来たんだよ。私達の初等部卒業と中等部入学のお祝いで。」

留美「そうなんだ。それじゃ、私と一緒にだね。」

私が○花達が北海道にいる理由を納得すると、八幡達と旅行に来た成り行きを、○花と○帆に説明する。

○花「……な、何か凄いな。比企谷さん……八幡さんが福引旅行を当てて、留美ちゃん和小町さんとめぐりさんの卒業記念旅行として行こうとしたら、他の皆さんも付いてきたって事？」

留美「うん。大まかに言えば、そんな感じ。」

○帆「そーかそーか。でも、人数でいったらあたしらの勝ちだなー。あたしらは総勢15人で来てるぞー。」

結衣「じ、15人!？」

めぐり「そ、それって、○花ちゃんや○帆ちゃんみたいに、みんな初等部の子達とかめぐり?」

○帆「違うなー、めぐつち。あたし達の同級生のサ○にひ○にア○リン、後輩のミ○ミミにつ○○ーにゲッ○ンにお○し、コーチのす○るんとあ○いっち、それ顧問の○ーたんとひ○のストーカーのナ○ヒ、あたしのお付きのメイドのや○ぼる。そして、あたしともっ○んで、慧○学園初等部女子バスケット部の卒業旅行メンバーというわけだ。」

雪乃「な、何を言ってるのかしら?まるで、一色さんが比企谷君に早口で振ってるみたいなのだけれど。」

いろは「ちよっ!雪ノ下先輩!」

沙希「へー、アタシと同じ名前の子もいるんだね。サ○って。」

○花「は、はい。永塚紗○って言うんです。沙希さんも何となくですけど、紗○みたいにクールなところがありませんよね。」

陽乃「○花ちゃんと○帆ちゃん、バスケット部なんだ。それで、どうして今は2人きりなの?」

○花・○帆『うっ……。』

陽乃さんの問い掛けに、○花達はバツが悪そうな顔をして黙ってしまふ。もしかして、さつき○帆が喚いていた事が原因なのかな……？

○帆「ま、まー、それは聞くも涙、語るも涙の、やむを得ないじじよーって言うのが、あつてだなー。」

○花「何言ってるの、○帆！○帆が竹中君兄妹や紗○達と次の行動で揉めたのが原因でしょ!？」

○帆「も、もっ○ん!!それは言わない約束だぞ!?!それに悪いのはアイツらだつて言っただろ!!しかも、す○るんもアイツらの味方してたし!!もっ○んもす○るんの回し者じゃないのかー!?!」

○花「ふえええええ!?!わ、わ、私は別にす○るさんの回し者って訳じゃ……!!」／

あれ?今、○帆がす○るって人の話をしたら、○花が急に顔を赤くした……?もしかしたら……。

留美「ねえ、○花。そのす○るさんっていう人達、何処ではぐれたか分かる?」

○花「留美ちゃん……ごめん。初めて来た所だから、ちよつと……。」

留美「それだったら、一緒に探そうよ。私も協力するから。」

○花「ふえ?で、でも……?」

ためらおうとする○花に、私は○花の耳に近づきヒソヒソと話す。

留美「(○花、す〇るって人の事、好きなんでしょ?)」

○花「ふあう!?!ど、どう……!?!」

留美「(シッ!静かに。だから、一刻も早く逢いたいんじゃないかなって思ったの。私も八幡とはぐれちゃったらそうだし。)」

○花「(ふえええええ!?!る、留美ちゃん、八幡さんの事が……!?!)」

留美「(そうだよ。私は八幡の事が好き。そのす〇るって人、高校生なのかなって……。)」

○花「(……そうだよ、私の好きなす〇るさんも高校生の人。でも、何で分かったの?)」

留美「(……だって、私達好きになるものとか、結構似てたりしてたじゃない。幼馴染なんだから、それぐらい分かるよ。)」

○花「(ふえええええ!?!)」

○帆「おーい、どうしたんだよ?もっ〇んにルミミミ。)」

八幡「どうしたんだ?お前ら。)」

○花「あつ、い、いいえ!?!何でも無いですよ!!」

留美「八幡、女の子の秘密を聞き出そうとするなんて、サイテーだよ。それにお前らじゃない、留美に○花。いい加減に覚えて。」

八幡「ぐっ……。ルミミミ、川、川……。川島？みたいな事言いやがって……。」

ゴチイン!!ドゴツ!!

八幡「グオツ!!」

沙希「アタシ、アンタに言ったよね？名前間違えたら殴るって。」

留美「それにルミミミってのも言うな、キモい。」

○帆「おー！ルミミミにサキツペ、ナイスコンボ!!」

私と沙希さんがそれぞれ八幡の脇腹と頭を同時に殴って、それを○帆が賞賛している。そして、八幡が殴られたところをおさえながら悶えている様を、みんなが笑っている。(○花や奈呼さんと璃夢さんは引いていたけど。)

そんな他愛ないやり取りの後、私は○花達と一緒に来ている友達を探す事になった。

——それが、私の恋の運命を大きく動かす事になると知らずに。

——おまけ・第17話——

〈仲町千佳の災難・その1〉

(仲町千佳 side)

今日は本当に厄日だどつくづく思う。星座占いなら、間違いなく最下位の1日を過ごしていると確信できるぐらい。

きつかけは、かおりが北海道に家族旅行に行ったせいで、本来バイトが休みだったはずなのに、急遽かおりの代役で入る事になった事からだつた。(もつとも、それをかおりが教えてくれたのは、旅行に行く前日だが。)

そうしたら、春休みが始まつた為か、その日は結構忙しい。しかも、その日に入るはずだったバイトの男の子2人が、昨夜急遽入院したらしく(店長が『昨日の夜、彼等の彼女達とダブルデートをしていたら、知らないアラサーの女に闇討ちに遭つた。』と彼等の親から言われたらしい)、彼等の代役もいなかった為、バイト始めて以来1番の忙しさだつた。

精々30席ぐらいしか無いお店ではあるものの、2人もいないとなると、本当にテンパリそうになる。もし、彼等を入院させたというアラサーの女に出会つたら、文句の一言でも言わないと気が済まないぐらいだつた。

そんな中、お店に突然の珍客が現れる。

イン○ツ○ス「何か美味しそうな匂いのするお店なんだよ!と○まのお見舞いに行く前に、ここで休んだ方が良いかも!」

ラス○オー○ー「そーだね!せっかく遠出してきたんだから、あの人とお姉様に会い

に行く前に休みたいと、ミ○カはミ○カは賛同してみたり！ついでに、あの人のお見舞いの品も買った方が良いかもって、ミ○カはミ○カは提案してみる！」

アクセ○○ータ「……まったく、うるせエンだよ。少しは静かにしろ。クソガキ共。」
イケメンだけど凄い恐ろしい白髪の男、シスターっぽい衣装を着た女の子、この中では普通そうな茶髪の幼い女の子が、来店してきた。

千佳「い、いらつしやいませー。お客様は3名様でよろしかつたでしょうか？」

アクセ○○ータ「アアン？他に誰がいるって言うんだよ？」ギロツ

千佳「（ビクツ）で、ですよねー。御案内致します。」アセアセ

ちよつ、超恐いんですけどー！何でこんな時にこんな客の対応がうまいア
ンタがないのよー!?かおりー!!

さつき案内した5人組の家族（？）の隣の席しか座れそうな席が空いていなかったの
で、とりあえずそこに案内することにした。

っていうか、あの5人組も一見変わった組み合わせなんだよねー。着物姿と優しそうな綺麗なママさん達に、普通そうな少し年下っぽい男の子、それに天使みたいな幼くて可愛い女の子と男の子。おそらく、幼い子達のママさん達で、どつちかの親戚のお兄ちゃんなのかな？でも、あのママさん達、心なしかどつちもただ者じゃなさそうなんだ
けど……。

千佳「お、お待たせしました。ご注文はお決まりでしょうか？」ビクビク
店長に行ってもらいたかったけど、手を離せない為、私は勇気を振り絞って、その3
人の注文に伺う。

イン〇ツ〇ス「私は、ここに載ってるデザートを一品ずつなんだよ！季節限定も含めて全部！」

千佳「ぜ、全部ですか!？」

イン〇ツ〇ス「そうなんだよ！何か問題あるかな!？」

千佳「い、いえ、大丈夫です。今入力しますので、少々お待ちください。」

な、何なの!?!このシスターみたいな子!?!この店のデザート、全部一品ずつ!?!マジでありえないんですけど!!

そんな事を思いつつも、私はハンドオーダーを急いで入力する。こんな事もバイト始めて以来だ。

千佳「お、お待たせしました。他にご注文はございますか?」

ラス〇オー〇ー「ミ〇カはホットミルクと苺のショートケーキ、つてミ〇カはミ〇カは堂々と注文してみたり!」

ほっ……良かった……。やっぱり、この子が一番まともそうだ。自分の事を繰り返して名前で呼んだり口調に癖があるけど、そんな事が些細な事で可愛く感じるぐらいです

もん。

千佳「ホットミルクと苺のショートケーキですね……？あ、あの……そちらのお客様は……？」

アクセ○○ータ「……………アイスコーヒー。ボソツ

千佳「えっ？あ、あの……。」

アクセ○○ータ「アイスコーヒーつってんだろが。聞こえねエのかア？」ギロツ
千佳「ヒツ!!も、申し訳ございません!!すぐにお持ちいたしま〜す!!」タツタツタツ
……

や、やっぱりメツチャ恐いんですけど〜〜!!私は注文を繰り返さないで、速攻でその席を逃げるように離れた。

そうして、注文されたドリンクをあの席に運んでいた時に、私は目撃してしまったのです。

？「ニヤー!!」

イン〇ツ〇ス「コ、コラ!スフィン〇ス!!ダメなんだよ!!」

京華「にやんこちやんだー!にやんこちやんだー!!」

川崎弟「にやんこちやん、まってー!!」

な、な、な、な……何やってんの!?あの子達!!

それは、さっきのシスターと隣の席にいた幼い子達が、猫を追つ掛けていたのです！
ちよつ、ちよつと待つてよ〜〜!! 何でお店の中に猫がいるの〜〜!!

大志「ちよつ、ちよつと！落ち着け！お前ら!!」

雪ノ下母「あらあら、困ったものですね。」

由比ヶ浜母「まあ、どうしましょう?」

ラス○オー○「うーん、これはどうしよう、つて、ミ○カはミ○カは起死回生のご
まかしを考えてみる。」

アクセ○ー○「……チツ、だからこういうところで道草くうの嫌だったんだよ。」

な、な、な、な、何でアンタら、そんな平然としているのよ〜〜!!? しかも、誤
魔化すにも誤魔化しきれないでしょ、この状況!!

しかし、私の災難はこれで終わりではありませんでした。

……かおり、今夜、アンタに電話で散々愚痴つてやるから！覚悟しなさいよ!!

第20話

「2日目の昼・さつぽろ羊ヶ丘展望台」（留美 side）

○花「あの……本当にごめんなさい、八幡さん。私や○帆の為に……。」

留美「大丈夫だよ、○花。八幡は年下の可愛い女の子の言うことなら、何でも聞くから。」

八幡「おい、留美。誤解されるような発言はやめろ。まるで、俺がロリコンみてえじゃねえか。」

私はあれから八幡と○花と一緒に、○花達と一緒に来ている人達を探す事になった。

因みに他の人達はと言うと、○帆が『イヤだイヤだー!!絶対に行かないからなー!!』と駄々をこねた為に、○帆の相手をしていた。

○花は凄く申し訳無さそうにしていたが、このままという訳にもいかないので、とりあえず私達3人で探す事にしたのであった。

八幡「それにしても、全然見つからないよな。北海道大学に比べたら、全然大した事ない広さなのに……。」

八幡の言う通り、探してから1時間経過したのだけど、未だに○花の探し人達は見つかつていない。

○花「そ、そうですね……。ふあううう……。みんな、何処に行っちゃったんだろう……。？」

○花の探し人達が見つからず、途方に暮れていた時だった。

チャリーン……チャリーン……

留美「ん……。？」

近くで何枚かのコインの音が鳴り響く音が聴こえて、私達はその方向へと振り向くとチャリーン……。パラパラ……

占い師「——君達に迷いが見える。このまま現状維持でいるべきか、前へと進むべきか。確かに今は、あまり良い運勢では無い。」

男女『……………』

そこには、小さな椅子と小さなテーブルであるカップルを占っている、赤いジャケットを着た20代後半か30代前半ぐらいの男の占い師さんがいた。カップルの人達は、占いの結果に不安そうな表情をしているように見える。

占い師「だが、このままでいるよりは、前に進んだ方が正解だ。自分自身を、そしてお互いのパートナーを信じてな。そうすれば、君達の運勢も良い方向へと導く事になる

だろう。大丈夫だ。」

男「ほ、本当ですか!？」

女「あ、ありがとうございます!!」

占ってもらったカププルは、自分達の占いが最初の言葉とは正反対の良い結果だった事を凄く喜び、占い師さんにお礼を言いながらその場を去っていった。

○花「占いかー。留美ちゃんはああいうの信じる?」

留美「うーん……どうだろう。どちらかと言えば信じるような……。○花は?」

○花「私も留美ちゃんと一緒に。どちらかと言うと信じる方だよ。朝のTVの12星座占いとかよく見るもん。」

留美「そうなんだ。八幡はどうなの……って、えっ?」

八幡「あれ……?」ガシガシ

私が八幡に尋ねようとしたら、八幡は占い師さんを見て、頭を掻きながら難しい顔をしていた。

留美「どうしたの?八幡。」

八幡「いや、あの占い師、昔どっかで見た事あるような気がするんだが……。」

留美・○花『えっ?』

八幡が占い師さんについて何か心当たりがあるような発言をした時だった。

占い師「……ちよつといいか？」

八幡・留美・○花『っ!』

少し離れた場所にいた占い師さんが、いつの間にか私達の近くまで来て、私達に声を掛けたのだ。

八幡「な、何スか!? どうして、俺達に声を掛けて……?」

八幡がキョドリながらも、占い師さんに私達に声を掛けた理由を尋ねると、

占い師「いや、今朝の占いで新たな出会いがあると出たのだが、おそらく君達の事だろうと思つてな。」

○花「えっ? 新たな出会い? それが私達なんですか?」

占い師「ああ。『今日の午後に、高校生の少年と4月から中学生になる2人組の少女達と出会う』と今朝の占いに出た。君達はそうではないのか?」

八幡・留美・○花『えっ……!』

何なの、この人……!?! 初対面なのに、私達の事を正確に言い当てるなんて……!

占い師「……その反応と表情だと、どうやら今朝の占いは当たりのようだな。」

留美「そ、そんなの分からないじゃない。ちゃんと観察すれば、それぐらい当てられる人だつて……。」

私は強がつて、占い師さんの言う事を否定しようとした。だって、初対面でそこまで

正確に当てられるのも何か嫌だったし、それぐらい私達の事をよく観察したらと思つたから。

占い師「更に言えば、君達3人に共通する事は、それぞれ何らかの原因で孤独に過ごしていた時期があつた。今ではそれは解消されているみたいだけだな。」

八幡・留美・○花『……………!!』

しかし、その占い師さんの続いた言葉に、私達は息を飲んだ。

……つて、ちよつと待つて？八幡は何となく分かるけど、○花までどうして私達と同じ反応をしているの？まさか、○花も……？

八幡「な……何なんですか!?!どうして、俺達の事をそこまで……!!」

占い師「——『俺の占いは当たる』」

八幡が占い師さんに問い詰めようとしたところ、占い師さんは堂々と私達にそう答えていた。

八幡「あれ……?」

占い師「うん?どうした?」

八幡「いや、何かそのセリフ、どつかで聞いた覚えがあるんだけど……?小さい頃に……。」

占い師「人違いではないのか?俺と君達は、初対面なのだろう?」

八幡「うーん……。そうなんですかね……。？」

占い師「……まあ、いい。せっかくだから、君達の事も占いたい。特別に無料で占おう。」

○花「ふえっ？無料で……。ですか？」

占い師「ああ。ここで出会ったのも何かの運命だ。特に君は、今一緒に旅行に来た人達を探している。違うか？」

○花「ふあう!?す、凄いです!!どうしてそこまで……。!?」

占い師「言っただろう?『俺の占いは当たる』と。」

留美「……八幡、○花。せっかくだから、占ってもらおうよ。そこまで当てられたら、流石に信用するしかないと思うよ。」

八幡「お、おう。分かった。」

○花「は、はい。宜しく願います。」

こうして、私達はその占い師さんを信用して、占ってもらう事になった。

その占いの結果は、私達——正確に言えば、私と○花に大きな影響をもたらすのであった。

占い師「……では、始めるぞ。」

八幡・留美・○花『……………』

チャリーン……

占い師さんが、占いの開始と同時に3枚のコインを同時に指で弾く。その様子を私達は静かに見ている。

トン、コロコロコロコロ……

チャリーン……トン、コロコロコロコロ……

占い師「……次で最後だ。」

チャリーン……トン、コロコロコロコロ……

占い師「……………」

八幡・留美・○花『……………』

占い師さんは最後と言ったコイントスの落ちたコインを見て、しばらくの間沈黙する。私達も、静かにその様子を静かに見ていた。

やがて、占い師さんは口を開いた。

占い師「……君の探し人達は、すぐに見つかるはずだ。」

○花「ふえっ!?!本当ですか!?!」

占い師「ああ。他の2人と一緒に来ていた人達のところに戻るべきだ。そこでその人

達と再会出来る。」

○花「あ、ありがとうございます!!留美ちゃん、八幡さん、今すぐ戻って……!」

占い師「待ってくれ。ついでといつてはなんだが、君達2人の事で気になる事がある。」

留美「えっ?」

○花「ふえっ?」

占い師「悪いが、その少年は聞かないでほしい。彼女達に対するプライベートな事だから。」

八幡「な、何だよ……。俺だけ除け者って訳かよ……。」

留美「……………八幡。」

八幡「……………分かってるよ。冗談だ、冗談。プライベートな事なら、聞くわけにはいかないだろ。」

そう言いながら八幡は、私達の話が聞こえない場所まで離れて、私達を待つ事になった。

でも、気になる事って何だろう?しかも、占い師さんの話ではプライベートな事らしいし……。

占い師「さて、君達の気になる事の話になるが……。君達は今、大きな運命の分岐点

にいる。」

留美「えっ？大きな運命の分岐点？」

○花「ど、どういう事ですか？」

占い師「……君達は今、気になる異性の相手がいるはずだ。それも少し年上——4
5歳ぐらい年上のな。」

留美「えっ!？」

○花「ふええええ!？」

ほ……本当に何者なの、この人……？まるで、私達の事を何もかも見えてるみたいに……。

占い師「今こそが、勇気を出して前に進むべき絶好の機会——その幼き恋心を彼等に示す時だ。これを逃せば、もう2度とその機会が訪れないかもしれない。」

留美・○花『……………』

占い師さんの言葉に押し黙る私と○花。そんな私達に、占い師さんは更に言葉を続ける。

占い師「その運命を決めるのは君達だ。勇気を出して君達自身の運命を切り開くか、勇気を出さずそのままにするのか……。いずれにせよ、君達自身の選択に後悔のないようにな。」

留美「う、うん。分かった。ありがとう、占い師さん。」

○花「あ、ありがとうございます。」

そして、私と○花は占い師さんのもとを離れて、八幡と合流する。

八幡「留美、○花。あの占い師に何て言われたんだ？」

○花「は、八幡さん、プライベートな事だから、聞くのはダメって言われませんでした？」

留美「そうだよ。乙女の秘密を聞こうとするなんて、サイテーだよ。八幡、キモい。」

八幡「ぐっ……。ルミルミ、お前も由比ヶ浜みたいな事を言いやがって……。」

留美「だからルミルミでもお前でもない。留美だから。」

○花「そ、それより早く戻りましょう。占い師さんが私達と出会ったところに戻れば、みんなと会えるって言っていましたから。」

八幡「お、おう。悪いな、○花。」

留美「そうだね。○花、ゴメンね。私の八幡が変な事を言うから。」

八幡「……おい、いつ俺が留美のものになったんだよ……。」

そんな下らないやり取りをしつつも、私達は元々いた場所へと戻る事にしたのだ。た。

そして、あの占い師さんの言う通り、私と○花の運命が大きく変わる出来事が、この

後起こるのであった。

——おまけ・第18話——

〔千葉市内・某公園〕（川崎大志 s i d e）

スフ〇ン〇ス「ニャー！」

京華「にゃんこちやーん!!」

川崎弟「まってー!!」

ラス〇オー〇ー「あなた達、あんまり遠くに行くんじゃないよー! って、ミ〇カはミ〇カはミ〇カより年下の子達にお姉さんぶってみる!!」

イン〇ツ〇ス「あーん……………もぐもぐもぐもぐ……………」

由比ヶ浜母「まあ、見事な食べっぷりね。」

雪ノ下母「そうですね。結構可愛らしいじゃありませんか。」

イン〇ツ〇ス「こちらこそありがとなんだよ! こんな美味しいデザートを御馳走して

もらって、うれしいんだよ！」

由比ヶ浜母「良いのよ。あのまま何も食べれなくて、追い出されるのも可哀想だったし。」

……………今日は、川崎大志です。あの後、俺達は隣のお客さんだった3人組と一緒にお店を追い出されたのでした。(因みに店員のお姉さんが『アンタら、出てけー!!』と大激怒していました。)流石にお店の中に猫を連れてきて騒いでいたら、言い訳のしようもないツスもんね……………。

しかし、雪ノ下先輩と由比ヶ浜先輩のママさん達の機転で、どうにか注文したデザートやドリンクは辛うじてお持ち帰り出来たので、今は最初に俺達がいた公園であのシスターさんが大食いっぷりを発揮しています。その食べっぷりにママさん達は感嘆していました。

そして京華達は、あのミニ御〇さんと猫と一緒に遊んでいます。となると……………
アクセ〇〇ータ「……………」

大志「……………」

そうなんすよ……………。必然的にこんな組み合わせになったツス……………。俺の隣には、如何にもあの『学園〇市のレベル5第一位』のあのお方がいらつしやったツス。何でこの人

なんツスカ……。確かに「rb:主人公」>「ヒーロー」らしくて好きだし、むしろサインを貰いたいぐらいツスけど、どうせなら第三位や第五位の人達のほうが……。

アクセ○○ータ「……オイ。」

大志「(ビクツ)は、はい!!何ツスカ!」

そんな事を考えていると、白髪のお兄さんは俺に突然声を掛けてきました。な、何ツスカ?!もしかして、変な事を考えていたのを読まれたのでは……?

アクセ○○ータ「……さつきは悪かったな。オレらの騒ぎにテメエらまで巻き込まんじまって。」

大志「……はい?」

あ、あれ?俺の聞き間違いツスカ?このお兄さん、もしかして謝った……?

大志「あ、あの……?」

アクセ○○ータ「うるせエぞ!!ガキ!!2度は言わねエからな!!」

大志「は、はい!!すいませんでした!!お、俺なら気にしてませんから!!」

や、やっぱり怖いツスよ!この人くくく!!俺は即座にお兄さんに謝りました。

アクセ○○ータ「……ところで、オマエ。何か悩みでもあるみてエな顔をしてるな?くだらねエ恋愛絡みか何かか?」

大志「……はい?」

あれ？俺、話して無いツスよね？何で分かったンスか……？

雪ノ下母「あら？そんなのですか？」

由比ヶ浜母「へえー、そんなんだ。良かったら私達にも教えてくれないかしら？」

イン〇ツ〇ス「私も君の悩み、興味あるかも！恋愛がらみなら！」

いつの間にかママさん達やシスターさんも、俺の悩みに興味を持ったみたいです。

大志「わ、分かりました。お話します……。」

そうして、俺は姉ちゃんの恋愛話、そして俺の恋愛の話をしました。名前は出しませんでした。姉ちゃんの好きなお兄さんの話、俺の好きな比企谷さんの話、それらを全て話しました。

雪ノ下母「成程……つまり、お姉さんも貴方もその兄妹が好きだという事なのですね。」

イン〇ツ〇ス「そうなんだねー。それぞれ好きになったのが兄妹って、凄く素敵な偶然かも。」

由比ヶ浜母「あれ？そのお姉さんの話、何か聞き覚えがあるような気がするんだけど……？まあ、凄くいい話だけだね。」

ラス〇オー〇ー「うーん、これは素敵な恋のロマンスの香りがするね、ってミ〇カはミ〇カはいつの間にか興味深々で聴いていたり。」

俺の話の聴いてくれた女性陣からは様々な意見が出てくる。っていうか、幼いミ○カさんはいつの間に聴いてたンスか……。

アクセ○〇ータ「……ケツ、くだらねエ。哀れだなア、オマエもその姉貴も。」

大志「なっ……!!」

い、今、この人姉ちゃんの事を馬鹿にしましたよね!? そうツスよね!?

大志「く、下らないとか哀れって何ツスか!」

アクセ○〇ータ「オマエもその姉貴も意気地無しって事だよ。根性無し、またはヘタレとも言うけどなア。」

大志「お、俺の事はともかく、姉ちゃんまで馬鹿にするなツス!!いくら、アンタでも……!!」

俺の自慢の姉ちゃんをそこまで馬鹿にされたら、例え相手が神様でも許せないツスよ!! そんな事を思いながら、お兄さんに歯向かおうとしたら、

アクセ○〇ータ「だったら、テメエがまずその想いをぶちまけたらどうなんだ!? 1回でも、その女にテメエの想いをぶちまけた事があんのか!? アア!!」

大志「っ……!!」

しかし、お兄さんの続けて出た言葉に、俺は何も言えませんでした。お兄さんは更に言葉を続けます。

アクセ○○ータ「まずはテメエがダメもとでやってみるんだ。そうして姉貴にも、言つてやるんだよ。『俺は自分の想いを伝えた。だから、姉ちゃんも自分の想いを伝えな』つてなア。」

大志「……………」

アクセ○○ータ「結果はどうなるかは分からねエよ。だが、何も変わらずこのままでいいはずがないのは、テメエも姉貴も分かつてるんだろが。違うのか？」

大志「……………そうツスよね、やつぱり。」

お兄さんの言葉を聞いて、俺は決意しました。

大志「俺、決めました!!電話越しになりますけど、今夜告白します!そうして、姉ちゃんにもその事を伝えます!!」

アクセ○○ータ「……チツ、ようやく腹をくくつたか。全く柄にもねエ事言わせんじやねエよ。このオレに。」

雪ノ下母「柄にもないなんてとんでもない。何か素敵ですよ、貴方達。」

ラス○○オー○○「ううう……まさかあなたがそんな事を言うなんて、つてミ○力はミ○力はあなたの変化に感動してみたり。」

イン○○○○ス「アクセ○○ータ、何か凄いだよ!これもと○まと出会ったお陰かも!」

川崎弟「あくせ〇〇ーた？」

京華「それがおにいちやんのなまえなの？ だったら『あーちゃん』だね!!」

由比ヶ浜母「ウフフ。『あーちゃん』ね。何か可愛いかも。他の2人と猫ちゃんは？」

京華「えーと……『インちゃん』と『みーちゃん』、それににゃんこちゃんは『スーちゃん』!!」

ラス〇オー〇ー『みーちゃん』ってミ〇カの事？ ってミ〇カはミ〇カは可愛らしいニツクネームに喜んでみる!!」

イン〇ツ〇ス「イ、『インちゃん』って私の事かな？ 結構いいかも!!」

アクセ〇〇ータ「……チツ、クソガキ共。そろそろ時間がねエぞ。あの三下とオリジナルのお見舞いに行くんじゃないのかよ？」

イン〇ツ〇ス「あつ、そうだった！ 早くと〇まと短髪のところに行かなくちゃいけないんだよ！」

ラス〇オー〇ー「じゃーねー！ ちびっ子達ー!! ってミ〇カはミ〇カはちびっ子達に大きく手を振ってお別れしてみたり!!」

川崎弟「またねー!! おねーちゃん!! にゃんこちゃん!!」

京華「バイバイ!! みーちゃん！ インちゃん！ あーちゃん！ スーちゃん！」

イン〇ツ〇ス「こちらこそ、御馳走してくれてありがとう!! また会える日を楽しみに

してるんだよー!!」

アクセ○○ータ「……………じゃアな。」

こうして、あの（一部で）有名人の3人組は俺達のもとを去つて、何処かへと向かったのです。

でも、最後の話を聞いた限り、『と○まと短髪』、それに『三下とオリジナル』つて言つてたような気がするツスけど、もしかして…………。

由比ヶ浜母「…………結構良い子達でしたね、あの子達。」

雪ノ下母「そうですね。縁がありましたら、またお会いしたいものです。」

京華「けーかもみーちゃんやスーちゃんとおそべて、たのしかつたよー!!」

川崎弟「にゃんこちゃん、すぐくかわいかつたー!!またあいたーい!!」

ママさん達や京華達が、あの人達に出会つた感想をそれぞれ話しています。

大志「あの…………。」

その時、俺はママさん達に面を向かいました。

雪ノ下母「あら、どうされました?」

由比ヶ浜母「ん?どうしたの?」

そして、俺は——

大志「俺の姉ちゃんは……………川崎沙希は、絶対に雪ノ下先輩や由比ヶ浜先輩達には

負けないツス!! 必ずお兄さんの……………比企谷八幡先輩の恋人になります!!」

雪ノ下先輩や由比ヶ浜先輩達のママさん達に向かって——

大志「そして俺も、比企谷さん……………比企谷小町さんに今夜告白します!! 必ず比企谷さんと恋仲になるツス!!」

——大それた宣戦布告ともいえる、宣言をしたのでした。

京華「きゃー! たーちゃん、かつこいー!」

川崎「たーちゃん、すごーい!」

俺の宣言に、京華達は拍手しながら喜んでいます。

由比ヶ浜「そつかー、ヒッキー君をめぐる結衣のライバルの家族だったんだね、君達。」

雪ノ下母「……………成程、陽乃と雪乃、そして比企谷君のお知り合いなのでね、貴方。」

そして、ママさん達は、俺の宣言で俺達の素性に気付きました。

雪ノ下母「それでは、私はそろそろ失礼致しますわ。」

由比ヶ浜母「あれ? もう行かれるんですか? 『ゆきのんちゃんのお母様』。」

雪ノ下母「ええ。私も少し娘達の応援をしようと思ひまして。貴女もそうではないのですか? 『由比ヶ浜さんのお母様』。」

由比ヶ浜母「……………そうですね。私も結衣に言つてやらなくちゃ。『うかうかしてると、

ヒッキー君とられるよ』って。」

何か、ママさん達の間で静かに火花が散っているように見えるんですけど……。しかも、バックには龍と虎がいるようないない……。やっぱり、俺、無謀な事を言いましたかね……？

こうして俺達は別れて、スーパーで夕飯の買い物をしつつ、家への帰路につくのでした。

そして、俺は今夜……。

あつ、余談なんですけど、何か俺達が公園の近くの病院で騒ぎが起こったらしいです。何でも大きな嘔みつき音や男性の悲鳴、それに病院にいた人達が操り人形みたいになったとか、大規模な停電が起こったとかで大パニックになったとか……。

……………京華達がいなかったら、俺もついていきたかったかもツス……………。

第21話

く2日目の昼・さつぽろ羊ヶ丘展望台く（鶴見留美 side）

ギヤーギヤー

八幡「あん？何か騒いでるぞ？」

○花「あつ……………!!」

留美「○花？」

私達が出会った場所に戻ろうとした少し前で、騒ぎが起きているのを目にする。それを見て誰がいるのか気付いた○花が、思わず声を出していた。そこで私達が見たものは……………。

つ〇き「なにメーワクかけてんだよ、あほのマ〇!!」

ひ〇らぎ「そーだそーだ!!ボクたちやにーたんたちとかつてにはぐれるな!マ〇のあほ!」

〇帆「うるさいうるさい!!つ〇ひーやナ〇ヒ達があたしと行きたいところが違うの

ち帰りしたくくくいい!!」

か〇つ「だ、駄目ですよ! 姉様はお持ち帰りさせません!!」

陽乃「ちよ、めぐり!! 落ち着きなさいよ! ……むしろ、私のセリフなんだけど、それ。(ボソツ)」

愛〇「ふええええん! やつぱり、私デカ女なんだああああ!! うわああああん!!!」
雪乃「ご、ごめんなさい! 背が高いって言った事、謝るし取り消すから!! ねっ!! だから、泣き止んで!!」

ミ〇「アレアレ? ししよーハドコニイルノデスカ?」

奈呼「し、『ししよー』って〇花さんの事ですか? もうすぐ、戻ってくると思いますよ。ね、璃夢?」

璃夢「そ、そうだね……。早く戻ってこないと、收拾つかなくなりそうだね……。」

八幡・留美・〇花『……………』

な、何……………?あの力オス過ぎる空間……………。

私達3人は、その光景を見て呆然としてしまった。

確かにあの占い師さんの言うとおり、○花や真○のバスケット部の仲間と思われる子達が出た。しかし彼女達は騒動を起こしていて、それを私達のメンバーが止めようとしたら、中にはケンカを買おうとしたり暴走したりと、まるで地獄絵図と化していた。

八幡「……………なあ、○花。」

○花「は、はい。何ですか?八幡さん。」

八幡「もう少しだけ戻るの待つ事にしないか?俺、あの空間の中に巻き込まれたくねえぞ……………」

○花「ふえ!?!」

留美「……………私も八幡と同意見。あの空間に飛び込む勇気無いもん。」

○花「で、でもお……………っ!」

私と八幡の意見に対して何か言おうとした○花は、突然何かを閃いたような顔をした。もしかして、あの力オス空間を止める秘策か何か思い付いたのかな?

○花「……………分かりました。せっかくですから、留美ちゃんと八幡さんで少し楽しんできてくださいよ。ほら、私達のせいで御迷惑をおかけしてるから、せめて、ね。」

八幡「はあっ?!いいのか!?!」

○花「だ、大丈夫ですよ。私が何とかしますから。ねっ、留美ちゃん？（パチッ）」
留美「っ……………」

○花が、私と八幡に何処かで時間つぶしをするように促してきた。八幡が聞き返したところ、私にウイנקをしてくる○花。

留美「……………そういう事か。ありがとね、○花。」

私の○花のウイנקの意味に気付いて、彼女に心の中で感謝する。

留美「○花の言う通りだよ。行き、八幡。」タツタツタツ……

八幡「あつ、留美!!」

○花「気をつけてね。留美ちゃん。2人とも御手洗いに行つたつて言っておくから。」

そして、私は八幡を連れて2人きりのデートをする事にした。

○花のウイנק——それは、八幡と2人きりになるチャンスの合図だった。このチャンスを私は……………

く少し時間が経つてく

留美「うん。ここなら静かに過ごせていいかもね。」

八幡「全く……。留美がここまで活発的になるとはな……。それにしても、本当に○花やアイツら、放置して大丈夫なのか？」

私は、みんなから少し離れた場所で、八幡と2人きりになった。周りの人達も数人ぐらいで、それほど気になる程度ではない。

留美「別に大丈夫でしょ。○花が私達で楽しんできてって言ったんだから。それとも、八幡はあの空間の中に飛び込みたいの？」

八幡「……………勘弁してくれ。」

留美「そうでしょ？ だったら、私の事、エスコートしてよ。」

八幡「る、ルミルミ……。いつのまに、そんな高等な外国の言葉を……………」

留美「だからルミルミ言うな、キモいから。それに、エスコートぐらい分かるから。他愛ないやり取りをしつつも、私と八幡はアイスクリームを買って、ベンチで休む事にした。」

留美「……………全く、エスコートしてって言ったのに、アイスクリームを買って休憩なの？」

八幡「別にいいじゃねえか。下手したら、歩き回ってアイツらのいる場所に戻る事になるんだぞ。」

留美「まあ、それもそっか。……………ねえ、八幡。」

そして、私は八幡にどうしても言いたかった事を伝える。クリスマスの時でも伝えられなかった事を。

八幡「ん？何だよ？」

留美「……今更だけど、本当にありがとう。『林間学校』の時の事。」

八幡「っ……………!?!」

私の言葉に、これまでだらけていた八幡の表情が一変する。八幡自身も分かっているみたいだった。

留美「あれから、私、いじめに遭わなくなっただよ。それだけじゃない。少しずつだけど、学校で友達も出来るようになった。」

八幡「……………そうか。留美、あの時は——」

留美「ううん、謝ってほしいんじゃないの。言ったでしょ、『ありがとう』って。私、本当に感謝してるんだよ。」

八幡「留美……………」

留美「八幡も、あのやり方が正しいと思ってなかったんでしょ？でも、それで私、救われたんだよ。だから、私は否定しないよ、八幡の事もあのやり方も。」

私の伝えたかった事——林間学校で私を救ってくれた事のお礼を、どうしても伝えなかった。

八幡「……………」

八幡は気まずそうな顔をして黙っている。確かに正しいやり方ではなかったとは思ふ。1歩間違えれば、八幡も私も今頃……。

留美「……私、八幡にまだ言いたい事があるんだけど。」

八幡「……何だよ？今度はクリスマスの時の事か？」

留美「違うよ。もう1つお礼を言いたいの。ありがとう、私を旅行に誘ってくれて。」
クリスマスイベントの再会を経て、私はららぽーとで八幡とまた巡り逢えた。小町さんの援護があったのもあるが、八幡が誘ってくれたお陰で、こうして八幡と旅行に来ている。その事が素直に嬉しかった。

八幡「その事かよ。それならいいだろ。あの時、お礼を言ってくれたんだから。」

留美「あつ、そう言えばそうだよね。でも、楽しいよ。八幡だけじゃなくて、他のみんなとも仲良くなれたような気がするから。これも八幡が誘ってくれたお陰だよ。本当にありがとう。」

この2日間でいろいろあったけど、私はこの旅行が凄く楽しく過ごせている。八幡は勿論だけど、小町さんをはじめ、雪乃さん、結衣さん、いろはさん、陽乃さん、沙希さん、めぐりさん……………。みんなと過ごしてるこの旅行に来て、本当に良かったと思う。

留美「それでね、私、決めたの。」

そして、私は決意を固めて、宣言する。

留美「八幡に私の『本物』の気持ちを伝えようって。」

八幡「えっ……!?!」

私の宣言に、八幡があからさまに動揺した表情を見せる。

八幡「ちよ、ちよつと待て、留美!! その『本物』って言葉、誰から聞いたんだ!?!」

留美「えっ? 何の事?」

『本物』という言葉に動揺している八幡が、慌てて聞いてくる。私には何故八幡がそこまです動揺するのか分からなかった。

八幡「そ、そうか。別に誰から聞いたって訳じゃねえんだな。」

留美「うん。どうしたの、八幡?」

八幡「い、いや。何でもない。それより、留美の『本物』の気持ちって、何なんだ?」

留美「うん、それはね……。あつ、八幡。」

八幡「あん? 何だよ?」

留美「口のところにアイスクリームが着いてるよ。」

八幡「えっ? マジか?」

留美「うん。私がつてあげるから、じつとして。あと、とるときに目にゴミが入るかもしれないから、目も瞑ってて。」

八幡「お、おう。分かった。」

八幡は言われるがままに、目を閉じてじっとしていた。そして私は……

———— チュツ ————

八幡「っ……………!!んん……………!!」

私の唇と八幡の唇を重ね合わせる。八幡は驚いて、閉じていた目を見開いた。

八幡「くっ……………ぶはっ……………!!る、留美……………お前……………!!」

留美「……………これが私の『本物』の気持ちだよ、八幡。」

私の顔はきつと真っ赤になっていているだろう。しかし、私は一番伝えたかった事——
自分の『本物』の気持ち、どうしても八幡に伝えたかった。

八幡「う、嘘だろ……………!!お前が……………俺の事を……………!!」

留美「っ……………!!……………嘘なんかじゃないよ!!嘘だったら、こんな事するわけない
じゃない!!」

八幡「っ……………!!留美、泣いて……………!!」

留美「えっ……………!!」

知らないうちに、私は涙を流していた。しかし、涙を拭わずに八幡に伝える。

留美「……………私、八幡の事……………大好きなんだよ?この『本物』の気持ちを、嘘なんてつかない。嘘なんかで片付けないですよ……………」

八幡「……………」

私の言葉に、八幡は下をうつむいて黙ってしまふ。そんな八幡に構わず、私は続ける。留美「あの林間学校が終わってから、ずっと八幡の事を考えてたんだよ。今何してるのかなとか、元気でいるのかなって……。」

林間学校での出来事以来、私は八幡に恋をしていた。それからずっと、八幡の事ばかり考えていた。

留美「クリスマスイベントで再会した時は、本当に嬉しかった。そして、ららぽーとでまた再会した時も……。」

八幡「留美……。」

留美「だから、これは神様がくれたチャンスだと思ってるの。私の大好きな人に、私の『本物』の気持ちを伝えるチャンスなんだって。」

八幡「……………」

留美「突然の事だから、八幡も戸惑ってると思う。だから、すぐに返事してとは言わない。」

私はようやく涙を拭う。きっと伝わったはずだ。八幡の表情を見て、そう思ったから。

留美「だけど、旅行の最後には決めてね。私、その時も告白するから。みんなの前で。」

八幡「えっ!? アイツらの前ですか!」

留美「うん。私、負けないからね。雪乃さんにも結衣さんにもいろはさんにも……それから、陽乃さん、沙希さん、めぐりさんにも。」

八幡「ちよ、ちよつと待て! 何だよ、アイツらに負けないって!? 何でアイツらが関係あるんだよ!」

留美「……………朴念仁、鈍感、八幡。」

八幡「はあっ!? 留美までアイツらみたいに、俺の名前を悪口と同列にするのか!」

留美「だって、本当の事だもん。それより、そろそろ戻ろうよ。流星にみんな、心配すると思うから。」ギョッ

八幡「お、おい! 留美!!」

私はそう言いながら八幡の手を握って、引っ張っていくかのように八幡を連れていく。

不思議と今は、気持ちが一掃している。私の『本物』の気持ちを大好きな八幡に伝えられたからだと思う。

生まれて初めての告白、この初恋を絶対につかみとってみせる。

そんな決意を胸に秘めて、私は八幡と一緒にみんなのところへと戻る事になった。

留美・八幡『……………えっ?』

私達が戻った時、さっきのカオスな光景とはまた別の、しかし目が点になるような光景があつた。

雪乃・結衣・いろは・陽乃・めぐり・沙希・小町・奈呼・璃夢『…………………………』

私達の旅行メンバーも、私と八幡同様、『その光景』に啞然呆然としている。

あ○い・夏○・つ○き・ひ○らぎ・か○つ・雅○「…………………………」

ミ○「ししよー、スゴイデス。」パチパチパチパチ

私達旅行メンバー以外を見ると、真○と言いつ争っていた男の子や女の子達、さっきの光景にはいなかった雪乃さんや結衣さん達と同年代ぐらいの女の子が、口を大きく開けいろんな表情をしながら、石のように固まっている。フランス人形みたいな女の子は拍手をしていた。

真○「ま、まさかもつ○んがそんな大胆な事を……………!!」

紗○「う、嘘でしょ……………!?!」

愛○「は、はわわわわ……………!!と、○花ちゃんが……………!!」

ひ○た「おにーちゃん、ひ○もー。ひ○もやりたーい。」

そして、真○や○花の仲間と思われる子達は、『その光景』を見て、いろいろなコメントをしていた。

当事者達以外の誰もが驚いた『その光景』、それは――

○花「ん……………ん……………」

す○る「んんっ……………!!」

――○花が、八幡と年代ぐらいの男の人と、全員の目の前でキスをしていた光景だった。まるで、さっきの私と八幡のように。

す○る「んっ……………!と、○花……………どうして……………!?!」

やがてキスを終えた男の人が、○花に尋ねる。

○花「……………これが私の本当の気持ちなんです、す○るさん。」

す○る「えっ……………!?!」

○花「私、す○るさんの事が好きなんです!!」

す○る「えっ……………ええええええっ!?!」

○花「私、今までの……………このままの関係でいるのが嫌なんです!!私はす○るさんともっと……………!?!」

留美「と、○花……………」

八幡「な、なあ、留美。○花って……。」

○花のす○るといふ男の人への告白がクライマックスになつて最中、八幡が私に尋ねてくる。

留美「いや、私に言われても……。」

私も凄く驚いている。小さい頃よく遊んだ時には、どちらかと言えば私みたいに引つ込み思案なところがある子だったのに……。

す○る「わ、分かった、○花!!今はちよつと待つてくれ!!」

○花「……ふえ?」

す○る「悪いけど返事するのは少し待つてくれないか?俺も七〇高の男バスを復活させなくちやいけなから。」

○花「そ、そうですよね……。」

す○る「でも、○花の気持ちは凄く嬉しかった。その気持ちは『本物』なんだって、心から伝わったよ。」

八幡「っ……………!!」

雪乃・結衣・いろは『えっ……………!?!』

す○るの言葉に、八幡、それに少し離れた場所で雪乃さんと結衣さんというはさんま

で、驚いた反応を見せる。

八幡だけじゃなくあの3人も、『本物』という言葉にあんな反応みせるなんて……。八幡達は、その言葉に『何か特別な意味』でもあるのだろうか？

璃夢「……あつ！八幡君に留美ちゃん！戻ってきましたよ、皆様！」

そんな事を考えていると、璃夢さんが私と八幡が戻ってきたのを見つける。

小町「もう、何やってたの!?ゴミイちゃん!!」

いろは「そーですよ！先輩と留美ちゃんが戻ってくるまで、大変だったんですからねー!!」

結衣「ヒッキー！留美ちゃんと何処に行ってたの!？」

八幡「お、おう……、すまん。少しトイレに行ってただけだ。な、留美？」

留美「う、うん。○花だけ先に戻ってもらって……。」

沙希「……確かに言ってたね、○花が。」

雪乃「その割には時間が随分遅かったわね。」

陽乃「あれあれ。もしかして、2人きりの甘い時間を過ごしてたとかじゃないよね？まさかね？？」

八幡・留美『（ギクツ）そ、そんな訳ないでしょ!!』

めぐり「えっ?どうして、2人で同じ返し方なの?しかも、ハモってたよ?」

留美「べ、別にいいじゃない。八幡と同じ返し方になるなんて……バツカみたい。」

八幡「……おい。それ、どういう意味だよ。」

す〇る「あ、あのー……。」

私達がいろいろ話し合っている最中、〇花の想い人と思われるす〇るが、私達に声をかける。

八幡「……あつ、アンタが〇花やマ〇マ〇の保護者なのか？」

す〇る「そ、そうです。皆さんには真〇が御迷惑をおかけして、本当にすみません。」

真〇「何言ってるんだよー、す〇るん！みんな、あたしやもつ〇んの事、テイチョーにもてなしてくれたぜー！ハチ公やルミミミも含めて、今日からあたしの子分みたいなものだからなー。なつ、みんな！」

八幡・雪乃・結衣・いろは・陽乃・めぐり・沙希・小町・留美『誰が子分だ（よ）（だ

よ）（ですか）!!』

夏〇「真〇！お前、いい加減にしろ!!」

つ〇き・ひ〇らぎ『そーだそーだ!!にーたんの言う通りだー!!マ〇のアホー（アホの

マ〇ー）!!』

紗〇「あ、頭痛くなってきた……。」

ひ〇た「おー、みんな、ケンカはやめよー。」

こんな一騒動があったものの、最後には仲良くなり、朝の風○君と○子ちゃんの時みに、みんなまで記念撮影も行っていた。

私と○花の２ショットや○花と同じ年のみんなと私の写真、何故か八幡とす○るの２ショットや女の子全員での写真なども撮ったりしていた。私と八幡、○花とす○るでの４人での写真の時に、真○が『何かダブルデートの記念撮影みたいだなー!』と言った時は、他のみんなから睨まれたりしたけどね。

そんなこんなで記念撮影が終わり、○花達とお別れの時がやってくる。

す○る「皆さん、本当にいろいろとありがとうございました。」

八幡「ああ。アンタも大変みたいだけど、頑張れよ。留美、○花にちゃんと挨拶しないとな。」

留美「分かってるって。子供扱いしないでよ。」

○花「……す○るさん、八幡さん。最後にお願ひがあるんですけど。」

八幡「ん？何だ？」

○花「少しだけ留美ちゃんと２人きりでお話がしたいので、時間をくれませんか？」
す○る「それぐらいならいいよ。皆さんも大丈夫ですか？」

八幡「ああ。せっかくの幼馴染の再会なんだ。これぐらいは構わないぜ。」

○花「ありがとうございます。行こ、留美ちゃん。」

留美「……うん。」

少し離れた場所に移動して、私と○花が2人きりになる。

○花「……留美ちゃん、これ、私の連絡先だから。」

そう言いながら、○花は私に自分の連絡先を書いてある紙を渡す。

留美「うん、ありがとうございます。でも、話ってこれだけ?」

○花「ううん、それだけじゃないよ。八幡さんとの仲は進んだの?」

留美「……う、うん。私もキスをした。○花達みたい……。」

○花「ふえっ!?る、留美ちゃんも!?って、見たの!」

留美「そ、そうだよ。私と八幡が戻ってきた時、丁度それを見てたんだから。」

○花「ふあうう……。な、何かズルいよ……。私も留美ちゃんと八幡さんのキス、見てみたかった……。」

留美「な、何言ってるの!?!……本当、バツカみたい。」

○花「で、でも、留美ちゃんもあの占い師さんの言う通り、勇気を出して自分の運命を切り開いたんだね。」

留美「うん。私、頑張るよ。八幡との恋、必ず掴みとってみせるから。だから、○花

もす〇ると必ず恋人同士になるんだよ。」

○花「うん！ありがとう！私もす〇るさんとの恋、必ず実らせるから！」

そう言いながら、私と○花は誓いの握手をする。それぞれの恋を必ず掴みとる、必ず実らせる、そんな強い誓いを秘めた握手を。

そうして、私と○花はお互いの手を握りながら、みんなのところへと戻っていった。

八幡「おう、お帰り、留美に○花。話は終わったのか？」

○花「はい。私と留美ちゃんの為に時間をくれて、ありがとうございました。」

す〇る「留美ちゃんって言ったっけ。これからも○花と仲良くしてくれよ。」

留美「大丈夫。連絡先も交換したし、旅行終わって暫くしたら遊びに行こうって約束したから。」

八幡「そうか。その時は楽しんでこいよ。」

留美「何言ってるの？その時は、八幡とす〇るも一緒だからね。ダブルデートで。」

す〇る「えっ!？」

○花「ふえええええっ!？」

八幡「はあっ!?!じよ、冗談だろ!？」

留美「……冗談だよ、半分ね。本気って言ったら、他のみんなが何しでかすか分からないし。特に結衣さんやいろはさん辺りが。」

結衣「そ、そうだし！もし、そうなったら、あたし達もついてくから!!」

留美「えっ? ついてくの?」

いろは「当たり前です! 留美ちゃんの好きにはさせませんから!」

雪乃「私もついてくわ。男達が鶴見さんと湊さんに犯罪を犯さないよう、監視しなくてはならないから。」

陽乃「そうだね。私もついてこうかな♪」

真〇「ほーほー、それは面白そうだなー。それじゃ、その時にはあたしらもついてこうかなー!」

ひ〇た「おー。おにーちゃんたちをかんしせざるをえない。」

めぐり「だ、駄目だよ、みんな。……でも、ひ〇ちゃんや愛〇ちゃん達にまた会えるなら、いいかも(ボソツ)」

愛〇「えっ? な、何か言いました? お姉さん。」

小町「ハハハ……。めぐりさん、まだ暴走しそうですね……。」

沙希「全く、アンタらは……。」ハア……

紗〇「川崎さん、心中お察し致します……。」ハア……

こうして、いろんな騒動があつたけど、〇花達とまた会う約束をして、別れる事になつた。

○花「留美ちゃん！千葉でまた会おうねー！約束だよー！！」

留美「うん、必ず会いに行くから。○花も元気でね。」

別れて暫くの間、その余韻に浸っている私達。やがて、私は口を開く。

留美「……行っちゃったね。」

八幡「……ああ。騒がしい奴らだったけど、悪い奴らじゃなかったよな。」

留美「うん。○花、昔は私達と出会った時のような性格だったんだけど、変わったなっと思う。真○やす○るって人達のお陰かもね。」

八幡「……成程な。でも、留美も随分変わったんじゃないか？俺達と林間学校で出会った頃より。」

留美「……そうだね。八幡のお陰だよ。さつきも言ったけどね。」

八幡「……なあ、留美。さつきの話なんだが……。」

留美「ストップ。言ったでしょ？すぐに返事をしないでって。でも、最終日には言うてね。」

八幡「……分かったよ。」

小町「えっ？何？何？おにいちちゃんと留美ちゃん、何か約束したの？」

留美「ううん、何でも。行こうよ、八幡。みんなも。」

こうして、私達の北海道旅行2日目の札幌観光は、終わりを迎えたのであった。

……八幡、私、絶対に八幡の恋人になってみせるから。覚悟してよね。

おまけ・第19話

〈同時刻・さつぽろ羊ヶ丘展望台〉

一方、八幡や留美達と別れた後の○花達の後日談である。

真○「それにしても凄かったなー、もっ○ん。まさか、あの場です○るんとキスするなんて。」

紗○「本当ね。ト○があんな事するなんて、予想もしてなかったわ。」

愛○「長○川さんと○花ちゃん、もうすっかり手を繋いで歩いてるもん。でも……。」

ひ○た「うーん。こっちのほうをなんとかせざるをえないかも。」

真○達が前を歩いている○花とす○るに目をくれず、別の所に視線を送る。

あ○い「ハツ……ハツハツハツハツ……。す○ると……○花ちゃんが……。」

夏○「げ、元気出せよ！あ○いお姉さん！あんなロリコン、気にする事ねえから！」

つ○き「にーたんの言う通りだよ、コーチ！」

ひ○らぎ「ボクたちがなぐさめてあげるから！元気出してよ！」

雅〇「これは重症ね……。気持ちには分からなくもないけど。」

か〇つ「私も相手が〇花先輩じゃなくて姉様だったら、あ〇いコーチみたいになつても……。」

ミ〇「コーチ、ししよーあいてジャ、ブがワルいです。」

荻山あ〇いはさつきの〇花とす〇るのキスのシヨックを、未だに抜け出せずにいる。そんなあ〇いを、夏〇と〇花達の後輩達が慰めて(?)いる。

?「よー、ようやく帰ってきたかー。」

??「お帰りなさいませ、皆様。」

真〇「あつ、〇ーたん、やん〇る。」

そんな〇花達の前に、〇花達のバスケット部の顧問である『〇ーたん』こと美〇、真〇のメイドである『やん〇る』こと久〇奈の2人の女性が現れる。

美〇「にやはは。どうだった、す〇る? 真〇を探して三千里の旅は?」

す〇る「笑い事じゃねえよ、ミ〇姉! こっちはいろいろと大変だったんだからな! 何で、ミ〇姉はビール飲みながら、高みの見物なんだよ!?!」

美〇「ほーほー。どんな事があったんだ?」

す〇る「うっ、そ、それは……。」

真〇「〇ーたん、あたしら、もつ〇んの幼馴染と出会ったんだー。あたしらに負けな

いぐらい、凄く可愛かったな。」

美〇「そっかそっか。それで、他には？」

真〇「それから、す〇るんともっ〇んがチューしたんだ。口と口で。あれは凄かったな。」

す〇る「ま、真〇！それは言うな……!!」

美〇「……そっか。ついにやらかしちやったか、す〇る。」ゴゴゴゴゴ……

す〇る「ヒツ！」ビクッ

真〇の報告を聞いた美〇の表情が一変し、それを感じたす〇るは思わず身震いし後ずさる。

美〇「……覚悟は出来てるんだよな、す〇る？」バキツベキツ

す〇る「ま、ま、ま、ま、待ってくれ、ミ〇姉！これにはやむを得ない事情が……!!」

美〇「やむを得ない事情？そんなのあったのか、あ〇い？」

あ〇い「……特に無いです。徹底的にやつちやつてください、ミ〇姉。」ハイライト〇

F F

美〇「だってさー。あ〇いの許可も出たし、覚悟しろよ。すばる♪」

す〇る「や、やめろ、ミ〇姉……ぎやああああああ……!!」

〇花「す、す〇るさあああああん!!!」

札幌のもうすぐ夜を迎えようとする夕暮れの中、羊ヶ丘展望台に少年の悲鳴とうら若き少女の叫び声が木霊するのであった。

番外編『やはり俺の福引旅行はまちがっている。 P r

o t o t y p e 』

「特賞！特賞が出ました〜!!おめでと〜うございませ〜す!!」

八幡「……………はっ?」

はじまりは、3月の春休み前のある休日の日だった。

何が起こったのか頭の中で理解出来ず、思わずそんな間抜けな声が出てしまった。

まさか小町に頼まれて一緒にららぽーとのペットショップに行つて、そこでもらった
たった一回の福引きでそんな幸運な事が起こるなんて、想像すらしていなかった。

小町「お……………おにいちゃん……………?えええええっ!」

一緒にいた小町ですら、今の状況が信じられず驚きの声をあげざるを得なかった。

「特賞はなんと!5名様ご招待の3泊4日の春休み札幌・函館ツアー!!本当におめでと
うございませ〜す!!」

そんな驚きを隠せない俺達に、福引係の人は声高々に祝福していた。

小町「すごい!すごいよ、おにいちゃん!!小町、もうおにいちゃんのこと、ゴミいちゃ

んなんて言えないくらい、ポイント爆上げだよ!!」

福引係の人から目録をもらって、ようやく特賞の旅行ツアーを当たったと実感した小町は、凄く興奮しながら喜んでゐる。

八幡「あつ、ああ……。サンキューな。」

一方の俺は、目録を持っていながらも未だに特賞が当たったと実感出来ず、思わず戸惑った返事をする。

小町「これは神様が小町の中学校卒業&4月から総武高校に入学するお祝いを、おにいちちゃんから貰いなさいって事なのかな?」

八幡「バカ言え。そんなわけあるか。」

小町は3月に中学校を卒業し、4月から総武高校に入学する。

つまり、俺の後輩になる事が決まっていた。(ついでにいえば、川崎の弟である大志の野郎もだが。)

小町「何言ってるの、おにいちちゃん。この時に使わなかったら、いつ使うの!?!今でしょ!」

八幡「お前、もう古いからな。そのネタ。」

小町の何年か前によく使われていた流行語にツッコミをいれつつも、言葉が続ける。

八幡「……でも、そうだな。俺ももう少して春休みに入るし、せつかくだから親父と

お袋にも話して、一緒に小町の卒業&合格祝いで家族旅行に行くとするか。」

小町「やつたー！さすが、小町のおにいちゃん!!……………あつ、でもお父さんとお母さん、今仕事忙しくて、なかなか時間がとれないって言ってた。」

八幡「えっ……………？そうなのか……………？」

親父とお袋……………俺には話さないのに、何で小町には話すんだ……………？

俺、泣きたくなかったぞ。

八幡「うーん……………じゃ、どうすつか？親父とお袋が時間とれないんじゃないかな……………。それに使っても5人だし……………」

小町「うん、そうだね……………」

小町は口では納得したものの、ガツカリした悲しそうな表情を浮かべる。

小町にこんな顔をさせて、俺は申し訳ない気持ちでいっばいになる。

八幡（何か、何かいい方法は無いのか？）

小町の為にどうすれば旅行に行けるのか、そう考えていた時だった。

留美「……………あれ？八幡？」

めぐり「あら？比企谷君じゃない？久しぶり〜。」

偶然なのか予定調和なのか。城廻先輩と留美と出会ったのだった。

小町「はじめまして、比企谷小町と言います。兄がいつもお世話になっていました。留美ちゃんも久しぶり！」

めぐり「私は城廻めぐりです。はじめまして、妹さん。留美ちゃん。こちらこそ宜しくお願いますね。」

小町「小町と呼んでください。ねっ、留美ちゃん。」

留美「……うん。久しぶり、小町さん。はじめまして、めぐりさん。鶴見留美です。」
城廻先輩と留美と出会った俺と小町は、成り行きで一緒にサイゼリヤで昼食をとっていた。

一見全く接点の無い3人（特に城廻先輩と留美）が、まさか一緒に席でメシを食べるなど、想像すらしていなかった。

小町「それでめぐりさんと留美ちゃんは、どうしてららぽーとに来ていたんですか？」
めぐり「私はスーツを買いに来ていたんだよ。大学の入学式で着る為のね。」

留美「……私は参考書を買って来た。総武高校に入る為の。」

小町「えっ？留美ちゃん、この間小学校卒業したばかりなのに、もう進路決めてるの？」

留美「うん。だって八幡の通っている学校だから。」

めぐり「すごいね、留美ちゃん。私は留美ちゃんの頃にそんな事全く考えていなかったよ。留美ちゃんが私達の後輩になってくれたら嬉しいな。」

留美「……ありがとう、めぐりさん。私、頑張る。」

……………

こんな感じで、意外と3人の会話は弾んでいた。

小町はともかく、まさか城廻先輩と留美がここまで会話するとは、俺は予想していなかった。

特に留美は、俺と同じぼっちである為、人見知りする傾向があると思っていた。

だけど、城廻先輩と小町の雰囲気そうさせるのか、留美も城廻先輩や小町と普通に会話が出来る。

3人が意気投合している間、俺は完全に蚊帳の外だった。

八幡「(……:…:…:…:…:…)この3人の共通点と云ったら……:…:…」

俺は3人が会話をしている間、3人の共通点をふと思いついて出した。

この3人の共通点、それは3月に学校を卒業している事——

八幡「(全く接点無いのに、意外な共通点があるんだな。)」

そんな事をふと思いつかべていた時だった。

小町「あつ、そうだ！」パン

突然、小町が両手を叩きながら席を立ち上がる。

八幡「っ？どうしたんだ、小町？」

小町「おにいちゃん、どうせだったらこのメンバーで行かない？北海道旅行!!」

八幡「……………はっ？」

めぐり・留美「えっ？」

突然の小町の提案に、俺は啞然とし、事情を知らない城廻先輩と留美が驚いた。

めぐり「ちよ、ちよつと待って、小町ちゃん。私と留美ちゃん、何の話か全く分からないんだけど？」

留美「そ、そうだよ。小町さん、どうしてそんな話になるのか説明して。」

小町「あつ、そうだった。今日おにいちゃんが……………」

突然の提案に戸惑う城廻先輩と留美に、小町は先程俺が福引の特賞である北海道ツアーを当てた事、4名まで使えるので家族と行こうとしたら、親父とお袋が仕事で時間がとれない事を、2人に説明する。

留美「八幡、本当なの？」

八幡「あつ、ああ。これがそうなんだが。」

俺はそう言いながら、目録とその中身を2人に見せる。

めぐり「本当だっ!!比企谷君すごい！」

留美「……」

城廻先輩は凄く感心しながら、留美は何も言わなかったものの、それぞれ俺の見せた目録に目を輝かせていた。

小町「それでどうでしょう？3月に卒業して4月から新しい生活をスタートさせる小町達が出会ったのも何かの縁ですし、おにいちちゃんを含めた4人で行きませんか？」

八幡「おつ、おい小町。いくらなんでもそれは……」

小町が暴走しそうなのを制止しようとしたその時だった。

留美「私、行きたい。八幡と一緒になら。」

めぐり「わ、私も比企谷君と一緒にならいいかなって……。」

八幡「……………えっ……………？」

城廻先輩と留美が顔を少し赤くしながら、小町の提案に対して答えていた。

八幡「ほ、本当にいいんですか？城廻先輩。留美も。」

めぐり「う、うん。比企谷君が駄目だって言うなら、しょうがないけど……。もし誘ってくれたら嬉しいなって……。」

留美「私も八幡ともっと親密になりたい。今回がそのいいチャンスだと思っている。」

八幡「うっ…………。」

2人の言葉を聞いて、俺の顔も少し赤くなる。

小町「(ははくん。これはもしかして……!)」

その瞬間、小町が目を輝かせていたような気がする。しかし、間髪を入れずに小町が続ける。

小町「ねえ、おにいちちゃんいいでしょ?小町とめぐりさんと留美ちゃんの卒業をお祝いしてよ。」

小町が上目遣いでそうおねだりされた俺は

八幡「わつ、分かった。城廻先輩、留美、一緒に行きましよう。」

思わず戸惑いながらも、OKの返事を出した。

めぐり「本当?!ありがとう〜!比企谷君〜!!」

留美「八幡、ありがとう。」

OKの返事を聞いた2人が、凄く嬉しそうな表情を浮かべながら、俺に感謝している。

留美「でも、待って。5名だから、もう1人呼ばないといけないんじゃない?」

八幡・小町・めぐり『あつ………。』

留美が発言した疑問に、俺達は失念していた事を思い出す。

確かに留美の言う通り、この賞品は5名ご招待の賞品。もう1人誰か呼ばないといけないのであった。

八幡「う〜ん……どうすつか……?もし、この3人がよければ、戸塚辺りでも……。」

俺がもう1人のメンバーとして、戸塚を誘おうか考えている最中の時だった。

? 「話は全部聞かせてもらったツス! お兄さん、比企谷さん!!」

八幡「……あん?」

小町「あれ?」

めぐり「えっ?」

留美「だ、誰?」

大志「その旅行、もう1人のメンバーとして、是非ウチの姉ちゃんを連れてつてくだ

さいツス!!」

川崎弟「わー! たーちゃん、かっこいいー!!」

沙希「ちよ、ちよつと、大志!!」

京華「はーちゃん♪」

どこで話を聞いていたのか、川崎家の面々がいつの間にか、俺達の席の横に立っていたのだった。

八幡「お、お前ら、いつの間に……!? ええと、か、か、か……川本?」

沙希「……川崎なんだけど。いい加減覚えないと、本気でぶつよ?」

八幡「ごめんなさい。私が悪かったです、川崎さん。」

大志「そうツスよ、お兄さん！俺達の苗字を間違えるなんて、酷いツス!!」

八幡「やかましい。うつとおしいぞ、このクソ野郎。」

沙希「あつ？アンタ、今何つった？」

八幡「気のせいです。許してください、川崎様。」

留美「こ、小町さん。この人達は……つて、あれ？そこの小さい女の子、見たことある。」

京華「あー！クリスマスのおねーちゃんだー!!」

留美「やつぱり。劇に出てたもんね。お久しぶり。」

京華「はい！おひさしぶりです!!」

めぐり「こ、小町ちゃん。この子達つて、比企谷君の……?」

小町「そうです。おにちゃんのクラスメイトの川崎沙希さんと弟の大志君です。小町も下の子達には、初めて会いますけどね……。」

少しの騒ぎがあった後、少し離れた席にいた川崎一家と俺達だが、団体客の座れる席に移動することになった。つていうか、サイゼでこんな団体で座る事になるとは思わなかった。

八幡「それにしても、川崎。お前らが外食なんて珍しいじゃねえか。そんなイメージ

無かったけど。」

沙希「あつ、ああ。大志の総武高校入学祝いで奴だよ。両親が忙しいから、アタシ達だけでららぼーと行って楽しんでこいって……。」

めぐり「へー、川崎さんの弟も総武高校に入学するんだね。」

沙希「あつ、はい。隣にいる大志がそうです。ほら、大志。」

大志「は、はじめまして。川崎大志ツス。」

めぐり「城廻めぐりです。今月卒業したから、OGになるかな。」

八幡「城廻先輩、この野郎に気使う事ありませんよ。」

沙希「アンタ、もう一回言ってみな。今のセリフ。」

八幡「いいえ、何も言っていないです。」

めぐり「もう、比企谷君。……ところで、川崎さんも旅行に連れてってって言って

たけど、比企谷君はどうなの？それと小町ちゃんと留美ちゃんも。」

八幡「あつ、いや、俺は……。」

城廻先輩の質問に、どう答えようか迷っている。俺がからかう事さえ言わなければ、川崎も俺に普通に接してくれる、希少な人間だ。これと言った毒も吐かないしな。（俺が毒を吐かなければだが。）

小町「小町は大賛成です！是非、一緒に行きましようよ！沙希さん!!」

留美「というより、決定権は八幡にあるけどね。メンバー揃えば旅行に行けるなら、私も賛成かな。」

八幡・沙希『えっ……?』

けーちゃん達の相手をしていた小町と留美の返答に、俺と川崎は気の抜けた声を出す。まさか、賛成するとは思わなかったからだ。(多分、川崎も)戸惑いながらも、川崎が城廻先輩に質問する。

沙希「し、城廻先輩はどうなんですか?」

めぐり「私も賛成だよ。学校で話した事ないけど、こうやって弟さん達の面倒をちゃんと見てるところを見ると、良い子なんだなって感じるから。私も是非、川崎さんに来てほしいなって思うよ。」

沙希「あ、ありがとうございます……。」

城廻先輩の返答に、川崎は顔を赤くしながらお礼を言う。そうして、顔を赤くしたまま俺をチラチラ見ている。頼むから、やめてくれ。可愛い仕草で勘違いしちまうじゃねえか……。

八幡「……川崎、一緒に旅行に行くか?」

沙希「えっ?!いいの!?!」

八幡「……他のメンバーも賛成なら、俺も賛成するしかねえじゃねえか。嫌だったら、

構わねえけど。」

沙希「い、いや、そういうわけじゃ……。」

大志「駄目だよ、姉ちゃん!!留守の間は、俺が京華達の面倒をちゃんと見るから!だから、安心して行つてきなよ!」

川崎弟「たーちゃん、かつこいいー!」

京華「さーちゃん、けーかいこでいるから、だいじょうぶだよ。」

沙希「う、うん……。」

こうして、北海道旅行の最後のメンバーは川崎に決定し、俺と小町、城廻先輩と留美の5人旅行になることが決まったのであった。

その後、俺達は旅行の日時の確認、目録に記載されていた宿泊先のホテルの予約、チケットの予約等の旅行の打ち合わせをしていた。

その際、俺と小町は、城廻先輩と川崎と留美の連絡先も交換したり、スマホで札幌と函館の名所などを検索しどういうルートを通るか、旅行当日の集合場所等を話しながら、時間を潰していた。

八幡「それじゃ、城廻先輩、留美。また旅行当日で。留美はちゃんと親御さんの許可をとつてから、来るんだぞ。」

留美「大丈夫。八幡と一緒に言えば、お父さんとお母さんも安心する。」

小町「えっ?!?おにいちゃんって留美ちゃんのご両親から、そんなに信頼されてるの!？」
留美「うん。八幡には感謝してらって。八幡に会ってみたいとも言ってた。」

「つか、知らない間に俺はルミルミの両親から信頼されてるのか?なんか照れ臭いぞ。」

めぐり「私も大丈夫だと思うよ。友達と旅行だつて言えば。」

八幡「ええ。城廻先輩なら大丈夫だと思いますが、一応ご両親の許可をとつてからお願いしますね。」

めぐり「うん。分かったよ。それじゃね、比企谷君、小町ちゃん、川崎さんに留美ちゃん。」

沙希「こちらこそ宜しくお願います、城廻先輩。それと、京華達の相手をしてくれてありがとね、小町、留美。」

留美「うん。また遊ぼうね、京華ちゃん。」

京華「うん!ありがとー!るーちゃん!」

留美「それじゃ、またね。八幡に小町さん、沙希さんにめぐりさん。」

小町「こちらこそ旅行に参加してくれて、ありがとございます!沙希さん!また、当日に会いましょう!」

そう言いながら、今回は解散した。

小町「ふ〜んふんふん♪」

小町が上機嫌に鼻歌を歌いながら、スキップしている。

それほどまでに、今回の旅行が楽しみなのだろう。

今回旅行に行くメンバーは、城廻先輩、川崎、留美、小町、そして俺。

偶然とはいえ、まさかこのメンバーで行く事になるとは思わなかった。

でも、俺にとって心を穏やかにして旅行に行ける癒し系のメンバーではあると同時に

思う。

留美も川崎も、俺が変な事を言わない限り毒は吐かないし、城廻先輩も悪い言葉を言

わない癒し系の人。

勿論、小町は俺にとっての癒しの天使。戸塚と双壁を成すくらいなの。

……よく考えたら、ある意味最高なんじゃねえか？そんなメンバーで旅行に行けるな

んて。

仮の話だが、雪ノ下姉妹・由比ヶ浜・一色で行くよりも、遥かに良いかもしれないぞ

……？その4人だと、俺の心がブレイク限界になって、楽しい旅行になると思えないし。

小町「おにいちちゃん、どうしたの？もう家着いたけど。」

八幡「えっ？あつ、悪い。」

そんな事をふと思い浮かべているうちに、いつの間にか家に着いていた。

そして、自分の部屋に入ってベッドに大の字になりながら、ふと呟いた。

八幡「……旅行、楽しみだな……………」。

今回のメンバーで行く旅行。

来週の春休み初日から行く旅行に、俺も小町同様これまでにない楽しみを期待していた。

——しかし、その淡い期待は

陽乃「ひやつはろー！珍しいじゃない。こんな朝早く、比企谷君とめぐりが一緒にいるなんて♪どこか行くの？」

旅行初日の朝に、集合場所に指定したバス乗り場の時点で、夢くも崩れさろうとしていた。

第22話

「2日目の夕方・ホテル」(八幡side)

ピツ ガチャ

八幡「はあ……………」バタツ

2日目の観光が終わりホテルに戻ってきた俺は、力尽きるかようにベッドに倒れこんだ。

八幡「今日もマジで疲れたな……………。こんなんで、後2日もつのかよ……………」
ベッドに倒れこむと同時に、今日の出来事と旅行のこれからに対する思いをぼやいてしまう。

本当に朝からここに着くまで、いろいろありすぎだったよな…………。

起きたら留美が隣で寝てたり、戻ろうとしたら他のメンツに見つかって一騒動、北海道大学の雪ノ下の迷子騒動、昼はラーメン屋で一悶着、さっぽろ羊ヶ丘展望台では留美の幼馴染に会って…………。

よくよく考えてみると、この旅行、昨日からずっと騒動ばかりじゃねえのか？しかも、昨日の土〇さんやイ〇ヤ達、今日の智〇達やあのカップル等とか、本来出逢いそう

にない人達と出逢う事が多すぎるような気がする……………。(旅行に来たからと言われ
たらそれまでだが。)

そして、昨日の夜の折本、今日の昼の留美。2人とも俺にキスをしてきた事も、俺に
とつての大事件だ。しかも、留美は俺に告白のような事もしてきた。……………『本
物』という言葉を使つて。留美の想いは、間違いなく『本物』だという事は分かる。あ
んなポロポロ泣いてまで告白したのだから。

それに、折本がキスしてきた事も、ずっと考えてる……………『私のファーストキス、比
企谷にあげちゃった♪』つて、わざわざ言っただくらいだし、中学の時の初恋の相手が、ま
さか俺の事を……………??

そして、雪ノ下と川崎の2人も、2人きりになった時、学校の時と比べて明らかに違
和感を感じる。特別な事をしたわけでもないのに、何でだろうか……………??

八幡「……………あっ————!!わかんねえ!!!」

いろいろ考えているうちに頭の中が少し混乱し、頭を抱えながらそんな風に叫んだ。
八幡「……………とりあえず、寝るか……………。いろいろ考えても分かんねえんだつた
ら、寝て頭の中をスッキリさせねえと……………」

自分の中の問題を後回しにしようと思ひ、このまま疲れを取るために寝ようとした時
だった。

プルルルルル　プルルルルル

八幡「……………あん？」

部屋の電話の音が鳴り響く。……………これ、昨日の夕方にもあったよな……………。

ガチャ

八幡「……………はいよ。」

いろは『あつ、先輩！可愛い後輩のいろはちゃんが』

ガチャ

八幡「……………さて、寝るか。」

プルルルルル　プルルルルル　ガチャ

八幡「何だよ!?一色！」

いろは『それは、こっちのセリフですよ!!何で電話切っちゃうんですか!?せっかく、食の時間になったから、お誘いの電話をしたのにー!!』

八幡「……………シャワー浴びてから行くから。少し待ってろ。」

いろは『なっ!?何ですか、その返し方!?……………はっ!遂に先輩も覚悟を決めたという訳なんですネ!?そうなんですネ!?でもお互いの両親の紹介や合意が無いのに無理です!もう少し段階を踏んでから言ってくださいごめんなさい。』

八幡「……………何で行こうとしたのに、フラれてんだよ。悪ふざけの電話なら、切つ

て寝るぞ。」

いろは『もー、冗談に決まってるじゃないですか。それに、そんな事言つていいんですか、先輩？小町ちゃん、留美ちゃん……………』

八幡「分かつてるから、断つたらそう来るのも!!だから、待つてろつて!!」

いろは『はい。お待ちしますよ、先輩♪』ガチャ　プープー

ガチャ

八幡「はあ……………。今日もこのまま終わらなそうだな……………」

そんな事をぼやいた後、俺は眠気覚ましのシャワーを浴びて、アイツらと合流し、夕食を食べる為に会場へと向かうのであった。

—— バイキング会場 ——

ワイワイガヤガヤ

八幡「……………ん？何だ、あの人ばかりは？」

俺達が夕食の会場に行くと、凄く異様な光景が見受けられた。

小町「何か、あの場所だけ凄く人がいますね。何やつてるんだろ？」

今日の夕食も、昨日同様北海道の海の幸や山の幸を揃えたバイキング。しかし、昨日

と明らかに違うのは、それに目をくれず多くの人達が『1ヶ所』だけに、その場に集まっている事だった。

陽乃「何かイベントでもやってるのかな？ちよつと行ってみない？」

陽乃さんの言葉に、俺達はその場所へと向かつてみる。俺は人混みは好きじゃないから遠慮しようとしたんだが、小町と留美に手を繋がれて、連れてかれた。

「——さあさあ、皆様!!本日限定の特別ディナーイベント、『北海道豪快カレー』の大試食会を開催しておりまーす!!皆様ー!!本日限定のイベントですから、この機会を是非お見逃しなくー!!」

アナウンスをしている男のイケボな声が、会場に鳴り響く。そんなイベントやってたのか……………。

「この『北海道豪快カレー』、北海道の大自然が育んだ野菜やお肉や海の幸が全部入った、その名の通り豪快なカレーとなっておりまーす!!当社の新作カレーの試食会、本日限定でしか食べられませんから、是非ともご賞味くださいー!!」

……………何かお○松さんやコー○ギ○スのス○クっぽい声だよな。櫻○孝宏っぽい声でそんな事言われると、ちよつと興味が出てくるかも。

「そして、本日はなんと!お忙しいスケジュールの合間を縫いまして、当社の社長が皆様に食べてもらいたいと腕を振るいに北海道にやって参りました!社長自らが皆様にカ

レーをお配りしています!!」

結衣「へー、ちよつと食べてみようかなー。みんなはどうするの?」

小町「小町も食べてみたいですね! すつごく興味がありますよ!」

いろは「私も食べたいです!」

めぐり「私も食べてみようかなー。」

留美「……………私も食べてみたい。」

由比ヶ浜をはじめ、何人かが興味を示し始める。確かに食べてみたくなってきたかもしれない。

雪乃「……………私も少し食べてみようかしら。」

沙希「アタシもちよつと興味が出てきたね。」

陽乃「よーし、決まりね。みんなでカレーを食べにいこー!」

八幡「えっ? あ、あの、俺の意見は……………」

雪乃・結衣・いろは・陽乃・めぐり・沙希・小町・留美『はい?』

俺の発言に対して、他のメンツは『おめえの意見、ねーから』みたいな顔をしながら、俺を見ていた。

……………何となくは分かってましたよ。確かに興味があるし、食べてみたいとも思っていますよ。だけど、意見ぐらい言わせてくれよ…………… (泣)

変な奴等を見た俺達は、思わず目が点になりながら、開いた口が塞がらなかつた。

つてか、いろいろツツコミどころ満載過ぎるだろ!!まず、何で『テレビ〇日の日曜朝7時30分』に出てきそうなアイツら、普通に実在してるんだよ!?!しかも、ワニのような奴は社長に……………そういえば、なつてたような気がするな。

しかも、あの櫻〇声の宇宙人のような奴、バイトで雇ったのかよ!?!アイツ、人間の女の人と駆け落ち結婚して、旅館で働いていたんじやなかつたのか!?

いろは「ゆ、結衣先輩。あのワニみたいなの、アタシ昔見たことあるような気がするんですけど……………」

結衣「……………いろはちゃん。あたしも、見たことあるような気がするよ……………」

……………昔の日曜朝をしつかり見てたんだな、由比ヶ浜に一色。俺も昔見たことあるよ。最近でも、見たことあるような気がするが。

留美「……………ワニは知らないけど、あの宇宙人みたいな人、見たことあるような気がする……………」

小町「る、留美ちゃん、あの宇宙人みたいな人、知ってるの…………?」

留美「うん。確かジェラなんちゃらとかいつてたような……………」

留美も日曜朝、ちゃんと見てたんだな……………。プリキュアのついでに見てたけど、本当に面白かつた。

変な奴等が登場して、戸惑っている俺達。しかし、周りの反応は――

「へー、旨いじゃん、このカレー。」

「美味しい!!何これ!?こんなカレー、食べた事ない!!」

「うつまー!!やばすぎっしょ、このカレー!!パネエーわー!!」

「おじちゃんたち、おいしいよ!ありがとー!」

いかにも、俺達の反応が普通じゃないと言うかの如く、あの変な奴等の事を気にせず、普通にカレーを食べていた。しかも、戸部っぽい口調の奴やアイツらにお礼を言う子供までいるし……………。

「ママー、このおいしいカレー、あのへんなおじちゃんたちがつくったんでしょー?」

「シツ!変って言うんじゃありません!」

……………ホテルでいつも鉢合せするママアレ親子、貴女達まで普通に食べてるんですか……………?お嬢ちゃんの言っている『へんなおじちゃん』は正解ですよ、お母さん。

『北海道豪快カレー』――その言葉の意味が、アイツらを見たせいで理解出来た。確かにアイツらの片割れのバイト君の方、『豪快』な方に出てたからな……………。(正確に言えば、社長の方も『映画』でチョイ役で出てた気がするが。)やがて、社長がマイクを手にして発言する。

社長「さて、皆さん!今日は我が社の新メニュー、『北海道豪快カレー』の試食会に集

まっけて頂きました、本当にありがとうございます!!お札に、皆さんに対して感謝の気持ちを含めまして、ワニのショートタイムが始まりま〜す!!」

バイト君「よっ!社長、お待ちしていました!皆様、盛大な拍手をお願いします!!」
パチパチパチ……………

八幡「……………はっ?」

あ、あれ……………?物凄く嫌な予感がするんですけど……………。

そして、その予感はずぐの中する事になった。

社長「♪究極のカレー 北海道直送 ワニの考えた 豪快なカレー♪」

『でもでも、命名したのは、ワニではなくバイト君なんですよーだ』

♪あら、ネタバーレしちゃーって どうすんだよ♪」

「い、いやああああああ!!な、何?!何なの、この歌!」

「み、耳がああああ!!あ、頭が痛いいいいい!!」

「や、やめろおとおお!!」

ワニの歌を聴いた周囲の人達が、耳や頭を抱えて苦しみました。

八幡「う……………うわああああああ!!」

小町「お、おにいちちゃん、助けて……………やああああああ!!」

留美「は、八幡!ああああああ!!」

俺達も当然、耳を塞ごうとしたが、社長の音痴な歌が聴こえて、苦しみだす。

「うわああああああああああん!! ママー!!」

「き、聞いちやいけません!! いやああああああ!!」

あのママアレ母娘まで泣きながら苦しんでる………!! 苦しんでる俺の視界に入ってきたものは

バイト君「よつ、社長! 日本一の美声ですなー!! 紅○やレ○大、間違いなく出れますよー!!」

ヒゲダンスをしながら歌ってる社長、それをヨイショしているバイト君の姿だった。その光景を見て、『俺の中の何か』がプツンと切れる。そして、俺は――

八幡「――やめろ、テメエ!! このワニ野郎!!」ドカツ!!

――無意識のうちに奴等をとめようと、社長に突撃していったのであった。

社長「♪オレは恋するヤツ………って、何だね、チミは?」

俺の突撃に、社長はたじろいて歌うのをやめる。

八幡「うるせえ!! いいから、その迷惑な歌を歌うんじやねえ!!」バキツ!!

社長「アイター!! 男に殴られても、気持ちよくないもんねー!! お返しにガブリしてや

るー!!」

八幡「っ!!」

社長が俺に噛みつきこうとする。しかし、次の瞬間――

雪乃「ハッ!!」ガシッ

クルッ

社長「アイダー!!」

陽乃「もいっちょよ、おまけ!!」バキッ!!

社長「アギャー!!」

――俺と社長の間に、雪ノ下が割り込み社長を投げ飛ばす。更には陽乃さんが、社長の鳩尾に正拳突きを放つ。

……………これが、話に聞いていた、雪ノ下姉妹の習っているという合気道か。なんか貴重なものを見たな……………って、アイツ相手に通用したのかよ!?

バイト君「き、君達!?! 一体何の真似だ!?! 何故、社長を……………!」

いろは「行きますよ、結衣先輩!」

結衣「う、うん!セーの!!」ガシッ

バイト君「な、何をするんだ!?! 君達!」

バイト君が俺達をとめようとしたところ、由比ヶ浜と一色がバイト君を取り押さえ

る。えっ!?マジで!?お前ら、何処にそんなパワーを隠してたの!?

いろは「今だよ、小町ちゃん、留美ちゃん!」

バイト君「や、やめろ!俺の耳を……………あつ。」

小町「あつ、いろはさんや結衣さんの言う通りでした!」

留美「この人、耳栓してた。どうりで、あの音痴な歌が効かなかったんだね。」

小町と留美がバイト君の耳の中にあつた耳栓を取り出す。留美、正確に言えば、ソイツ『人間』じゃないから。つてか、お前らも無茶すんじやねえよ!

社長「おのれ〜!ワニの歌の邪魔をするなら、ガブリキスしてやる〜!手始めに……………あつ、そこのお仲間だと思われる、大人しそうな子からだ〜!」

めぐり「えっ?えっ?わ、私〜!」

社長が城廻先輩を見つけて、襲いかかろうとしていた。

八幡「お、おい、やめろ…………」

沙希「比企谷、動かないで!!」

八幡「っ!」

俺は社長をまた取り押しさえようとした時、川崎の声が聞こえて制止する。そして、

沙希「ハアツ!!」

ドカッ!!

社長「ウギャー……!!!」

沙希「悪いけど、本気で飛び蹴り使わせてもらったよ。アンタ、結構タフそうだからね。」

川崎が社長の顔を目掛けて、空手で習ったと思われる飛び蹴りを喰らわせた。因みに飛び蹴りの時、黒のレースが見えたのは、俺だけの秘密だ。

バイト君「しゃ、社長！ここは退きましよう！」

社長「チ、チミ達は一体何者なんだー!?」

八幡「通りすがりの千葉県民だ!!覚えと………かなくてもいいから、とつとと出てけ！」

社長「うー！お前達の顔、覚えておくぞー！では、サラダバー！」ドドド

バイト君「しゃ、社長ー!!待つてくださーい！」タツタツタツ………

こうして、俺達はあの変な奴等を追っ払った。だから、覚えとかなくていいから………

陽乃「………全く、随分無茶をしたね、比企谷君。」

八幡「………すんません、俺も無意識のうちにアイツらに突っ込みましたから。つてか、陽乃さん達も無茶しすぎッスよ。でも、助けてくれてありがとうございます。雪ノ下や川崎達もサンキューな。」

雪乃「べ、別に、私もあの人達が迷惑だと思つたから。」／／／
 沙希「ア、アタシも城廻先輩を守ろうと思つて。」／／／
 陽乃「またまた。比企谷君にいいところを見せようつて思つて、頑張つたんでしょ。私もだけど♪」

雪乃・沙希『姉さん（陽乃さん）!!』／／／

八幡「ま、まあ、とりあえず気を取り直して、晩飯でも……………」。

俺が騒ぎも収まったところで、晩飯を食べようと言おうとした時だった。

パチパチパチ……………」

「スツゴーい、あの子達!!」

「あの音痴な歌を止めてくれて、ありがとー!!」

「ただの馬鹿騒ぎしているハーレム軍団じゃなかったんだな！見直したぞー!!」

「千葉県民、パネエーわー!!ヤバすぎっしょ!!」

八幡・雪乃・結衣・いろは・陽乃・めぐり・沙希・小町・留美『……………」

あつ。』

アイツらを追い出した俺達は、他の観光客やホテルの従業員の人達から、スタンディングオベーションのような拍手喝采や称賛の嵐を浴びる。

あの、皆さん……………。逆に恥ずかしいんですけど。皆さんが苦しんでるから、当た

り前の事をしただけツスから。あまりにも目立ち過ぎて、穴に入りたいぐらいです。

あと俺達、バカ騒ぎしてるのは認めますけど、ハーレム作った覚え無いですから。勘違いしちゃうからやめてほしいツス。それから、戸部みたいな口調の人は、その口調やめたほうがいいです。

「ほら、もう大丈夫だからね。あのお兄ちゃんとお姉ちゃん達が、おじちゃん達追い出してくれたから。」

「ひつぐ……えつぐ…………ありがとー…………へんなおにーちゃんとへんなおねーちゃんたち…………」

…………お礼を言ってくれるのはありがたいし凄く嬉しいよ、お嬢ちゃん。だけど、俺達をアイツらと同じ『変な奴等』のカテゴリに入れるのは、やめてほしいな…………。お兄ちゃん、お嬢ちゃんみたいに泣いちゃうからね。

黄「やるじゃん、あの子達。アンタより勇気あるんじゃないの？」モグモグ

緑「ちよ、ちよつと！あの子達より僕のほうが勇気がないの!？」モグモグ

銀「凄かったツスねー、あの子達！もしかしたら『俺達の後輩』の資質があるかもしれないよ、皆さん！」モグモグ

鳥『ウーン、ソレハナイカナ!』

青「だろ。何人か除いては、明らかに素人の動きだ。」モグモグ

桃「でも、いいではありませんか。あの方々の勇氣、素晴らしいと私は思います。」モグモグ

赤「……………へッ、まさかアイツら相手に、あんなに派手にいく奴等がいたとはな。まあいいさ、これで静かにカレーが食える。」モグモグ

……………おい、そこで呑気にカレーを食ってやがるカラフルな6人組と田村ゆ〇り声の鳥……………明らかに『その道の本職』だろうが、アンタら。カレー食ってねえで、アンタらが止めてくれよ、アイツら……………。それに俺達『アンタらの後輩』の資質なんてないからな、銀の人。

……………って、ちよつと待った!!あの社長やバイト君だけじゃなくて、アンタらも実在してたのかよ!?!真面目に一緒に記念撮影してほしいんだけど!!

八幡「あ、あの……………」
ガシッ

雪乃「ほら、行くわよ、比企谷君!」

八幡「ちよ、ちよつと、雪ノ下!?!」

結衣「いいから、早く立ち去るし!!あたし達も恥ずかしいんだから!!」

八幡「ちよつと待って、由比ヶ浜!あの人達と、あの人達とくく!!」

雪ノ下と由比ヶ浜に捕まった俺の叫びも空しく、そうした騒動の後、俺達はその会場

を出て行って、別の場所で晩飯を食べることになった。

俺もあの場で晩飯を食べるのは恥ずかしかつたから、それはいいとしよう。だけど、あの『カラフルな6人組の人達』と記念写真撮りたかつたな……………。

これで、旅行の2日目が終わりになるかと思った。しかし――

めぐり「ひ、比企谷君、いる〜?」

――晩飯の後、俺の部屋にやってきたこの人と一緒に『あんな事』になるとは、部屋の開けた時の俺は、思いもしなかった。

か？」

？「はい、何でしょう？」

でも、それだけじゃないの。この人、何処と無く『あの人達』の面影があるような気がしたんだ。

かおり「女将さんって、姉妹とかいるんですか？」

？「……………いいえ、私に姉妹はいませんが。どうして、そのようなお話を？」

かおり「私、昨日札幌で、女将さんに似ている姉妹の人達と出会ったんですよ。確か、バスガイドをやってる姉妹なんですけど。」

『あの人達』——『奈呼さんと璃夢さん』に何処と無く似ているような気がして、何となく尋ねてみた。

？「……………！そうですか……………」

ん？何か一瞬、表情が変わったような気がするけど、気のせいかな？

かおり「あ、でも気にしないでいいですよ。多分、他人の空似だと思いますから。そういえば、女将さんの名前を聞いてもいいですか？」

澪羅「……………澪羅（れら）。七崎澪羅（ななさきれら）と申します。以後お見知りおきを、折本様。」

かおり「私は折本かおりっていいいます。かおりって呼んでください、澪羅さん。」

滯羅「かしこまりました、かおり様。ところで、ご両親がご夕食の場所でお待ちなのですが……………」

かおり「あつ、そうだった！今行きます。それから、私の『お願い』も聞いてくれて、ありがとうございます。」

滯羅「ええ、明日は3連休の最後ですので、特に問題はありませんでしたから。」

こうして、私は滯羅さんと別れて、両親が待っている夕食の場所へと向かった。

かおり「滯羅さんの事も気になるけど、まずは『作戦の第1段階』成功つてとこかな？」

向かつてる途中、昨日ラーメン屋でアイツが言つてた『ウケる事』を思い出す。あの時から『この作戦』を思い付いたんだ。

かおり「明日が待ち遠しいなく♪函館に着いたら、ずっと私のターンになるから♪」

アイツ——比企谷の明日からの函館入りをワクワクしつつ、私の旅行の2日目、昨日と違い平和に終わった。

かおり「覚悟してよね、比企谷。絶対、私の彼氏になつてもらおうから♪」

特別編 やはり俺達の大晦日はまちがっている。

く大晦日・比企谷家く

『(ブデーン) 方〇、タイキツクー。』

『いや、これ、どんな流れ!?』

『あ—————!!痛い痛い痛い—————!!!!』

今日は年の暮れの大晦日。俺は毎年恒例となっている『ガ〇使』を見ていた。いつもの年なら、親父とかーちゃんと小町は毎年旅行に行ってるので、1人でまったりと見ているはずなのだが……………。

結衣「アハハハハ!これ、笑うなって方が無理だから!」

雪乃「そう?私にはどこが笑いどころか全然わからなかったのだけれど。」

小町「はーい、お待たせしましたー!年越しそば、出来ましたよー!」

めぐり「ありがとう、小町ちゃん。留美ちゃんもいろはちゃんもお疲れ様。」

いろは「いいですよ、今日は大晦日なんですから。明日は先輩方のおせち料理を楽しみにしてます。」

留美「私達の年越しそばより美味しくなかったら、承知しないから。」

沙希「へえ、言ってくれるじゃない。いろはも留美も。」

陽乃「今の発言きつと後悔するわよ、留美ちゃん。私達のおせち料理を食べたらね。」

……そう、今年は春の北海道旅行に行った彼女達と一緒に過ごしているのだ。

本来ならみんなも、折本や戸塚や材木座達のように家族旅行や帰省などあるはずだった。しかし、みんなはこう言った。

『八幡のいない旅行や帰省に行くぐらいだったら、八幡と一緒に年越しそばやおせちを食べて過ごしたい。』

そういう訳で彼女達は旅行や帰省せずに、俺の家で過ごしているのだった。

八幡「なあ、みんな……………」

雪乃・結衣・いろは・陽乃・めぐり・沙希・小町・留美『えっ?』

八幡「今更だけど、年越しを家族じゃなくて俺と過ごして、本当に良かったのか?— 応、俺も謝ったけどさ……………」

俺は年越しをみんなと過ごすにあたり、みんなの家に行つて家族に謝ってきた。幸い結衣のお母さん、雪乃のお母さん、大志やけーちゃん達をはじめ、家族の人達は快く応じてくれたのだが、やっぱり少し引つかかるものがあった。

陽乃「何言ってるのよ、八幡。私達が過ごしたいって言ってるんだから、それでいい

じゃない。」

雪乃「そうよ。私達の母さんも八幡だったら、安心して任せられるって言うてたでしょう?」

八幡「そ、そりや、そうだけどさ……。」

沙希「自信持ちなよ、八幡。アタシ達もいつもと違う年越しを過ごしたかつたんだから。」

いろは「そーですよ。毎年八幡が一人で寂しく過ごしてるって小町ちゃんから聞いたから、今年からは私達がずーっと一緒に過ごそうって、みんなで決めたんですよ」

八幡「え?!!こ、今年からって、来年以降もか!?!」

留美「当たり前じゃない。私達、八幡の事が大好きなんだから。」

小町「そうそう♪来年以降もずーっと、大好きな小町達と一緒に過ごそうね、八幡♪」

八幡「あ、ああ。わかった……。」

めぐり「あれ?何で八幡、そんなに浮かない顔をしているの?」

結衣「ま、まさか、またあたし達に内緒で、他の女の子と浮気してるし!?八幡!!」

八幡「い、いやいやいやいや!!それはない!!絶対ないから!!」

じよ、冗談じゃねえよ!!こんな年の瀬のオーラスで、また『お婿に行けない体』にされちまうなんて……!!

いろは「いいですね！八幡、私達の『本物』、また受け止めてくれますよね!？」
八幡「い、いや、待て、みんな!!何でそんな話になる!？」

小町「問答無用だよ、八幡♪それじゃ、みんなで……………」

そして俺は押し倒されてしまい、みんなにハイライトの消えた目でこう言われた。

雪乃・結衣・いろは・陽乃・めぐり・沙希・小町・留美『私（あたし、アタシ、小町）達の今年最後の『本物』、しつかり受け止めてね、八幡♪』

八幡「や、やめて……………いやああああああ……………!!!!」

俺の必死の懇願も空しく、今年の最後の最後で『お婿に行けない体』（6回目、例のごとくR—18の為割愛）にされてしまったのであった。

……………来年は、もう少し平凡に過ごしたいなあ……………（泣）

————『やはり俺達の大晦日はまちがっている。』おしまい————